

三雲・井原遺跡Ⅳ

－ 三雲上覚・ヤリミゾ・井原ヤリミゾ地区 －

福岡県前原市大字三雲・井原所在遺跡の調査報告

前原市文化財調査報告書

第 86 集

2004

前原市教育委員会

三雲・井原遺跡Ⅳ

－ 三雲上覚・ヤリミゾ・井原ヤリミゾ地区 －

福岡県前原市大字三雲・井原所在遺跡の調査報告

前原市文化財調査報告書

第 86 集

2004

前原市教育委員会

序

ここに報告する三雲・井原遺跡は、伊都国の中心的な拠点集落で、「魏志倭人伝」に記された、代々の王が居住した遺跡であると考えられています。

前原市教育委員会では、ほ場整備時に行われた発掘調査の成果を受け、平成6年度より、国指定へむけた遺跡の範囲確認調査を行っています。その結果、徐々にではありますが、遺跡の内容、性格が明らかになってきました。

本書では、江戸時代に発見された後、その所在地がわからなくなった井原鍮溝遺跡の確認調査の成果をまとめています。これまでの調査では井原鍮溝遺跡は確認にはいたらなかったものの、所在地の絞込みができつつあると考えています。また、周辺に広がる古墳時代中期の集落の様相も明らかになり、三雲・井原遺跡の古墳時代の様相の一端を知ることができたことは、大きな成果であったと思われまます。

発掘調査・報告書作成に至る間には、調査に快くご理解いただきました地権者の皆様をはじめとして、調査指導委員会の諸先生、調査に参加した地元有志のご協力を得て、これを無事に終了することができました。深く感謝する次第であります。

本書が教育・研究ならびに文化財愛護思想の普及に、わずかなりとも、寄与できれば幸いに存じます。

平成16年3月31日

前原市教育委員会
教育長 菊 竹 利 嗣

例 言

1. 本書は福岡県前原市大字三雲437番地他に所在する遺跡の発掘調査報告書である。
発掘調査は平成9～14年度、遺物整理は平成15年度に、それぞれ国・県補助を受け、前原市教育委員会が実施した。
2. なお、大字三雲450-2番地は平成9年度以前に遡るが、遺跡の性格をより詳細に把握するため、本書で一括して報告する。
3. 本書に使用した1/2,500、1/5,000地形図は前原市都市計画図（昭和60年度、平成10年度作成）を使用した。
4. 本書に使用した遺構実測図、および写真撮影について、大字三雲450-2番地は川村博、同439番地、大字井原2575番地は角浩行、同2579番地は角・平尾和久、大字三雲441番地は岡部裕俊・牟田華代子が行った。また、発掘現場の空中写真撮影については、(有)空中写真企画（代表 壇睦夫）に委託した。
5. 遺物実測は、川村・常松幹雄（現福岡市教育委員会）、石井扶美子（現夜須町教育委員会）、中村昇平（現春日市教育委員会）、山崎賀代子・牟田・平尾が行った。
6. 遺構図・遺物実測図の製図は山崎・友池真由美を中心に行った。
7. 遺物の復元は、おもに川上辰子が行った。
8. 本書の執筆分担は本文目次に記載している。なお、記載のないところは平尾が執筆した。
8. 一覧表は、石器を牟田が、土器・鉄器を平尾が作成した。
9. 本書の編集は、各調査担当者の協力を得て、平尾が行った。
10. 本書で報告した遺構図・遺物図、記録写真・出土遺物は、一括して伊都歴史資料館で保管・管理する予定である。

本文目次

I. はじめに	1	の調査	25
1. 調査にいたる経過	1	(1) 調査の概要	25
2. 調査の組織	1	(2) 土器棺	25
II. 調査の記録	2	(3) 住居跡	26
1. 位置と環境	2	5. 三雲上覚441番地(岡部・牟田)	32
2. ヤリミゾ地区における調査の経過	5	(1) 調査地点の概要	32
(岡部)	5	(2) 住居跡	35
3. 三雲ヤリミゾ437番地(ヤリミゾ地区)	7	(3) その他の遺構・遺物	45
の調査	7	6. 三雲上覚450-2番地他	45
(1) 調査の概要	7	(1) 調査地点の概要	45
(2) 住居跡	8	(2) 住居跡	45
(3) 包含層出土の遺物	12	(3) その他の遺構・遺物	68
3. 井原ヤリミゾ2575番地(ヤリミゾ地区)	14	7. 鉄器・石器	70
の調査	14	III. おわりに	77
(1) 調査の概要	14	(1) 三雲・井原遺跡を中心とした古墳時	
(2) 住居跡	16	代中・後期土師器編年	77
(3) 包含層出土の遺物	22	(2) 住居跡の変遷	79
4. 井原ヤリミゾ2579番地(ヤリミゾ地区)	22	(3) 井原鍮溝遺跡の所在について	82

挿図目次

第1図 三雲・井原遺跡周辺遺跡分布図 (1/50,000)	3	第14図 井原2575番地遺構配置図(1/400)	16
第2図 三雲・井原周辺遺跡の範囲図 (1/7,500)	4	第15図 1~3号①住居跡出土土器実測図(1/4)	17
第3図 三雲・井原遺跡調査区配置図 (1/2,000)	6	第16図 3号②~8号①住居跡出土土器実測図 (1/4)	18
第4図 三雲437番地遺構配置図(1/300)	7	第17図 8号②・9号住居跡出土土器実測図 (1/4)	20
第5図 調査区北壁土層断面図(1/80)	8	第18図 10・12号①住居跡出土土器実測図 (1/4)	21
第6図 近世溝実測図(1/120)	8	第19図 12号住居跡出土土器実測図②(1/4)	22
第7図 1号住居跡実測図(1/60)	9	第20図 包含層出土土器実測図①(1/4)	23
第8図 1号住居跡出土土器実測図①(1/4)	10	第21図 包含層出土土器実測図②(1/4)	24
第9図 1号住居跡出土土器実測図②(1/4)	11	第22図 井原2579番地遺構配置図(1/400)	25
第10図 2・3号住居跡実測図(1/60)	12	第23図 IV区Iトレンチ北壁土層断面図 (1/80)	26
第11図 1号③~3号住居跡出土土器実測図(1/4)	13	第24図 近世溝実測図(1/120)	26
第12図 4・5号住居跡実測図(1/60)	14	第25図 近世土器棺墓実測図(1/20、1/8)	27
第13図 包含層出土土器実測図(1/4)	15		

第26図	1号住居跡実測図 (1/4) ……28	第50図	13～17号住居跡出土土器実測図 (1/4) ……59
第27図	2・3号住居跡出土土器実測図 (1/4) ……29	第51図	18・19号住居跡実測図 (1/60) ……61
第28図	5号住居跡出土土器実測図① (1/4) ……30	第52図	18・21号住居跡出土土器実測図 (1/4) ……62
第29図	5号住居跡出土土器実測図② (1/4) ……31	第53図	20号住居跡実測図 (1/60) ……63
第30図	三雲441番地1・2区遺構配置図、土層実測図 (1/80、1/150) ……33	第54図	21・23・25号①住居跡出土土器実測図 (1/4) ……64
第31図	3区遺構配置図 (1/150) ……34	第55図	24～29・31号住居跡実測図 (1/60) ……65
第32図	1～4号住居跡 (1/60)、1号住居跡竈 実測図 (1/20) ……36	第56図	25②・26①号住居跡出土土器実測図 (1/4) ……66
第33図	5・6号住居跡、5号住居跡遺物出土状況実測図 (1/60、1/20) ……38	第57図	26②～31号住居跡出土土器実測図 (1/4) ……67
第34図	7・9～11号住居、9号住居跡土器出土状況実測図 (1/60、1/30) ……39	第58図	1～4号掘立柱建物実測図 (1/60) ……68
第35図	1号住居跡出土土器実測図 (1/4) ……40	第59図	5号掘立柱建物実測図 (1/60) ……69
第36図	2・3・5号住居跡出土土器実測図 (1/4) ……42	第60図	石棺墓実測図 (1/60) ……70
第37図	6・7号住居跡出土土器実測図 (1/4、1/2) ……43	第61図	Ⅱ-3g トレンチ上層出土銅鏡実測図 (1/1) ……………70
第38図	縄文、弥生土器実測図 (1/4、1/3) ……44	第62図	土坑・石棺墓・ピット出土土器実測図 (1/4) ……71
第39図	三雲450-2番地遺構配置図 (1/300) ……46	第63図	包含層出土土器実測図 (1/4) ……72
第40図	1～3号住居跡実測図 (1/60) ……47	第64図	三雲・井原遺跡出土鉄器実測図① (1/2、1/3) ……73
第41図	1号住居跡出土土器実測図① (1/4) ……48	第65図	三雲・井原遺跡出土鉄器実測図② (1/2) ……74
第42図	1号②～3号住居跡出土土器実測図 (1/4) ……49	第66図	三雲・井原遺跡出土玉類、巡方実測図 (1/1、1/2) ……74
第43図	2・4～7号住居跡実測図 (1/60) ……51	第67図	三雲・井原遺跡出土石器実測図① (2/3、1/2) ……75
第44図	8～10号住居跡実測図 (1/60) ……52	第68図	三雲・井原遺跡出土石器実測図② (1/2、1/3、1/4) ……76
第45図	4～10号住居跡出土土器実測図 (1/4) ……53	第69図	糸島地区古墳時代中期～後期土器編年表① ……………80
第46図	11・21～23号住居跡実測図 (1/60) ……54	第70図	糸島地区古墳時代中期～後期土器編年表② ……………81
第47図	11・12号住居跡出土土器実測図 (1/4) ……56		
第48図	12・13号住居跡実測図 (1/60) ……57		
第49図	15～17号住居跡実測図 (1/60) ……58		

付図目次

ヤリミゾ遺跡周辺の現在の地形と旧地籍、発掘調査地点 (1/1,000)

図版目次

- 図版1 a. 三雲437番地調査区全景
b. 井原2579番地調査区全景
- 図版2 a. 三雲437番地調査区近景
b. 近世溝全景
c. 1号住居跡
- 図版3 a. 1号住居跡竈検出状況
b. 1号住居跡土器出土状況
c. 井原2579番地近世溝全景
- 図版4 a. 1号住居跡
b. 1号住居跡竈、屋内土坑検出状況
c. 1号住居跡屋内土坑土器出土状況
- 図版5 a. 1号住居跡竈検出状況
b. 1号住居跡竈完掘状況
c. 2号住居跡
- 図版6 a. 5号住居跡
b. 6号住居跡
c. 土器群出土状況
- 図版7 a. 三雲441番地1区全景
b. 三雲441番地2区全景
- 図版8 a. 三雲441番地遠景
b. 三雲441番地3区全景
- 図版9 a. 1・2・4号住居跡全景
b. 3・5・10・11号住居跡全景
- 図版10 a. 1号住居跡
b. 1号住居跡竈土器出土状況
- 図版11 a. 5・6号住居跡
b. 7号住居跡
- 図版12 a. 1号住居跡須恵器大甕出土状況
b. 5号住居跡遺物出土状況
c. 6号住居跡ミニチュア土器出土状況
- 図版13 a. 1号住居跡、短刀出土状況
b. 6号住居跡鉄器出土状況
c. 同上
d. 同上
- 図版14 a. 6号住居跡土師器出土状況
b. 7号住居跡須恵器出土状況
c. 7号住居跡土器出土状況
- 図版15 a. 10号住居跡弥生土器出土状況
b. 9号住居跡
- 図版16 a. 三雲450-2番地他調査区①
b. 三雲450-2番地他調査区②
c. 三雲450-2番地他調査区③
- 図版17 a. 三雲450-2番地他調査区④
b. 三雲450-2番地他調査区⑤
c. 三雲450-2番地他調査区⑥
- 図版18 a. 1号住居跡
b. 1号住居跡
c. 1号住居跡
d. 2・3・6・7号住居跡
- 図版19 a. 4・11・21~23号住居跡
b. 5号住居跡
c. 12号住居跡
d. 10号住居跡
- 図版20 a. 12~14号住居跡
b. 13号住居跡土器出土状況
c. 13号住居跡
d. 17号住居跡
- 図版21 a. 19号住居跡
b. 17・18号住居跡
c. 20号住居跡①
d. 20号住居跡②
- 図版22 a. 26~29・31号住居跡
b. 25号住居跡土器出土状況
c. 25~28・31号住居跡
d. 25・26・29・31号住居跡
- 図版23 a. 31号住居跡土器出土状況
b. 石棺墓遠景
c. 15号住居跡・石棺墓
- 図版24 三雲437番地1号住居跡出土土器
- 図版25 1~3号住居跡出土土器
- 図版26 3号住居跡、包含層出土土器
井原2575番地出土土器

- 図版27 井原2575番地3～9号住居跡出土土器
図版28 9～12号住居跡、包含層出土土器①
図版29 包含層出土土器②
図版30 井原2579番地1・2号住居跡出土土器
図版31 2～5号住居跡出土土器
図版32 5号住居跡出土土器
図版33 井原2579番地6号住居跡・包含層出土土器
三雲441番地1・2号住居跡
図版34 3～7号住居跡出土土器
図版35 7～11号住居跡出土土器
図版36 三雲441番地12号住居跡・包含層出土土器
三雲450-2番地他1～8号住居跡
出土土器
図版37 12～31号住居跡、石棺墓出土土器
図版38 ピット・包含層出土土器
三雲・井原遺跡出土石器
図版39 三雲・井原遺跡出土鉄器

表 目 次

- 表1 三雲・井原遺跡出土鉄器一覧表
表2 三雲・井原遺跡出土石器一覧表
表3 三雲・井原遺跡出土土器一覧表

I. はじめに

1. 調査にいたる経過

三雲・井原遺跡は「魏志倭人伝」に記された伊都国の中心的拠点集落として、著名な遺跡である。その調査は、江戸時代の三雲南小路遺跡・井原鎚溝遺跡の不時発見に伴い、青柳種信により行われた詳細な記録調査以来、今日にいたるまで広く注目を集め続ける遺跡である。

本格的な発掘調査は、昭和49（1974）年より始められた三雲地区県営ほ場整備に伴うものを嚆矢とし、福岡県教育委員会がその主体となった。この時の調査は、盛土による遺跡の保全を図ったことにより、トレンチ調査による遺跡分布状況、遺構内容の確認調査という、調査面積的には限られた調査であったが、その成果は、非常に大きなものであり、三雲・井原遺跡が伊都国の中心的な集落であったと、広く人々に認識させるにいたった。

その後、平成6（1994）年に三雲・井原遺跡の国指定にむけた調査が、前原市教育委員会により開始され、翌7年度には、三雲遺跡等調査指導委員会を発足し、その指導のもと、継続的に調査を実施している。

調査の主目的として、①環濠等の確認による伊都国の存続期の集落範囲の確定、②伊都国王墓とされる三雲南小路遺跡の解明と井原鎚溝遺跡の所在確認、③屋敷・井ノ川地区周辺における青銅器製作工房の所在確認等を掲げている。②のうち、三雲南小路遺跡については、平成12年度に王墓周辺で集中的に調査を展開し、王墓が方形プランの墳丘墓であることを確定することができた。また、平成14年度の調査では屋敷地区に隣接する下西地区で、幅3m、深さ2mの大溝を検出した。溝は東西方向に長さ50mにわたり直線的に伸びた後、南に向かい直角に曲がって伸びていることが確認され、新たに④大溝に区画された空間機能の解明が課題としてつけ加えられた。

なお、本書で報告する内容は井原鎚溝遺跡の所在確認のために平成9年度から行ってきた一連の調査成果に、昭和58年度に実施した三雲450-2番地他での発掘調査成果を加えて報告するものである。

2. 調査の組織

平成15年度における発掘調査体制は以下のとおりである。

調査指導委員会	委員長	西谷 正
	委員	工楽善通 町田章 小西龍三郎 柳田康雄 橋口達也
総括	教育長	菊竹利嗣
	教育部長	久我和彦
	文化課長	鬼木武信
	文化課課長補佐	中村鉄弥
	文化財係長	岡部裕俊
庶務	文化振興係主事	浜地 克
	歴史資料館係主事	福山二葉
調査・報告書作成	文化財係主事	平尾和久
		牟田華代子

なお、各地点の調査担当者は以下のとおりである。

三雲437・井原2575番地（ヤリミゾ地区）・・・角 浩行 瓜生秀文（平成9年度）

井原2579番地（ヤリミゾ地区）・・・角 浩行 平尾和久（平成10・11年度）

三雲441番地（ヤリミゾ地区）・・・岡部裕俊 牟田華代子（平成12年度）

三雲441番地（ヤリミゾ地区）・・・岡部裕俊 牟田華代子（平成14年度）

三雲450-2番地他・・・川村博他（昭和58年度）

なお、調査の実施にあたり地権者の方々をはじめ、多くの地元行政区のみなさまにご協力をいただきました。また、現場における発掘調査作業・遺物の整理作業の実施にあたっては、地元有志のみなさまに、現地指導等につきましては、三雲遺跡等調査指導委員会の諸先生にご協力を賜りました。末尾ながら記して感謝申し上げます。

Ⅱ．調査の記録

1．位置と環境

三雲・井原遺跡は、福岡県西部の前原市に所在する。前原市は、東に福岡市、西に糸島郡二丈町を控える面積104.50km²、人口66,173人（平成15年6月1日現在）の市である。近年は、福岡市近郊都市に見られるベッドタウン化が急速に進み、人口の伸びも著しい。人口の半分は、国道202号線沿いに集中しており、残りの半分は、田園地帯が多く残る市域全体に広がる。

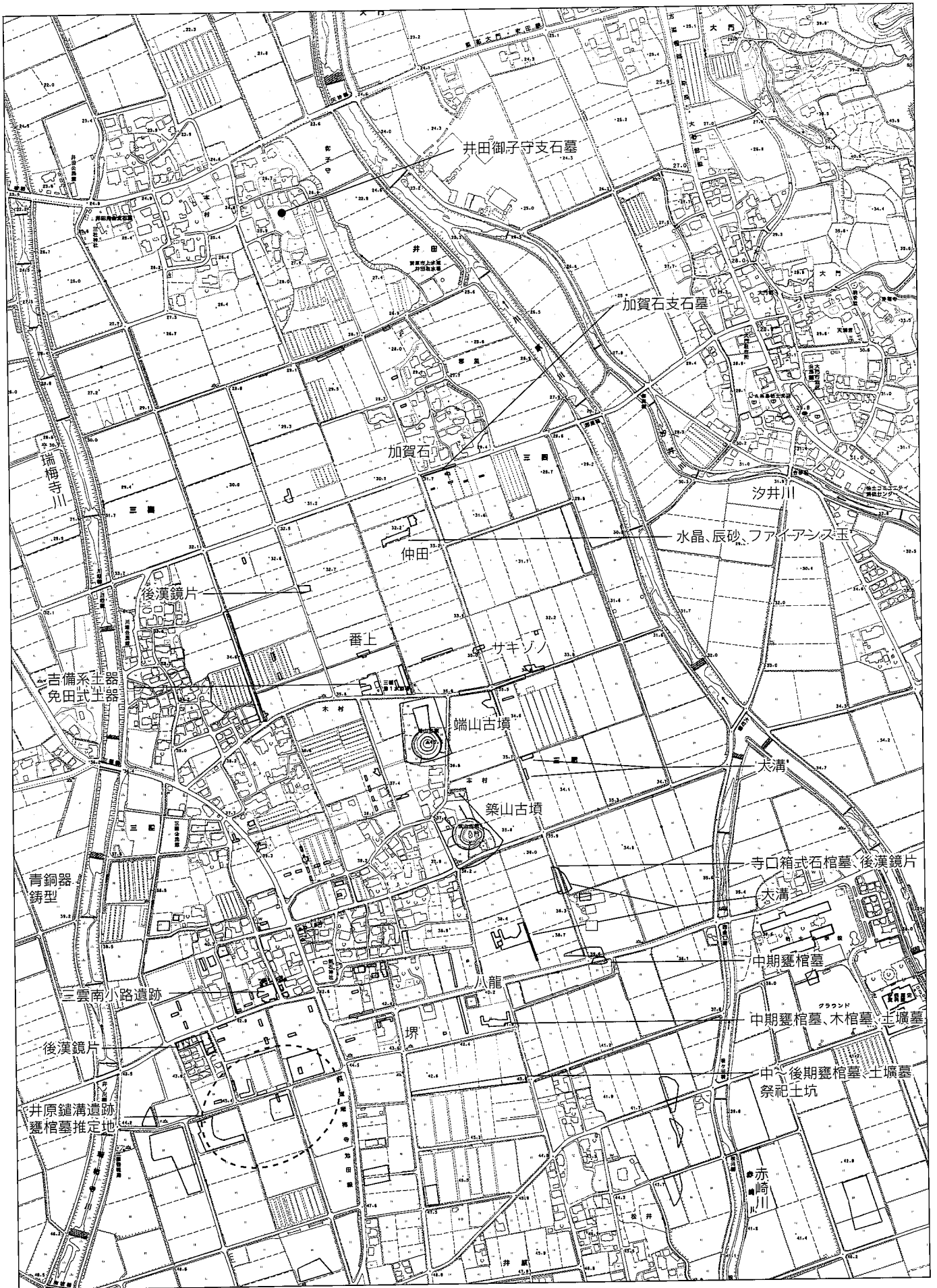
ここでは、近年の成果を盛り込み、糸島地域の弥生・古墳時代の概況を紹介する。

わが国における弥生時代の始まりは、博多湾を中心とする玄界灘沿岸地域で確認できるが、糸島地域では曲り田遺跡のほかには、集落跡が確認されていなかった。しかし、近年では、周船寺遺跡10次調査で板付ⅡA段階の溝が調査され、当期の集落の存在が想定される。また、曲り田遺跡の縁辺部でも水田等が確認され、集落の構造も明らかになりつつある。

弥生時代前期末からは、今山遺跡で石斧の生産・流通が本格化し、北部九州の広い範囲で確認されるにいたる。この石斧の流通の管理主体が三雲・井原遺跡の首長であり、のちの、石斧を用いなくなる時期も、その過程で培った流通網を生かして、九州の大陸・半島の窓口としての役割を果たしていたものと考えられていた。その結果、集積した富の一部は三雲南小路・井原鍮溝遺跡等の首長の墓に副葬品として納められたと思われるが、飯氏遺跡9次調査で中期後半の二重の大溝が確認され、環濠の可能性も指摘されたことから、今山の石斧の流通管理は三雲・井原遺跡だけでなく近隣の、複数の遺跡で管理されていた可能性も想定しなければならない。

三雲・井原遺跡は弥生時代中期から古墳時代前期にかけて断絶することなく、拠点的な集落を営み続けるが、周辺の衛星的集落の規模等は未解明のままであった。近年、三雲・井原遺跡の北側に位置し、伊都国の玄関口としての役割が想定されていた志登・潤地区の調査が大規模に行われた。現在、整理中であるため、詳細は後日刊行される報告書を参照していただきたいが、潤地頭給遺跡では弥生時代終末期から古墳時代前期にかけて、碧玉や水晶の原石を搬入し、玉類を生産した工房群が形成されていた。今後は原石の産地や製品の消費地の確定等が焦点になる。

また、前原西町遺跡では、古墳時代前期の竪穴住居跡から造付け竈が検出されている。半島系土器が伴うところは、西新町遺跡などと共通する。古墳時代前期の初期竈受容の中心が西新町遺跡で



第2図 三雲・井原遺跡周辺遺跡の範囲図 (1/7,500)

※うすいアミかけ部は氾濫原・水田および谷地形、濃いアミかけは調査地点

あることには変わらないが、前原西町遺跡をはじめとする玄界灘沿岸諸地域においても受容されていることが、今後の調査によって明らかにされるだろう。

三雲・井原遺跡の南側にある井原1号墳も調査が行われ、大型の箱式石棺を主体部とする全長43mの前方後円墳であることが確認された。主体部は攪乱を受けていたが、主軸長2.5mほどの大型箱式石棺の北側小口を検出した。棺外から鉄剣、鋸等の鉄製品が出土している。他にも高祖東谷1号墳などの前期古墳の調査・報告も進められている。

このように、三雲・井原遺跡の周辺遺跡の様相が次第に明らかになりつつあるが、今後は、三雲・井原遺跡の具体像とともに、伊都国の構造、周辺遺跡との関連性などを視野に入れた調査・研究が必要になるだろう。

【参考文献】

池田祐司・久住猛雄 編 (2000) 『JR筑肥線複線化地内遺跡埋蔵文化財調査報告書』

福岡市埋蔵文化財調査報告書第654集

牟田華代子 編 (2003) 『三雲・井原遺跡Ⅲ』 前原市文化財調査報告書第82集

岡部裕俊 編 (2003) 『井原1号墳』 前原市文化財調査報告書第83集

江野道和・江崎靖隆 編 (2003) 『前原西町遺跡Ⅱ』 前原市文化財調査報告書第84集

武末純一 (1993) 「交易はどのように行われたか」『新視点 日本の歴史』 1 原始編

岡部裕俊 (1998) 「推定される伊都国の構造」『古代探求』

寺沢薫 (2001) 『王権誕生』

2. ヤリミゾ地区における調査の経過

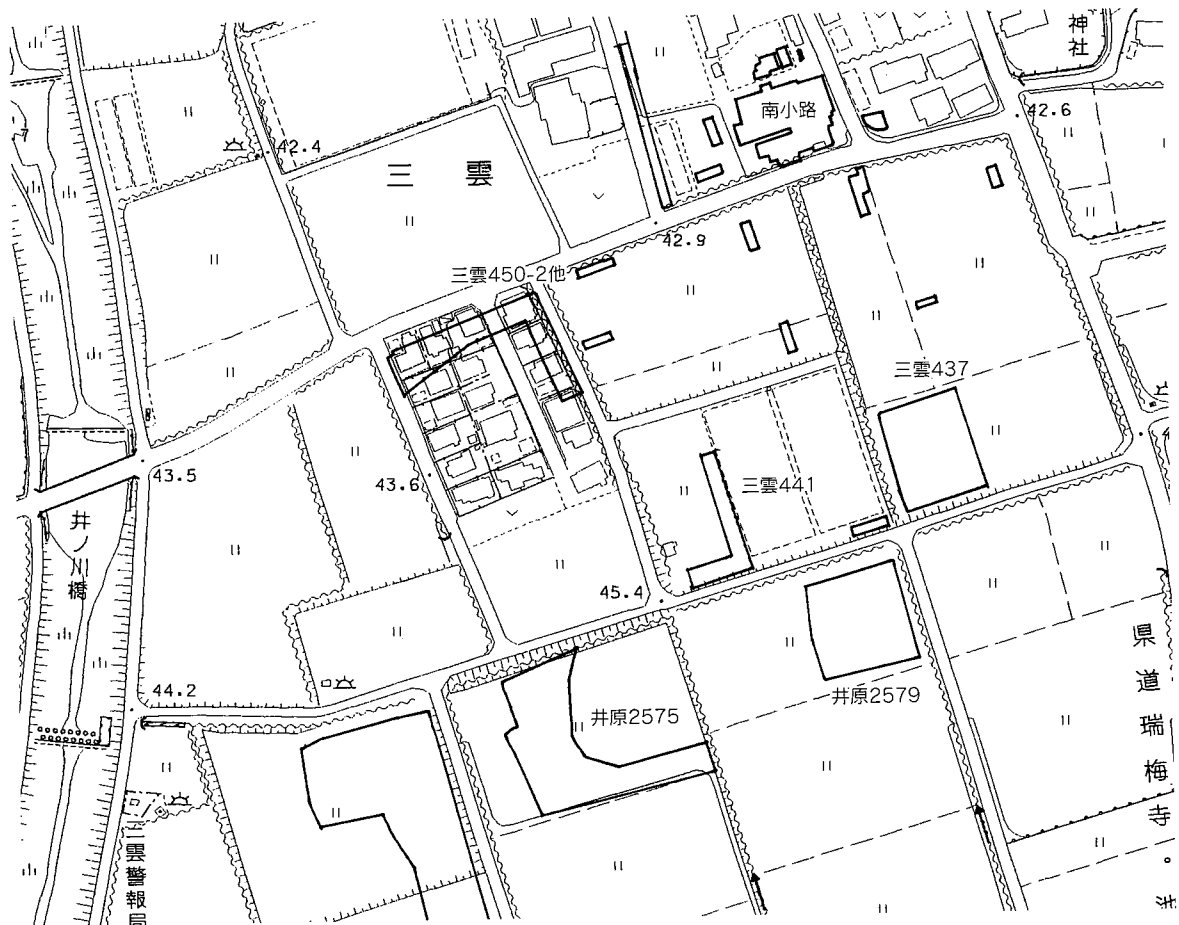
三雲・井原遺跡における重要遺跡確認調査の主目的のひとつとして伊都国歴代王墓の所在、構造の確認が示されている。特に三雲南小路遺跡、井原鎚溝遺跡の構造解明は重要課題とされ、継続的に調査を実施している。

平成12年度の南小路地区における一連の調査によって、三雲南小路遺跡が、周囲を幅3～6mの周溝に囲まれた東西32m、南北33mの方形プランの墳丘墓であることを明らかにすることができた。この結果、現在、王墓に関連する調査としては井原鎚溝遺跡の所在の確認が最優先の課題となっている。

井原鎚溝遺跡は、青柳種信が文政6(1822)年に著した「柳園不器略考」、「筑前国怡土郡三雲村所古器図説」により世に出た遺跡である。天明年間(1781～1788年)に三雲村との境である井原村の鎚溝で、水田の水口付近を棒で突いていたところ、溝の岸から「朱」が流れ出てきたため、掘り返してみると「一つの壺」から「古鏡数十」、「鎧の板の如きもの」、「刀剣の類」が出土したという。種信の調査は発見後40年ほど経過してから行われたため、古鏡は「破砕するもの数百片」となっていた。鈕より鏡の枚数を数えると「二十一」あったと報告されている。

残念ながら、出土した遺物で現存するものはないが、遺物の拓本が「柳園古器略考」に掲載されており、方格規矩四神鏡の他、大型の巴形銅器3点も出土していたようである。

遺跡の時期については、出土銅鏡の時期から弥生時代後期初頭に位置付ける見解、編年観に桜馬場遺跡の甕棺の編年的位置づけをからませて巴形銅器の型式学的考察から弥生後期中頃に位置付け



第3図 三雲・井原遺跡調査区配置図 (1/2,000) (トーン部分は今回報告分)

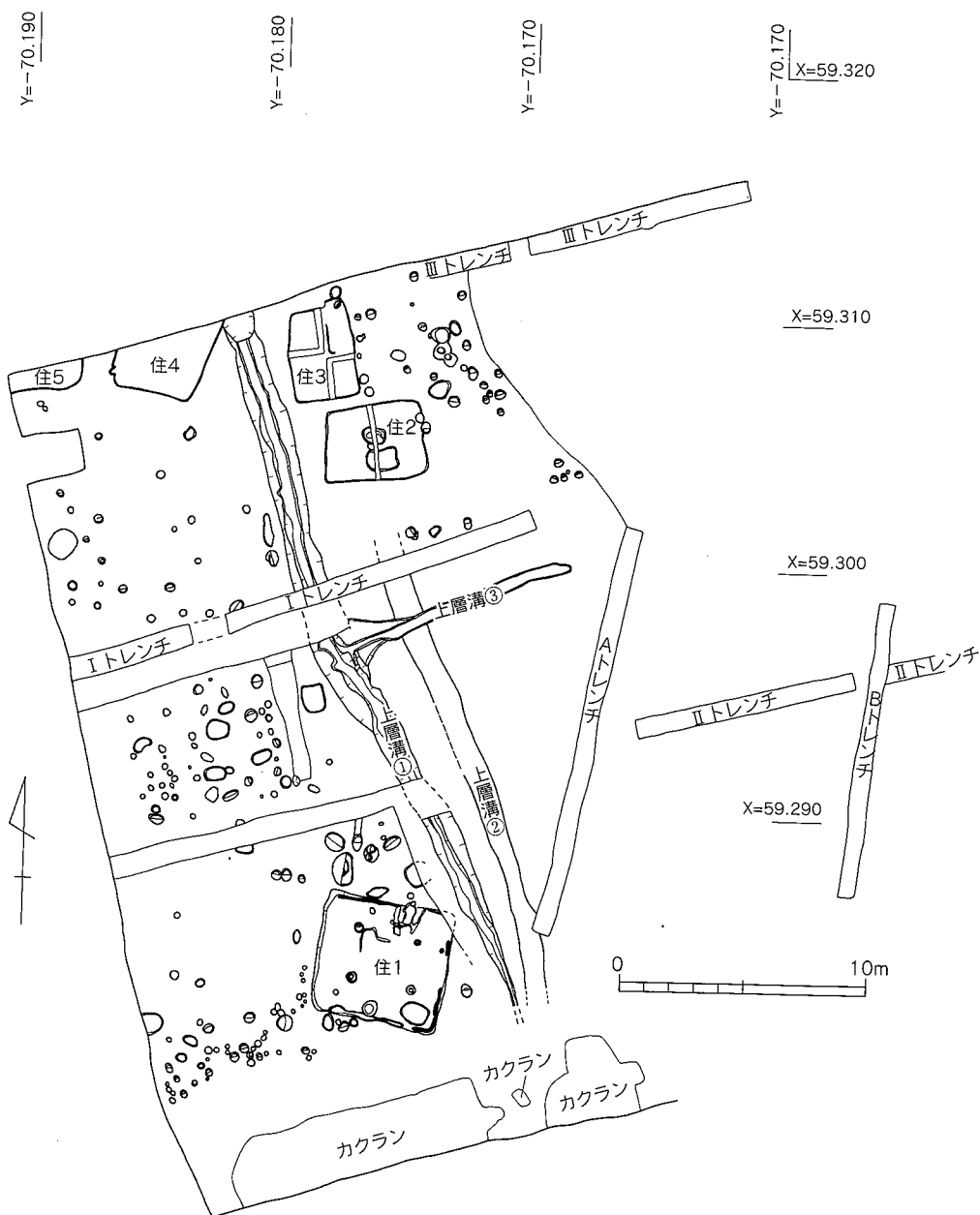
る見解、さらに後期後半～終末に位置づける見解に分かれる。また、青柳報告には、発見された棺について「壺」と表現されていることに注目し、糸島地方の甕棺の変遷のなかで甕棺の時期を推測する検討も行われている。

しかし、抜本的な解決にいたるには、井原鍵溝遺跡の所在を確認し、墓の構造、棺等についての直接的な検討が不可欠であることは言うまでもない。また、井原鍵溝遺跡の所在を確認することは、墓域の確定、引いては三雲・井原遺跡の南限を確定する上でも重要な意義を有しており、市教育委員会でも、継続して所在の確認調査を実施しているところである（第3図）。

調査にあたっては、青柳の報告をもとに旧井原村と三雲村の境界に残るヤリミゾ（鍵溝）という小字を第1の手がかりに、発見の契機となったとされる水路（付図 青線）を追って平成9年度から調査を実施している。ただし、ヤリミゾは現在の三雲地区にも連続して存するため、これらを含め旧三雲、井原村の境界付近で継続的に調査を展開することとなった。（岡部）

【参考文献】

- 青柳種信 (1822) 「柳園古器略考」
- 柳田康雄 編 (1984) 『三雲遺跡』南小路地区編 福岡県文化財調査報告書第68集
- 柳田康雄 (1986) 「青銅器の創作と終焉」『九州考古学』60
- 高橋徹 (1994) 「桜馬場遺跡および井原鍵溝遺跡の研究－国産青銅器、出土中国鏡の型式学的検討を踏まえて－」『古文化談叢』32
- 岡部裕俊 (1999) 「王墓の出現と甕棺」『考古学ジャーナル』No.451
- 常松幹雄 (2003) 「九州地方の土器」『考古資料集成』



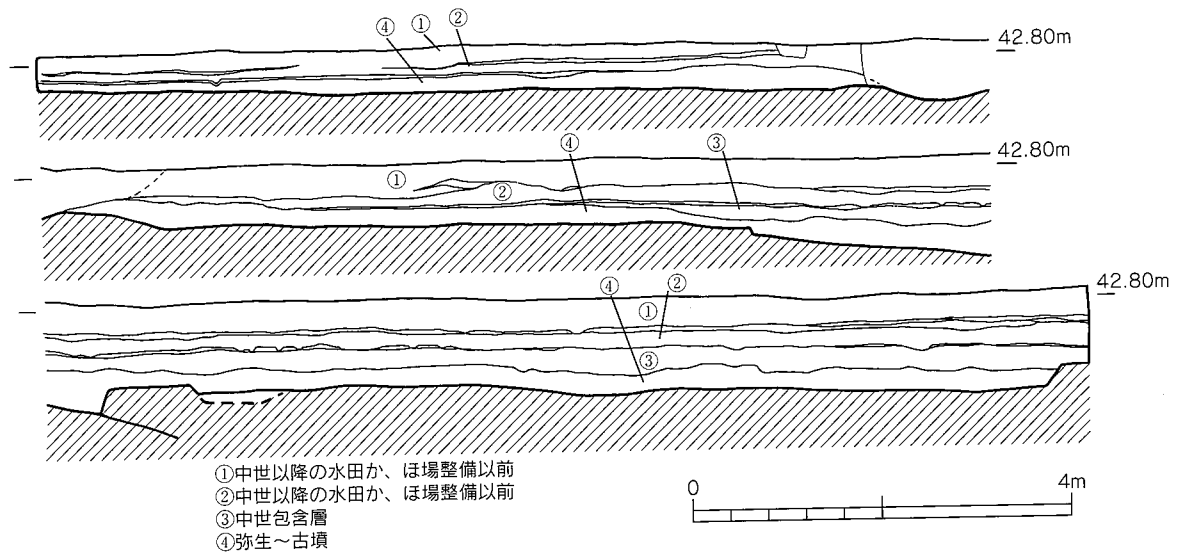
第4図 三雲437番地遺構配置図 (1/300)

3. 三雲437番地 (ヤリミゾ地区) の調査

(1) 調査の概要

平成9年度より、市教委では調査指導員会の指導に基づき、井原樋溝遺跡の調査に着手した。「柳園古器略考」によると、天明年間に三雲村と井原村の境を流れる溝の中から古鏡を得たと記していることから、前述した水路を記す地籍図をもとに、村境の溝を確認することから始め、溝付近の近世攪乱土坑の有無を確認した。

三雲437番地は三雲・井原遺跡を縦断する県道瑞梅寺池田線に隣接する箇所であり、現在は水田である。なお、近年の調査で三雲437番地の東半分は谷が入っていることが想定され、遺構の密度は薄



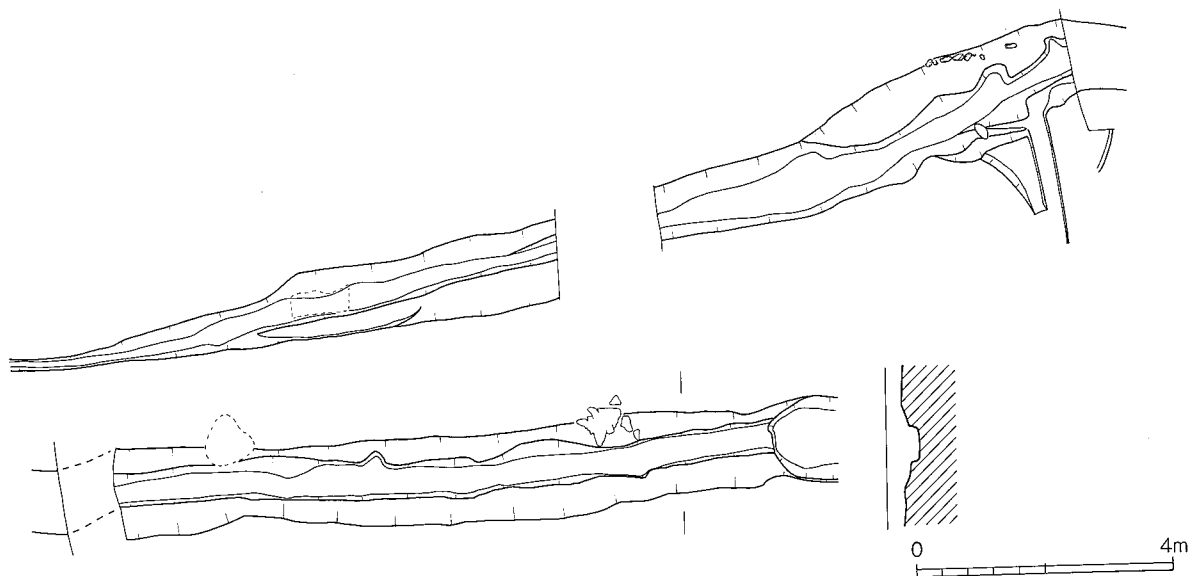
第5図 調査区北壁土層断面図 (1/80)

いものと考えられる。近世の溝は第4図のように、調査区の中央やや西側を南北方向に流れる。近世溝は部分的に両岸を石で補強しているが、攪乱土坑は未検出である。近世の遺構面の下には弥生・古墳時代の層があり、住居跡が5棟のほか土坑、ピットが多数検出されている。包含層からは主に弥生土器が出土する。

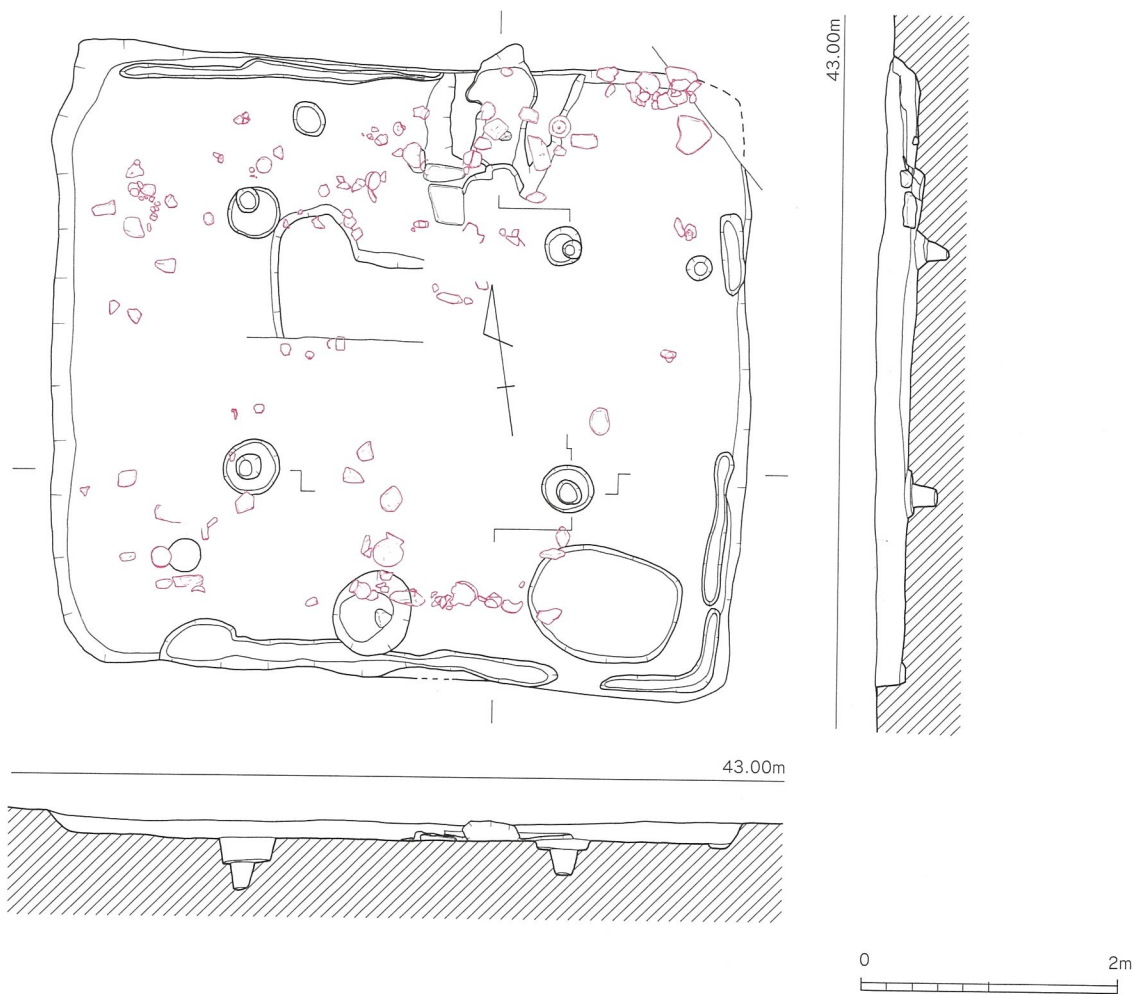
(2) 住居跡

1号住居跡 (第7図 図版2c~3b) 調査区の南側で検出した方形の住居跡である。長軸を東西方向にもち、4.66m×5.44mを測る。住居跡の南北と東壁際に周溝を設け、北壁の中央やや東寄りに両袖式の竈を築く。竈の煙道は北に伸び、燃烧部中央には支脚として石を据える。また、燃烧部から焼土を採取した。西側の袖に、補強用の石材を配す。主柱穴は径40cm、深さ30cm弱の4本である。

また、土器等は竈付近を中心とする北壁と南壁に沿って、豊富に出土する。刀子も1本出土する(第64図5)。時期は古墳時代中期前半~中頃。竈の本格的な出現、普及期に位置する。

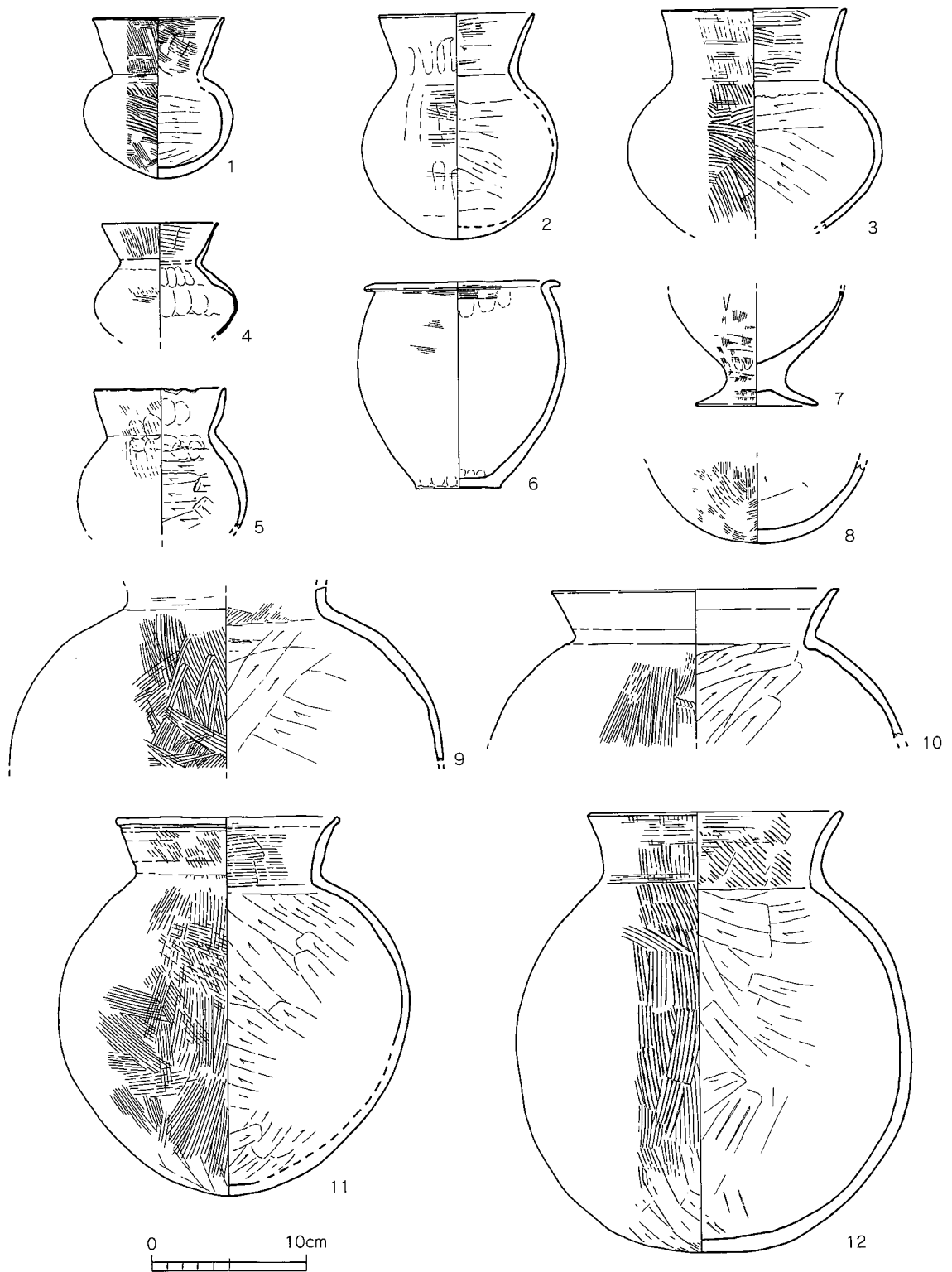


第6図 近世溝実測図 (1/120)

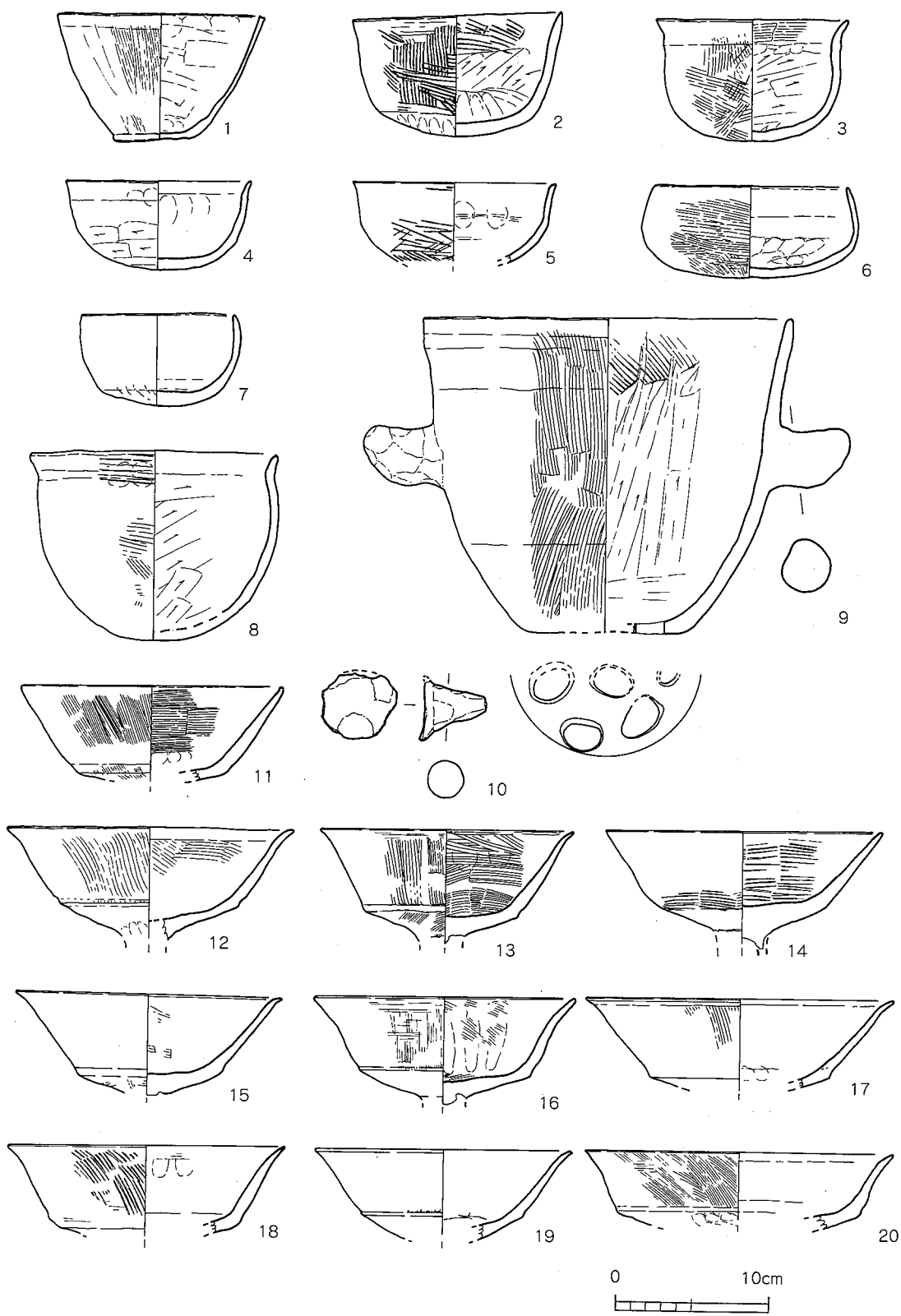


第7図 1号住居跡実測図 (1/60)

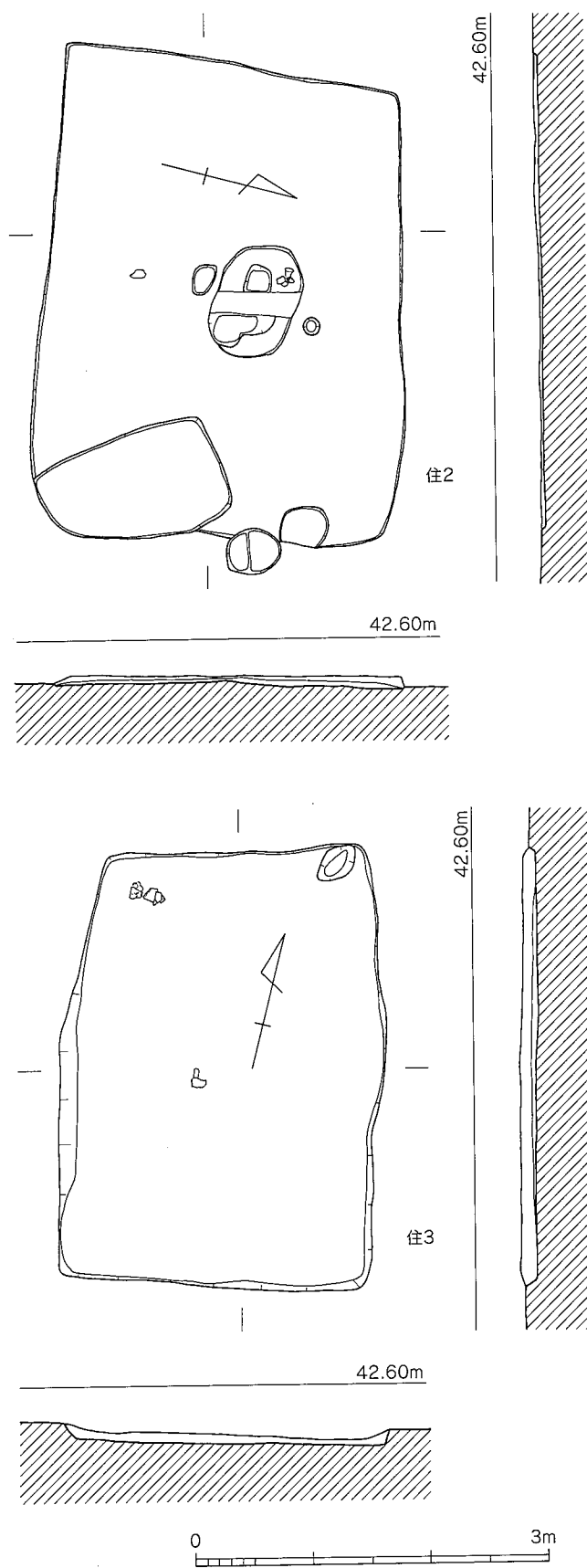
出土遺物 (第8・9・11図1~9、図版24・25) 第8図1~5は小型丸底壺である。1は胴部上半に最大径を有するなど前期の小型丸底壺の様相を受け継ぐものの、横ミガキが見られず、ハケメで調整を行う。口縁部の器壁は薄い。2~5は最大径が胴部中位まで下がり、新しい様相を見せる。3は口縁端部に若干の面を有する。内面頸部の稜は明瞭である。4の器壁は非常に薄い。5は1~4に比べて器壁の肥厚化が見られる。1~5はいずれも新しい段階の小型丸底壺で、中期中頃以降は激減する。6は弥生時代中期後半の甕で、混入品。7は台付甕か。外面はハケメで調整し、脚台端部は丸くおさめる。8~12は甕で、一部に古い要素を持つが、最大径が胴部中央に位置する。8は丸底の底部である。9は竈内出土で、肩が張る。10は尖り底の甕で口縁端部を若干摘み上げる。口縁部の器壁も厚い。12は重心が胴下半部に移行した甕で、全体的に器壁は厚ぼったい。口縁端部も丸くおさめ、頸部も丸みを帯びる。第9図1~8は鉢・椀である。1は弥生時代中期後半の鉢で、混入品。この時期から鉢・椀類の出土数が増大する。3、6~8は黒斑を有する。9は甑。器高が低く、重量感が有る。外面は粗いハケメ、内面は縦方向にケズリを施す。口縁部付近にはハケメも伴う。底は1/2ほど欠如するが、7孔か。把手下の刺突痕はない。10は甑の把手か。11~20、第11図1~8は高坏である。また、鉄滓も確認され、椀形滓も出土するが、住居に伴うものか不明である (17・18)。



第8图 1号住居跡出土土器实测图① (1/4)



第9图 1号住居跡出土土器実測図② (1/4)



10図 2・3号住居跡実測図 (1/60)

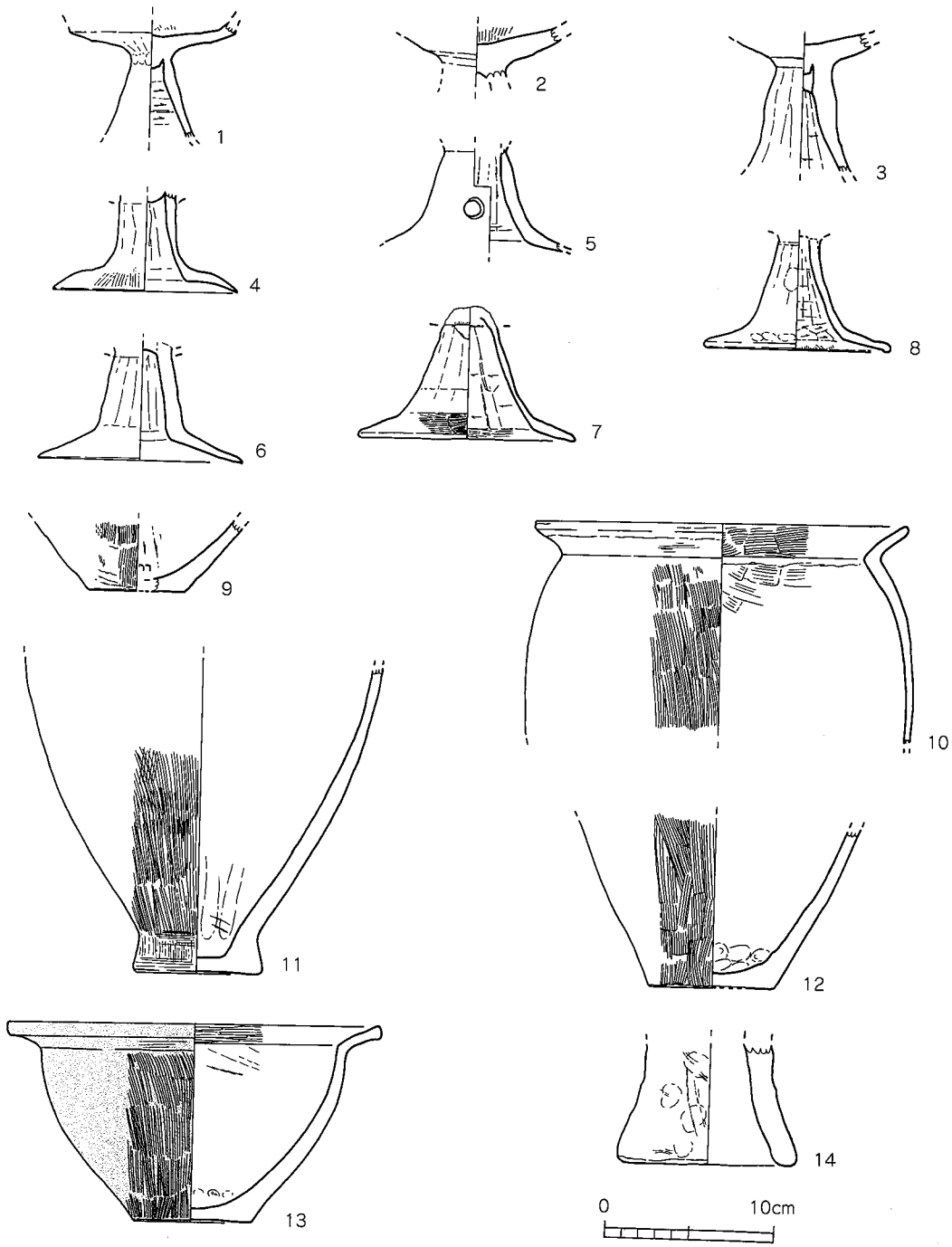
2号住居跡 (第10図1) 調査区の北側に位置する方形の住居跡である。長軸を東西方向に持ち、3.00m×4.08mを測る。東の角に浅い土坑がある。支柱穴は未確認である。中央の土坑は住居に伴わないものである。遺構は削平が進み、遺物は数少ない。時期は弥生時代中期か。

出土遺物 (第11図9、図版25) 遺物はほとんど出土していない。9は壺の底部でススが付着する。

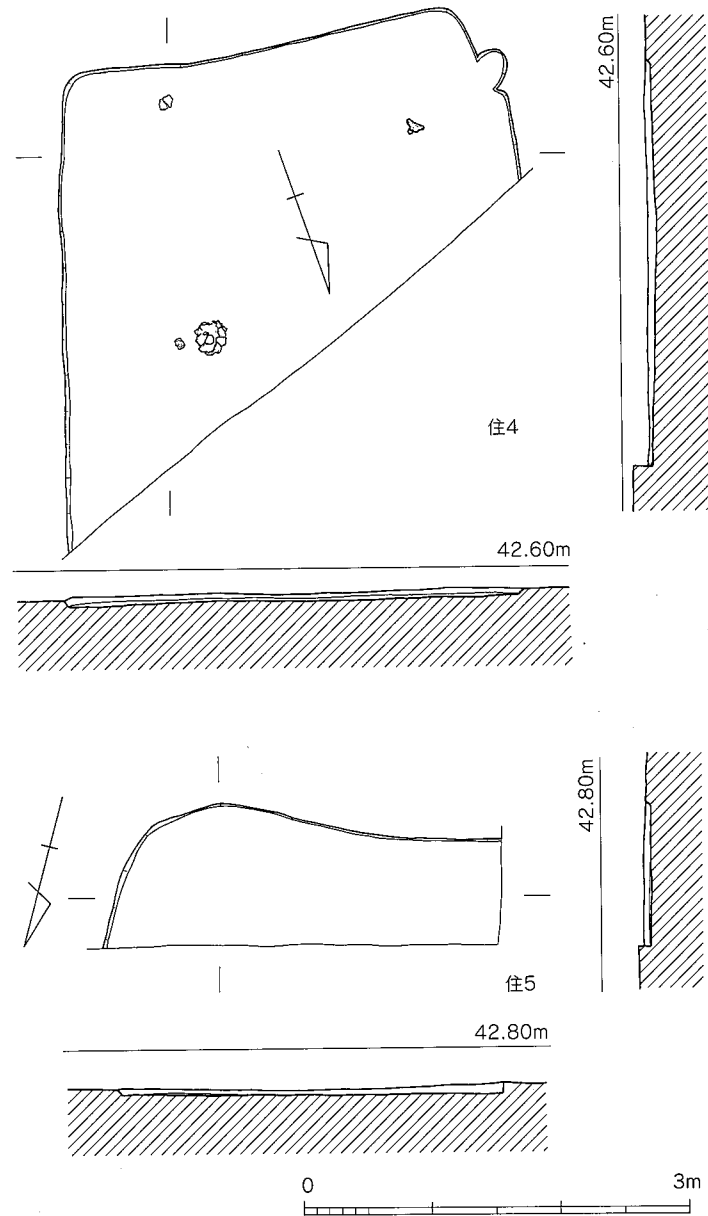
3号住居跡 (第10図2) 2号住居跡の北に隣接する長方形の住居跡である。長軸は南北方向に持ち、3.74m×2.76mを測る。支柱穴、炉跡等は未確認である。時期は弥生時代中期後半～後期前半である。

出土遺物 (第11図10～13、図版25・26) 10～12は甕である。11が古く、10がやや新しいか。13は鉢。口縁端部の調整を丁寧に行う。14は器台。外面に丹を塗布する。

(3) 包含層出土の遺物 (第13図、図版26) 包含層からは弥生時代中期を中心とした土器が出土している。1～5は壺である。3以外は丹塗りを施す。1は壺棺の破片か。6～10は甕。いずれも肩部が張り、く字口縁をもつ。11は高坏。脚柱部外面は縦に磨きを施す。12～15は器台。14は完形品で器壁が厚い。15は内湾する脚部を持つ。



第11图 1号③~3号住居跡出土土器実測図 (1/4)

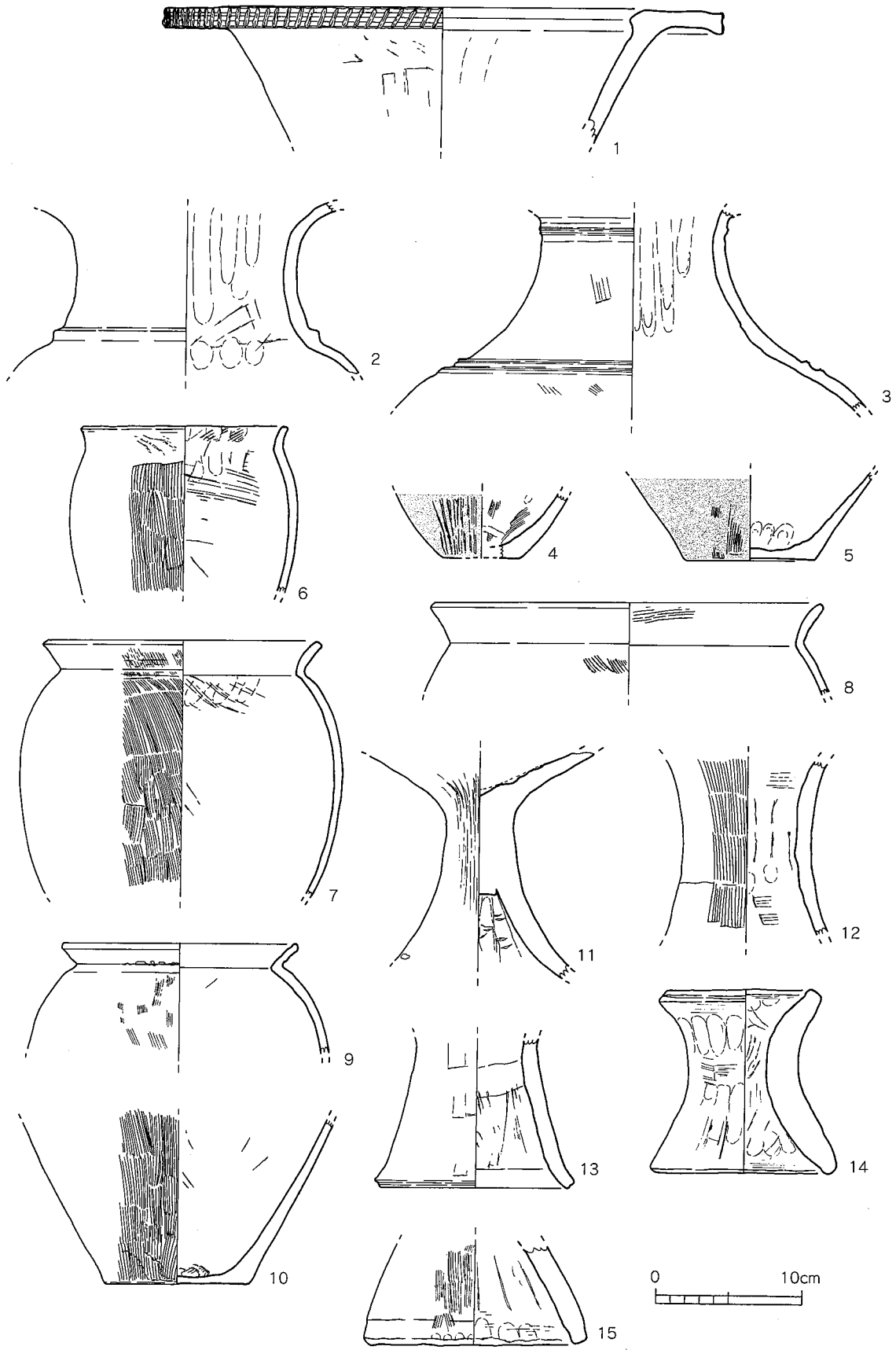


第12図 4・5号住居跡実測図 (1/60)

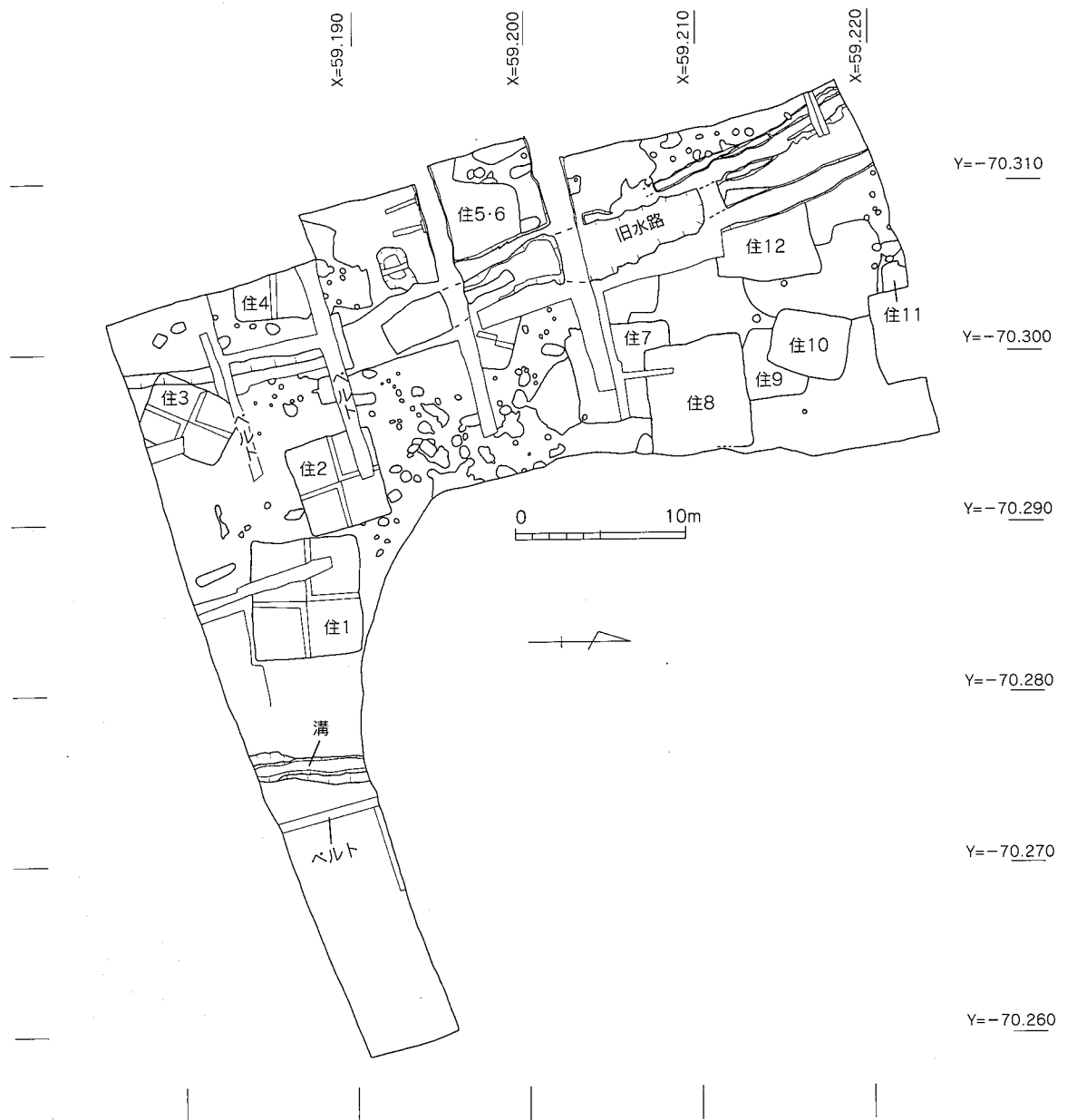
3. 井原2575番地 (ヤリミゾ地区) の調査

(1) 調査の概要

前年度に引き続き、近世溝の攪乱の検出を目的に調査を実施した。第14図のように調査区は想定される水路に沿ってL字形に設定した。調査区北側を東西に流れる溝を確認したが、攪乱は検出していない。近世の遺構面下には、古墳時代中期を中心とする住居跡13棟のほか、土坑、溝、ピットなどを確認した。しかし、今回の調査は井原鍮溝遺跡の確認調査であるため、住居跡等はトレンチ調査などの部分的なものに留めた。したがって、出土遺物はセット関係の捉えにくいものが多い。



第13图 包含層出土土器実測図 (1/4)



第14図 井原2575番地遺構配置図 (1/400)

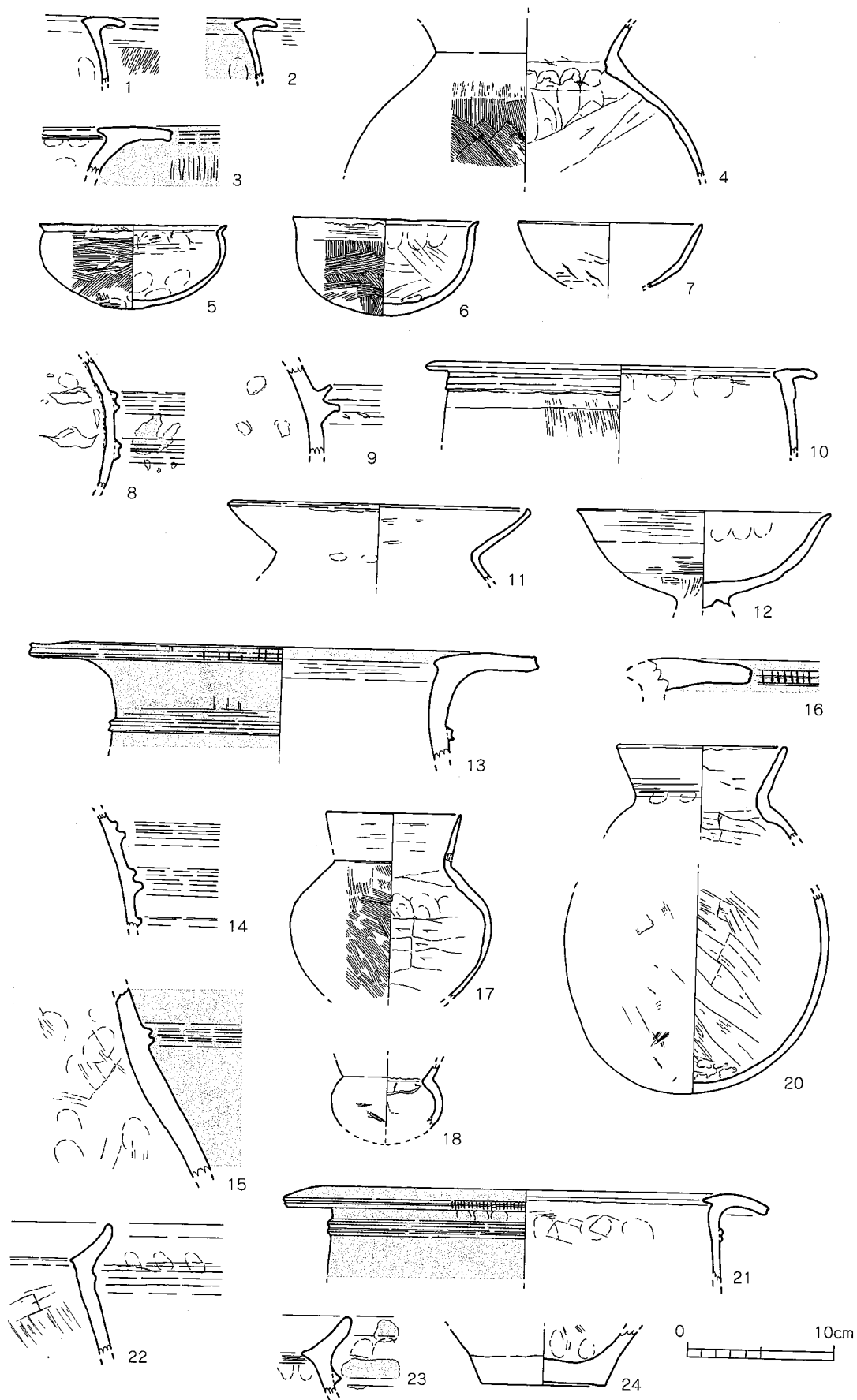
(2) 住居跡

1号住居跡 (第14図) 調査区の西側に位置する方形の住居跡で、7.00m×6.40mを測る。時期は古墳時代中期か。

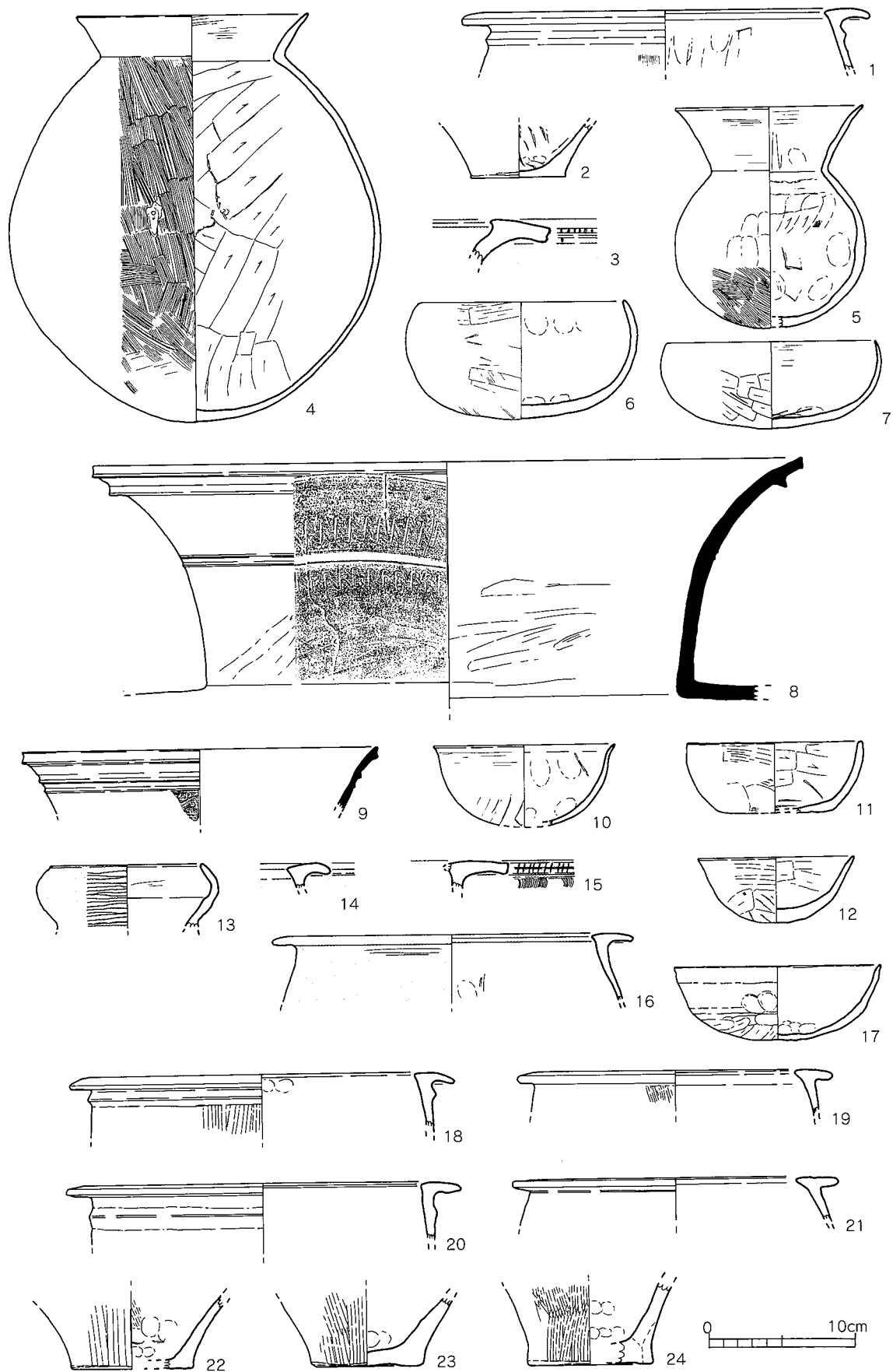
出土遺物 (第15図1~7、図版26) 1~3は混入。2は内面、3は外面に丹を塗布する。4は甕。5~7は鉢・椀。

2号住居跡 (第14図) 1号住居跡の北側に位置する方形の住居跡で5.50m×5.00mを測る。時期は古墳時代前期。

出土遺物 (第15図8~12、図版26) 8~10は混入。11は甕で、口縁端部をつまみ上げる。12は



第15图 1~3号①住居跡出土土器实测图 (1/4)



第16图 3号②~8号①住居跡出土土器実測图 (1/4)

高坏で、口縁を軽く外反させる。坏部に粘土を充填する。

3号住居跡（第14図）調査区北西部に位置し、北の角を境界溝に切られる。4.00m×5.30mを測る隅丸長方形の住居跡である。トレンチ調査であるが、比較的多くの土器が出土している。時期は古墳時代中期中頃。

出土遺物（第15図13～24、第16図1～7、図版26・27）第15図13～17、22～24、第16図の1～3はすべて弥生時代中期後半の土器。なかには丹を塗布するものもある。17は口縁部が直線的に外傾する中型壺。胴部中位に最大径をもつ。18は小型丸底壺の小片。19・20は甕。19の口縁は若干、内湾しながら立ち上がり、端部を丸くおさめる。胴部内面に強いヨコケズリを施す。20は胴部中位からやや下方に最大径を有する。底部は丸い。第16図4の重心は胴下半にある。頸部は締まりがあり、口縁端部に向けて、薄く仕上げる。5は中型壺。胴の上半から口縁部は薄く仕上げる。6・7は椀である。いずれも口縁部が強く内湾する。

4号住居跡（第14図）3号住居跡の境界溝を挟んだ北側に位置する方形の住居跡で北側半分は調査区外に伸びる。(2.7+α)m×4.3mを測る。出土遺物は無く、時期は不明。

5・6号住居跡（第14図）調査区北側の中央に位置し、北半分は調査区外に伸びる。平面で住居跡のプランを捉えているため、切合いは不明。南側は境界溝に切られる。時期は古墳時代中期中頃。

出土遺物（第16図8～12、図版27）8・9は古式須恵器で、TK208併行か。1は大甕で、頸部はL字状に立ち上がる。外面はしぼり痕が、内面には粗いヨコナデが入る。頸部の中央には、低い二条突帯が巡り、上下に波状文を施す。9は甕で、小片からの復元のため口縁径やや不安。二条突帯の下に波状文を施す。10～12は鉢・椀。10は器壁を薄く仕上げる。11は底部の詳細が不明であるが、若干新しいか。

7号住居跡（第14図）北側調査区中央に位置する方形の住居跡で、一辺6.00m前後を測る。南側を8号住居跡に切られる。トレンチ調査のため、詳細は不明であるが、時期は古墳時代中期か。

出土遺物（第16図13～17、図版27）13～16は弥生時代中期後半の壺・甕である。混入品。すべてに丹を施す。17は鉢。口縁端部をつまみ、反転させる。

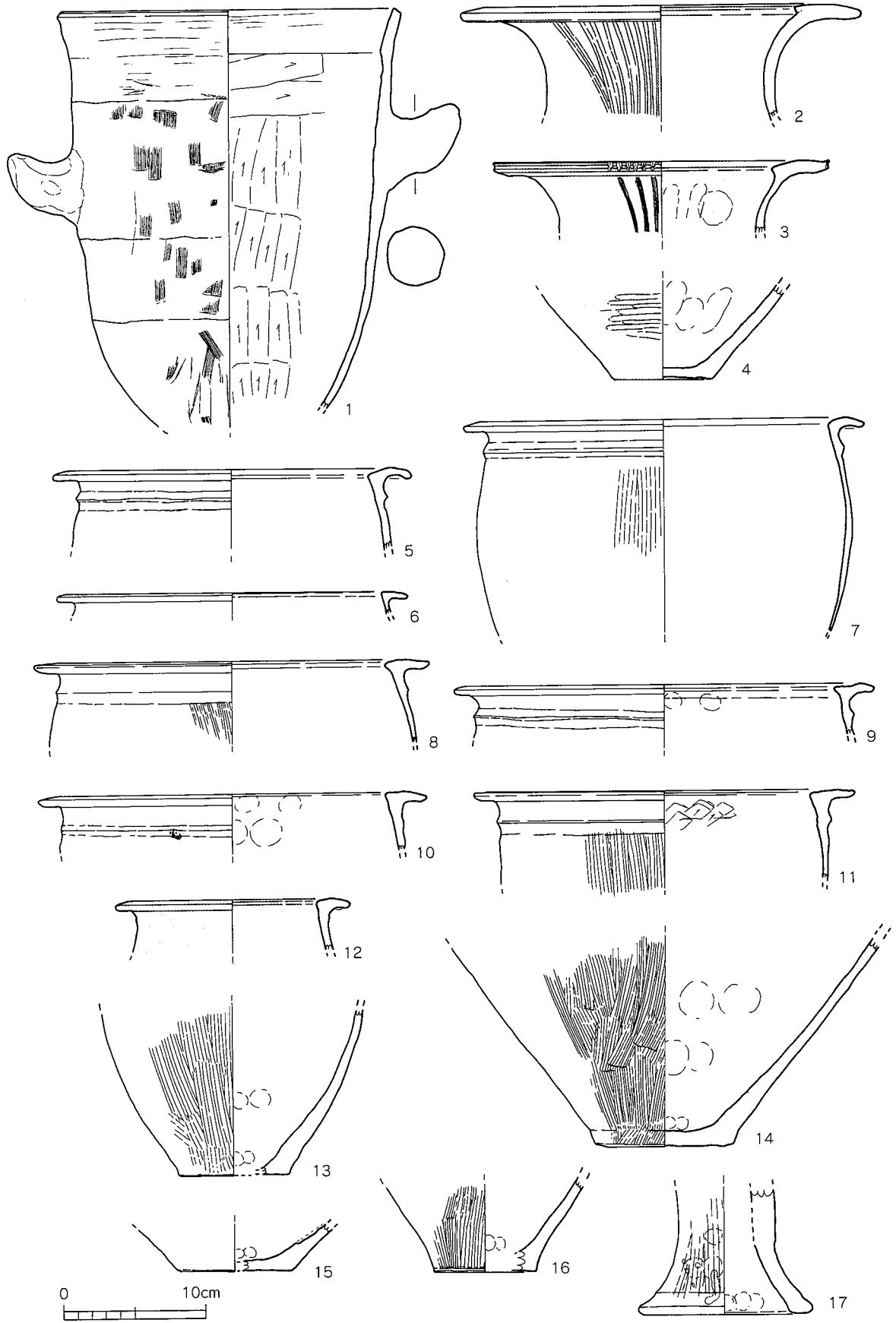
8号住居跡（第14図）7・9号住居跡を切り、南壁の一部は調査区外に伸びる住居跡で、6.8m×5.8mを測る。時期は古墳時代後期か。

出土遺物（第16図18～24、第17図1、図版27）18～24は弥生時代中期の甕で混入である。井原2575番地の調査で混入する弥生土器は、中期中頃から後半段階のものが大部分を占め、他の時期の土器をほとんど含まない。第17図1は甕で、長胴化している。外面はハケメ、内面は下から上へ、ヘラケズリを施す。把手の断面は正円である。底部は完存しないが、つつぬけタイプか。

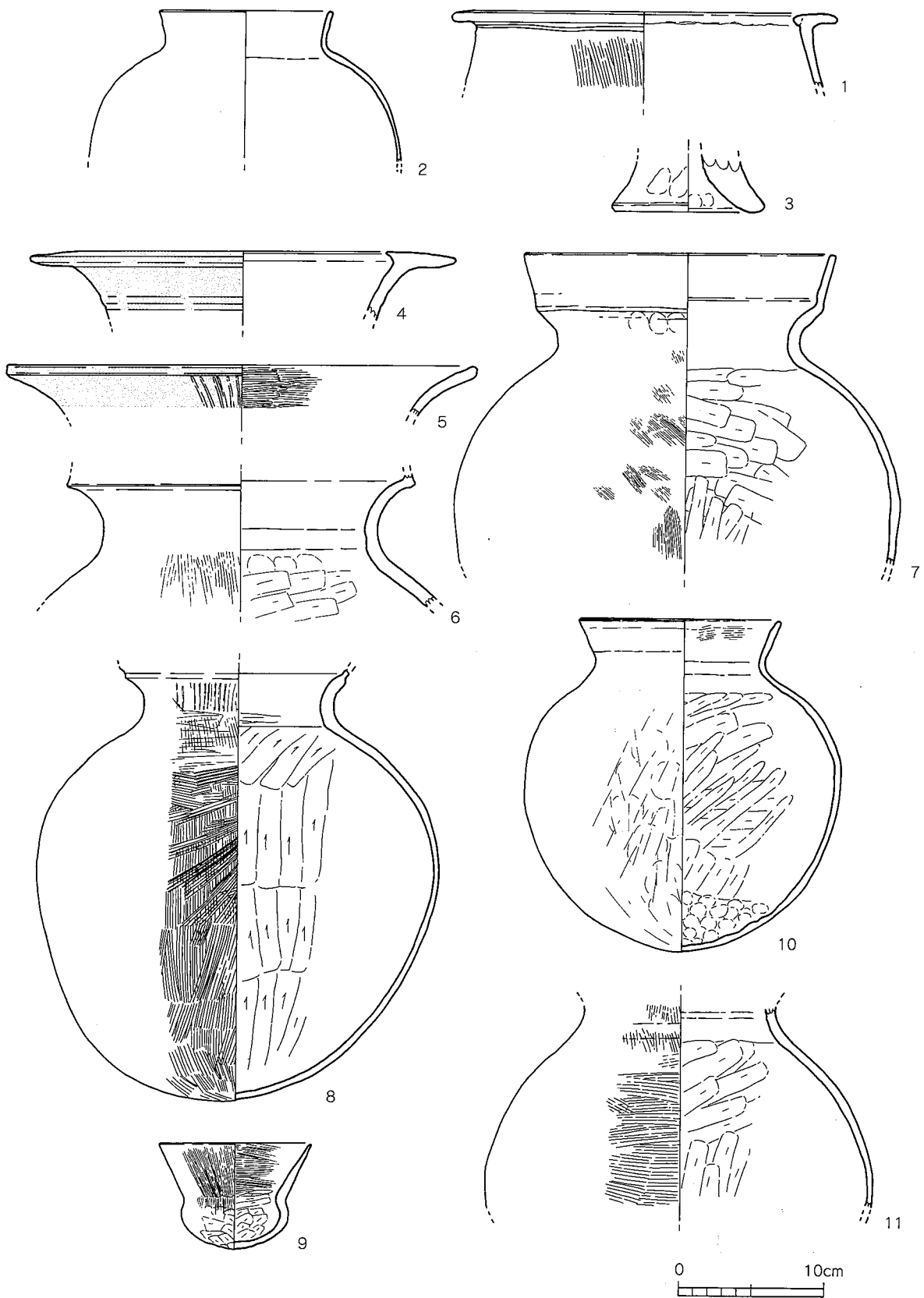
9号住居跡（第14図）8号住居跡の東に位置する方形の住居跡で、8・10号住居跡に切られる。規模は4.1m×4.0m前後か。焼失住居である。住居の時期は出土した土器から弥生時代中期後半であるが、他の住居との比較から若干の不安もある。

出土遺物（第17図2～17、図版27・28）2～4は壺で、外面に丹を施す。2・3は鋤先口縁を有する壺で、2の頸部に暗文を、3の口縁部に刻目を施す。4は外面にヨコミガキを施し、弱い上げ底をもつ。5～14・16は甕。5の口縁部は跳ね上がる。5、8～11の口縁下には弱い三角突帯を巡らす。12は外面に丹を施す。15は壺か。17は器台で、器表面に丹が飛び散る。

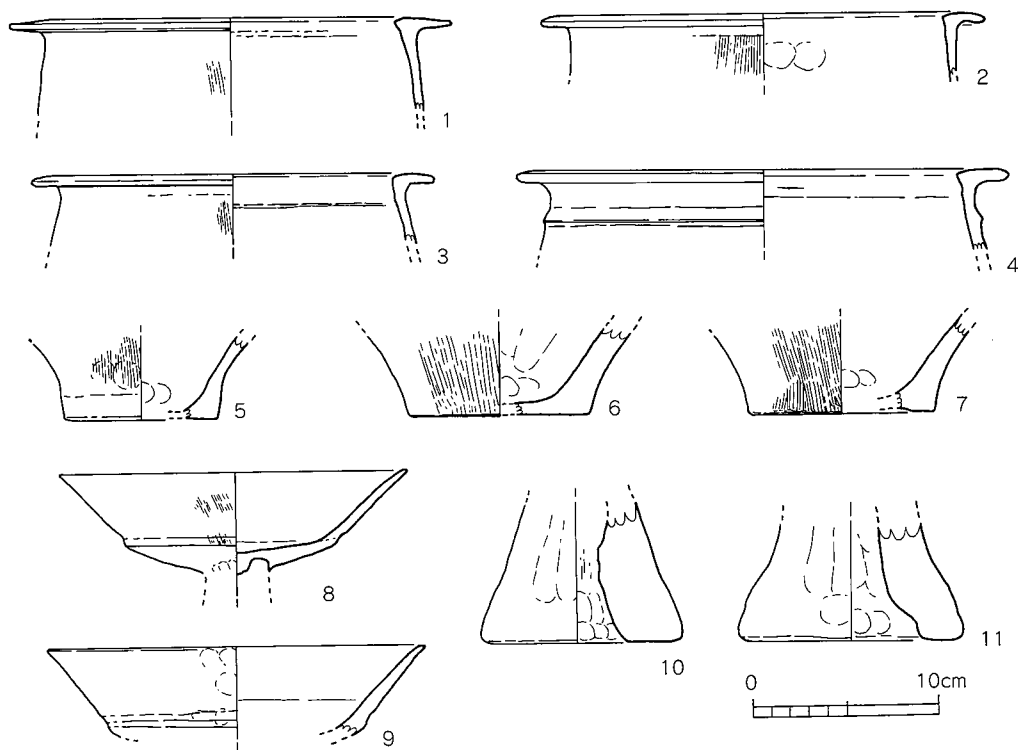
10号住居跡（第14図）9号住居跡を切る小型の方形住居跡。規模は4.5m×3.9mを測る。遺物



第17图 8号②·9号住居跡出土土器实测图 (1/4)



第18图 10·12号①住居跡出土土器実測図 (1/4)



第19図 12号住居跡出土土器実測図② (1/4)

は少量出土。時期は古墳時代前期か。

出土遺物 (第18図1~3、図版28) 1は甕、3は器台である。1は弥生時代中期後半で、9号住居跡からの混入の可能性がある。3の脚部の器壁は厚い。2は直口壺で、器壁を薄く仕上げる。胴部は球形であろう。

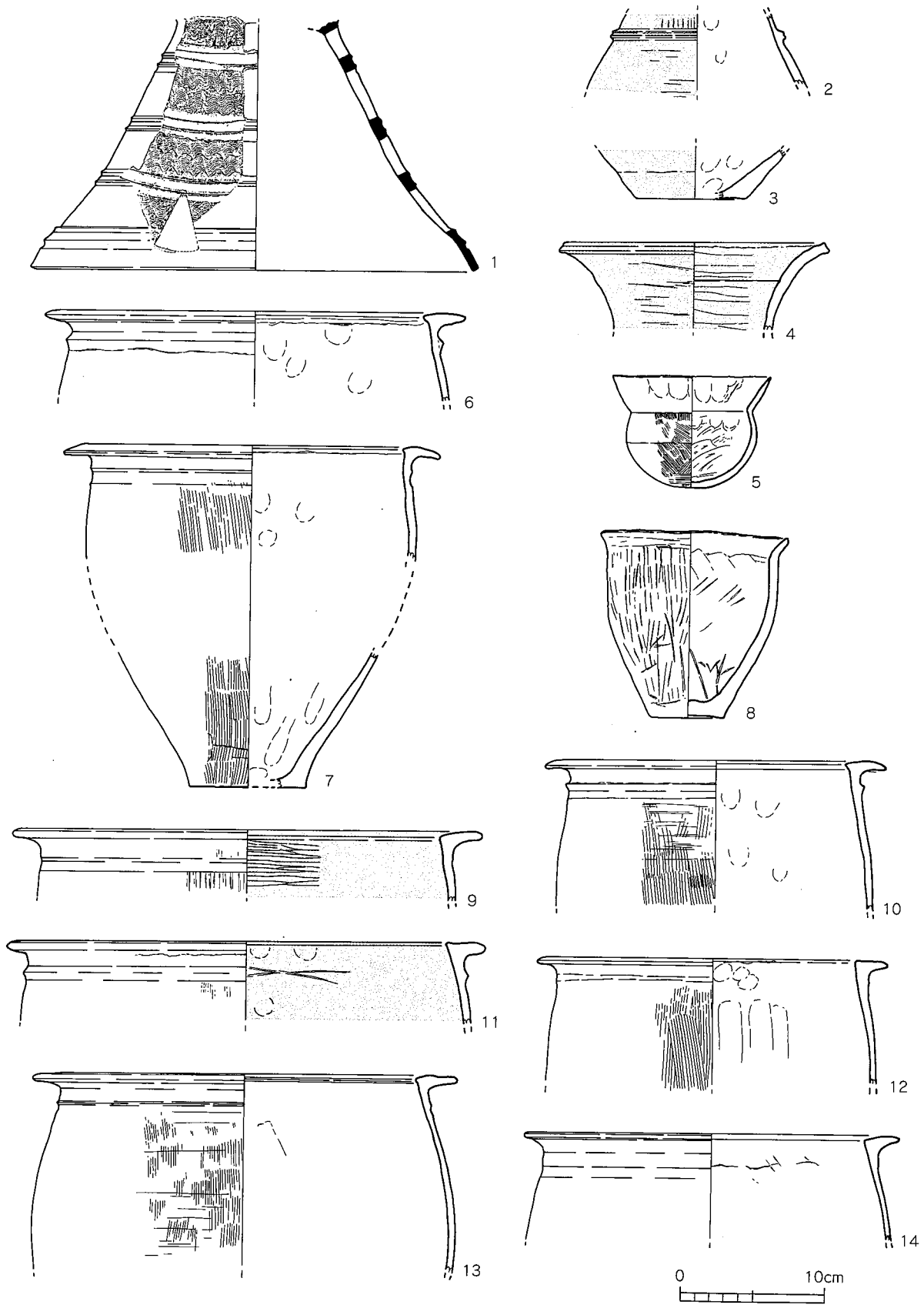
11号住居跡 (第14図) 北側調査区の東端で検出された住居跡で、東半分は調査区外に伸びる。出土遺物は無く、時期等、住居跡の詳細は不明である。

12号住居跡 (第14図) 調査区の北側に位置する住居跡で、6.0m×5.3mを測る。住居跡に西側の一部は近世溝に切られる。住居跡の詳細は不明だが、出土遺物から古墳時代中期初頭に位置付けられる住居である。

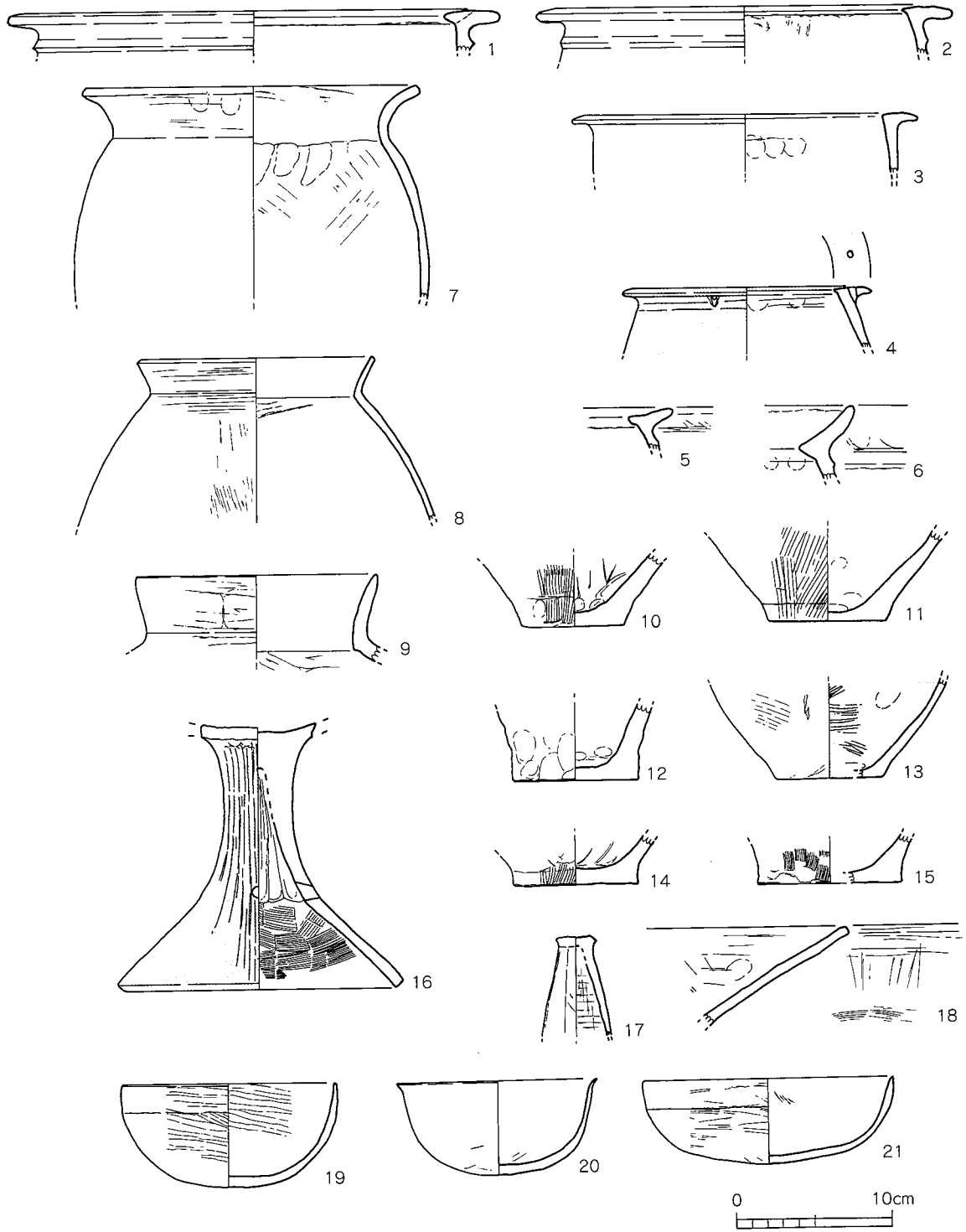
出土遺物 (第18図4~11、第19図、図版28) 4は鋤先口縁壺で頸部上半に突帯を巡らす。三井郡大刀洗町近辺に多いタイプ。5は広口壺である。両者とも外面に丹を塗布する。混入品であろう。6~8は二重口縁壺、9は小型丸底壺である。6は口縁反転部が明瞭で若干古いか。7・8は口縁反転部の稜は緩い。9は、全体的な形態は古いがヨコミガキは見られず、ケズリとハケで調整を施す。10は直線的に外傾する口縁部をもつ甕である。肩が張り、なだらかに締めりながら頸部に至る。内面底部は指頭痕が明瞭に残る。胴部内面には強いケズリを施す。11は甕か。なで肩で胴部中位に最大径を有する。第19図1~4は甕の口縁部、5~7は底部である。

(3) 包含層出土の遺物 (第20図 第21図)

1は須恵器の大形器台脚部である。1段目に三角透、2~4段目には方形透をもつ。段の間には水引きによる二重突帯を巡らす。透と透の間には波状文を施す。破片資料のため、各段の透かしの数等は不明。2~4は壺で、それぞれ丹を施す。5は小型丸底壺。外面はハケメ、内面はケズリを施



第20图 包含層出土土器実測図① (1/4)



第21图 包含層出土土器実測図② (1/4)

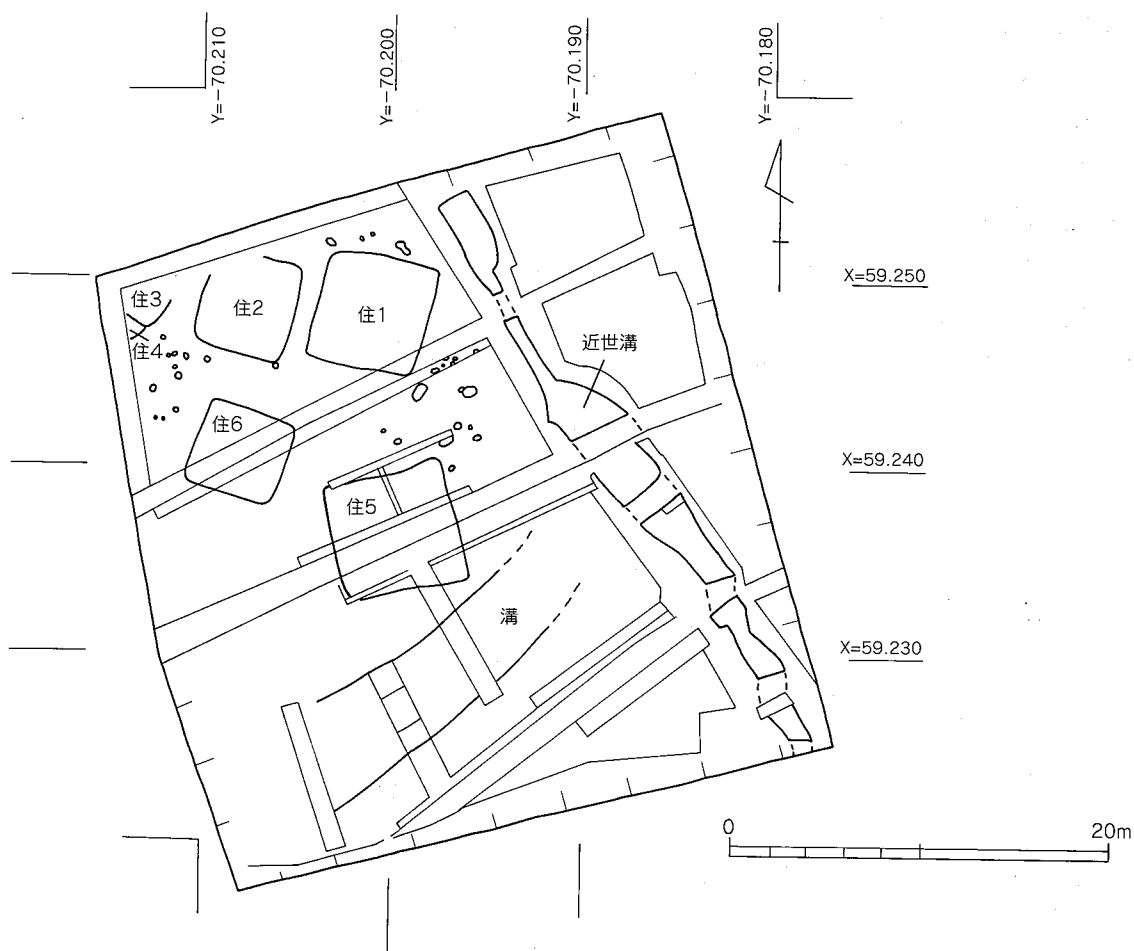
す。口縁部外面に2ヶ所、内面に3ヶ所、黒色顔料で径3.5~4.5cmの半円を描く。口縁部の歪みが大きい。完形品。6~14、第21図1~6は弥生時代中期中頃から中期後半にかけての甕の口縁部。8は完形で、口縁部の一部を打欠く。11は内面に丹を施す。14は口縁部が若干跳ね上がる。第21図4は口縁部上から穿孔する。2孔1単位であるが、破片であるため詳細不明。7は肩部が張り、口縁は内湾しながら立ち上がる。口縁端部は丸みを持つ。9は弱く外傾する口縁で端部に面はない。器厚が厚い。古墳時代中期後半。10~15は甕の底部。16は高坏脚部で、裾部に若干ふくらみを持つ。4孔穿つ。18は高坏口縁部か。19~21は鉢・碗。20は口縁端部を若干外反させる。

4. 井原2579番地（ヤリミゾ地区）の調査

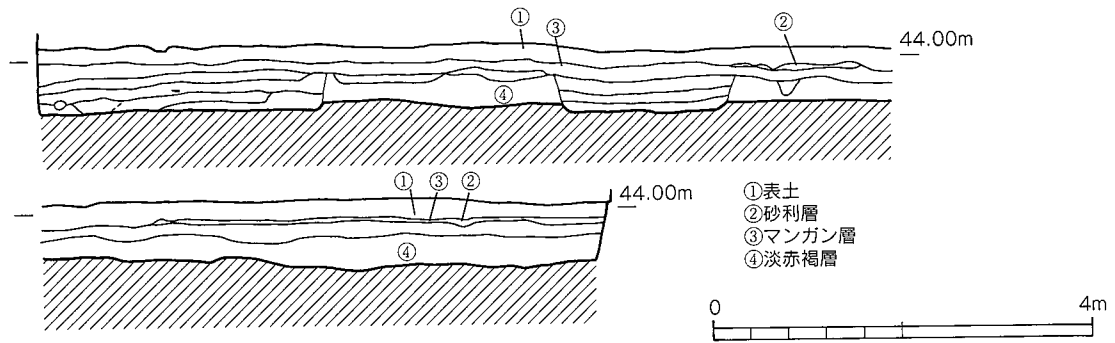
(1) 調査の概要

近世溝攪乱の検出を目的として、井原2575番地の東隣に調査区を設定する。現表土下1.5mほどで南北に走る近世溝を検出したが、井原縄溝遺跡の確認には至らず、前年度同様、古墳時代中期の住居跡を検出した。住居跡は部分的に調査したのみで、全容の解明には至っていない。

(2) 土器棺（第25図）近世溝を切る形で検出された土器である。著しく削られ、底部と口縁部の小片のみ確認された。器壁は厚く。胎土が良くない。



第22図 井原2579番地遺構配置図 (1/400)



第23図 IV区1トレンチ北壁土層断面図 (1/80)

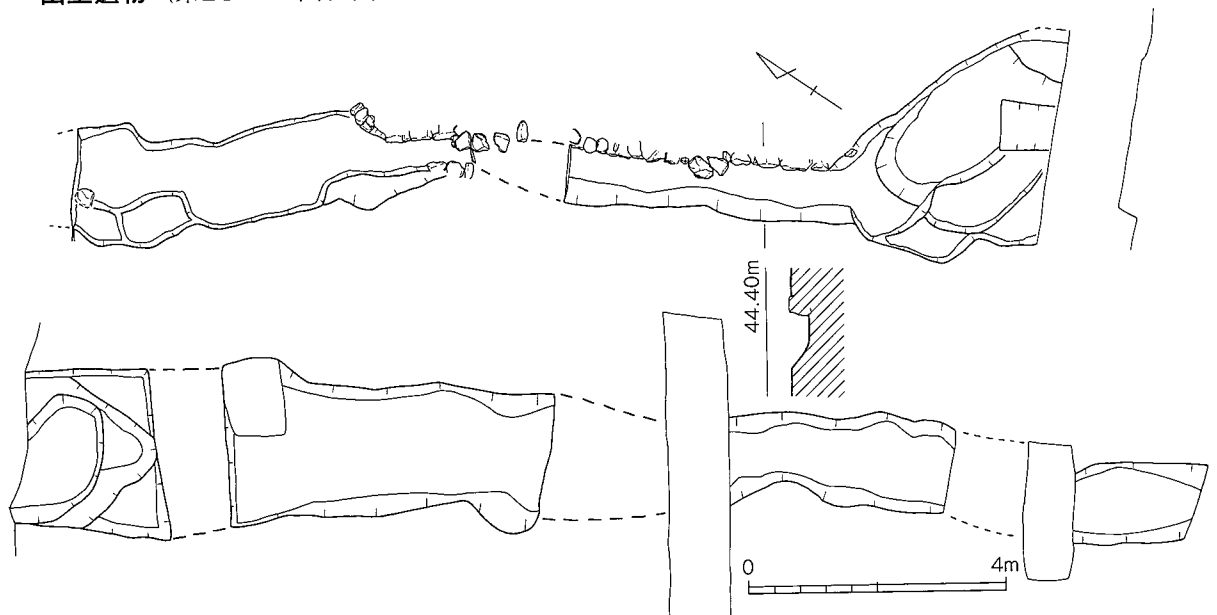
(3) 住居跡

1号住居跡 (第22図、図版4・5a・b) 調査区の北側に位置する住居跡である。規模は6.0m×5.8mを測り、住居跡自体の残りも良好である。部分的な調査であったが、北壁には作り付けの竈を検出した。また、東際には屋内土坑が確認された。時期は、古墳時代中期中頃か。

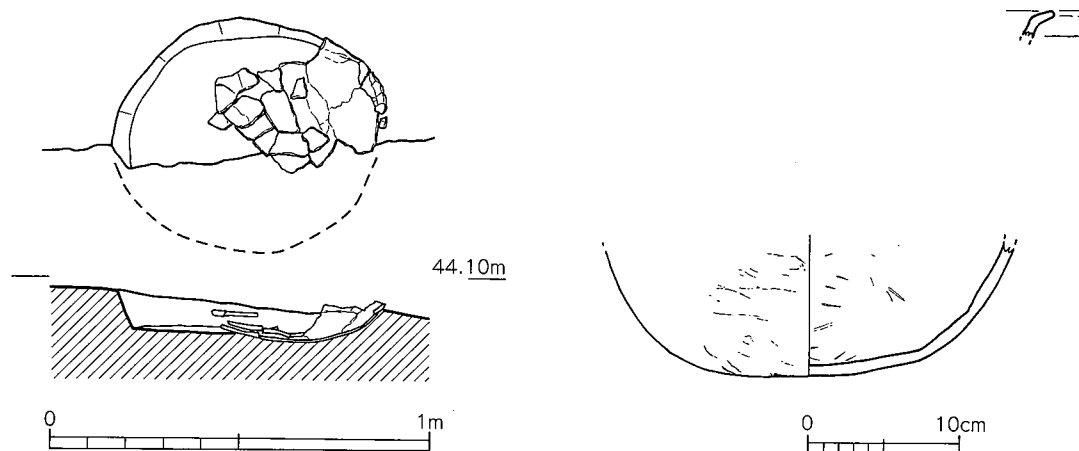
出土遺物 (第26図、図版30) 1は甕の口縁部である。頸部には2条の突帯を有する。突帯の間には波状文を有する。2は小型丸底壺で、外面に黒斑を有する。左右非対称で、口縁部の調整も粗い。しかし、口縁端部に面が有り、古い様相を若干残す。3~6は甕で、3は外面に丹を施す。弥生時代に含まれ、混入品であろう。4・5の口縁は若干内湾しながら立ち上がる。5は口縁部から胴部上半まで器壁が厚い。頸部内面には明瞭な稜を有する。6は直線的に外傾する口縁を持ち、胴部中位に最大径を有する。また、外面に、ハケメを明瞭に残す。7~10は椀である。7・10のように口縁部が内湾するものと8・9のように外に開き気味のものもあるが、口径はほぼ同じである。8は口縁部に黒色顔料を塗布する。10は竈内出土。

2号住居跡 (第22図、図版5c) 1号住居跡の北西側に隣接した住居跡で、北側の一部が調査区外になる。規模は5.2m×5.0mを測る。部分的な調査であったが、竈等は確認されていない。時期は古墳時代中期中頃か。

出土遺物 (第26・27図、図版30・31) 1は壺の胴部。胴部半ばに波状文を施す。2は壺。胴部



第24図 近世溝実測図 (1/120)



第25図 近世土器棺墓実測図 (1/20, 1/8)

中央に最大径を有する。頸部が強く締まる。3~7は甕。3は胴部最大径を胴部中央に有する甕で、口縁部は外傾しながら、直線的に立ち上がる。胴中央部の器壁が薄い。4は小型の甕で、胴の張りは弱い。全体的に調整はあまいが、頸部内面の稜は鋭い。5は大きく内湾しながら立ち上がる口縁部を持ち、端部の調整はあまい。黒斑を有する。頸部の稜も不鮮明である。6は口頸部が短く、器壁も厚い。8は甕で、甕の底部に焼成前の穿孔を施す。孔は底部中央に一孔穿つ。9~15は鉢・椀である。9~12は小さく反転する口縁部を持つ。端部はいずれも丸くおさめる。14・15は素口縁で、13は両者の中間的口縁部を持つ。なお、13は黒斑を有する。16は支脚状土製品である。口縁部が一部欠損するが、丁寧な作りで、脚柱部は面取りを行う。底部は平らである。

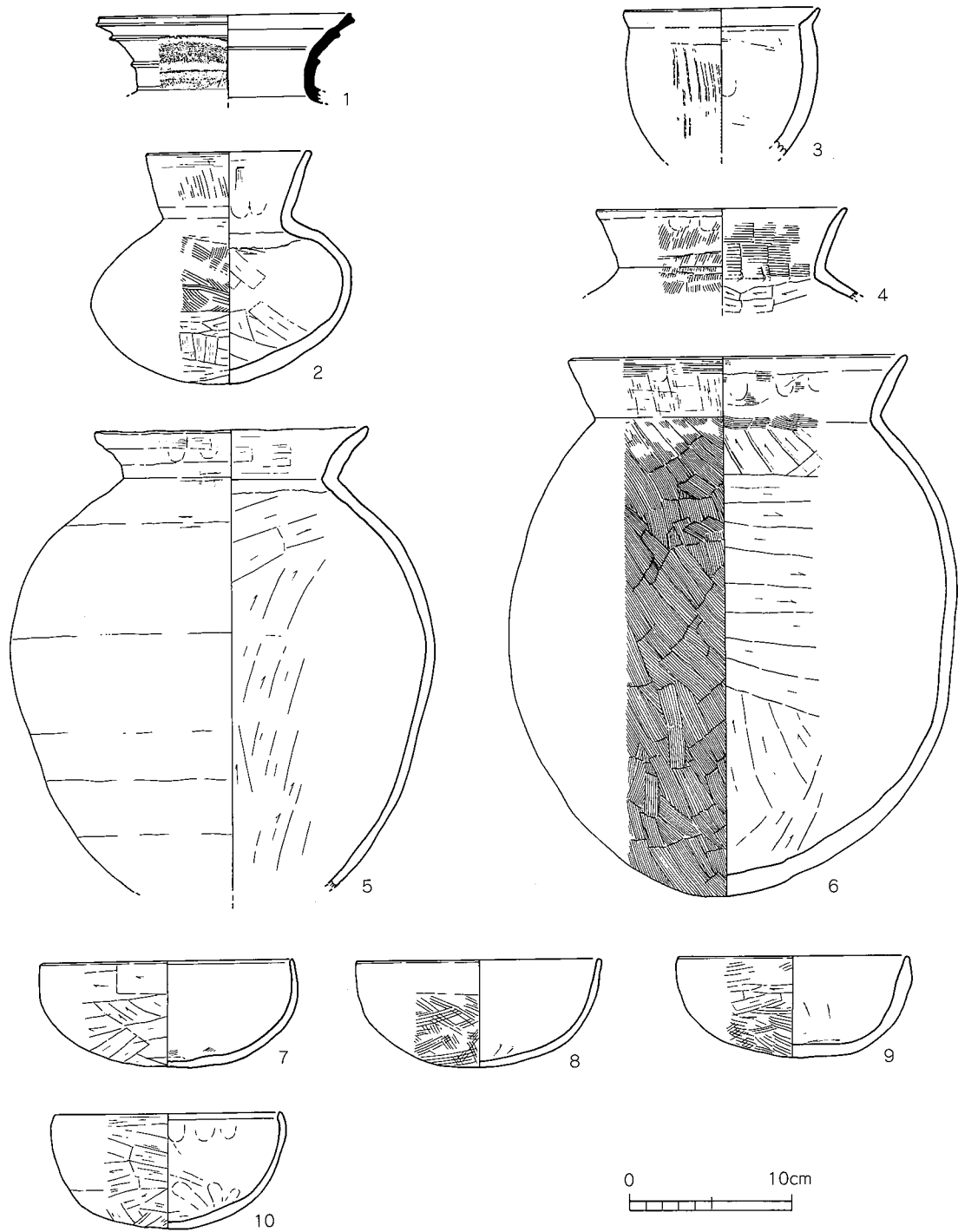
3号住居跡 (第22図) 調査区北西隅で検出された住居跡で、その大部分が調査区外に広がる。部分的な調査のため、規模、時期等は不明である。

出土遺物 (第27図、図版31) 17は壺である。胴中央部に最大径を有し、口縁部は直立する。なお、端部は丸くおさめる。

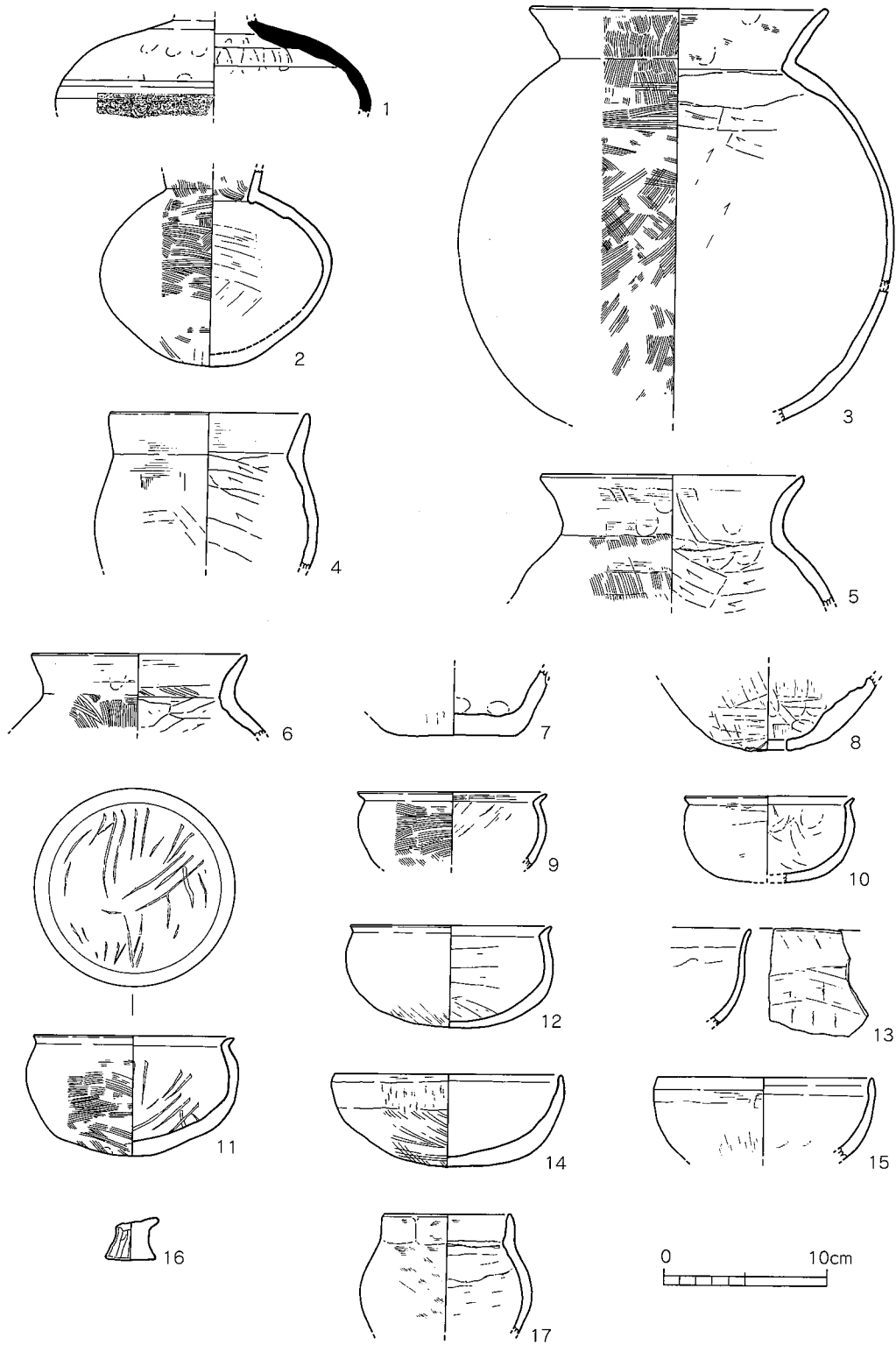
4号住居跡 (第22図) 3号住居跡に切られる形で調査区の隅で検出された住居跡である。住居跡の大部分が調査区外のため、規模や住居の時期の特定ができない。出土遺物も無い。

5号住居跡 (第22図、図版6a) 調査区の中央部に位置する住居跡で、6.0m×6.6mを測る。主軸を東西に持つ。トレンチ調査であったが、豊富な出土遺物が確認された。住居の時期は古墳時代中期中頃である。また、造付けの竈は確認されていない。

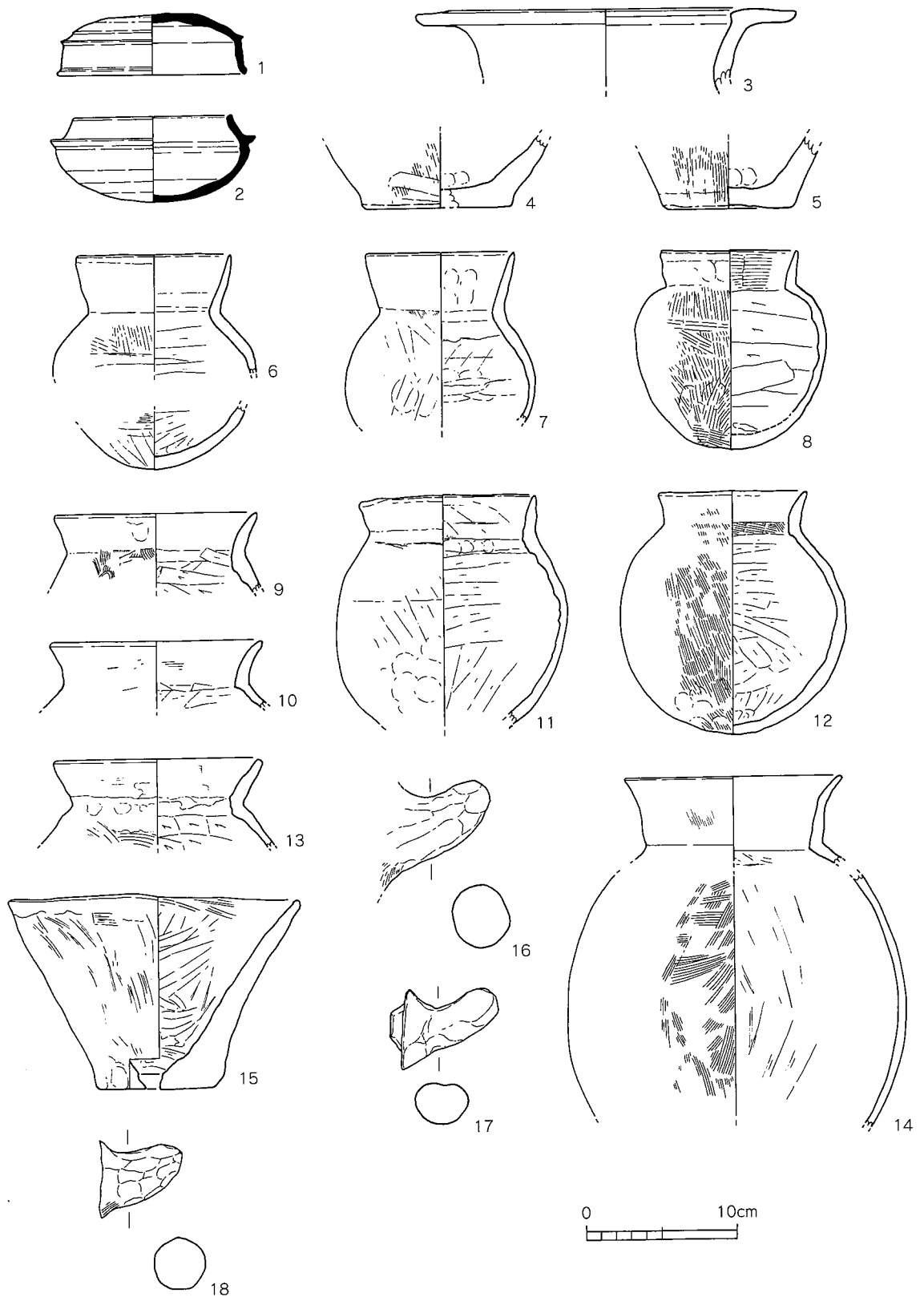
出土遺物 (第28・29図、図版31・32) 1は坏蓋である。外反する口縁端部を持ち、内面に稜は見られない。若干内傾しながら立ち上がり、鋭い稜を有する。天井部は、比較的平らで、稜の上方から丁寧な回転ヘラケズリを施す。灰黄色を呈す。ほぼ完形。2は坏身。きつく内傾しながら立ち上がる口縁部を有し、端部を反転させる。受部は上方につまみ上げる。受部以下は丸みを帯び、回転ヨコナデを施す。回転ヘラケズリは底部の中心部付近にのみ施す。ほぼ完形。1・2ともに内面に当て具痕を有する。TK216併行か。3~5は弥生時代の壺と甕で混入品。なお、井原2579番地においても古墳時代中期の遺構に混入する遺物は弥生時代中期後半の土器が大部分を占める。6・7は壺である。6は胴が張り、7は撫肩で最大径を胴下半に有する。両者とも内湾しつつ立ち上がる



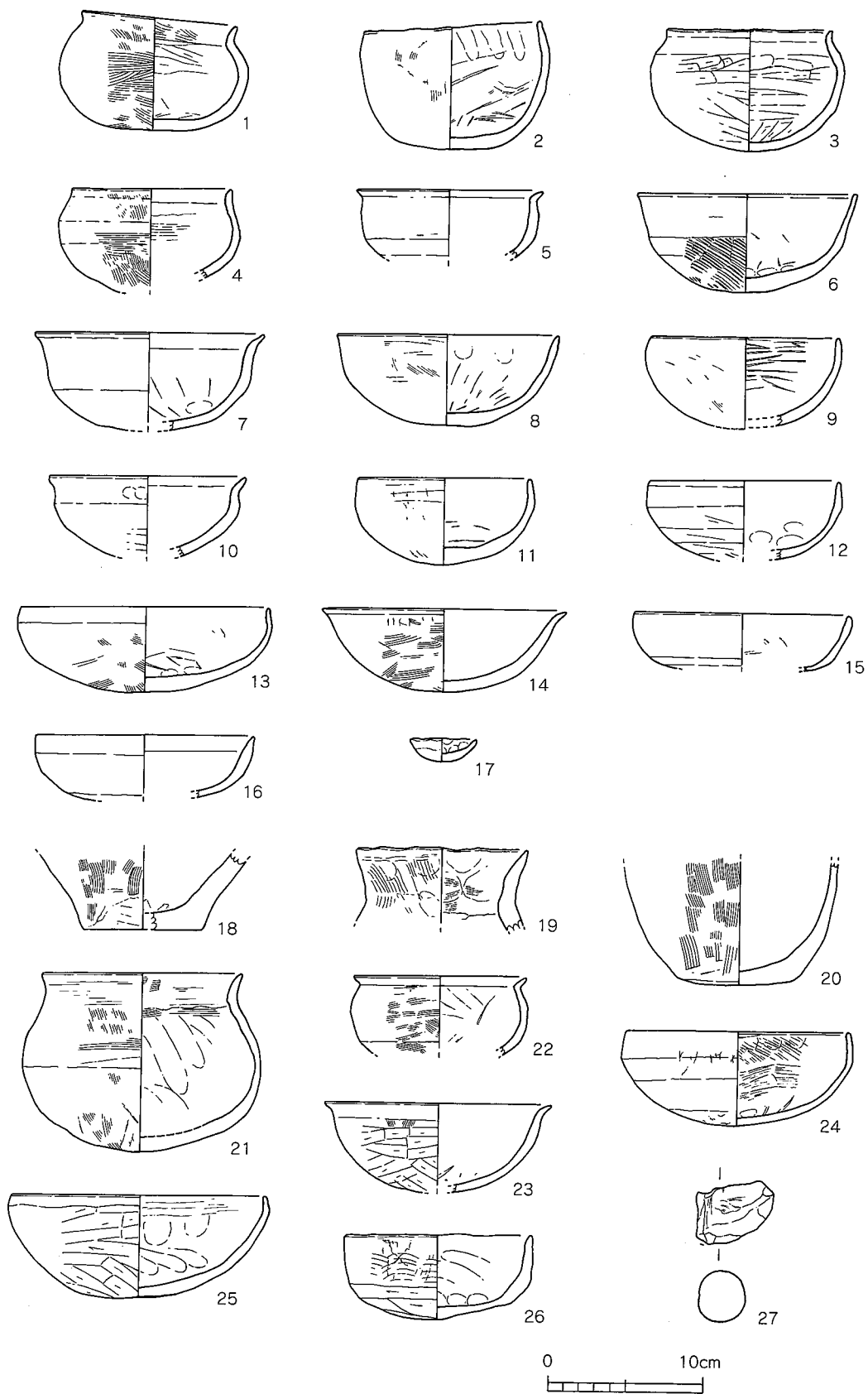
第26图 1号住居跡出土土器実測図 (1/4)



第27图 2·3号住居跡出土土器実測図 (1/4)



第28图 5号住居跡出土土器実測図① (1/4)



第29图 5·6号住居跡出土土器実測図② (1/4)

口縁部を有する。端部も丸みを帯びる。6・7ともに小型丸底壺の系譜を引くものであろうが、三雲437番地1号住居跡出土小型丸底壺のように前期の要素が残されていない。おそらく最終段階の形態であろう。なお、6は黒斑を有する。8は壺と甕の中間的形態である。ほぼ直立する口縁部に、肩が張る胴部がつく。内面頸部以下は強いヘラケズリが施され、底部にケズリ屑状の粘土帯が残る。9～13は甕である。いずれも頸部で器壁が厚く、口縁端部へ向かい薄くなる。端部はいずれも丸くおさめる。胴頸部の境は強い稜を有し、全体的に胴が張らないものが多い。12は黒斑をもつ。14も甕。前者と異なり、器壁を薄く仕上げ、口縁部は内湾しながら立ち上がる。頸部内面には強い稜を有する。15は鉢形甕。平底から、内湾しながら立ち上がる鉢で、口縁部はつまみあげたあと丸くおさめる。器壁は厚い。容量は1リットル前後で、弥生時代後期から出現する甕の底部に穿孔を施す鉢形の甕の一種であろう。蒸気孔の数は1つである。黒斑有。16～18は甕の把手である。いずれも差込式。第29図1～16は鉢・椀である。1・3・11・14は完形。6・11には黒斑を有する。この時期から、鉢・椀の構成比率が大きくなる。17はミニチュア土器である。手捏ねで、椀もしくは皿をあらわしたものか。

6号住居跡（第22図、図版6b）調査区中央やや北側に位置する。2号と5号住居跡の間で検出された。6号住居跡も5号と同様、住居の中央部に土層観察用の畔が残されているため、限られた調査となっている。規模は4.6m×4.7mを測る。住居跡からは土器のほかに鉄鎌が出土している。時期は古墳時代中期中頃か。竈は確認されていないが、甕の把手が出土した。

出土遺物（第29図18～27、図版33）18は甕の底部で混入品。19～21は壺。19は頸部の締まりが弱く、器壁も厚くなる。21は無頸壺か。撫肩で、胴半ばで最大径を有する。頸部内面は強い稜をもつ。黒斑有。22～26は鉢・椀である。明瞭な口縁を持つものと不明瞭なものの二者が並存する。27は甕の把手。

5. 三雲441番地（上覚地区）の調査

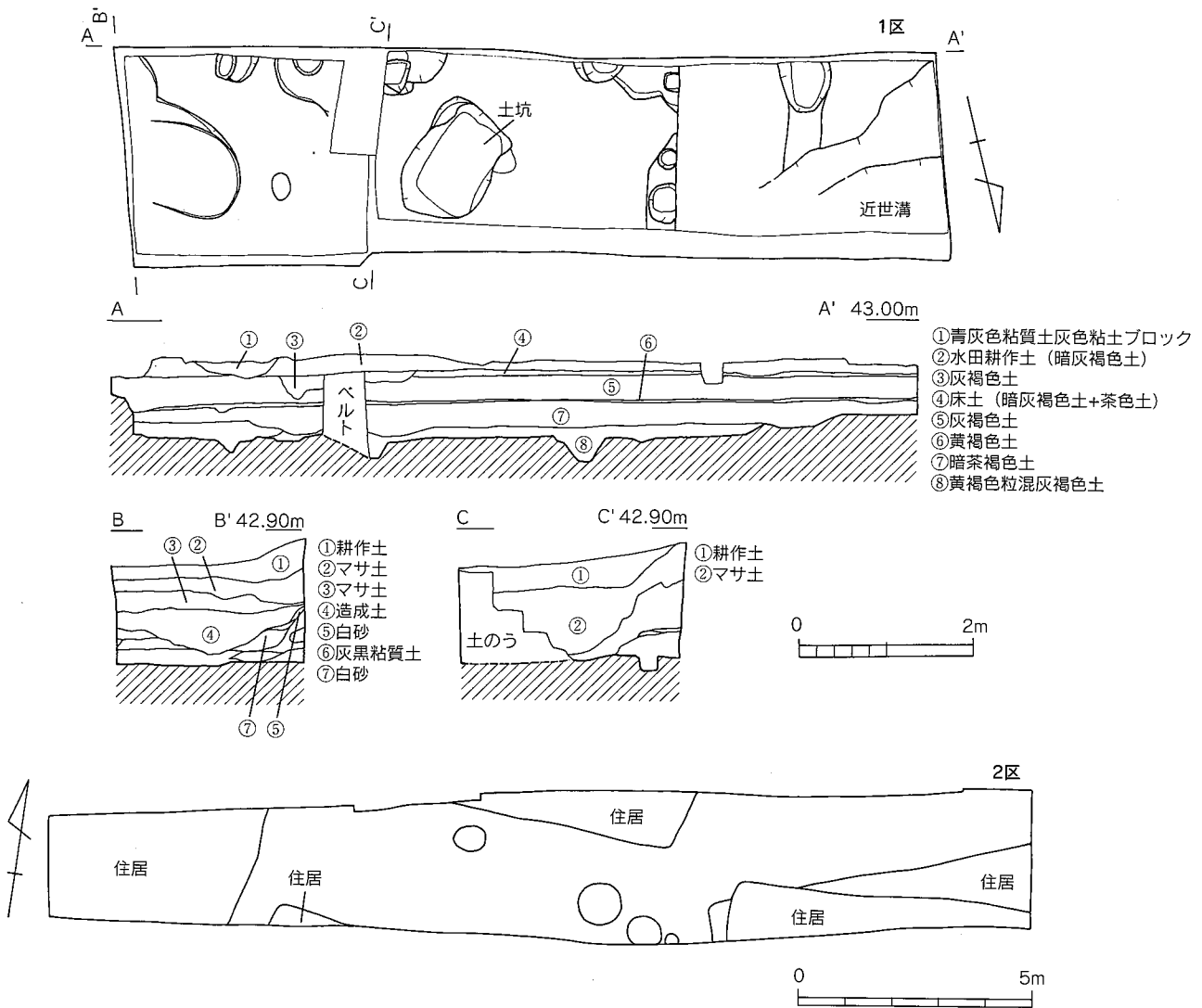
（1）調査の概要

大字三雲字上覚441番地は、平成10・11年度に調査を行った大字井原字ヤリミゾ2579番地で確認した南から北に流れる旧水路の北に位置する。現在はいちこの栽培が行われている。南の東西にのびる農道がほ場整備前の大字井原と三雲の字境に相当し、さかのぼって大正4年の地籍図でも追認することができる。まさに旧三雲村と井原村との境界上に位置している。井原澗溝遺跡の所在する可能性が高いと推定していた地点の一つである。

しかし、441番地は、ほ場整備前は数枚の水田であったものを1枚に区画しなおして整備されており、ほ場整備の際に、遺跡を保護するためほ場全体を厚く真砂土で盛土保護する措置がとられている。このことから調査に伴う表土剥ぎで扱う土量が膨大となることが予測された。また、水田の東部には高耐久性のビニールハウスが建てられており、早急なハウス下部での発掘調査はできそうになかった。このため一度に広範囲に調査を実施することは極めて困難な状況であった。

そこで、地権者である平山邦一氏のご了承を得て、調査区、時期を分割して調査することとした。

平成12年度にはビニールハウス南東部に東西方向のトレンチ（1区）を設定した。また、平成14年度にはハウスの南西部にトレンチ（2区）を設定するとともに西部にL字形の調査区（3区）



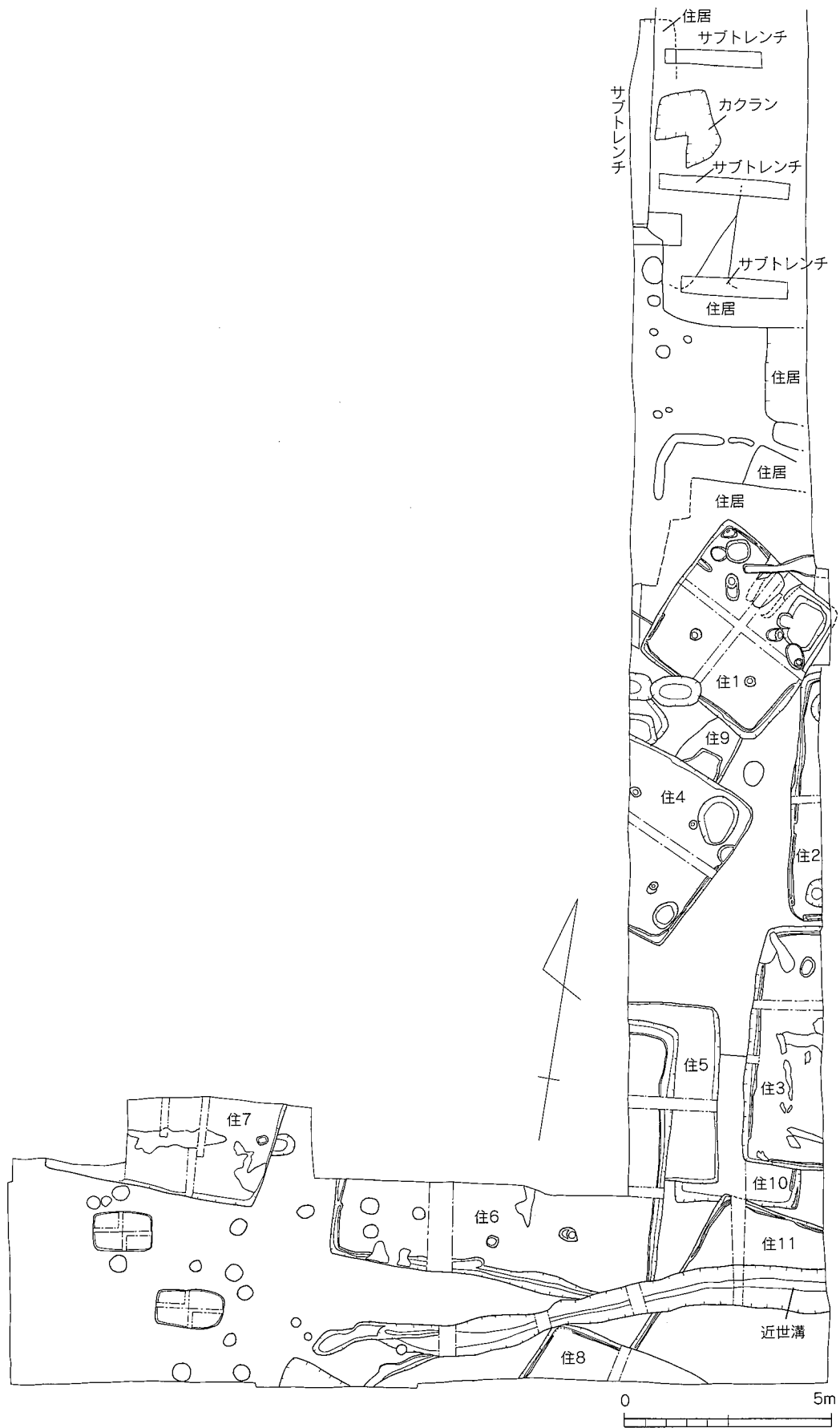
第30図 三雲441番地1・2区遺構配置図、土層実測図 (1/80、1/150)

を設け遺構の確認を行った。

もともと、旧地形が西から東に向かって緩やかに傾斜する斜面であったため、旧水田も西から東部に向かって段々と低くなる。1984年に実施されたほ場整備の際には、遺構面を保全するために最高所であった水田南西部の標高にあわせて盛土が行われたため、3区西部では水田耕作土直下から遺構面を確認できたのに対し、1区東端部では現水田下1mまで盛土を剥いでやっと遺構検出ができる状況であった。調査にあたっては、剥ぎ取った保護盛土をほ場内に仮置する必要があるため、これによって調査範囲が著しく限定され、3区では調査区をほ場東端と南端における遺構の状態に絞りL字状に設定することとした。

調査の結果、1区では井原2579番地で確認した旧水路が西からの水路と合流し東に向きを変えた水路の流路を、3区では字境（旧村境）に掘られたとみられる溝を確認することができた。

(岡部)



第31図 3区遺構配置図 (1/150)

1. 1区の調査

1区は、南から続く水路が、直角に曲がると推定される位置から東5mほどの地点に13.8m×2.1mのトレンチを設定し遺構の確認を行った。

調査の結果、弥生時代後期の土坑1基、ピット3基を検出し、この周辺に弥生時代後期の遺構が存在することを確認した。また、近世溝を確認することができた。溝は調査地点を東西に縦断している。南側から伸びてくる溝は調査地点西側で東方向に屈曲し、調査地点の東側で南方向に曲がっているとする昔の地籍図に記されている位置とほぼ同じで、地籍図の内容を追証することができた。土器は主に弥生時代後期前半～中頃のものである。(牟田)

2. 2区の調査

ビニールハウスの南西部にトレンチを設置した。1区同様にトレンチの北部には近接して高耐久性のビニールハウスがあり、地下約60cmにはその基礎が埋設されている。ハウスを保護するため基礎から約50cm離れた位置にトレンチを設定し調査を行うこととしたため、幅2～3m、長さ21mの調査区となった。遺構面は標高43.2mほどで現水田下70cmの深さにある。

弥生時代～古墳時代の遺構面は暗黄褐色土である。遺構を検出したところ、調査区をかすめた状態で方形ないしは長方形プランの住居跡4棟の掘り方を検出した。上面から土師器片が出土しており、埋土も黒褐色で3区の古墳時代住居跡の様相に酷似していることから、いずれも古墳時代の住居跡と推定された。調査はプランと位置の確認にとどめ遺構の掘り下げは行わずに埋め戻し、調査を終了した。(岡部)

3. 3区の調査

概要

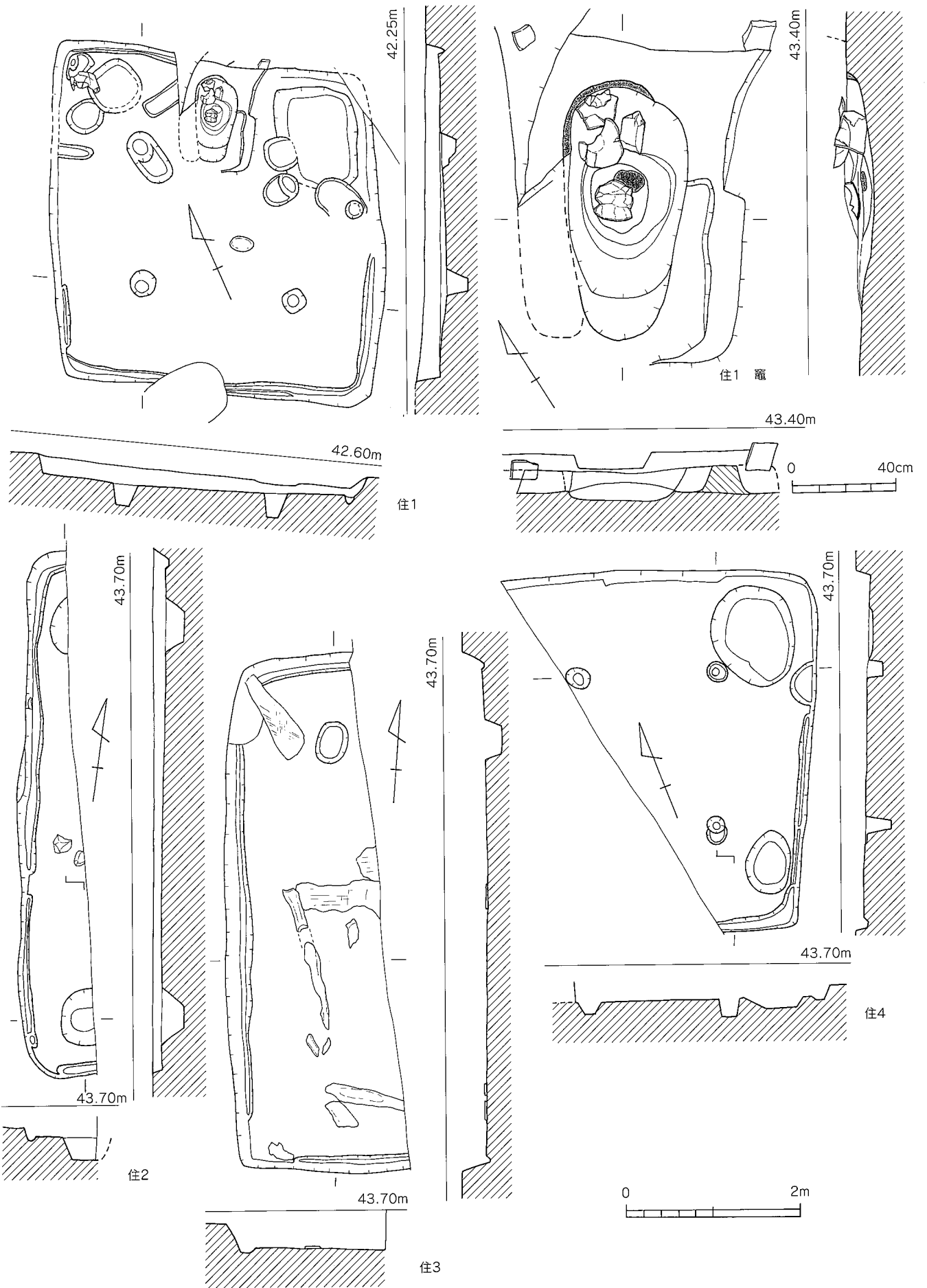
3区の南部～中央部にかけて古墳時代の方形ないしは長方形プランの住居跡を12棟調査した。住居は南部から順次調査した。調査区の中央まで遺構を掘り下げ、竪穴住居跡群はさらに北部まで続く様相をみせていたが、水田下の中世包含層上で溝遺構や近世期の掘り込みなど、井原縄溝遺跡の発見につながる遺構の検出は難しいと判断されたこと、掘削の深さが1m近くに達すると推定され、埋め戻し時の水田の復旧が懸念されたことから、掘り下げを断念し、埋め戻して調査を終了した。

以下、発掘を行った竪穴住居跡12棟、近世溝について報告する。

(1) 住居跡

1号住居跡 (第32図、図版10a) 主軸をN24°Eにとる正方形プランの竪穴住居跡で、南北長3.80m、東西幅3.88mを測る。南半分の壁下に周溝を配している。主柱は4本である。南東角に長さ1.20m、幅0.94m、深さ20cmの方形土坑が掘られていた。

北壁中央に造付けの竈を設置する。上面は破壊され、基底部付近が遺存していた。壁体は黄色粘土を築き固めて築く。遺存状況のよい東壁では炊き口部の壁面の立ち上がり直線的であることから、燃焼部の内面は方形に造出されていたものとみられる。炊き口から燃焼部にかけて深さ5cmほど掘り窪めており、竈と壁面との境には左右とも板石が立位で埋め込まれていた。燃焼部直上から土師器が出土するとともに、竈周辺を中心に古式須恵器甕、土師器椀が出土した。



第32図 1～4号住居跡 (1/60)、1号住居跡竈 (1/20) 実測図

出土土器 (第35図、図版33) 9、11、12は竈燃焼部から出土した。16は住居埋土からの出土で須恵器大甕の胴下半部である。外面のタタキ、内面の同心円状の当具痕とも目が細かい。

2号住居跡 (第32図、図版9a) 調査区の東壁付近で、わずかに住居の西壁付近の50cmほどがかかっていた。確認部位での南北長は6.08mを測る。主軸方位はN10° W方向にあるとみられる。壁と並行して2本の柱穴が確認された。4本主柱の住居跡と推定される。周溝が確認された。西周壁に近い埋土中から須恵器が1点出土した。

出土遺物 (第36図1、図版33) 須恵器坏身で、ほぼ完形品である。底部の回転ヘラケズリは約3分の2まで丁寧に行われている。外面に「一」文字のヘラ記号が残る。TK208型式相当と考えられる

3号住居跡 (第32図、図版9b) 2号住居の南に近接して位置する住居で主軸はN4° W方向にあり、南北長は6.04mを測る。周壁下には周溝が廻る。床直上から土師器の椀、小型の甑などが出土した。住居床面直上に炭化材、稲藁状繊維が重なるように堆積していたことから、焼失住居と推定される。倒れかかった丸木の径は15~18cmほどである。

出土土器 (第36図2~8、図版34) 7は丸底の鉢形を呈すが、底部に径2cmほどの円形孔が焼成前穿孔されていることから甑とした。

4号住居跡 (第32図、図版9a) 3号住居跡の西隣に位置する住居跡で5号住居跡と10号住居跡を切って掘りこまれている。主軸はN22° E方向に求められ4本主柱である。南北長は4.16mを測る。北東角に不整形の土坑が掘られており、1号住居跡と類似する。図化できる出土遺物はない。

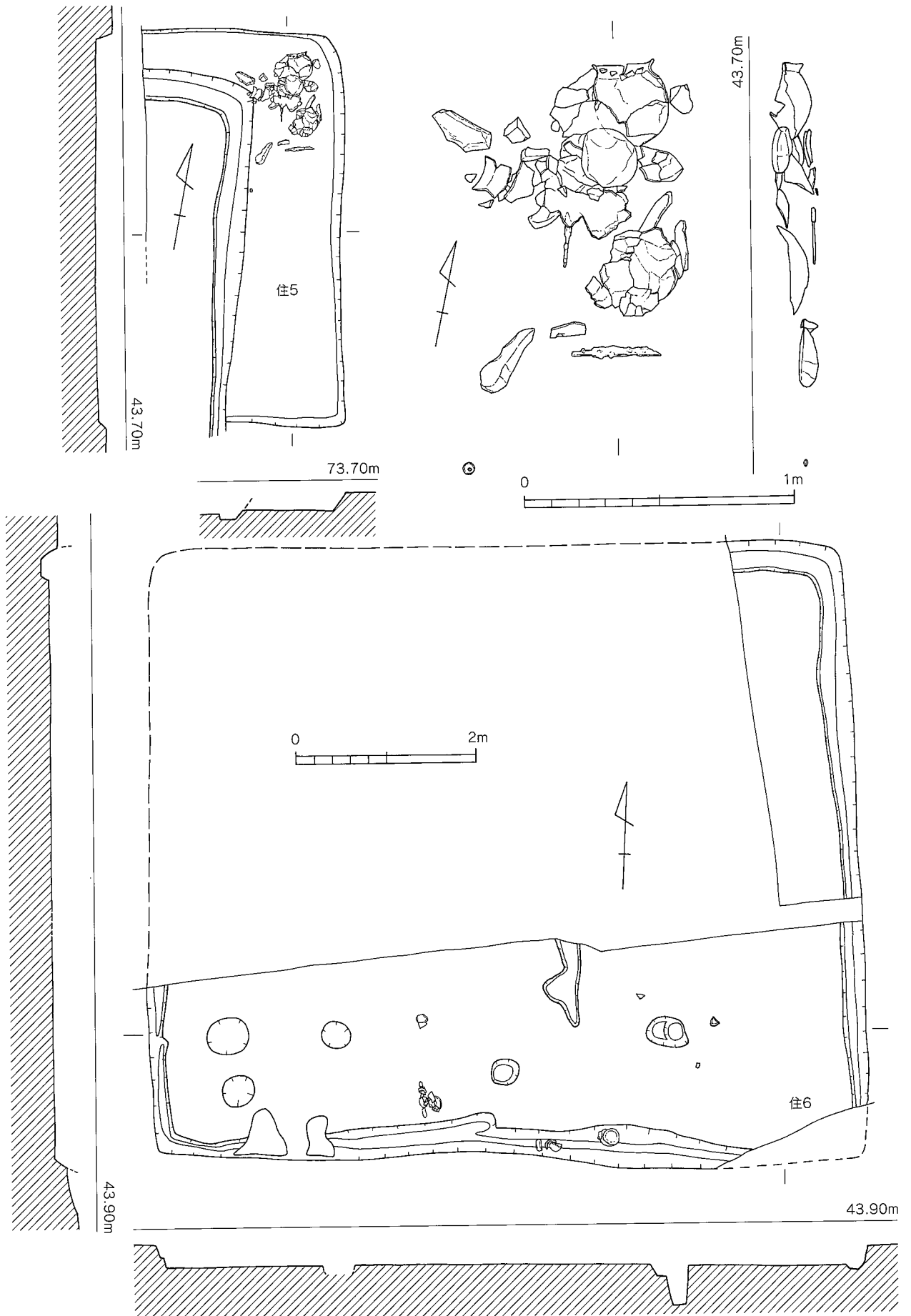
5号住居跡 (第33図、図版11a) 10号住居跡を切るが、6号住居跡に遺構の大半が切られ、北から東壁付近がわずかに確認できたにとどまる。遺構の残りは悪く床面から15cmほどが遺存している。東壁を下に主軸方位を推定すればN12° W方向になる。南北長4.36mを測る。

北東角の床面直上から土器と鉄器がまとまって出土した。刃の先端が蛇行した鉄刀が東壁から30cmほど離れた位置で壁と直交方向に床に据えられた状態で出土し、少し離れた位置で柄付のノミ状鉄器が刀子と直交方向にやはり床に据えられた状態で出土した。この鉄器と壁に囲まれた範囲を中心にやや大きめの石塊を交えて甕、壺が一括して出土した。また、これら遺物群からやや南に離れた位置で石製紡錘車も出土している。これら遺物は祭祀行為により、現場に供献、埋納されたもの推定される。

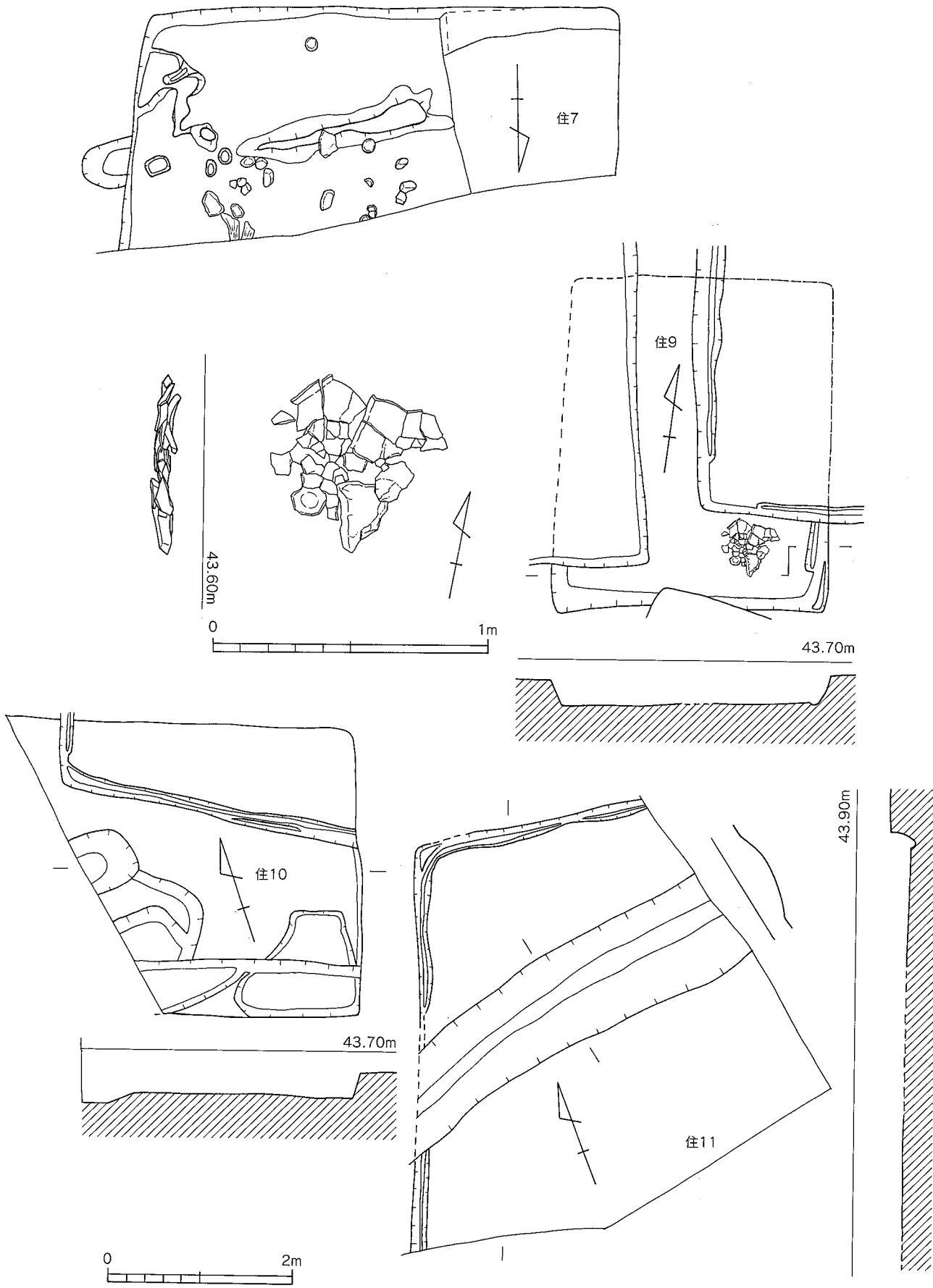
出土土器 (第36図9~14、図版34) 9~13は甕である。胴部はほぼ球形を呈し、大きく外反して口縁部にいたる。口縁の形態は古式形態を残す11と退化した形態を示す9、10、12、13が混在し、布留式の中~新段階への過渡的様相をみせる。

6号住居跡 (第33図、図版11) 東西幅7.96m、南北長7.0mの長方形プランの大型住居跡で主軸はN87° E方向にある。主柱とみられる柱穴が南部に2穴あり、その間隔は推定柱芯間で3.76mである。周壁下には幅広の周溝が廻る。周溝と床面から古式須恵器、土師器が出土した。南西周壁部で焼土の集中区を検出したため、周辺を精査したが、竈は確認できなかった。

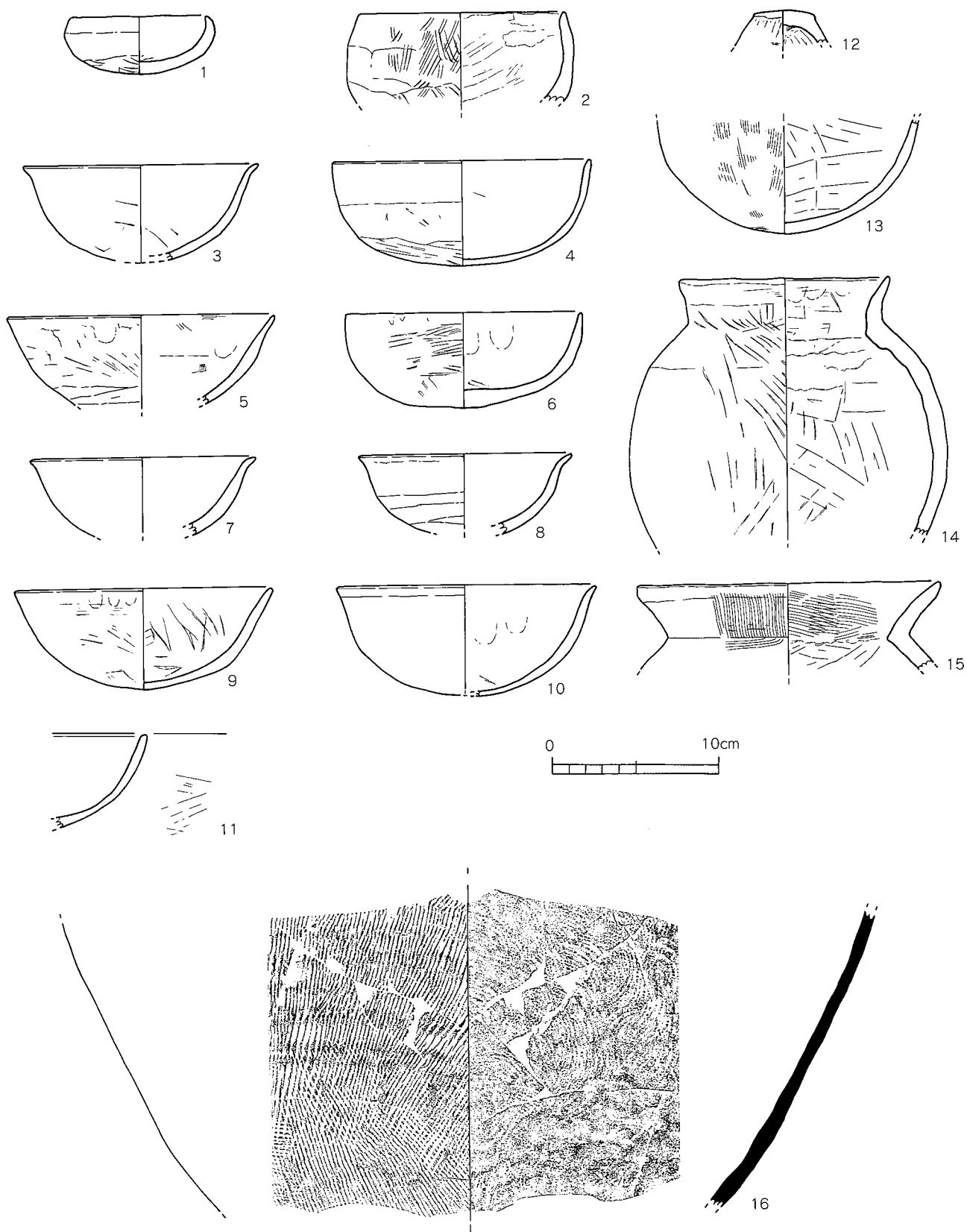
出土土器 (第37図19~30、図版34) 19は須恵器坏身である。底部は約2分の1まで丁寧な回転ヘラケズリが施される。口縁部は内傾している。25、26はミニチュア土器である。29、30は鳥足文タタキを有する半島系軟質土器片である。



第33図 5・6号住居跡、5号住居跡遺物出土状況実測図 (1/60、1/20)



第34图 7·9~11号住居跡 (1/60)、9号住居跡土器出土狀況 (1/30) 実測図



第35图 1号住居跡出土土器実測図 (1/4)

7号住居跡（第34図、図版11b）6号住居跡の西に近接する住居跡で、遺構の北半分は調査区外にある。東西幅5.20mを測り、推定主軸方位はN1° E方向にある。床面下層から多量の焼土、礫が出土した。埋土から土師器とともに古式須恵器が出土している。

出土土器（第37図1～18、図版35）1～4は須恵器で、1は蓋坏、2は坏身である。1の天部および2の底部の3分の2ほどが丁寧なヘラケズリで仕上げられる。口縁部はいずれも若干内径さみである。3は大型甕で断片から図上で復元した。頸部が広く外開き傾向が強い。4は甕の口頸部で口縁端部は三角形に肥厚し、頸部に2条の突帯がめぐり櫛描き波状文が施される。概ねTK208～ON46型式相当と推定される。6～13は鉢・椀である。口縁が内湾するものと、外反するものの二者がある。14、15は甑片である。14は4孔か。

8号住居跡（第34・35図、図版11a）調査区の南東角からやや西寄りで見出した住居跡で住居の北コーナーのみの確認にとどまる。主軸方位は不明である。

弥生時代の遺構、遺物

調査地点の東部で弥生時代の住居跡3棟を検出した。そのうち2棟は小型の住居跡で、いずれも長方形プランである。古墳時代の住居跡、近世溝に大きく切られていて遺存状態は悪く、詳細は明かではない。

9号住居跡（第31図、図版15b）主軸方位をN6° W方向に向ける住居跡で、南北長3.64m、東西幅3.04mを測る。3・5・8・10号住居に切られているため、比較的残りのよい南東部のみ調査を実施した。東壁下で周溝を検出した。床面では柱穴は確認できなかった。埋土の上面から、押し潰れた状態で甕1点が出土した。

出土遺物（第38図1、図版35）接合によりほぼ完形に復元できたが、胴下部の一部と口縁部に不足部がある。胴部に穿孔、口縁部に打ち欠き行為が行われたものと推定される。口縁部の反転屈曲は鋭く、胴部は上から3分の1に最大径を有し、その張りは、なだらかである。下半部は直線的に底部に続き、底部は若干上げ底になる。外面下部、内面には板状工具による縦方向のナデが行われる。

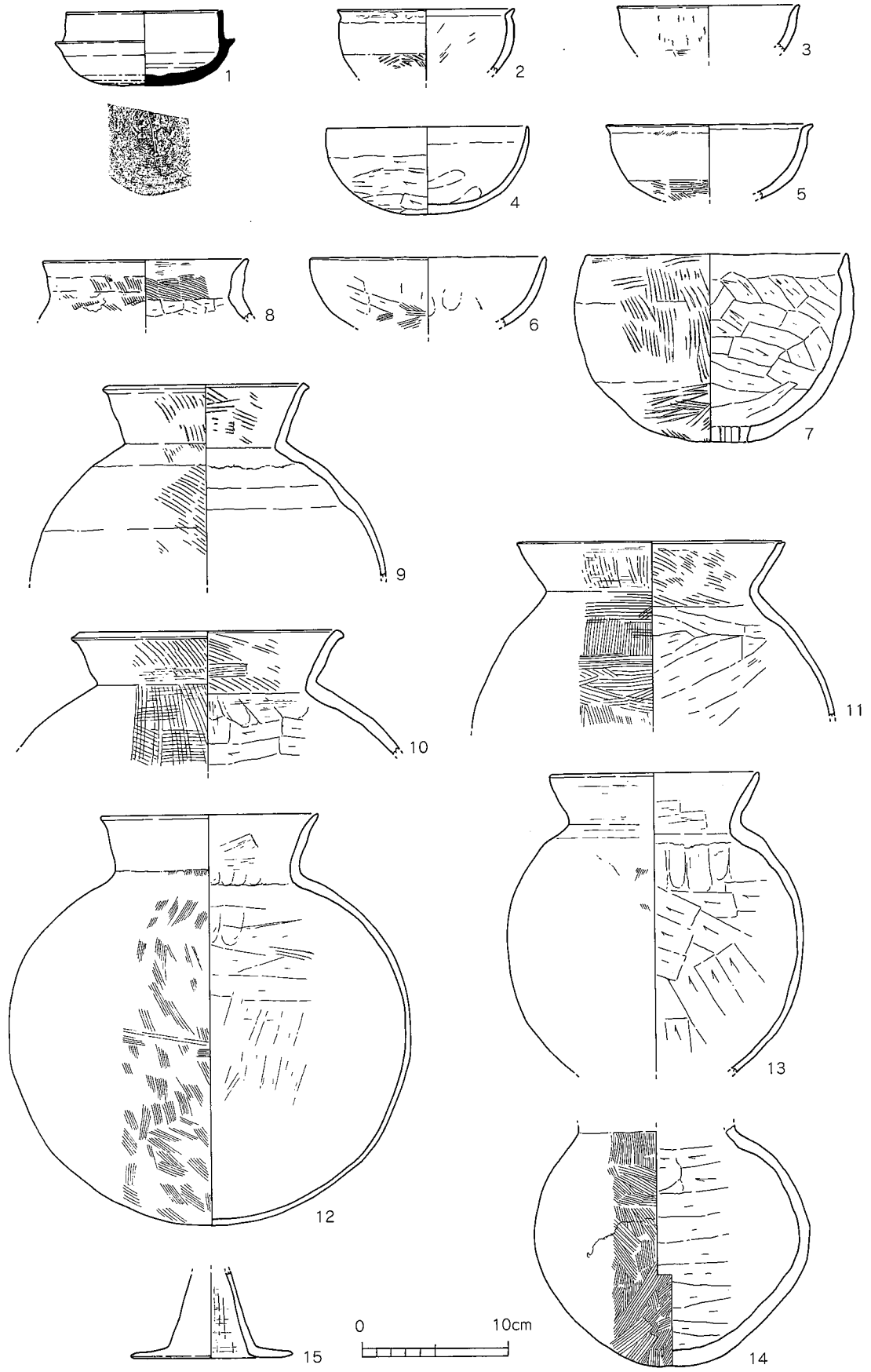
10号住居跡（第34図、図版9-b）1号、4号住居に大きく切られる住居跡で、正確なプランもわからないが、残存周壁から主軸方位をN72° W方向に向ける長方形プランで、南北幅で3.16mに復元することができる。8号住居跡のプランに近いものと推定される。検出床面からは柱穴は確認できなかった。

出土遺物（第38図2～4、図版36）2は高坏坏部で鋤状口縁の先端は下方に垂れ気味である。内外面ともに丹彩は施されていない。3、4は甕上部片である。3は口縁下から底部に向かって急速にすぼまり、4は胴中位に向かって膨らむ。外面はタテハケ、内面は板状工具によるナデ仕上げが行われる。

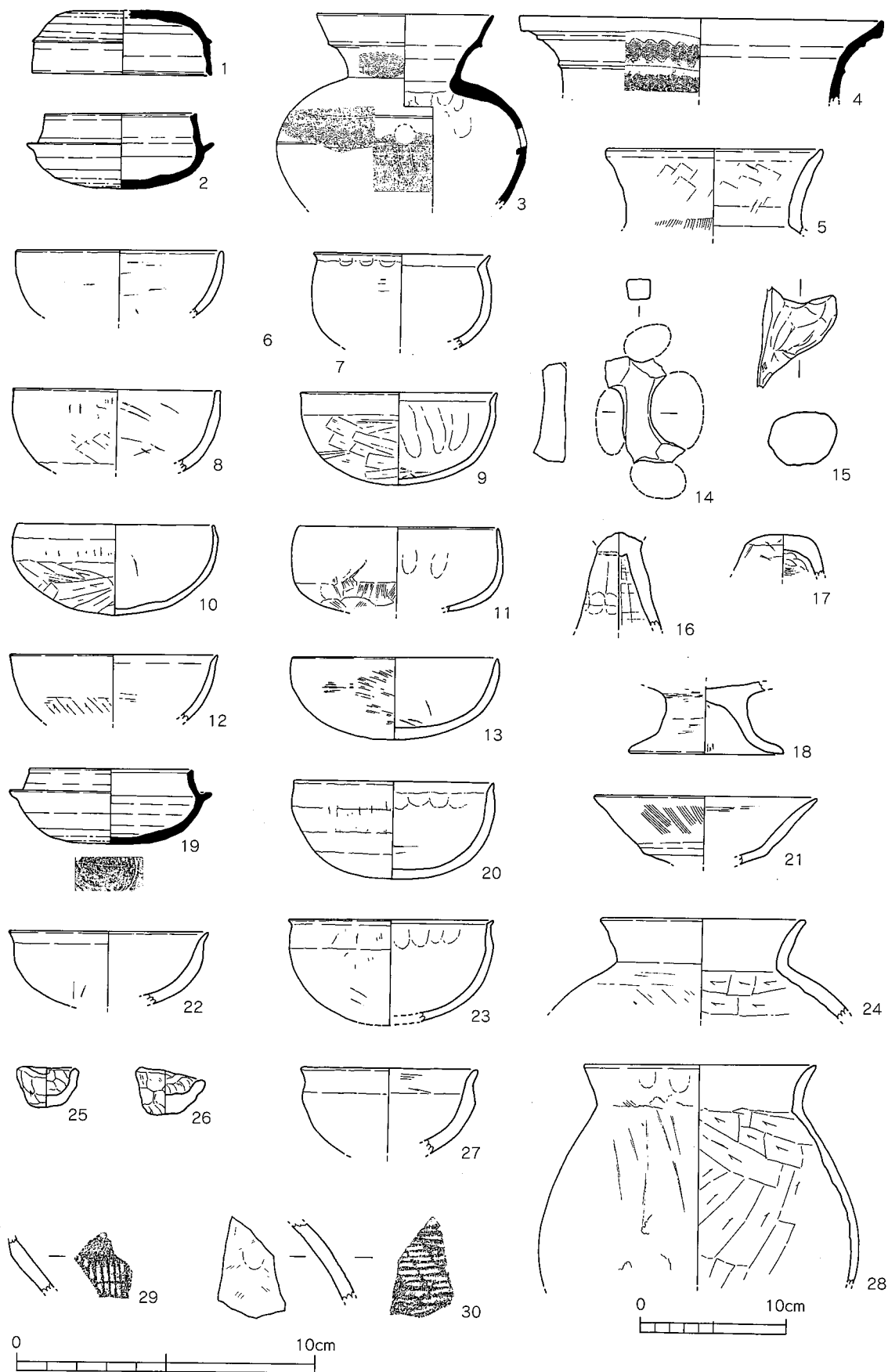
11号住居跡（第34図、図版9-b）調査区の南東隅角で見出した不整形プランの住居跡である。北隅角は鈍角を呈するため正確な主軸方位はわからないが概ねN19° E方向にあると推定される。周壁下から幅の狭い周溝が検出された。検出面では柱穴は確認できなかった。

弥生土器（第38図5～15、図版33・34）古墳時代の住居跡埋土からも弥生土器片が多く出土している。いずれも中期末から後期中頃にかけての土器である。

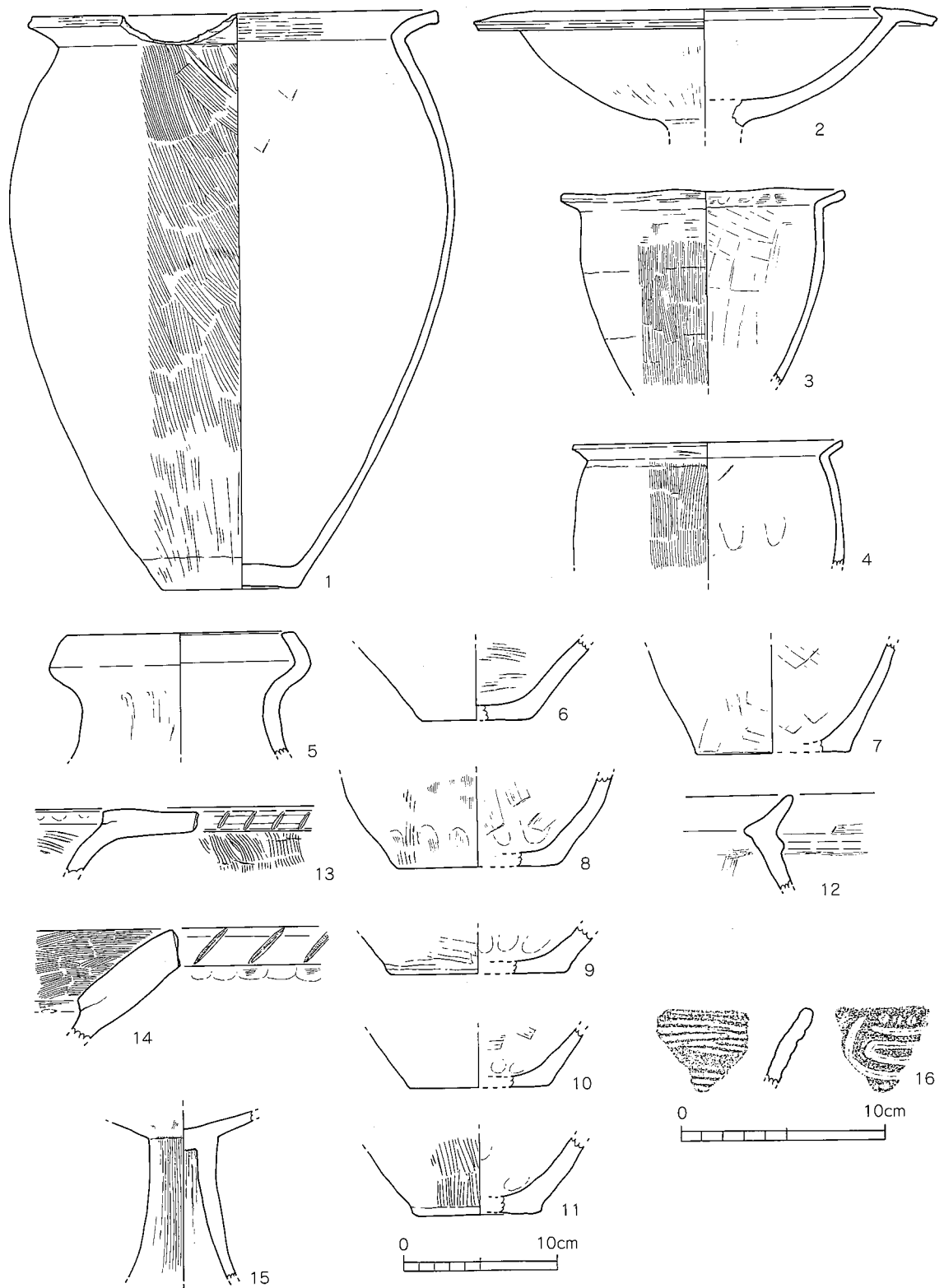
13、14は大型広口壺の口縁部で、いずれも1号住居跡の埋土から出土している。概ね後期前半～



第36图 2·3·5号住居跡出土土器実測図 (1/4)



第37图 6·7号住居跡出土土器実測図 (1/4、1/2)



第38図 9号~11号、その他の遺構出土縄文、弥生土器実測図 (1/4、1/3)

中頃の資料と推定される。これらの壺は甕棺の棺材、あるいは祭祀土器として使用されることが多く、付近に墳墓や祭祀遺構が存在する可能性があり、注意を要する。

(3) その他の遺構、遺物

近世溝 (第31・34図、図版8b・11a)

3区の南部西から東に向かって南を中心に緩やかに弧を描きながら延びる断面U字型の浅い溝である。途中で7号・9号・11号住居跡を切る。西端では二又に分かれ、一方は南に向かうものの他方は分岐点から1mほどで消える。東端はさらに東に延び、南から続く溝の屈曲地点で合流するものと推定される。遺物の出土はない。

大正4年作成の地籍図に描かれた三雲、井原村の境界線と合致することから、溯って江戸時代の村の境界溝であった可能性が高いと判断される。

縄文土器 (第38図16、図版34)

曾畑式土器片が1点出土している。鉢の口縁片で外縁部に刻目を施し、外面には沈線による施文が、内面には横方向の条痕調整が施される。この他にも打製石鏃、剥片石器が数点出土しており、南小路地区I-6・7区における同期の遺物の土器が報告されている。一帯に縄文時代前期の集落が存在したものと推定される。

(岡部)

6. 三雲450-2番地他 (上覚地区) の調査

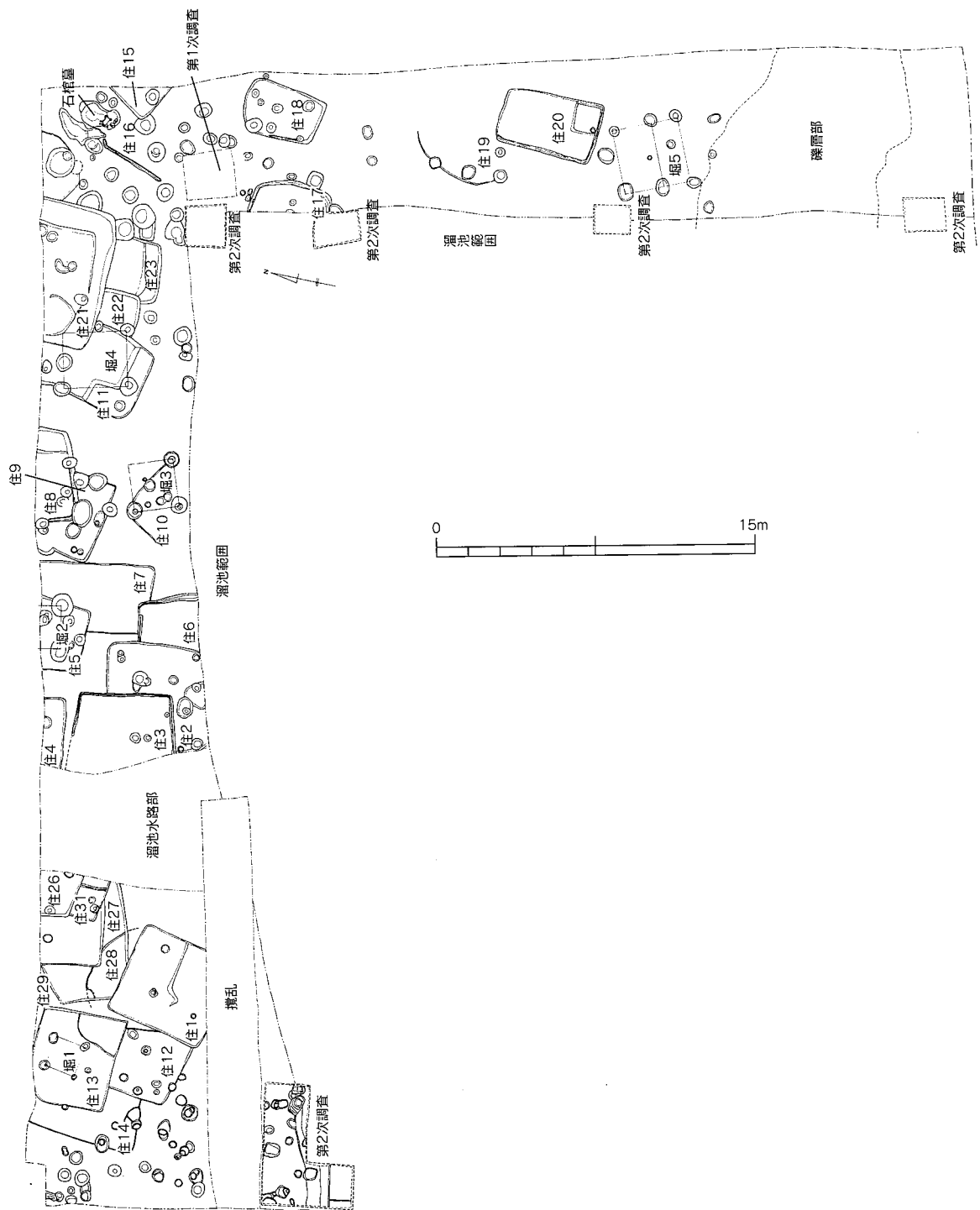
(1) 調査地点の概要

三雲上覚遺跡は、昭和58(1983)年に国庫補助事業として調査が行われ、住居跡30軒、掘立柱建物5棟、石棺墓1基が確認されている。なお、調査の概要は『三雲遺跡群I』(前原市文化財調査報告書第13集 1984年)で記されている。

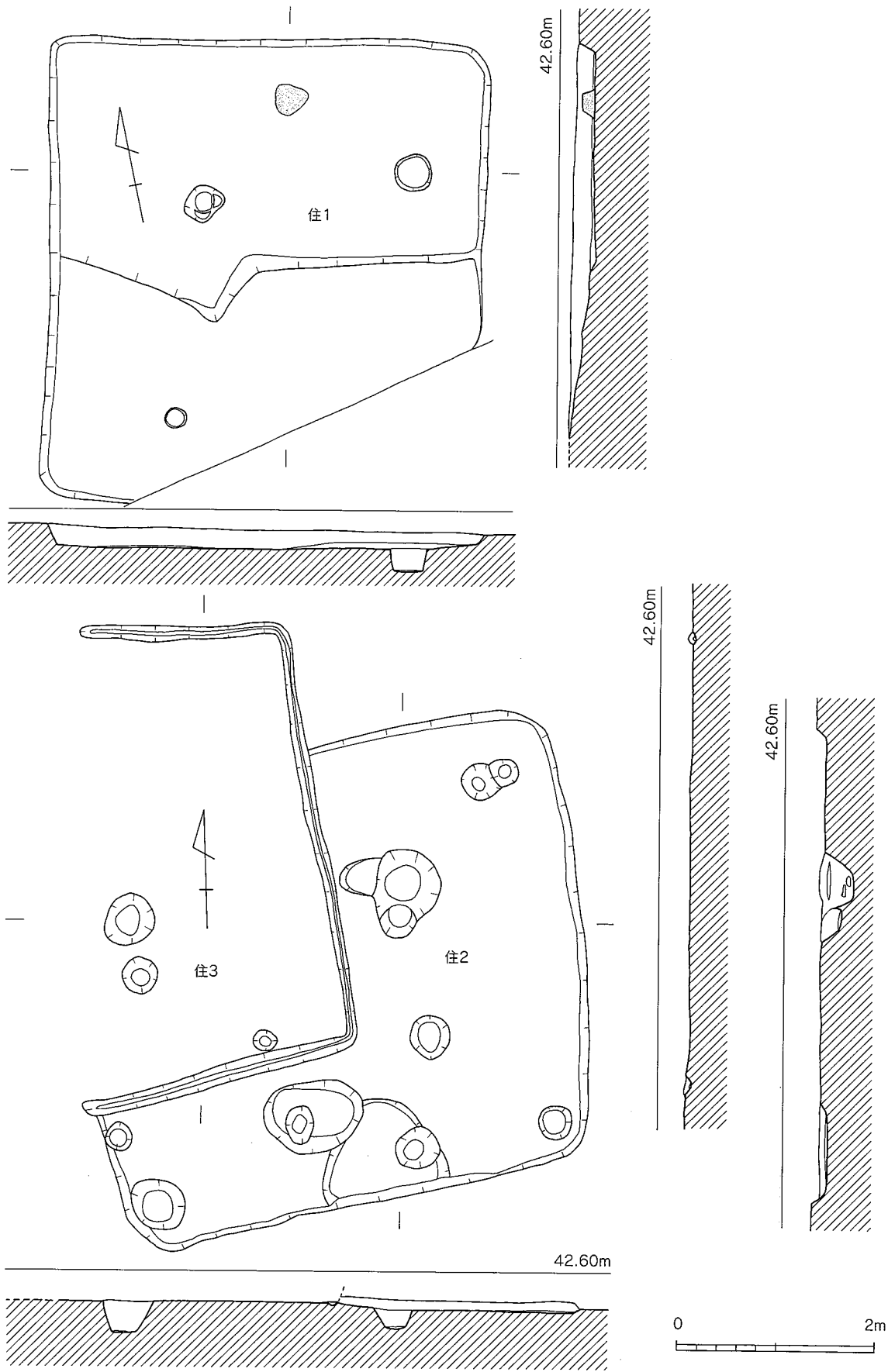
(2) 住居跡

1号住居跡 (第40図、図版18a~c) 北側調査区西側で検出した方形の住居跡で、4.62m×4.32mを測る。北壁中央部には炉を持つ。また、南側にはベッド状遺構を有するが、隅が攪乱溝で切られており、詳細は不明。12号・28号住居跡を切る。時期は古墳時代前期前半。

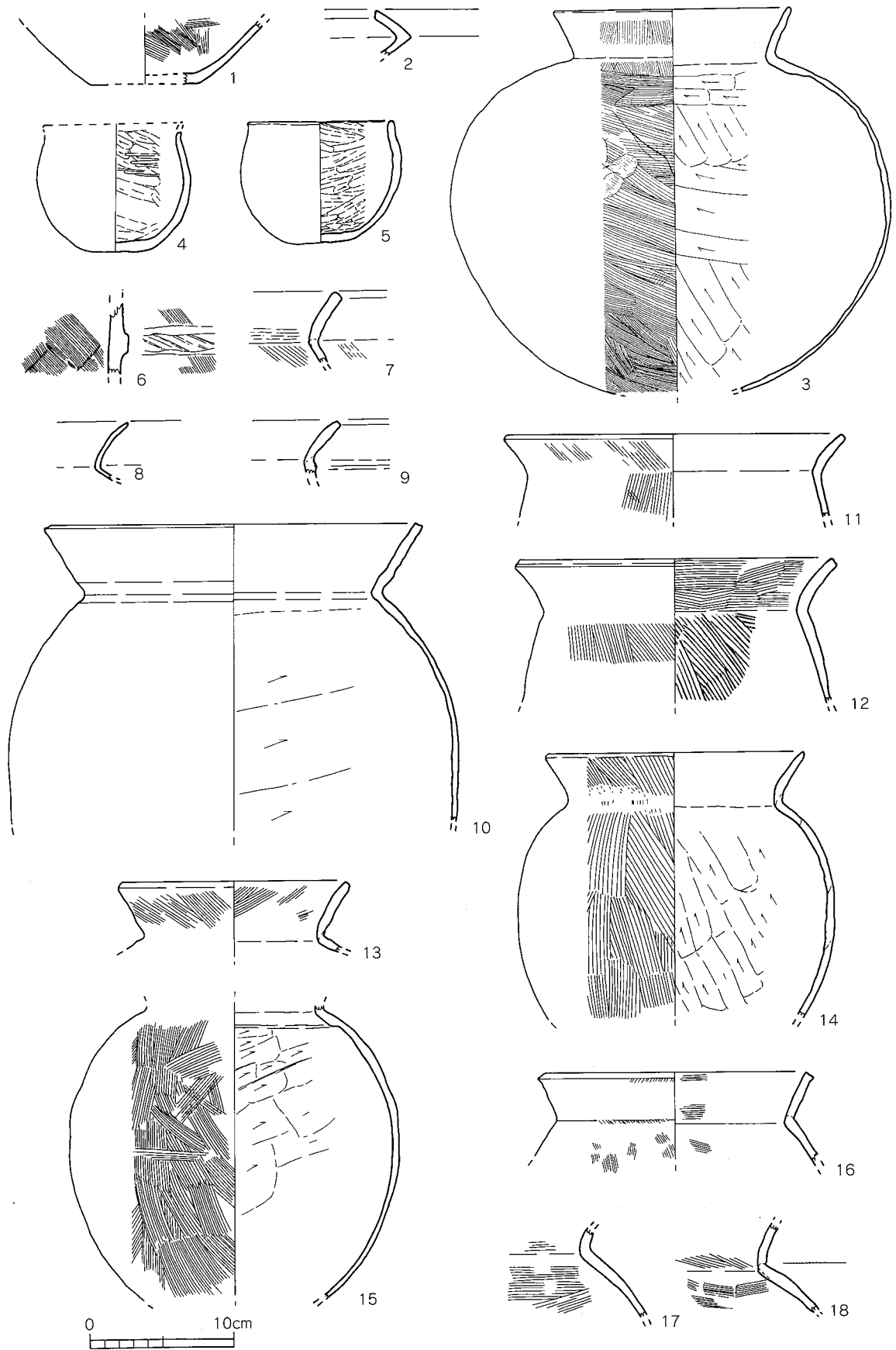
出土遺物 (第41・42図1~16、図版36) 1・2は壺で混入品。両者ともに弥生時代後期前半。3は口縁が外傾する直口壺である。胴の張りが著しく、胴部中位やや上方に最大径を有する。胴部内面は下から上へのヘラケズリを施し、器壁を薄く仕上げる。6は弥生時代終末から古墳時代前期の在来系大型甕の胴部破片である。帯状突帯で、端部に刻目を施す。7~18は甕である。10の器壁は薄く、口縁上端部には面を有する。11・12・16は長胴甕で、いずれも胴部を薄く仕上げ、口縁部が肥厚する。口縁端部は面を取る。16は口縁端部を摘み出す。14は肩が若干張る甕で、頸部は丸みを持ちながら締まる。口縁端部は丸みを持つ。外面全面に縦ハケを施す。第42図2~7は鉢である。2は口縁を有する。3・6は内面に横ハケを施し、底部が尖底になる。4・5・7は口縁部が内湾し、底部は丸底である。8~13は高坏である。9は弥生時代の高坏の脚柱部で混入品。12・13は外来系の高坏。椀形の坏部を有し、反転部から直線的に口縁部に至る。口縁端部には面を有する。内面は横ハケの後に暗文状の沈線が施される。12は外面にも沈線を施す。南側に位置する井原上覚遺跡4号祭祀土坑からも出土している。8は直線的に反転する高坏で口縁端部に面を有する。また、



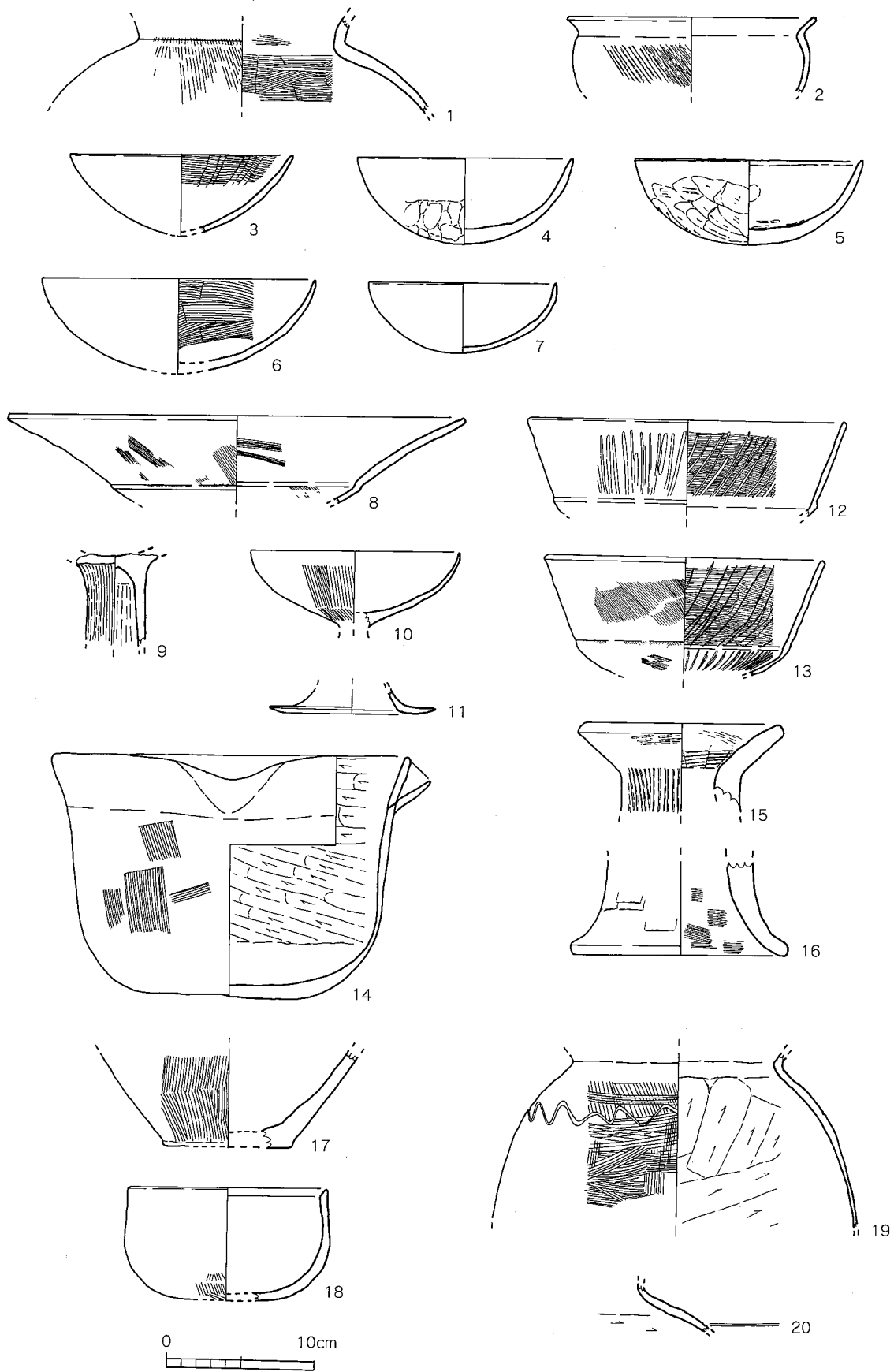
第39図 三雲450-2番地遺構配置図 (1/300)



第40图 1~3号住居跡実測図 (1/60)



第41图 1号住居跡出土土器実測图① (1/4)



第42图 1号②~3号住居跡出土土器実測図 (1/4)

反転部が長くなるタイプである。10は台付鉢の可能性もある。11は裾部が跳ね上がる脚部である。14は片口の大型鉢。底部から緩やかに外傾しながら立ち上がり、口縁部に至る。内面にケズリを施し、薄く仕上げる。底部は厚い。15・16は器台である。いずれも上半に頸部を有し、器壁は厚い。

2号住居跡（第40図、図版18d）調査区北側のほぼ中央の位置する方形の住居跡である。西を3号住居と溜池水路、南側を溜池で切られ、 $(4.61+\alpha)$ m \times $(4.98+\alpha)$ mを測る。南側に屋内土坑を有する。炉は未確認。時期は古墳時代前期か。

出土遺物（第42図17・18）17は弥生時代中期後半の甕底部。混入品。18は口縁部を摘み上げた鉢である。

3号住居跡（第40図、図版18d）2号住居跡を切るが、西側を溜池水路に切られる方形の住居跡で4.74m \times $(3.35+\alpha)$ mを測る。壁際には周溝を巡らす。主柱穴は2本か。時期は古墳時代前期。

出土遺物（第42図19・20）19は甕でハケメの後に肩部に波状文を施す。20は甕の小破片。

4号住居跡（第43図、図版19a）3号住居跡の北側で確認された住居跡。大部分は北の町道下にもぐりこむ。柱穴を一部確認。時期は弥生後期後半から古墳時代前期。

出土遺物（第45図1～3）1・2は弥生時代の甕である。2は甕の口縁部で内外面ともに丹塗り。1・3は混入か。

5号住居跡（第43図、図版19b）北側調査区中央に位置する方形の住居跡である。4号住居跡同様、南側のみ確認となる。主柱穴を一部確認。2号掘立柱建物に切られる。出土遺物はなく、時期は不明。

6号住居跡（第43図、図版18d）2号住居跡に切られる方形の住居跡である。壁には周溝を巡らす。主柱穴、炉等は未確認。時期は不明。

7号住居跡（第43図、図版18d）5号と6号住居跡に切られる大形の長方形プランの住居跡である。主柱穴、炉跡等は未確認。出土した土器は、混入品のみで、時期は不明。

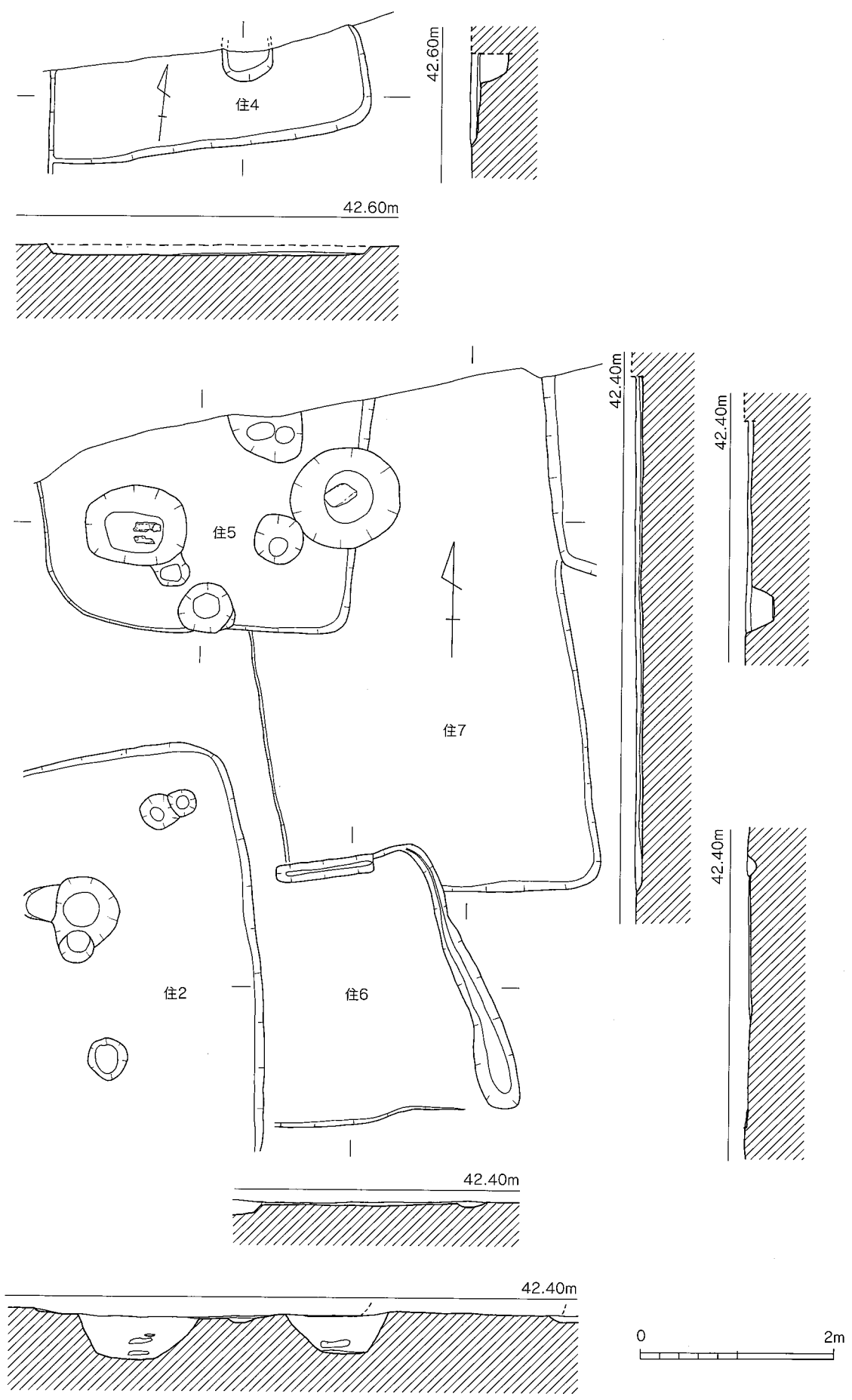
出土遺物（第45図4・5）7号住居跡と9号住居跡の上面から土器が2点出土した。4は壺の胴部で、外面に丹を施す。5は鉢の口縁部か。いずれも弥生時代中期のもので、混入品であると考えられる。

8号住居跡（第44図）北側を町道に切られる隅丸方形の住居跡である。壁際には周溝を巡らし、中央部西側では炉跡を検出した。東壁にはベッド状遺構を伴う。時期は古墳時代前期前半。

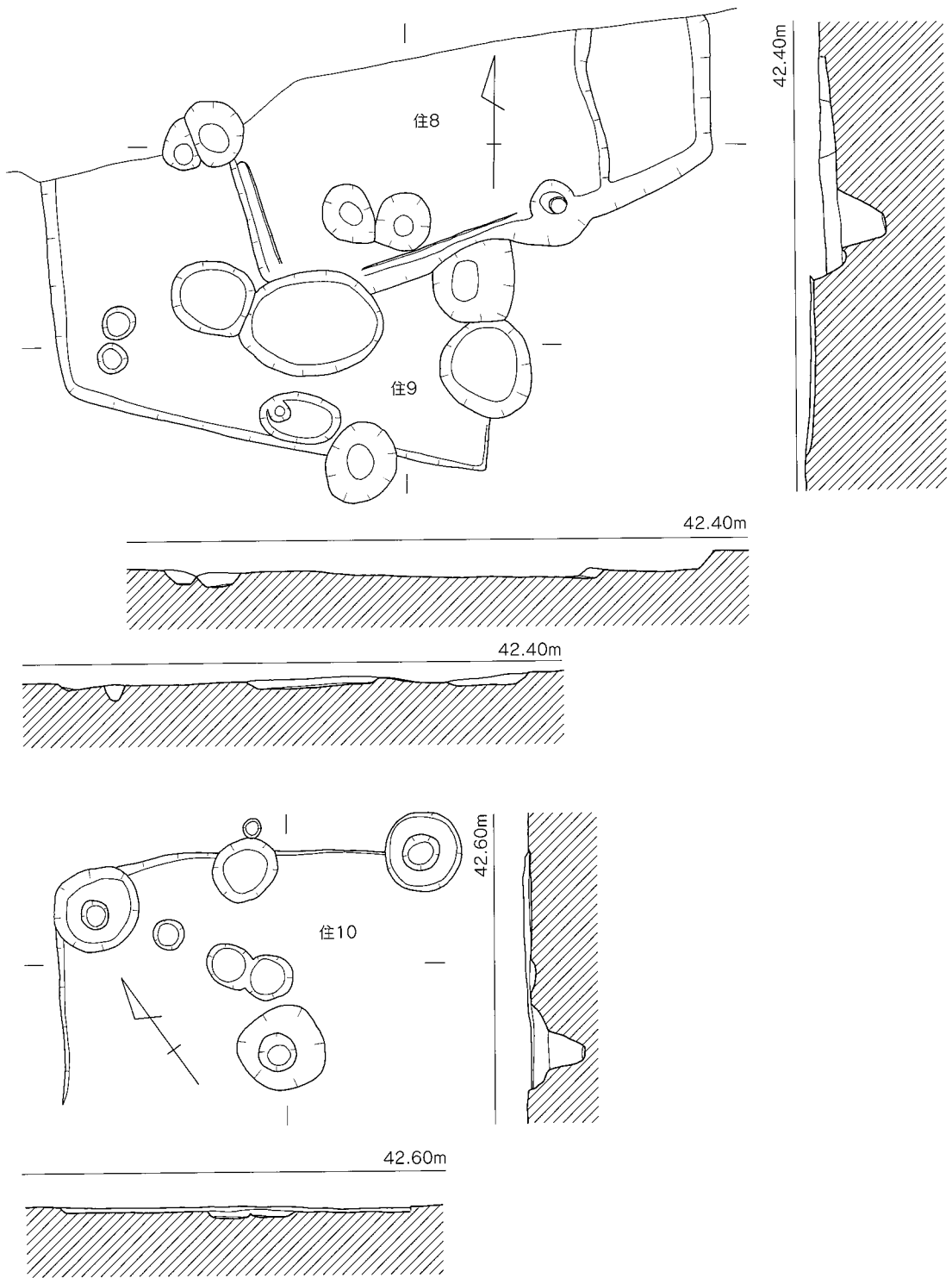
出土遺物（第45図7～17、図版36）7・8は壺。7は弥生時代中期後半の壺の底部。8は弥生時代後期前半の壺の口縁部。9は甕の口縁部。いずれも混入か。10は胴中位に最大径を持つ甕で、底部は下から削り上げ、丸く仕上げる。胴内面は全面に丁寧なハケメを施し、頸部には明瞭な稜がある。口縁端部は方形で、面を有する。11は甕の口頸部。口縁端部は丸くおさめる。12は内湾しながら立ち上がる口縁で、内面は横ハケでケズリは見られない。13～16は高坏。17は器台で、器壁が厚い。

9号住居跡（第44図）8号住居跡の南側に位置する住居跡で、主軸がほぼ南北にとる。 $(2.45+\alpha)$ m \times 3.92mを測る。時期は弥生時代後期後半から古墳時代前期前半。

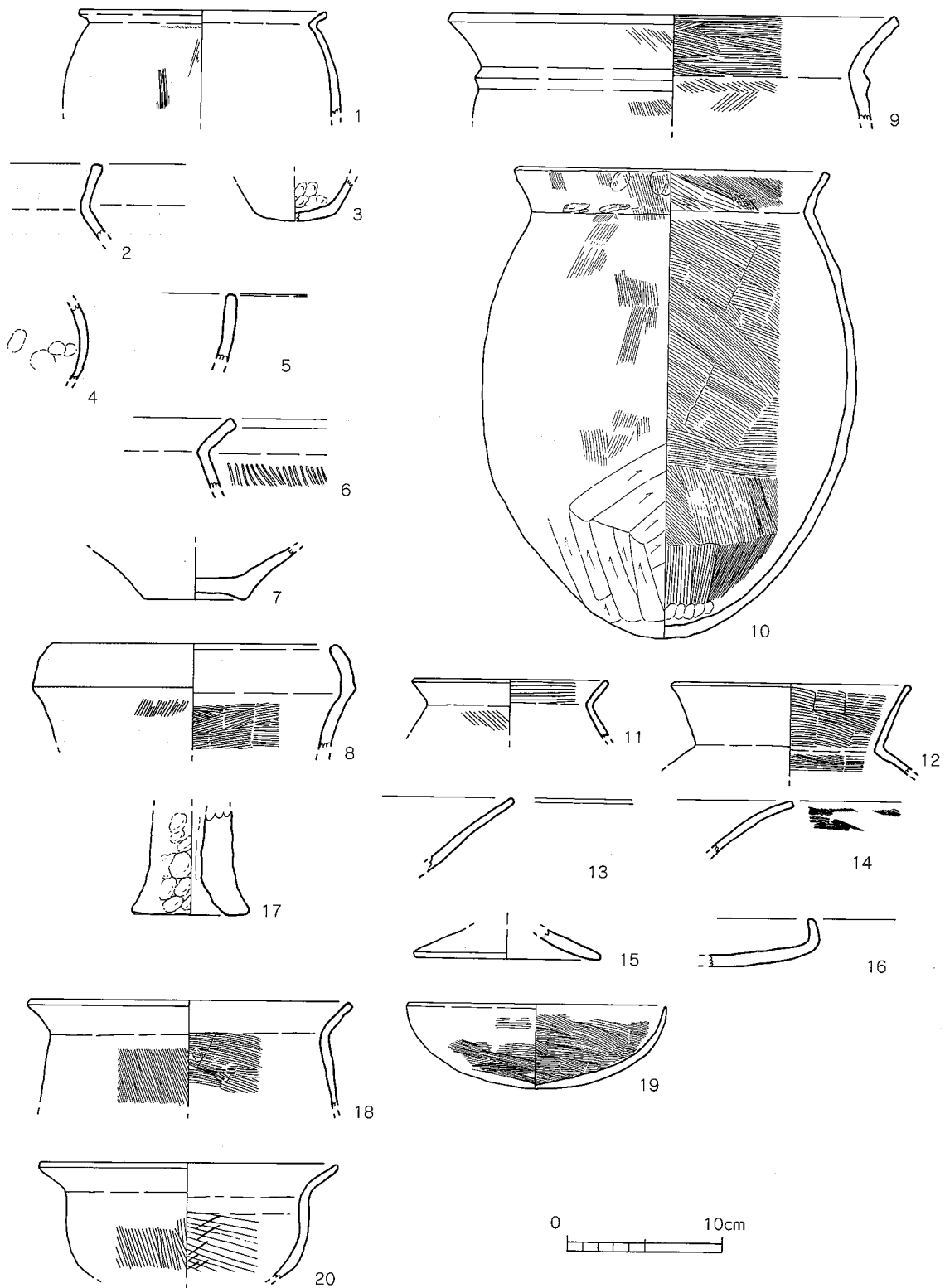
出土遺物（第45図18・19）18は長胴甕の上半部。胴の張りが弱く、内面の稜も明瞭ではない。



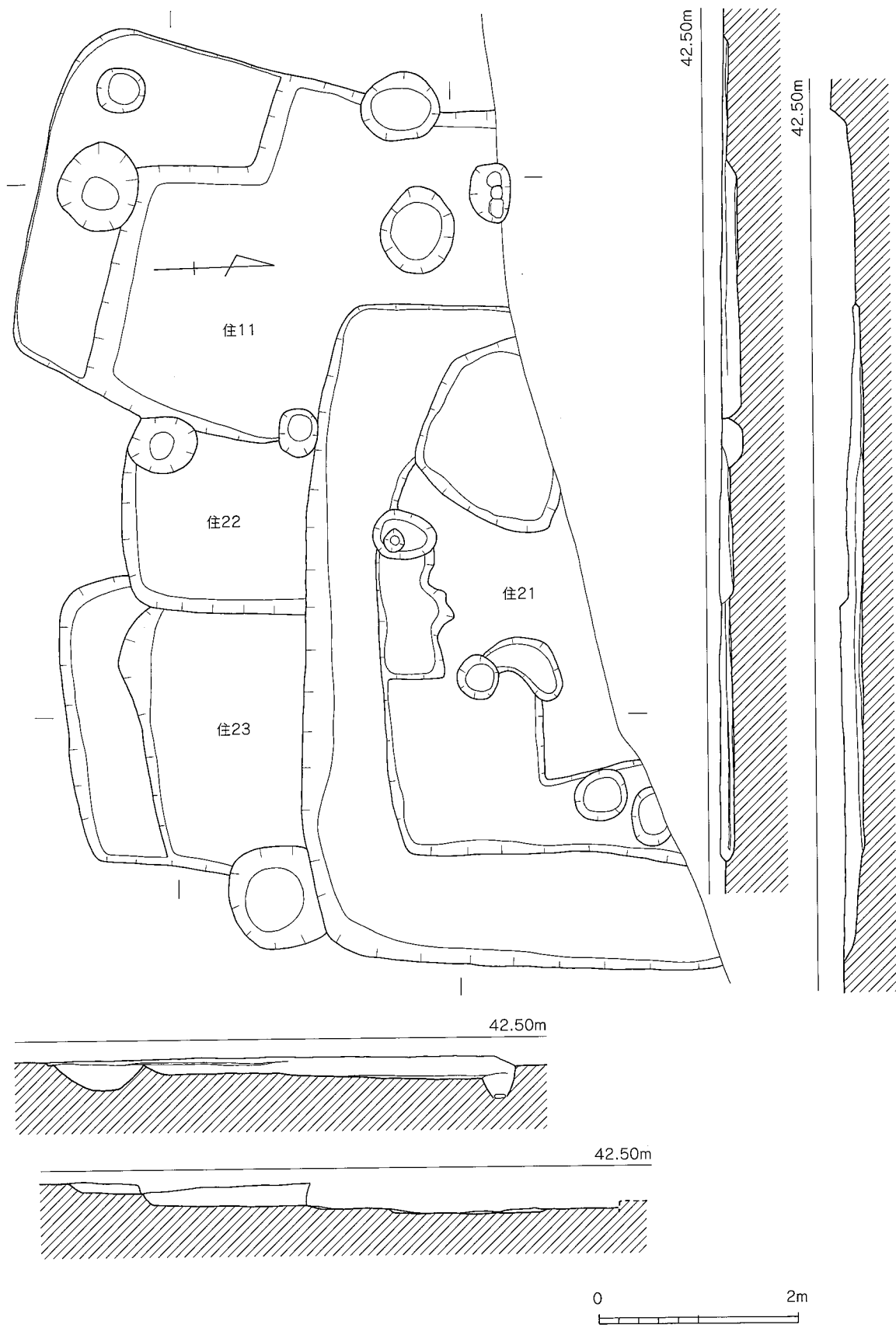
第43图 2・4～7号住居跡実測図 (1/60)



第44図 8~10号住居跡実測図 (1/60)



第45图 4~10号住居跡出土土器実測图 (1/4)



第46図 11・21~23号住居跡実測図 (1/60)

外面に縦ハケ、内面に横ハケを施す。口縁端部に面を有する。19は鉢で、内外面ともに横ハケを施す。黒斑有。

10号住居跡（第44図、図版19d）9号住居跡の南側に位置する住居跡で、南側を大きく削平され、詳細は不明。3号掘立柱に切られる。時期は弥生時代後期。

出土遺物（第45図20）20は鉢である。内面に粗いハケを施す。頸部にしまりがなく、口縁端部も丸くおさめる。

11号住居跡（第46図、図版19a）北側調査区東側で検出した長方形の住居跡である。南側にはL字形のベッド状遺構がある。遺構の切合いが激しいため、支柱穴等は未確認。時期は古墳時代前期前半。

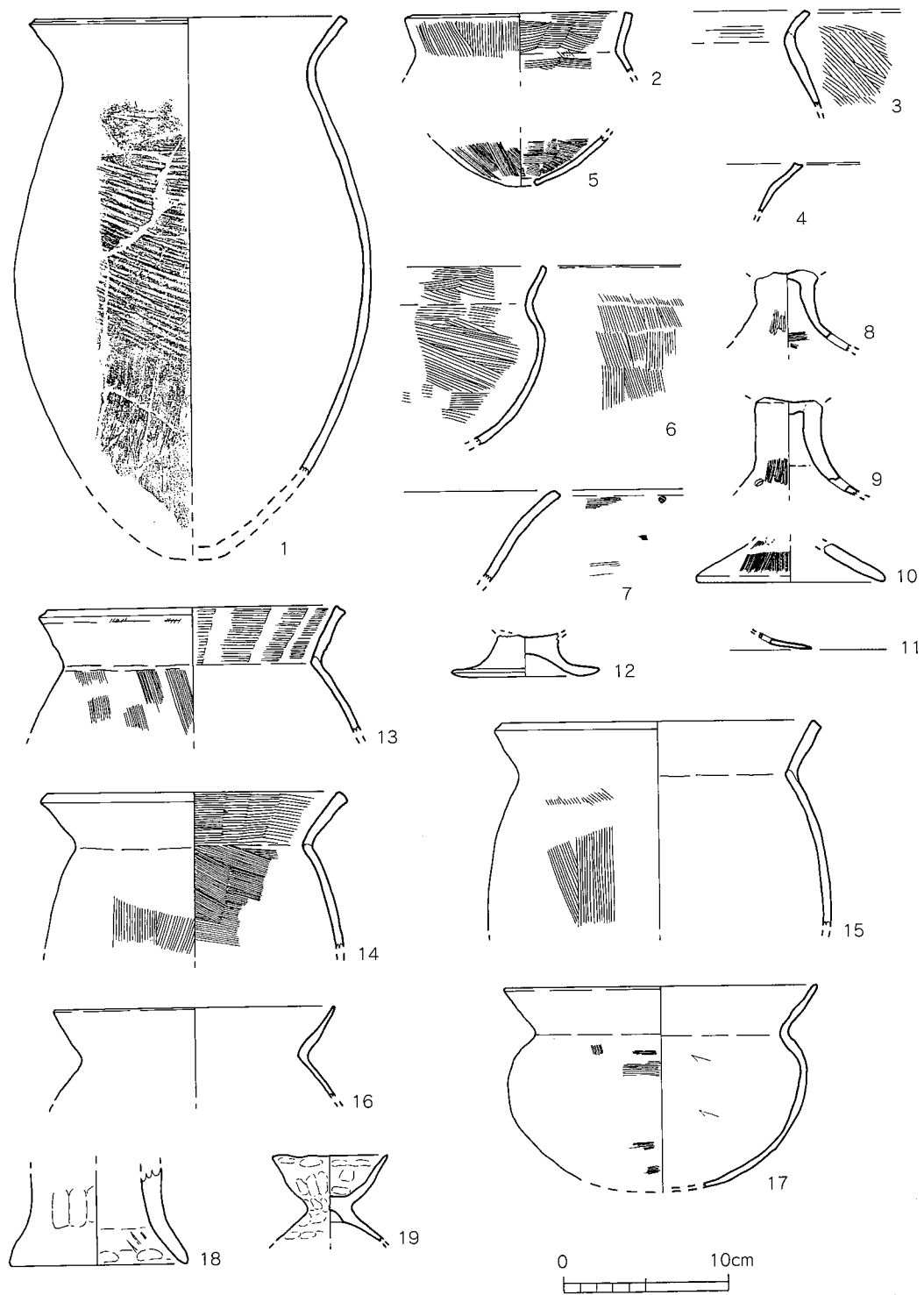
出土遺物（第47図1～12、図版36）1～5は甕。5は焼成前の穿孔を施し、甑として用いたもの。孔は1つで、孔径2.0cmを測る。内外面ともにハケメを施す。容量は1リットルほどか。1は長胴甕で、頸部内外面ともに湾曲し稜を持たない。胴部上半部には左上がりの粗い横タタキを、下半部はタタキの後に削り上げる。口縁端部は丁寧な調整を施す。2は弱く外傾する口縁を持つ甕で内外面ともに、ハケメを施す。口縁端部は面を取る。3は胴の張りが弱い甕で、頸部の稜は殆ど無い。5は鉢である。頸部は締まらないが、肩は張る。口縁端部は少しつまみ上げる。7～11は高坏で、12は台付甕、もしくは鉢である。8・9は短い脚部で、弱く締まりながら脚柱部に至る。10は脚裾部。端部は丸くおさめる。外面は丹塗り。11も丹塗り。12の脚台部の裾は、跳ね上がる。

12号住居跡（第48図、図版20a）北側調査区の西側に位置する方形の住居跡である。支柱穴を一部確認している。1号・13号住居跡に切られる。時期は弥生時代終末期から古墳時代前期前半。

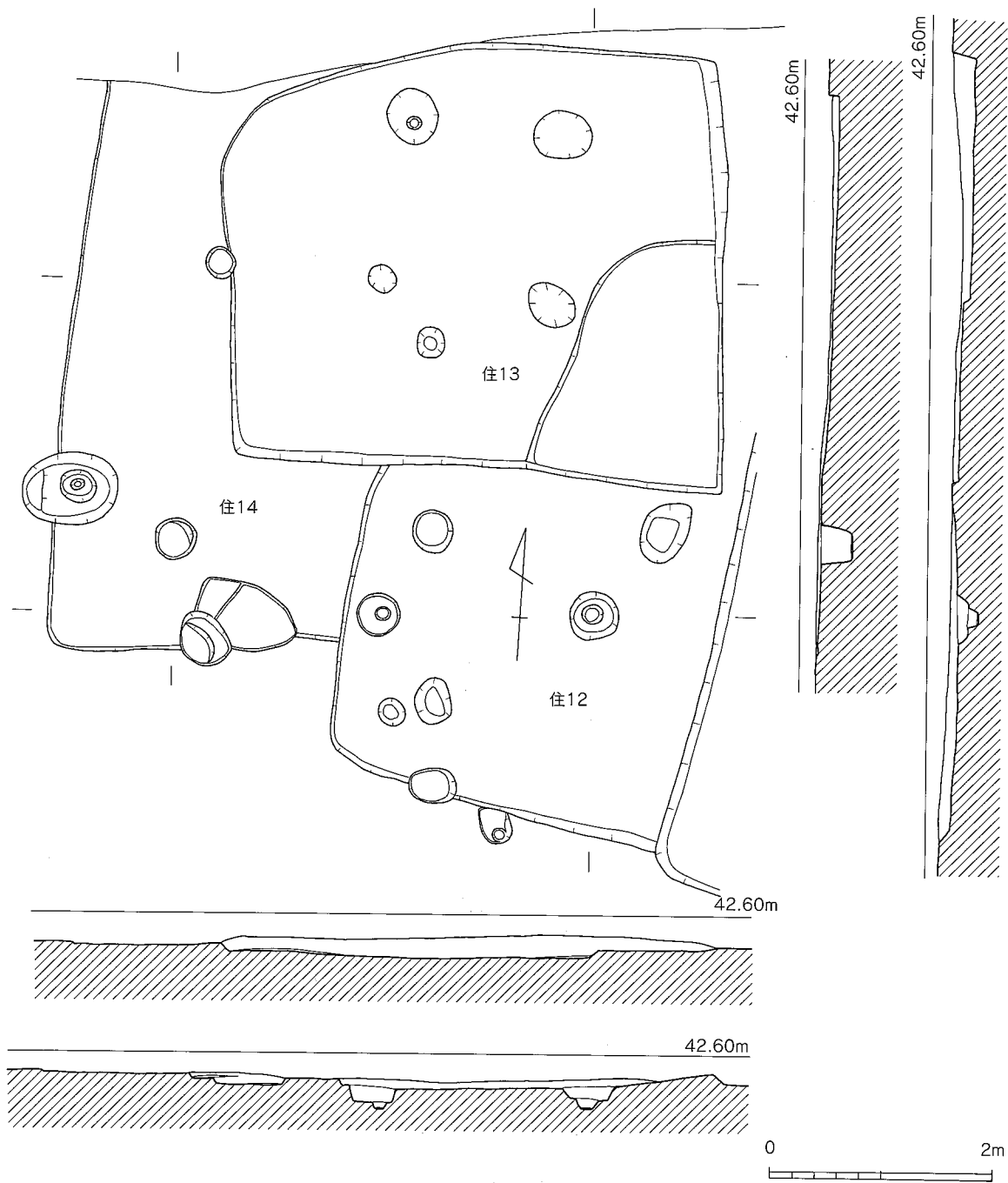
出土遺物（第47図13～19、図版37）13～16は甕である。13～15は在地系の長胴甕で、内外面ともにハケメを施す。口縁端部は丁寧な調整を施す。いずれも胴部よりも口縁部が若干、肥厚する。16は口縁が内湾しながら立ち上がる甕で、胴部内面はケズリを施し薄く仕上げる。17は鉢で直線的に外傾する口縁部を持つ。胴部は肩が張り、球形を呈す。内面はヘラケズリを施し、器壁を薄く仕上げる。底部は丸底である。18は器台。裾部の開きは弱く、胴部も直立する。19はミニチュア土器で、手捏ねで成形する。高坏もしくは台付碗の形をまねる。

13号住居跡（第48図、図版20a～c）12号住居跡の北側に位置する3.11m×4.2mを測る住居跡である。東南隅にベッド状遺構らしきものがある。1号掘立柱建物に切られる。時期は古墳時代前期前半～中頃。

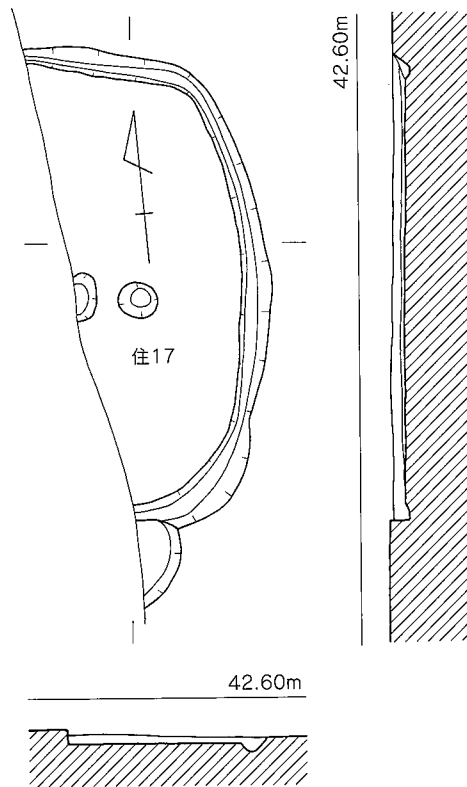
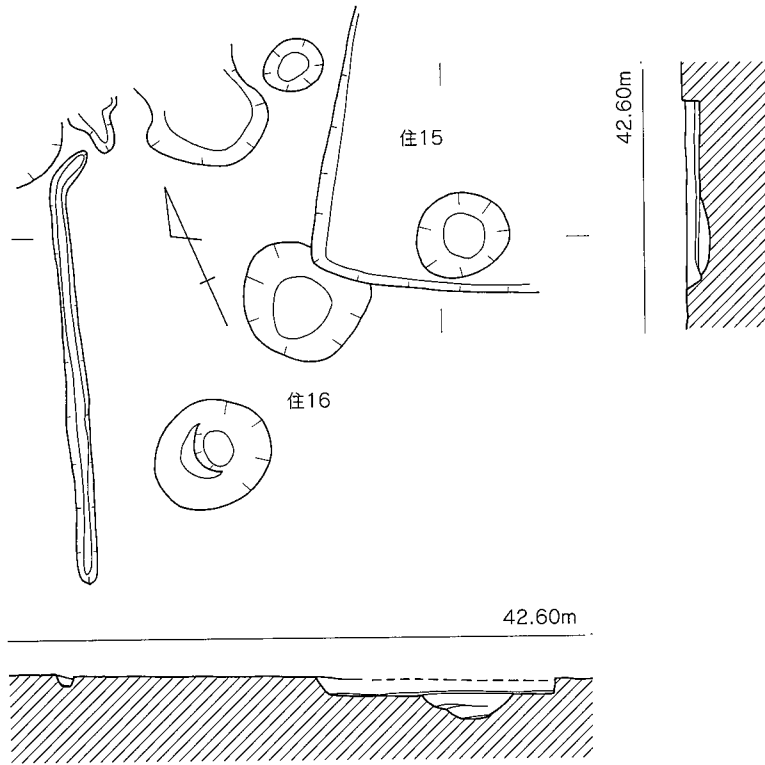
出土遺物（第50図1～23）1・2は弥生時代後期～終末のもの。2は口縁反転部に刻み目を施す。3～7は甕。4は小形の甕で、内外面ともにハケメを施す。口縁端部は丁寧な横ナデを施す。5は胴部内面を削り、器壁を薄くする。6は口縁部下端に稜を有する甕。胴部内面はヘラケズリ。7は甕の小片。8は鉢である。混入したもの。9は大型の鉢である。大きく内湾する口縁部を持ち、端部はナデにより窪む。内外面とも横ハケを施す。10～12は長脚の高坏である。10は脚柱部が締まるが、11は締まりが悪く、ハケメを残す。12は脚裾部。13～15は坏部。13は坏反転部が直線的に伸びる。14は反転部が長くなる高坏で、内面はハケメを施すが、調整は丁寧。16・17は短脚の高坏である。16は脚下半部がふくらみを持つ。18は小形の精製器台の脚部。外面は丁寧な横ミガキ、内面は縦ハケを施す。19は鼓形器台である。内面は横に削り、外面は丹を施す。20・21は器台である。両者ともくびれ部が上半に位置する。22、23はミニチュア土器で、手捏ねで成形する。い



第47图 11·12号住居跡出土土器実測図 (1/4)

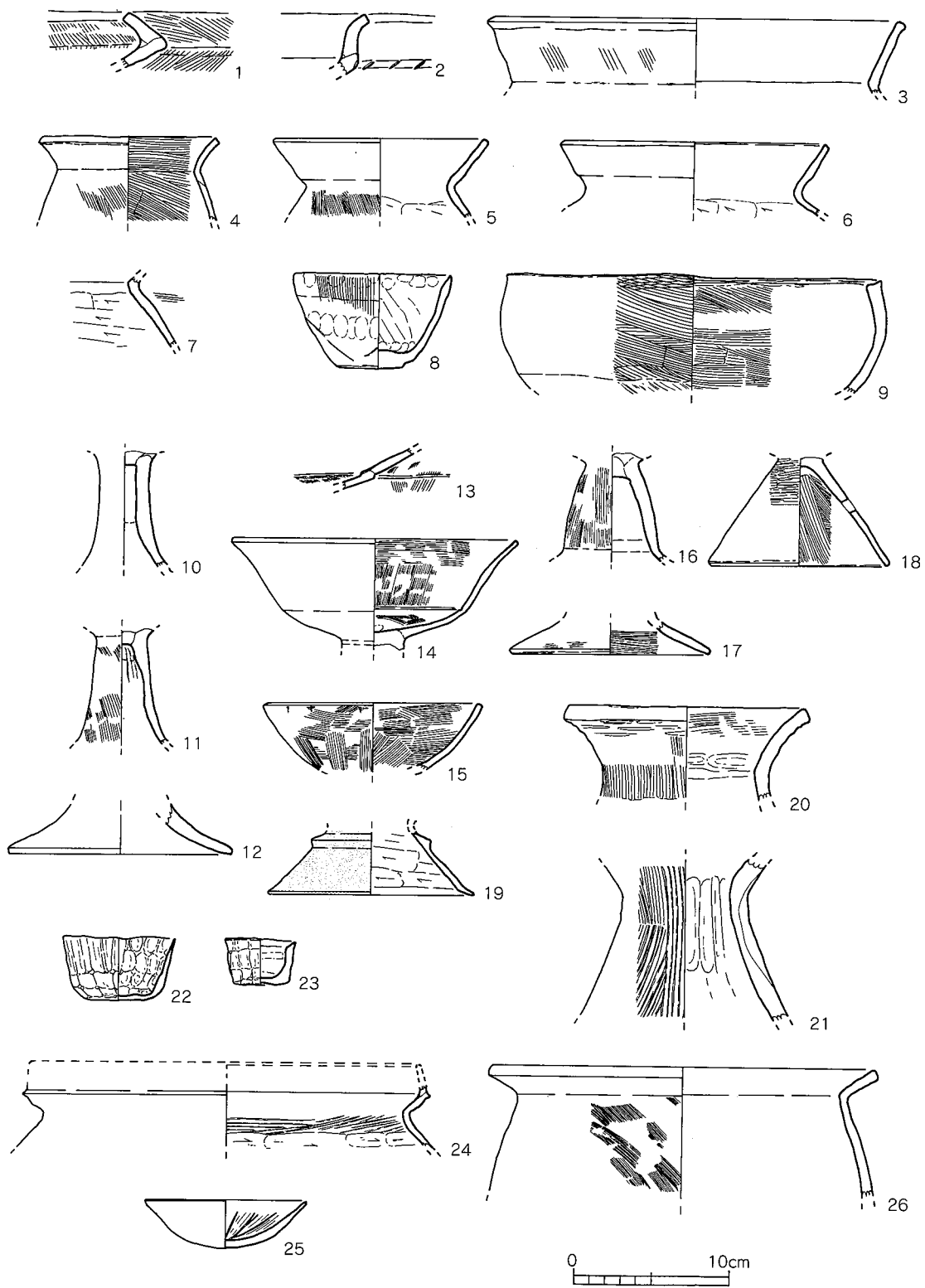


第48図 12・13号住居跡実測図 (1/60)



0 2m

第49图 15~17号住居跡出土土器実測図 (1/60)



第50图 13~17号住居跡出土土器実測图 (1/4)

ずれも椀形である。

14号住居跡（第48図、図版20a）12・13号住居の西側に位置する大型の方形住居跡である。主柱穴、炉等は未確認。時期は古墳時代前期。

出土遺物（第50図24・25）24は山陰系の甕である。頸部から胴部にかけては、横ハケを施した後、横位でヘラケズリを施す。口縁反転部は突出する。25は鉢。口縁部付近が若干反転する。

15号住居跡（第49図、図版19c）北側調査区東端に位置する方形住居跡。大部分が調査区外に広がる。出土遺物はなく、時期は不明。

16号住居跡（第49図）15号住居跡の西側で検出された方形住居跡。著しく遺構が削られており、西壁に伴う周溝のみ確認。出土遺物はなく、時期は不明。

17号住居跡（第49図、図版20d）東側調査区北側に位置する隅丸方形の住居跡である。西側半分が溜池に切られるが、壁際には周溝を確認。時期は出土遺物が1点のみで不安であるが弥生時代中期後半の可能性はある。

出土遺物（第50図26）26は甕である。外面にハケメを施す。口縁部は跳ね上がり、端部が若干、肥厚する。

18号住居跡（第51図、図版21b）17号住居跡の東側で検出された長方形の住居跡で、3.73m×2.51mを測る。西壁の一部には、周溝を巡らす。住居中央の土坑では炭化物が確認された。時期は弥生時代中期中葉～後半。

出土遺物（第52図1～4）1は甕の胴部である。胴部の中位に最大径を有し、その下に三角突帯を一条巡らす。甕棺ならば、中型棺であろう。2・3は甕の口縁部。いずれも、口縁が若干外傾するT字を呈する。口縁部下に扁平な三角突帯が巡る。4は高坏の口縁部。内面はヘラミガキを横位に施す。

19号住居跡（第51図、図版21a）東側調査区中央に位置する円形住居跡である。東側は大きく削られており、住居の規模等は不明である。出土遺物がなく、時期は不明。

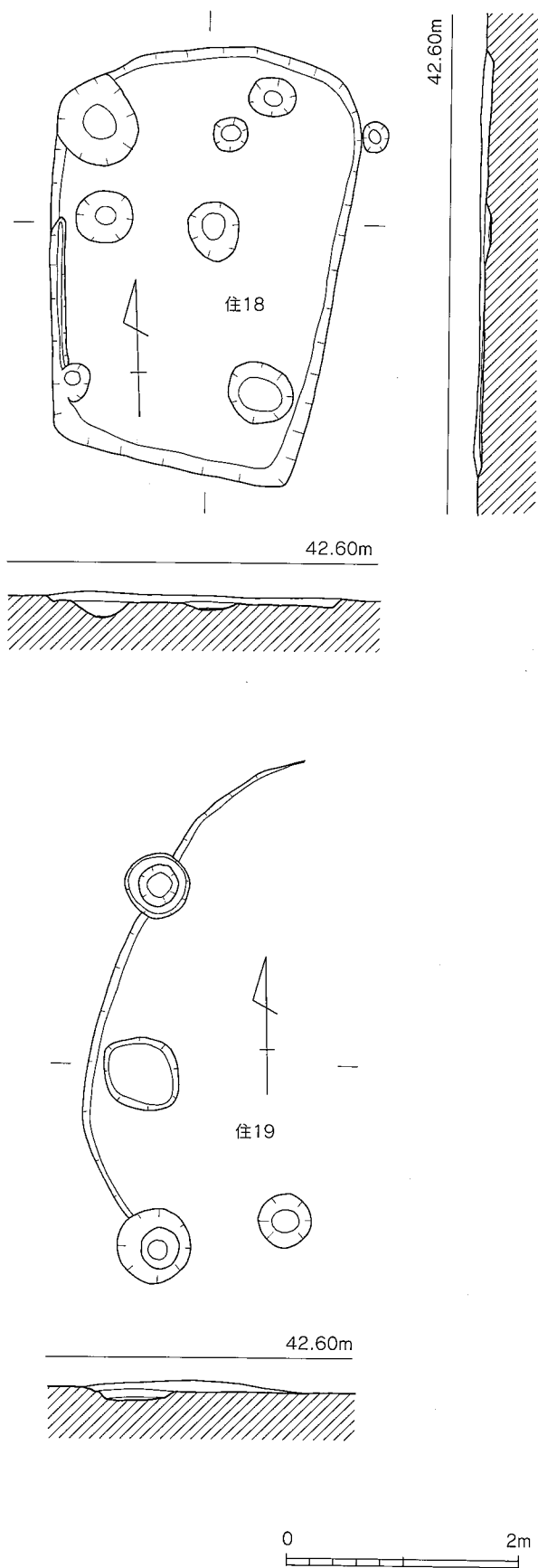
20号住居跡（第53図 図版21c）19号住居跡の南に位置する住居跡で、南北に長軸を持つ長方形プランをもつ。規模は4.68m×3.03mを測り、南側にベッド状遺構、西壁、南壁と東壁の一部には周溝を巡らす。出土遺物はなく、時期は不明。

21号住居跡（第46図）北側調査区東側に位置する。北半分が市道にさえぎられるものの、 $(3.66+\alpha)$ m×6.59mを測る大型の隅丸方形住居跡である。東から南壁にかけてはベッド状遺構をもつ。住居跡の中央から焼土を検出している。時期は古墳時代前期前半。

出土遺物（第52図5～8、第53図1、図版37）5・6ともに二重口縁壺である。口縁反転部から端部にかけて丁寧な調整を行う。胴部内面に下から上へのケズリを施し、器壁を薄く仕上げる。6は口縁部と胴部中位が欠ける。外面にハケメを施す。7は高坏で、内外面ともに暗文状のヘラミガキを施す。坏部底はハケメを施す。8は椀か。第53図1は山陰系の大型二重口縁鉢。口縁部は直線的に伸び、端部は丸く納める。外面は細かいハケメを施す。肩の張りは弱く、内面は横ヘラケズリ。

22号住居跡（第46図）11・21号住居跡に切られており、住居跡の詳細は不明である。出土遺物はなく、時期は不明。

23号住居跡（第46図）21・22号住居跡の南側に位置する方形の住居跡である。南壁沿いにはベッド状遺構を持つ。時期は古墳時代前期か。



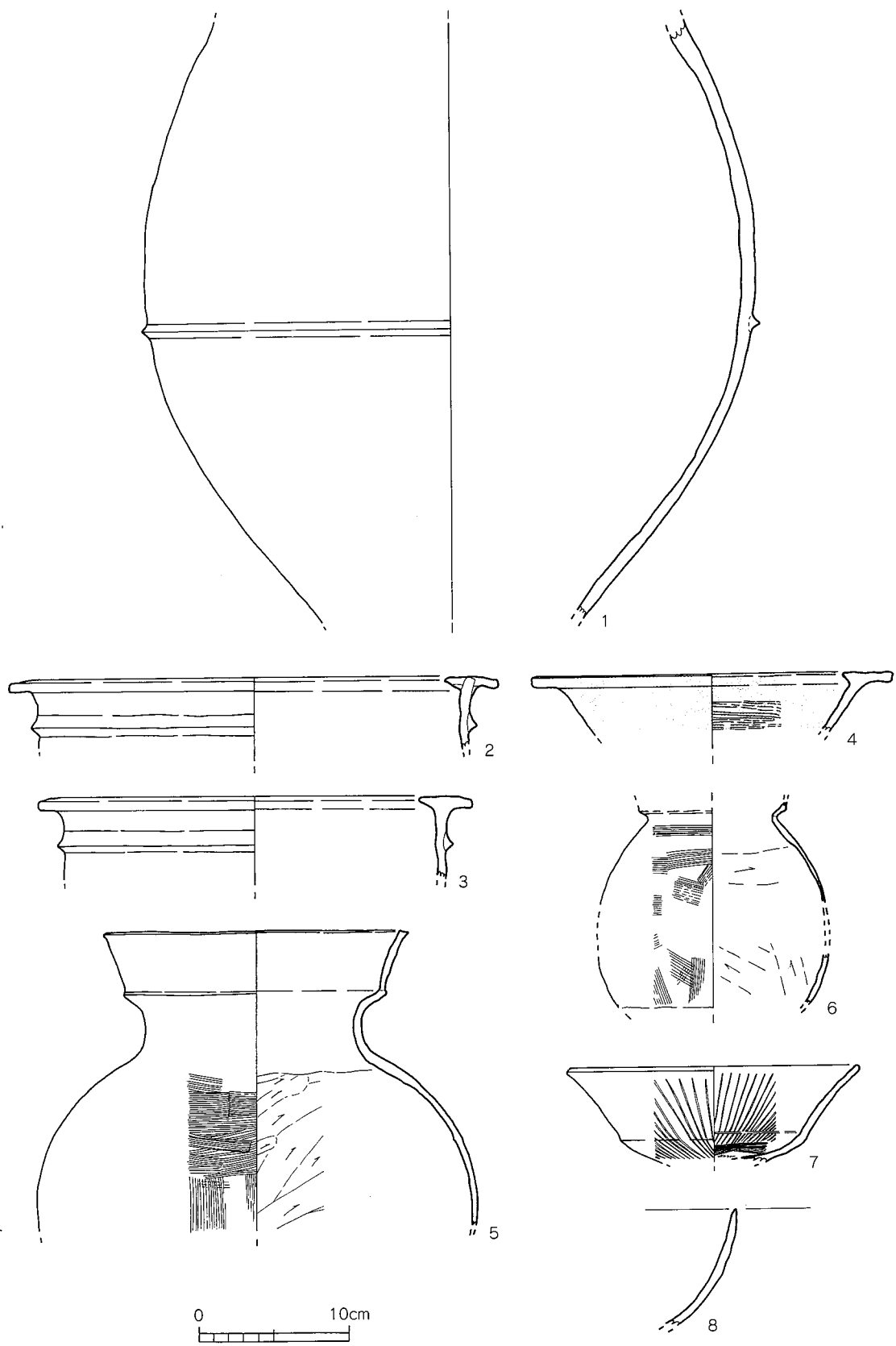
第51図 18・19号住居跡実測図 (1/60)

出土遺物 (第54図2) 2は甕の口縁部小片。端部を丸くおさめる。内面にハケメを残す。

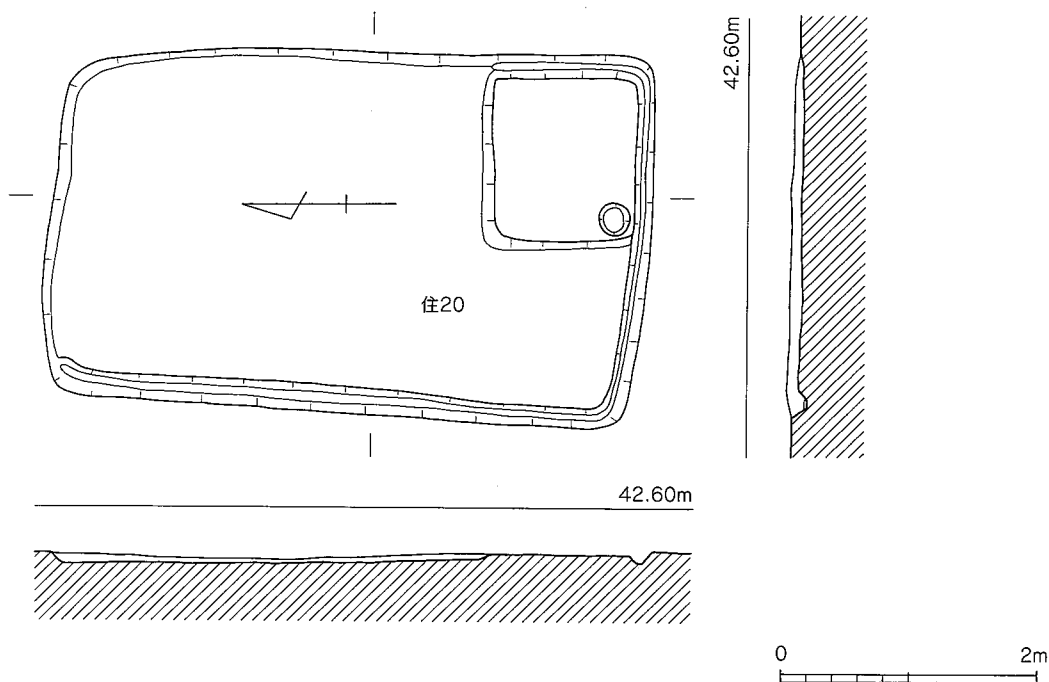
24号住居跡 (第55図) 21号住居跡の東に位置する不整形の住居跡である。北側は市道の下で、住居跡の詳細は不明である。出土遺物はなく、住居の時期は不明である。

25号住居跡 (第55図、図版22-a~c) 北側調査区西側に位置する住居で、北と東が切られている。支柱穴や炉は検出されていない。時期は古墳時代前期前半。

出土遺物 (第54図3~21、第55図1~11 図版37) 3は袋状口縁壺である。福岡平野で出土するものに似る。外面は丹塗磨研、頸部と胴部の境に低いM字突帯を巡らす。胴部中位には、焼成後の穿孔を施し、頸部も打ち欠く。本資料はラベルに基づき25号住居跡出土にしているが、写真では25号住居跡の中にある土坑から単独で出土している状況が確認できた。したがって、弥生時代中期後半の祭祀土壌を破壊した後、古墳時代前期に住居を建て、祭祀土壌の一部が残されていたものとする。4・5は山陰系の大型二重口縁鉢。両者とも口縁は直線的に伸びる。6・7は鉢か。6の内面に横ハケを施す。8~21は甕である。8は胴部上位に最大径を有する甕で、口縁部は内湾しながら立ち上がる。口縁端部は丸い。11は大型甕の頸部で、突帯に刻目を有する。9・10は布留甕の上半である。第55図1・2は高坏の脚柱部である。5は台付鉢の脚台部か。6~9は鉢である。いずれも内外面にハケメを施す。9は尖底を有する。7は胴が張る。11は上半にくびれ部があ



第52图 18·21号住居跡出土土器実測図 (1/4)



第53図 20号住居跡実測図 (1/60)

る器台。12は椀形の手握ね土器である。

26号住居跡 (第55図、図版22a、b) 25号住居跡の東を切る形で位置する住居跡である。大部分が調査区外に位置するため、詳細不明。時期は古墳時代前期で、若干時期幅が広いようである。

出土遺物 (第56図13~22、第56図1~14、図版37) 13・14は二重口縁壺の口縁部片。15は小型丸底壺か。16~22、第56図1~7は甕である。17は胴の張りが弱い甕で、口縁部は緩やかに立ち上がる。口縁端部は面を取る。20~22は内面に横ヘラケズリを施し、器壁を薄く仕上げる。22は肩部にハケ状工具による平行沈線を、21・22はヘラ状工具で波状文を施す。第56図1は胴部中位に最大径を有する。3は口縁の内湾が弱くなり、胴部も張る。8は大型の鉢。器壁を薄く仕上げ、尖底である。9は甕か。11は小型精製高坏の脚部である。

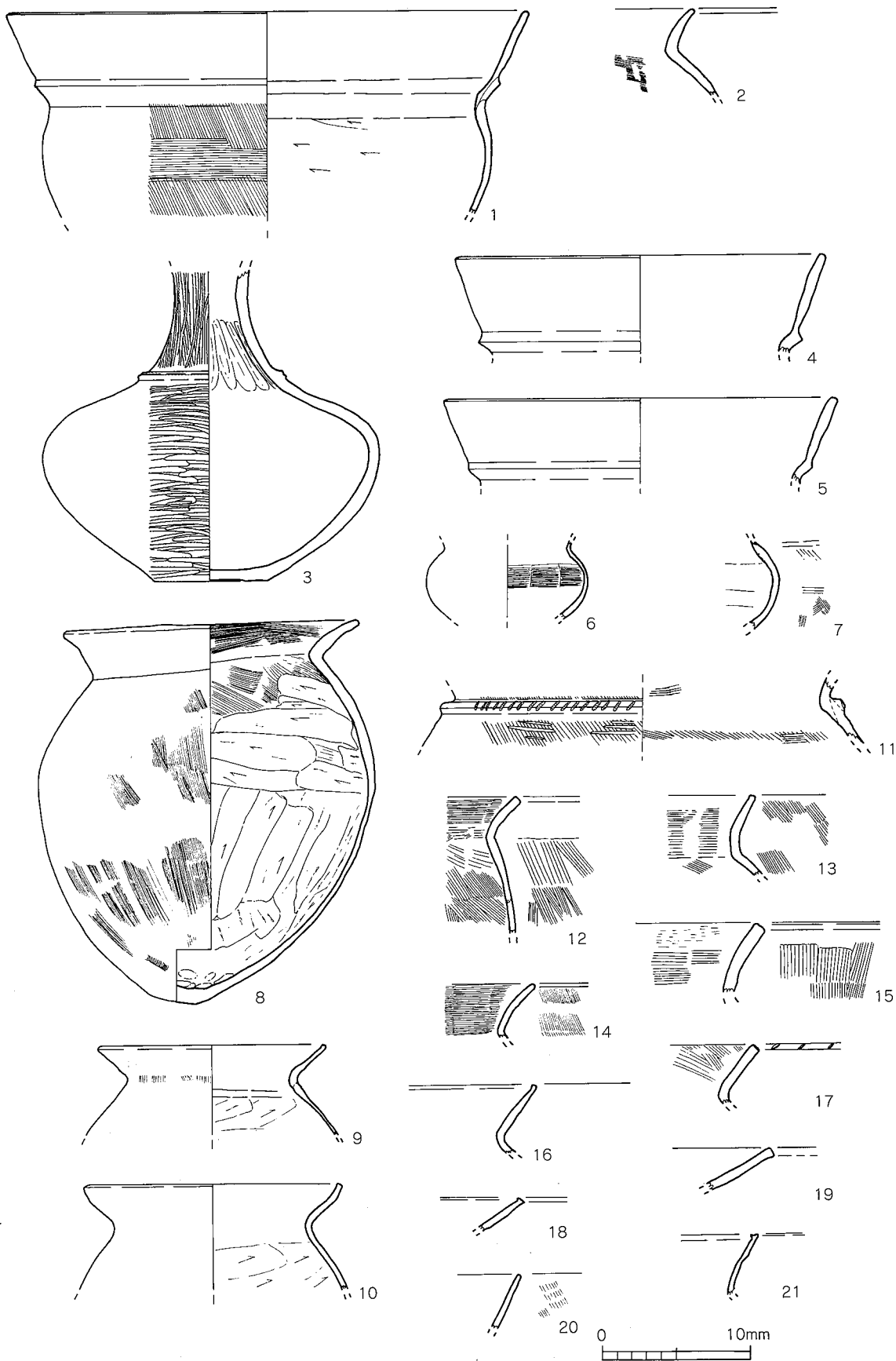
27号住居跡 (第55図、図版22a、c) 25号住居跡の西に位置する方形の住居跡。全体の1/4程度の確認で詳細は不明。時期は古墳時代前期。

出土遺物 (第57図15・16) 15は高坏の脚台部。円形の透が入る。16は鉢。丸底の底部から内湾しながら口縁部に至る。

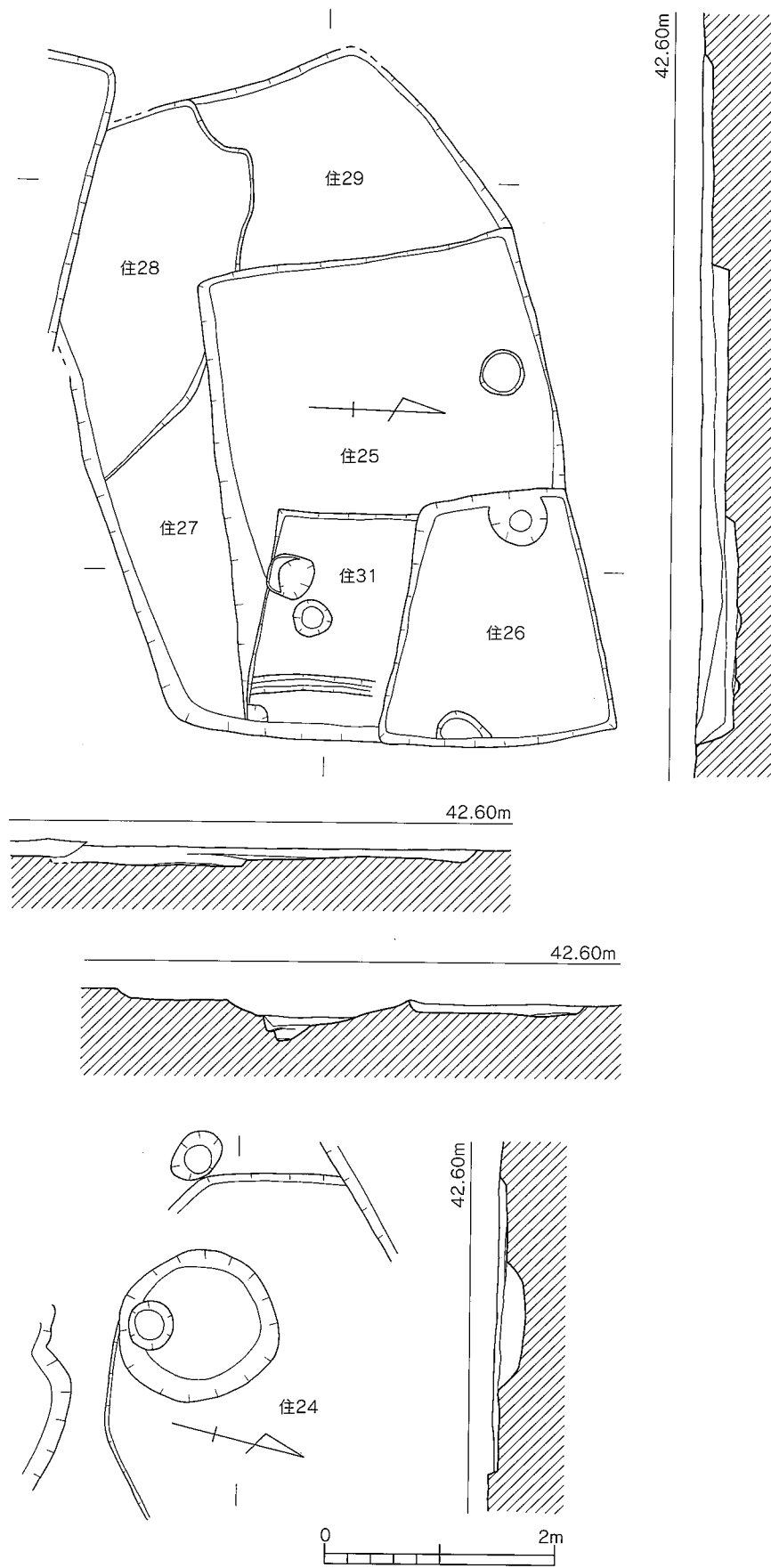
28号住居跡 (第55図、図版22c) 北側調査区西側に位置する円形住居跡で1号住居跡に切られる。住居の一部のみの確認で詳細は不明。時期は出土遺物がなく不明であるが、周辺から出土している土器 (第56図20~23) から古墳時代前期に位置付けられる。

29号住居跡 (第55図、図版22d) 27号住居跡とともに検出した住居跡で、詳細は不明。時期は古墳時代前期前半。

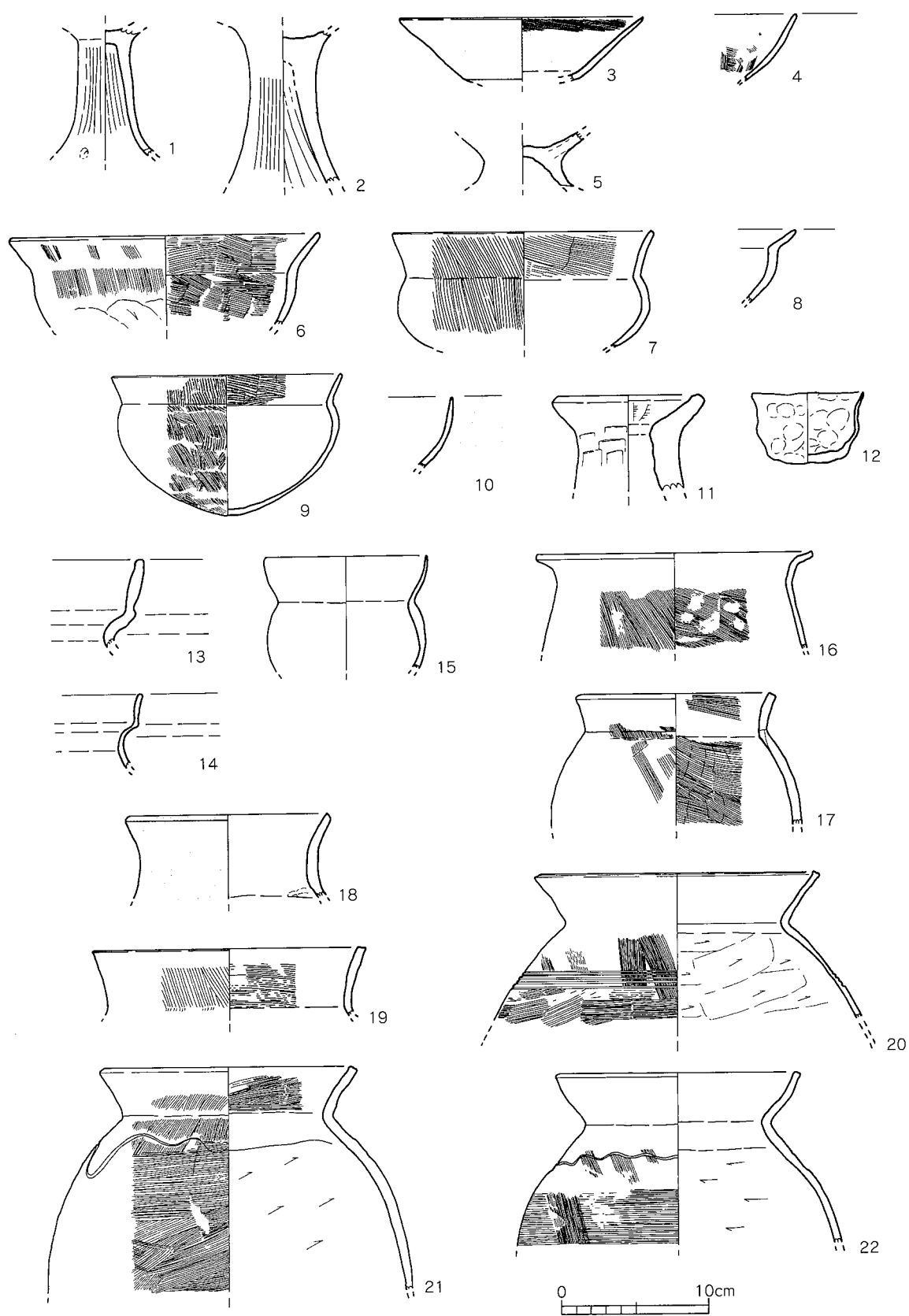
出土遺物 (第57図17~19、図版37) 17は長胴甕である。内外面ともハケで調整し、口縁部は肥厚しつつ、端部で面を取る。18は外来系の高坏。調整はハケメのみで暗文状のミガキはない。19は鉢で黒斑を持つ。尖底で内面の一部にミガキを施す。



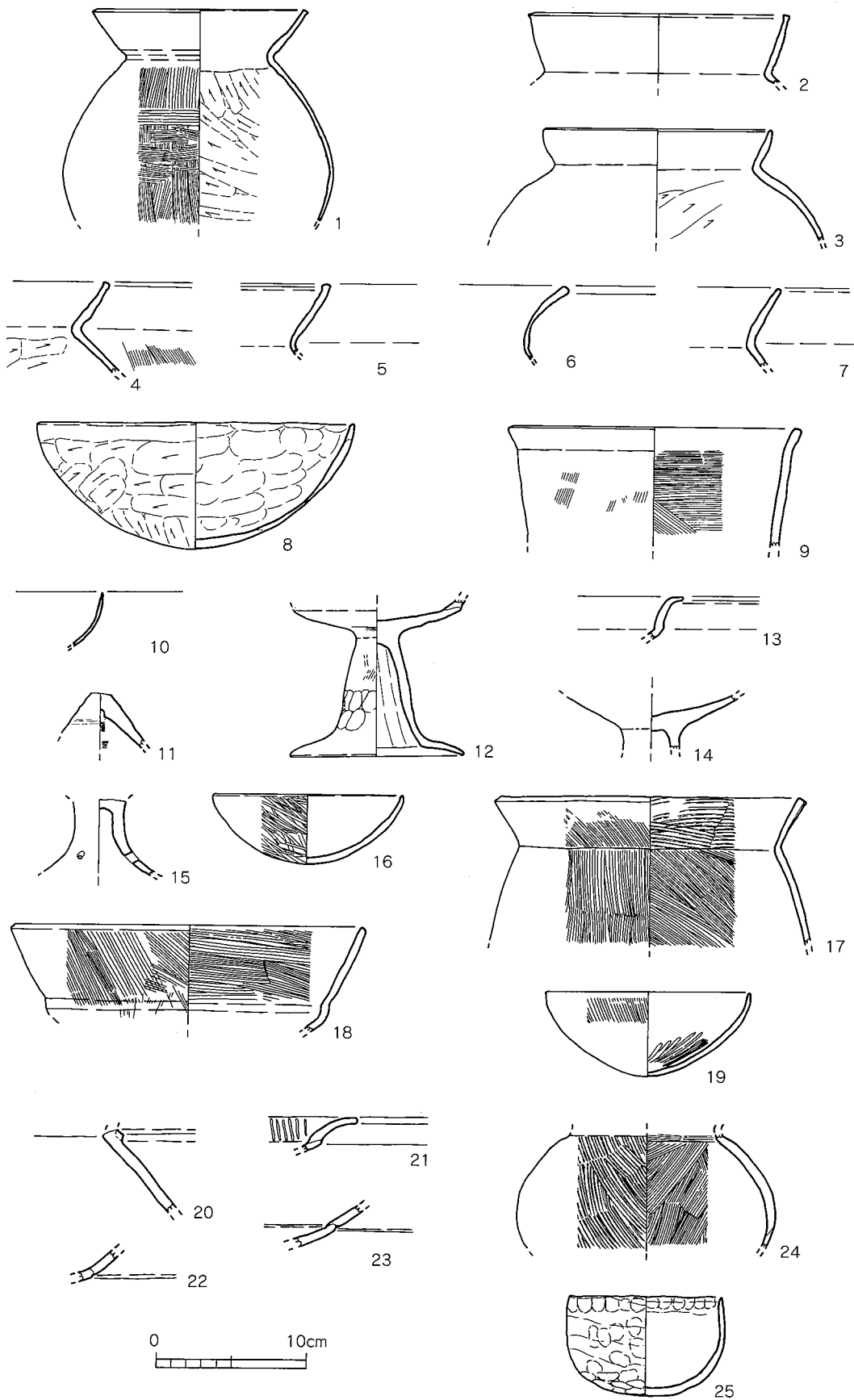
第54图 21·23·25号①住居跡出土土器実測図 (1/4)



第55図 24~29・31号住居跡実測図 (1/60)



第56图 25②·26①号住居跡出土土器实测图 (1/4)



第57图 26②~31号住居跡出土土器实测图 (1/4)

31号住居跡（第55図、図版22a、d）26号住居跡の南側で、住居跡の角が一部確認された。詳細は不明。時期は古墳時代前期。なお、30号は欠番である。

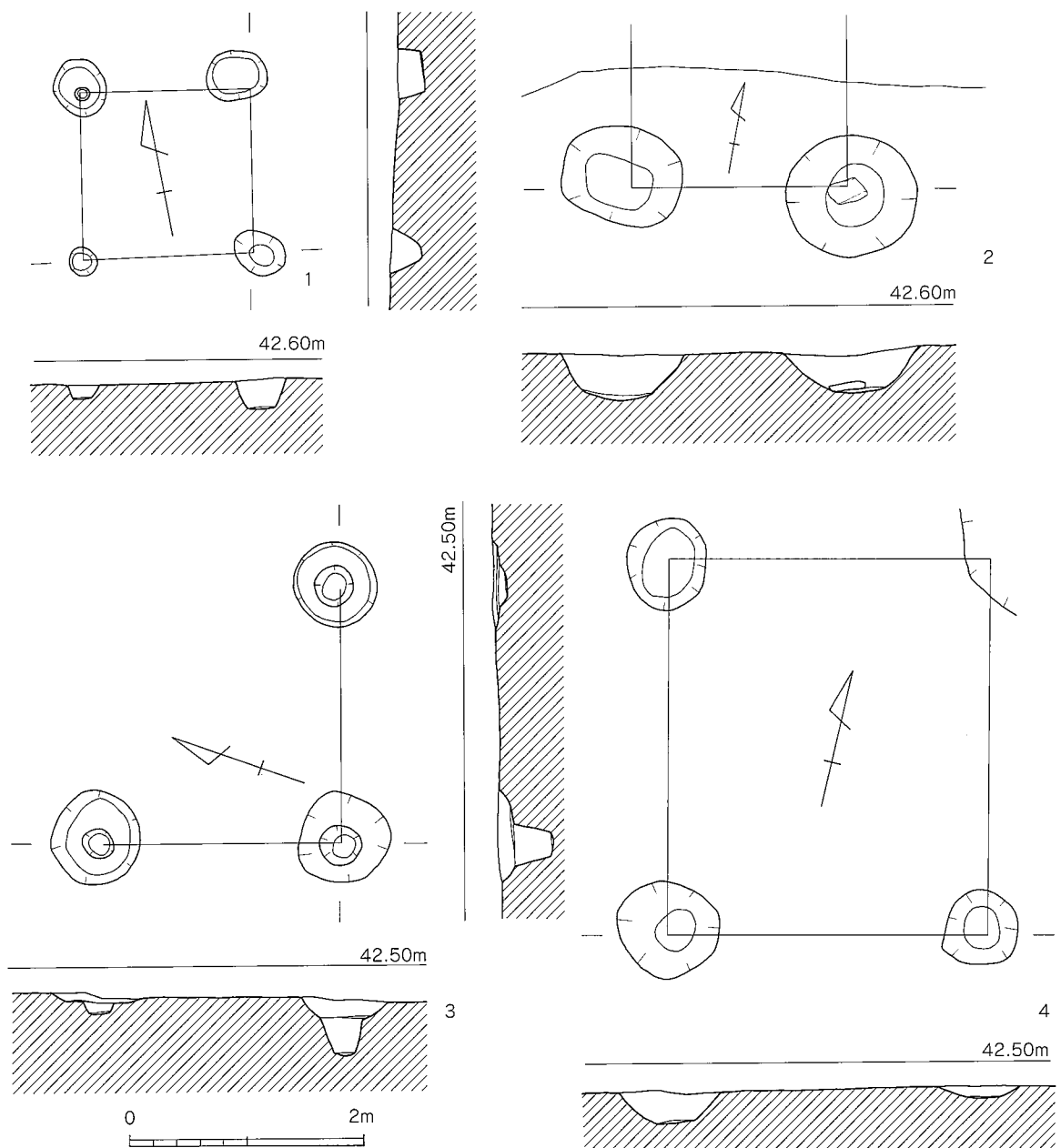
出土遺物（第57図24・25、図版37）24は甕か。内外面とも縦ハケを施し、胴が張る。15は椀形の手握ね椀である。

(3) その他の遺構・遺物

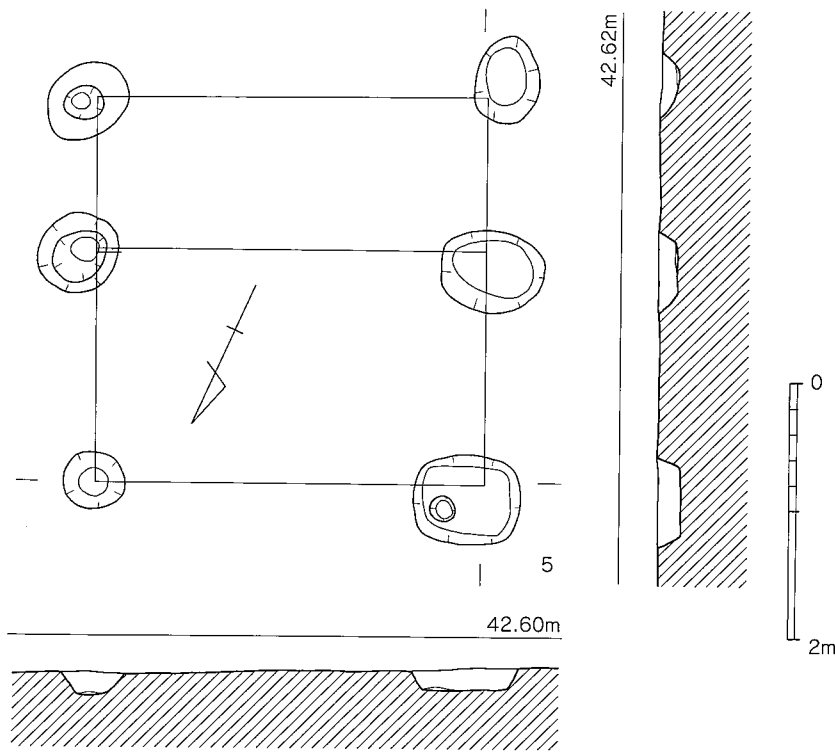
1. 掘立柱建物

5棟の掘立柱建物を検出した。いずれも1間×1間で、調査区外に伸びるものもある。出土遺物はないが、古墳時代前期のものが多いと思われる。

1号掘立柱建物（第58図）北側調査区西側に位置する1×1間の建物で、1.45m×1.43mを測る。



第58図 1～4号掘立柱建物実測図 (1/60)



第59図 5号掘立柱建物実測図 (1/60)

柱痕を検出。

2号掘立柱建物 (第58図)

北側調査区中央に位置し、調査区外に伸びる建物で、一辺が2.03mを測る。塊石を礎板として用いる。

3号掘立柱建物 (第58図)

10号住居跡を切る1間×1間の建物で、2.25m×2.07mを測る。柱痕を検出。

4号掘立柱建物 (第58図)

北側調査区東側に位置する1間×1間の建物で、2.97m×2.61mを測る。

5号掘立柱建物 (第59図)

20号住居跡の南に位置する1間×1間の建物で、

3.00m×1.80mを測る。南側に下屋を持つ。

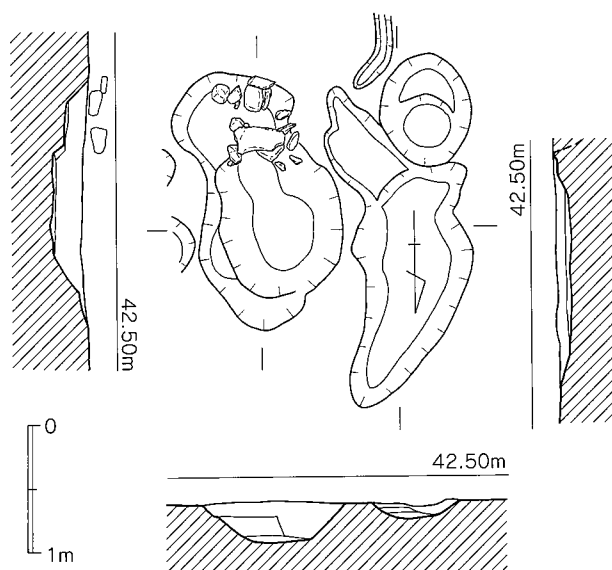
2. 石棺墓 (第60図、図版23b)

石棺墓は調査区の東北部で検出した。検出時に石を確認し、そのまわりを掘り下げると墓壙を確認した。大きさは1.3m×0.9mを測り、主軸をN14°Wにとる。石棺墓の中央部に攪乱をうける。また、西には土壙が隣接し、三雲遺跡寺口地区例のように祭祀的性格を持つものと思われる。石棺墓には赤色顔料や鉄器の副葬はないが、土器が2点出土している。

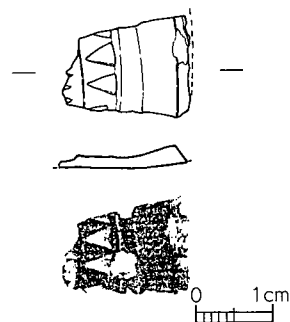
出土遺物 (第62図6・7) 第62図6・7は鉢である。いずれも反転する口縁部を持つ。7は内外面に丹を施す。鉢の出土状況が不明であるため、土器から石棺墓の時期を求めることは不安であるが、古墳時代前期に位置付けられようか。

3. 土坑、ピット、包含層出土の遺物 (第61～63図)

第61図の銅鏡は縁部の小片である。残存長1.7cm、幅1.3cmを測る。外区に鋸歯文が巡るが、鏡式等は不明。復元すると直径9.5cmの小型鏡になる。また、縁辺部は磨かれている。第62図1～3は1号土坑から出土した弥生時代中期後半の甕である。口縁部は鋤先口縁を有する。4・5は2号土坑から出土した甕である。4は弥生時代中期後半。5は口縁部を跳ね上げ、端部を丸くおさめる。8～10は42号ピット出土の甕である。8は長い口縁部を持つ。端部は丸い。9は布留甕で、肩部に12個の刺突文を有する。10も布留甕の胴部である。若干長胴化する。第62図は包含層出土の土器である。1・2は二重口縁壺。3～7は甕である。3は弥生時代中期で、その他は古墳時代前期。8・9は鉢で、10～13は高坏である、12は外来系の高坏で、外面に暗文状の沈線を有する。15・16は器台。14は甌か。15は脚台部として図化しているが、甌の口縁部の可能性がある。19は須恵器の器台の口縁部。20は片口の鉢である。21～23は輸入陶磁器の小片。中世の遺物は非常に少ない。



第60図 石棺墓実測図 (1/60)



第61図 II-3g トレンチ上層出土銅鏡
実測図 (1/1)

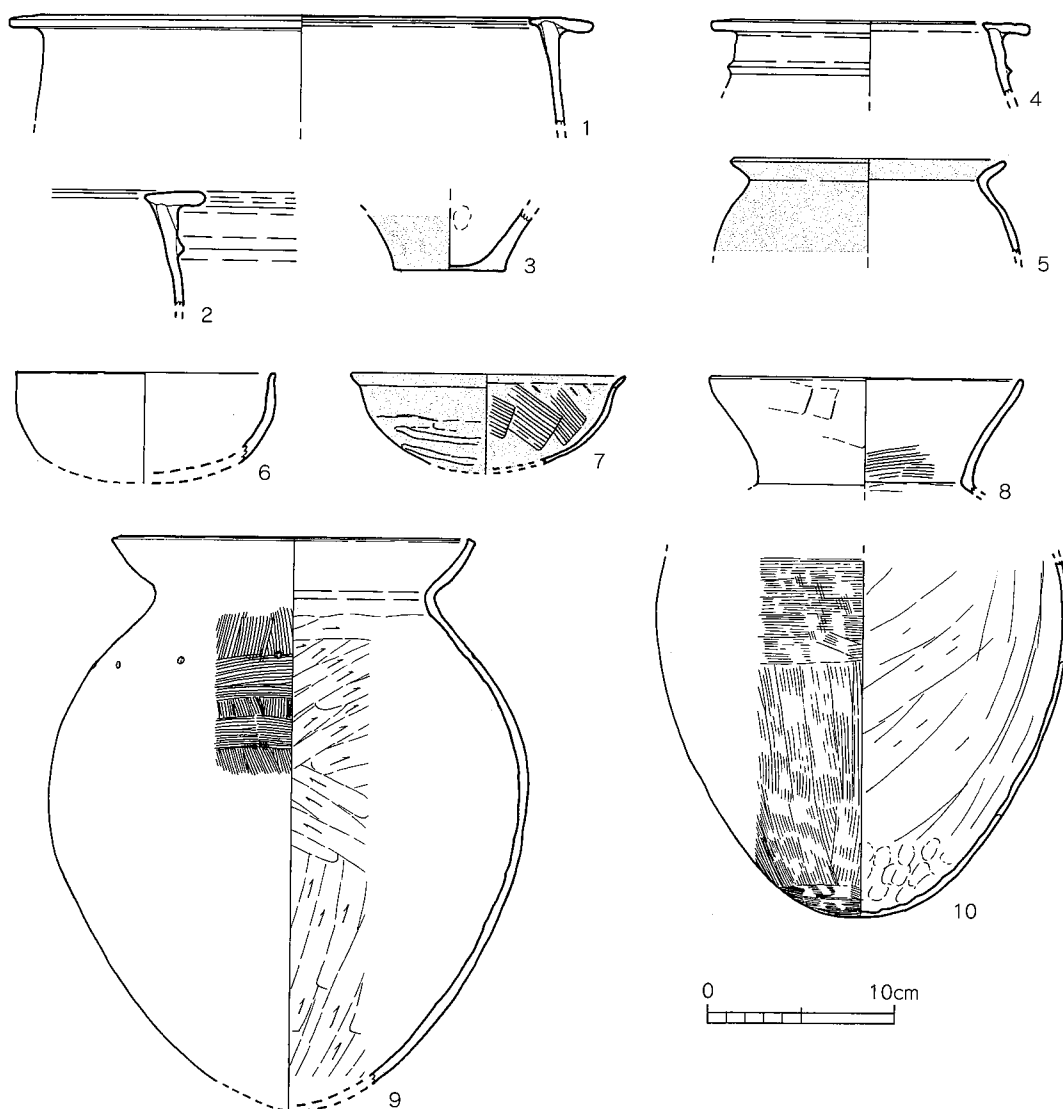
7. 鉄器・石器

本報告内の各遺構から出土した鉄器と石器をまとめて報告する。

1. **鉄器** (第64・65図、図版39) 1は三雲441番地1号住居跡出土の短刀で、切先部が蛇行する。茎部は断面長方形で、端部が少し曲がる。2は鉄剣の小片。3～8は刀子。9は井原2579番地6号住居跡から出土した鉄鎌である。全体的に錆に覆われ、柄装着部の形状はよくわからない。一部木質残る。10は鉄鋤先である。約1/2残る。反転部は明瞭である。12～15は鉄鎌。16は三雲450-2番地他10号住居跡出土の板状鉄製品。また三雲437番地1号住居跡からは鉄滓が多く出土している。18は椀形滓。出土状況がわからず、住居跡に伴うものか不明である。第64図は大部分が不明鉄製品である。

2. **玉類** (第66図 図版38) 1は井原2579番地表面清掃時に出土した石製巡方である。白～淡緑色の蛇紋岩製で2.60cm×3.05cmを測る。中央やや上方に0.25cm×1.65cmの垂孔を穿つ。垂孔は裏面に半円状の工具痕が残ることから、回転する円盤状工具で裏から溝状に掘り窪めた後に、表の孔縁の調整を施したと思われる(平尾2002)。また、裏面には粗い研磨痕が残されている。潜り穴は裏面の4隅に穿つ。福岡県の石製巡方の出土例は18遺跡33例が知られており、出土遺跡も郡衙や豪族居宅と推定される場所、もしくは博多遺跡群などの工房を有する遺跡に集中するようである。また、白色系の巡方は博多や大宰府に集中する傾向があるが(宮田2002)、本例もそれらとの比較検討が必要になるだろう。現在、怡土郡衙は確認されていないが、今後の調査では官衙関連施設の存在も視野に入れる必要がある。2はガラス小玉。スカイブルーで径3.5mmを測る。気泡はない。3は軟質の滑石製白玉。2・3はともに三雲437番地上層溝出土。径4.0mmを測る。胴が若干張る。一部剥離の痕跡があるが、穿孔時のものであるかもしれない。6は棒状土製品。時期は不明。4は土玉。上部から穿孔するが貫通しない。新しいものと思われる。5は三雲450-2番地他包含層出土の土製紡錘車。算盤玉形を呈す。

3. **石器** (第67・68図、図版38) 1～7は縄文時代の石鎌。8は安山岩製のスクレイパーである。



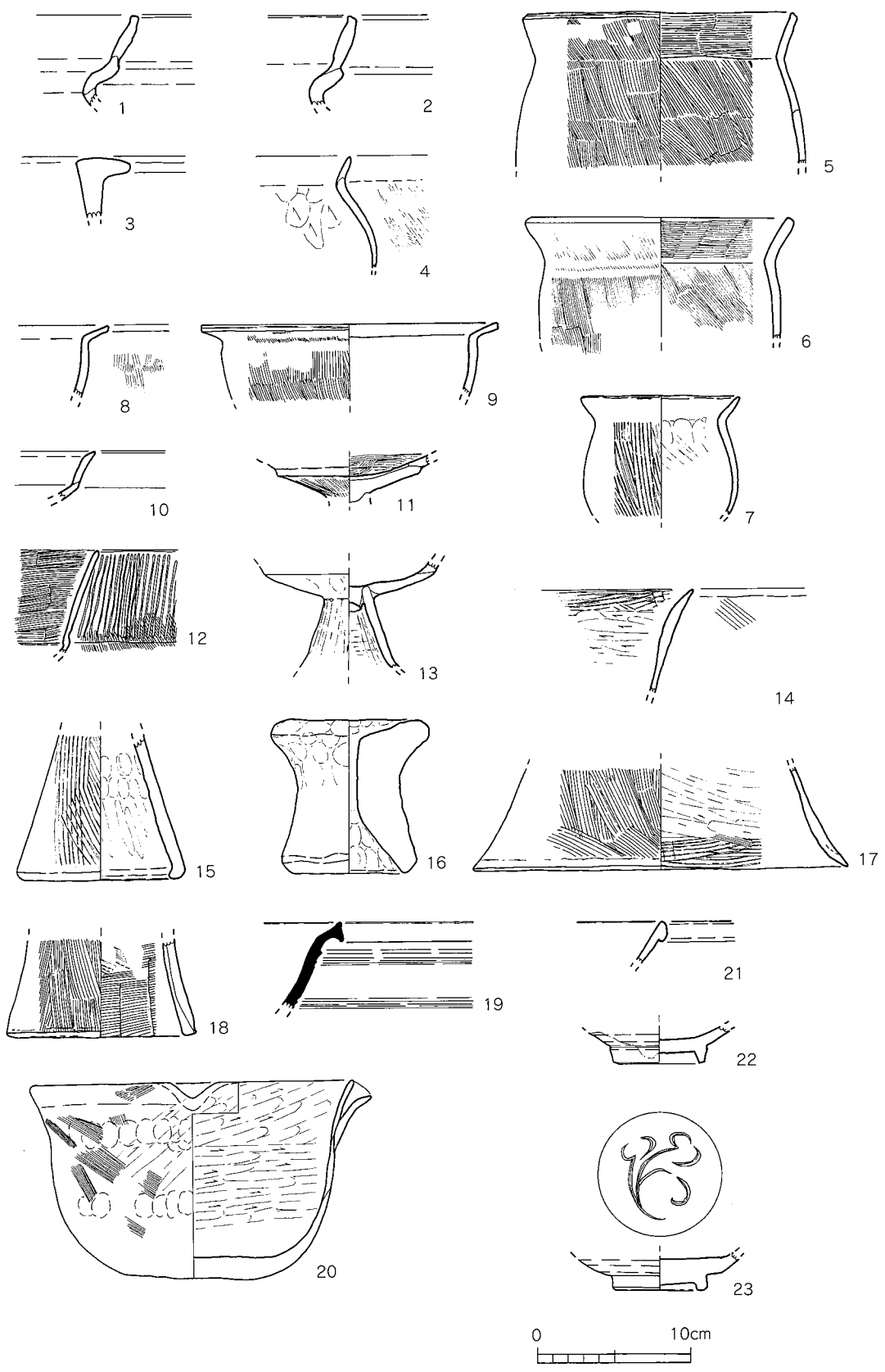
第62図 土坑・石棺墓・ピット出土土器実測図 (1/4)

9は軟質の滑石製勾玉である。孔付近に剥離が見られ、穿孔時のものと思われる。井原2575番地近世溝からの出土。10は安山岩製の角錐状石器である。三雲2579番地出土。11~17は紡錘車。12は穿孔前のものか。18~20は有孔石錘である。孔はそれぞれ両面穿孔である。21は石鍋転用の滑石スタンプである。第67図1は石剣の未製品で井原2575番地近世溝出土。3は磨製石剣である。2は打製石斧。4は叩石であるが時期は不明。側面にも叩き痕が残る。8は敲台石。9は磨製石斧である。

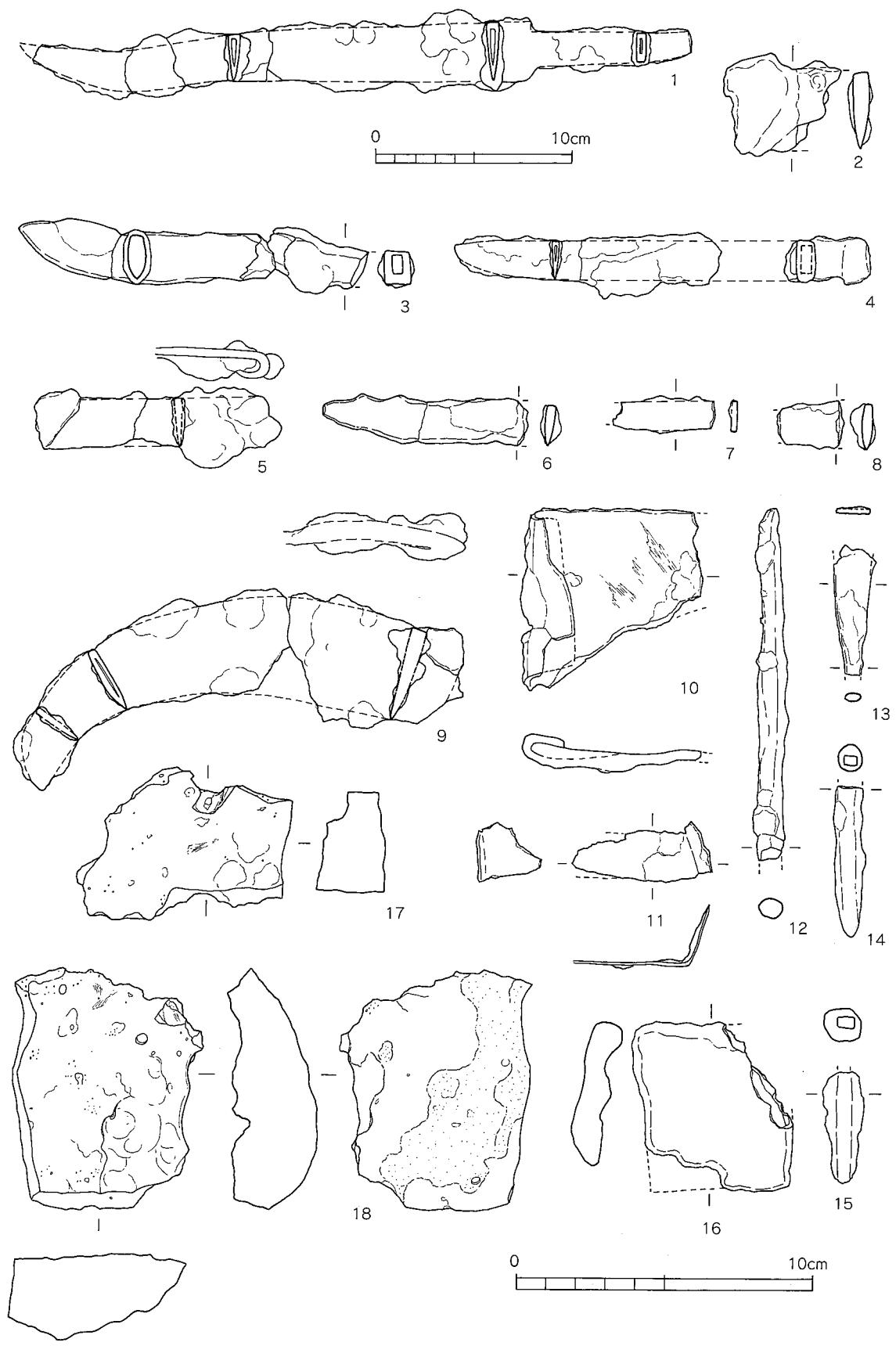
【参考文献】

平尾政幸 (2002) 「平安京の石鏝生産」 『鏝帯をめぐる諸問題』

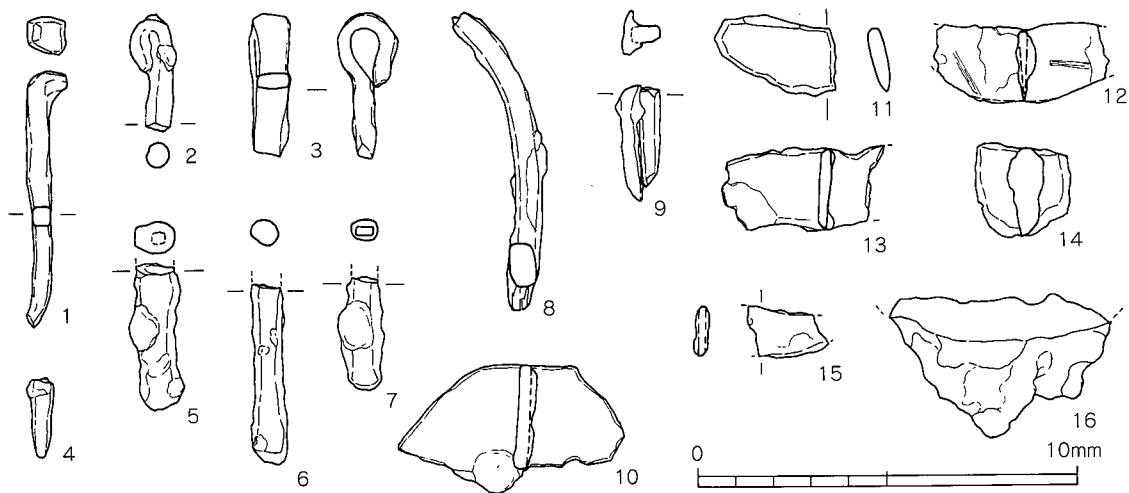
宮田浩之 (2002) 「九州地方の鏝帯」 『鏝帯をめぐる諸問題』



第63图 包含層出土土器実測图 (1/4)



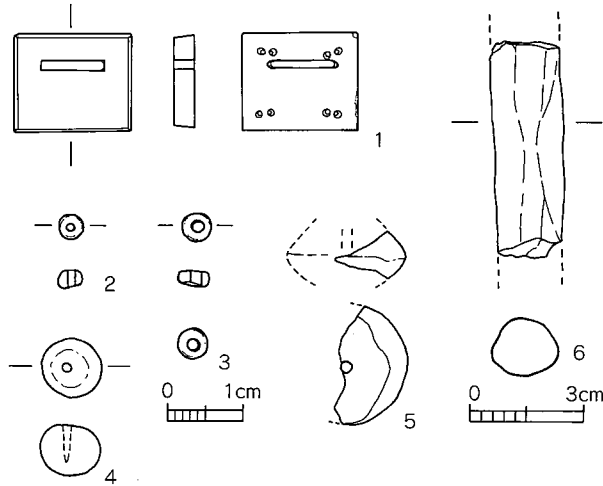
第64図 三雲・井原遺跡出土鉄器実測図① (1/2、1/3)



第65図 三雲・井原遺跡出土鉄器実測図② (1/2)

図No.	整理	種類	出土遺構	時期	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
63-1	2	鉋行刀	三雲441番地5号住居土器群		33.4	3.1	0.60	切先が鈍化する。
63-2	23	鉄刀	三雲437番地下層包舎層		—	2.7	0.50	小片。
63-3	29	刀子	三雲上寛1号住居		11.7+	1.5	0.45	茎一部欠損。
63-4	3	刀子	三雲441番地6号住居		14.0 (複元)	1.1	0.30	
63-5	8	刀子	三雲437番地1号住居	古墳中期	8.3+	1.5	0.25	切先と茎部が折れ曲がる。
63-6	25	刀子	井原2575番地5TR西側旧耕作土		6.9+	1.4	0.40	
63-7	6	刀子?	三雲441番地7号住居埋土		3.5+	1.0	0.15	刃部がなく、鉄鏝か。
63-8	20	刀子	井原2579番地上層遺構②		2.3+	1.6	0.35	小片。
63-9	1	鉄鏝	井原2579番地6号住居		15.4	3.4	0.55	
63-10	33	鉄鏝先	三雲上寛25号~30号住居		5.9+	6.1+	0.35	木質残る。
63-11	28	鉄鏝先	三雲上寛26号住居		1.7+	4.7+	0.10	非常に薄い。
63-12	22	鉄鏝	井原2575番地4号住居TR		12.0+	0.9	0.70	刃部の形態不明。
63-13	5	鉄鏝	三雲441番地6号住居		4.4+	5.5	0.30	刃部不明。
63-14	34	鉄鏝	三雲上寛3層		5.0+	0.7	0.35	
63-15	35	鉄鏝	三雲上寛11号住居東端部床面上		3.8+	0.6	0.40	
63-16	31	板状鉄製品	三雲上寛10号住居床面		5.7	5.0	0.50	
63-17	10	鉄滓	三雲437番地1号住居		7.2	5.3	2.00	鉄分無。
63-18	9	鉄滓	三雲437番地1号住居		8.1	8.4	2.80	鉄分若干含む。椀形滓。
64-1	11	鉄釘	井原2579番地上層遺構①		6.8	0.5	0.50	
64-2	14	不明鉄製品	井原2575番地旧水路②I区下層 (砂利層)		3.0+	0.6	0.70	
64-3	24	不明鉄製品	井原2575番地旧水路②II区上層 (整地層)		3.7+	1.0	0.60	
64-4	27	鉄釘	井原2579番地		2.1+	0.6	0.50	
64-5	13	不明鉄製品	井原2579番地I区東側包舎層		3.8+	0.4	0.30	
64-6	18	不明鉄製品	三雲437番地		4.7+	0.8	0.70	
64-7	12	不明鉄製品	井原2575番地5~6TR間耕作土		3.0+	0.5	0.20	
64-8	17	不明鉄製品	井原2579番地土器群②A		8.0+	0.7	1.20	
64-9	16	不明鉄製品	井原2579番地2TR旧水路~1層		2.6	0.8	0.50	
64-10	10	不明鉄製品	三雲上寛北西部3層		6.0+	2.8	0.30	
64-11	26	不明鉄製品	井原2575番地5TR西側旧耕作土		3.2+	1.7	0.45	
64-12	4	不明鉄製品	三雲441番地1号住居埋土		1.9	4.6+	0.20	鏝先か。
64-13	15	不明鉄製品	井原2579番地III区西2層		3.9	2.0	0.30	
64-14	19	不明鉄製品	井原2575番地旧水路②I区東側遺構上面		2.3	2.5	0.65	
64-15	7	不明鉄製品	三雲441番地7号住居		1.9+	1.3	0.35	
64-16	36	鉄滓	三雲上寛3層包舎層		5.7	2.6		

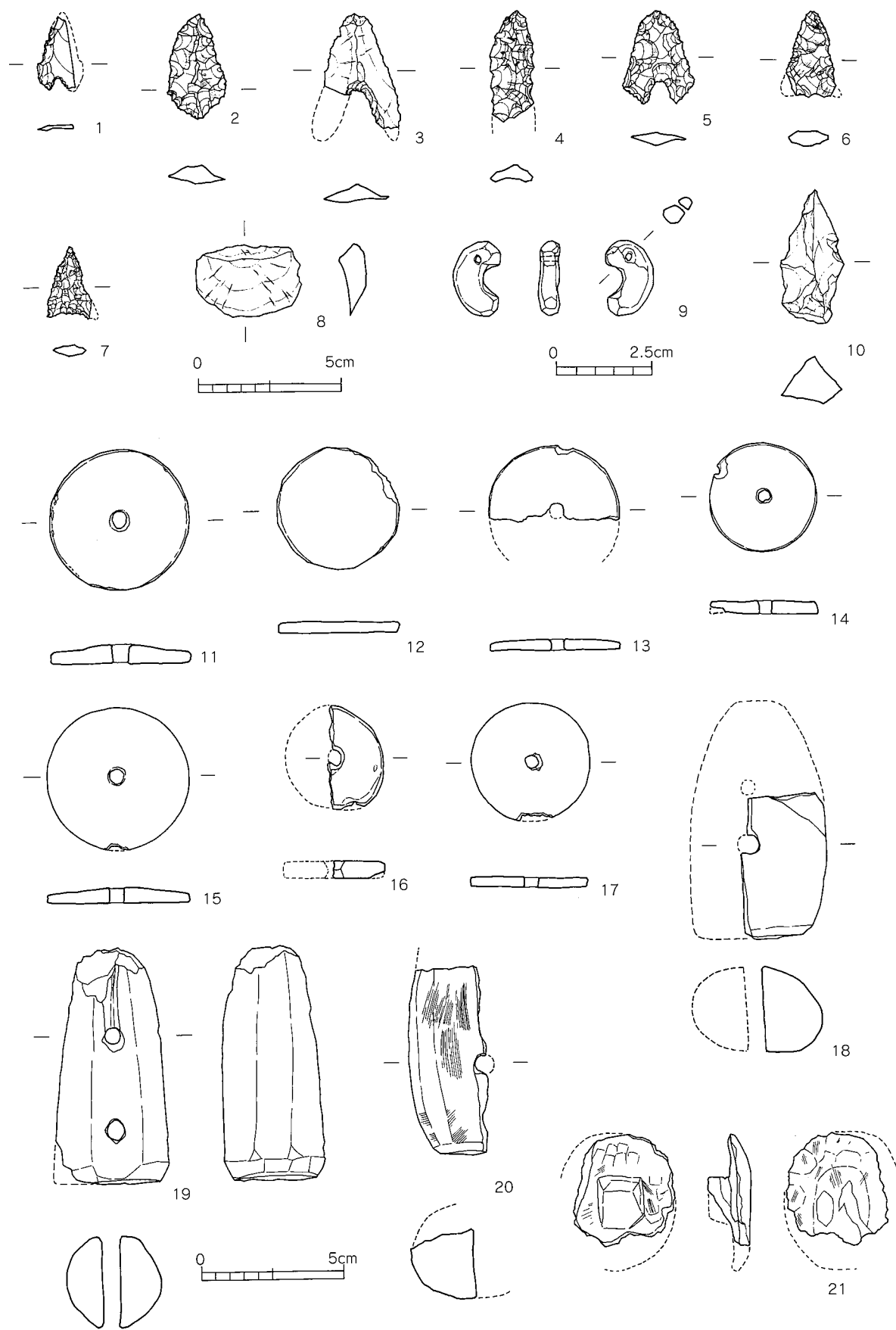
表1 三雲・井原遺跡出土鉄器一覽表



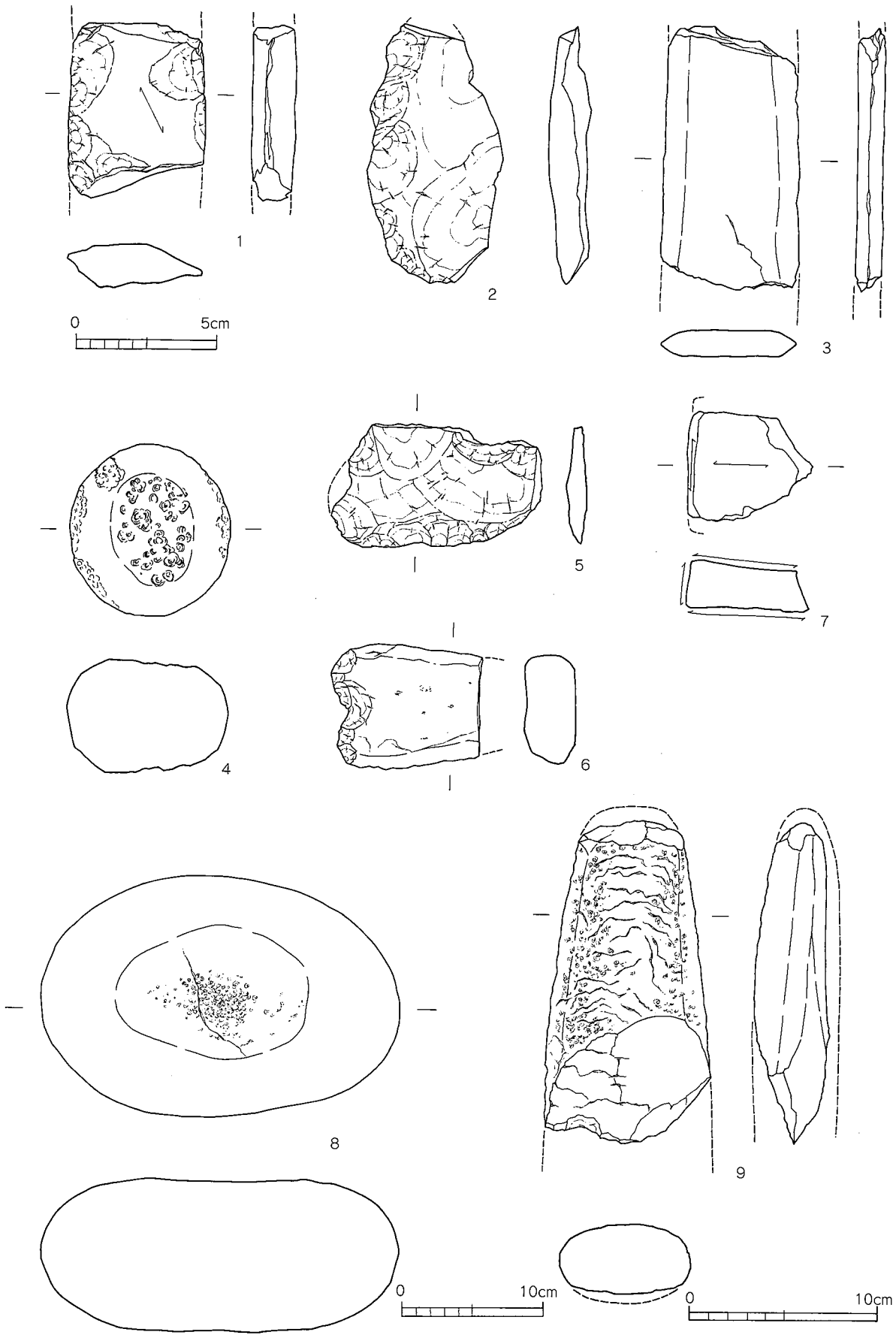
第66図 三雲・井原遺跡出土玉類、巡方実測図 (1/1、1/2)

図No.	整理	種類	出土遺構	時期	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
66-1	22	石鏃	井原2579番地 II・III層	縄文時代	黒曜石	1.90+	1.00+	0.10+	0.28+	
66-2	23	石鏃	井原2579番地 III区2層	縄文時代	黒曜石	2.80	1.50	0.50	1.75	
66-3	25	石鏃	井原2579番地 III区2層	縄文時代	安山岩	3.00+	2.00	0.50	1.73+	
66-4	13	石鏃	井原2575番地 6号住居床面	縄文時代	黒曜石	2.90	1.20	0.50	1.51	
66-5	19	石鏃	三雲441番地 5号住居下	縄文時代	黒曜石	3.40	1.90	0.30	1.26	
66-6	31	石鏃	三雲上寛 表探	縄文時代	黒曜石	2.20	1.00+	0.40		
66-7	32	石鏃	三雲上寛 9号住居 P-3	縄文時代	黒曜石	1.30	1.10+	0.30		
66-8	24	スクレイパー	井原2579 II区Vトレンチ	縄文時代	安山岩	2.50	3.70	1.00	8.44	
66-9	3	勾玉	井原2575 旧水路 2区東	弥生時代	滑石	1.95	1.30	0.60	2.06	孔径0.14-0.19cm
66-10	14	角鏃状石器	井原2575 旧水路 1区東	旧石器時代	安山岩	4.70	1.70	1.70	13.38	
66-11	1	紡錘車	井原2575 旧水路 4区西側	古墳時代?	滑石	4.90	-	0.70	26.13	孔径0.63-0.61cm
66-12	2	紡錘車?	井原2575 旧水路 1区東	古墳時代?	滑石	4.30	-	0.40	14.26	
66-13	20	紡錘車	三雲437 勾玉層	古墳時代?	滑石	4.60	-	0.40		
66-14	16	紡錘車	三雲441 5号住居	古墳時代	滑石	3.80	-	0.50		孔径0.53-0.50cm
66-15	28	紡錘車	三雲上寛 2号土坑	古墳時代	滑石	5.00	-	0.50		孔径0.60-0.57cm
66-16	30	紡錘車	三雲上寛 4号住居	古墳時代	滑石	3.70	-	0.60		
66-17	29	紡錘車	三雲441 11号住居	古墳時代	滑石	4.20	-	0.30		孔径0.45-0.43cm
66-18	15	有孔石鏃	三雲441 5号住居	古墳時代	粘板岩	5.10+	3.00	3.00	59.15+	
66-19	7	有孔石鏃	井原2575 P-30	?	滑石?	8.20+	3.90	3.50	168.29	上孔5.3-6.0cm 下孔5.7-5.5cm
66-20	17	有孔石鏃	三雲441	古墳時代?	粘板岩	6.50+	2.70+	2.50+	45.17+	
66-21	26	滑石スタンプ	井原2579 I区	中世	滑石	3.90	3.50	1.50	18.45	表面面取り痕明顯
67-1	5	石剣 (製作途中?)	井原2575 旧水路2 1区東	弥生時代?	砂岩質	6.20+	4.80	1.55	78.36+	西側調整、一部研磨
67-2	11	打製石斧	井原2575 旧水路2 1区東	縄文時代	玄武岩	8.70+	4.80	1.50	64.64+	
67-3	4	石剣	井原2575 旧水路2 1区埋土	弥生時代	砂岩質	9.30+	4.85	1.00	85.24+	表面風化
67-4	6	敲石	井原2575 旧水路2 1トレンチ	?	?	6.10	5.65	4.00	233.80	側面にも使用痕あり
67-5	27	-	井原2579 5号住居 38	縄文時代	玄武岩	6.50	11.10	1.10	90.50	
67-6	8	打欠石鏃	井原2575 旧水路2 4区 埋土	?	砂岩質	8.00+	6.60	2.70	216.64+	
67-7	21	敲石 (粗敲石)	三雲441 10号住居床面	古墳時代	砂岩質	6.50+	5.80	2.70	151.40+	
67-8	18	敲台石	三雲441 8号住居	古墳時代	花崗岩	25.10	17.20	11.00		上下両面平坦部に使用痕のこる
67-9	12	磨製石斧	井原2575 旧水路2 2区埋土	弥生時代		16.90+	8.70	3.75+	883.85+	表面に敲打痕のこる

表2 三雲・井原遺跡出土石器一覧表



第67図 三雲・井原遺跡出土石器実測図① (2/3、1/2)



第68図 三雲・井原遺跡出土石器実測図② (1/2、1/3、1/4)

Ⅲ. 終わりに

(1) 三雲・井原遺跡を中心とした古墳時代中・後期土師器編年

今回報告した三雲・井原遺跡の上覚地区、ヤリミゾ地区の調査の結果、井原鍵溝遺跡の所在確認は次年度以降に持ち越されたが、古墳時代の住居跡を中心とした遺構が検出された。住居跡の調査は、トレンチを設定して規模の確認程度に止まるものもあり、限定された内容であった。しかし、従来、手薄であった糸島地域の古墳時代中・後期の土師器編年を補う、貴重な一括資料も存在し、三雲・井原遺跡の集落変遷を概観できるものとする。また、当期は住居跡に造付け竈を導入し、須恵器も持ち込まれる時期で、炊飯様式の転換期に該当することから、土師器の変遷を追いながら、糸島地域における両者の導入、展開をたどることとする。

1. 糸島地域の古墳時代中・後期の土師器編年

福岡県における古墳時代全体を通じた土師器の編年は小田富士雄氏による有田遺跡のものが始まりである。1970年以降、弥生時代後期から古墳時代前期の土器変遷に人々の関心が集まり、多くの論文が執筆されるに至るが、古墳時代中期以降を含めた土師器編年は柳田康雄氏によるものがある(柳田1991)。柳田氏は対象地域を北部九州全域とし、論点の中心を古墳時代前期におくが、後期後半に至るまで概観したものとしては、ほぼ唯一のものであり、今日まで基準とされる編年案である。また、近年では、重藤輝行氏による浮羽郡の土師器編年(重藤2000)、対象地域を福岡県に広げ、器種・型式分類を示したものがある(重藤2002)。このように今日では、良好な資料の増加に伴い、各平野単位で編年案を提示していく段階に位置付けられる。

糸島地域では、三雲・井原遺跡のほかにも、福岡市西区女原遺跡(吉武編1990)、徳永遺跡(松村編1992)、飯氏遺跡(松村編1993他)、大原C遺跡(荒巻編1995)、志摩町御床松原遺跡(井上編1983)などで良好な資料が出土している。また、三雲・井原遺跡でもヤリミゾ地区のほかにも、井原上学地区(岡部編1989)、同塚廻地区(林編1992)、三雲南小路地区(岡部・牟田編2002)などで確認されている。

本稿での時期区分は古墳時代前期を3期に分類し、古墳時代中期、後期を6期に分類する。時期観は(重藤2000)に基づき、4期=中期初頭、5期=中期前葉、6期=中期中葉、7期=中期後葉~後期初頭、8期=後期前半、9期=後期後半に分ける。

4期(第69図1~27) 糸島地域で当期の資料は、古墳時代前期に引き続き比較的多く確認される。図示したものは井原塚廻2号住居跡、三雲堺6・7号住居跡、女原遺跡40号土坑である。

器種は中型壺、小型丸底壺、甕、高坏、鉢、椀からなり、鉢等の底部に孔を有する弥生系の甕も少数含まれる。壺は小型丸底壺が中心となり、前代まで多く見られる大型壺、中型壺は減少する。小型丸底壺は内外面ともにハケメを、胴部内面は粗いヘラケズリを施すように、全体的に調整が粗雑化する。甕は胴部中央に最大径を有し、口縁部は若干内湾しつつ、直線的に外傾する。口縁端部は上面に平坦面をもつ。外面は縦方向のハケメを施す。高坏は脚柱部と裾部の境が明瞭なものと不明瞭なものが存在するが、糸島地域では前者が多く占める。また、坏部は内湾し、ハケメを施す。なお、4期は1~3期同様、鳥足文土器などの半島系軟質土器や陶質土器が多く確認されている。

19は三雲堺6・7号住居跡出土の陶質土器であるが、華明洞7号墳出土の短頸壺と酷似していることから(柳田1985)、4期を4世紀末から5世紀初頭の古墳時代中期初頭に位置付ける。

5期(第69図28~39) 従来、糸島地域において資料が不足していた時期であるが、今回報告した三雲ヤリミゾ1号住居跡から良好な資料が出土している。そのほか、井原上学9号住居跡、井原塚廻8号住居跡を図示している。

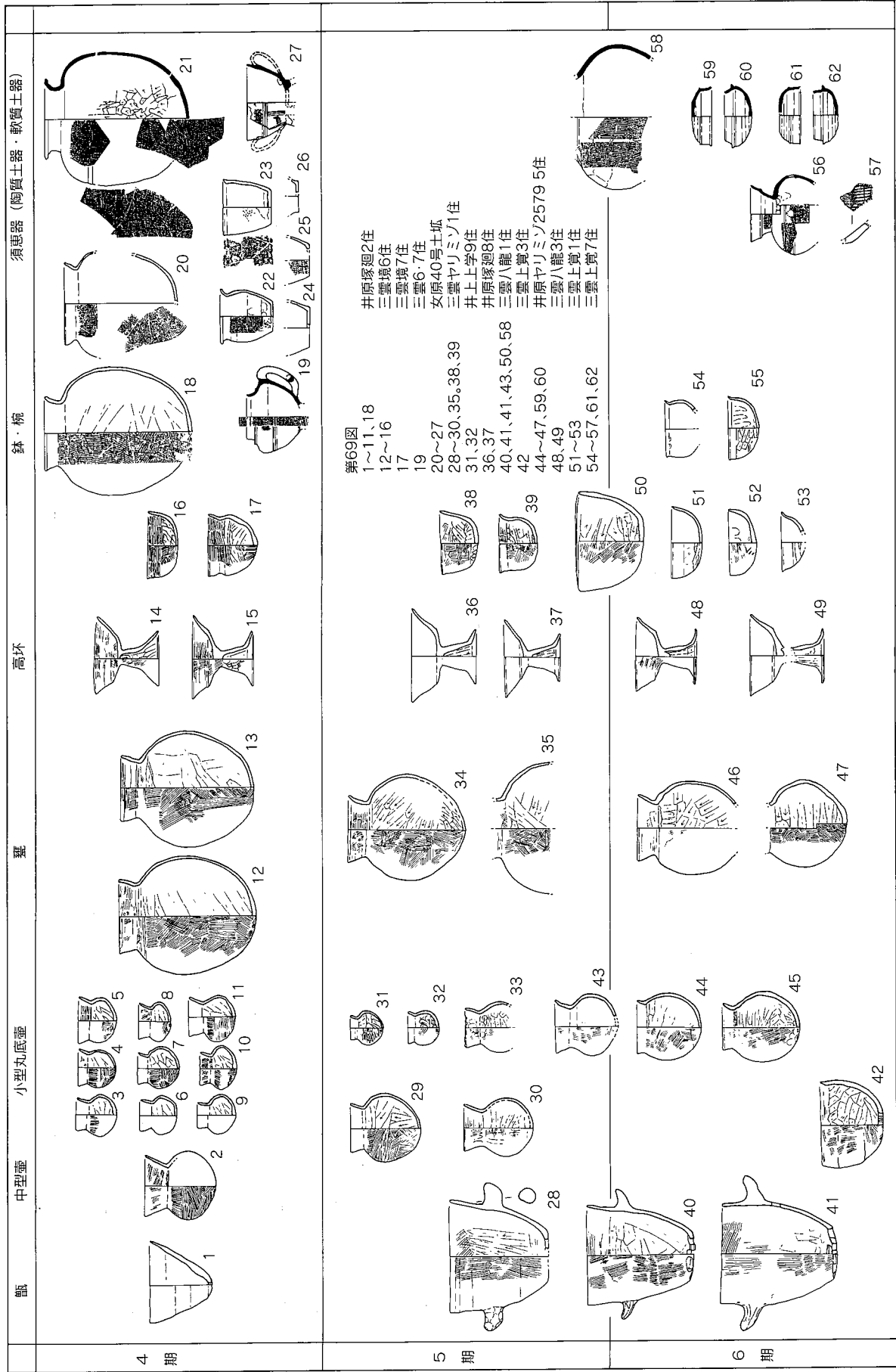
壺は小型丸底壺が主体を占め、中型壺が若干伴う。いずれも4期と比較し、器壁の厚みが増し、ハケメも粗雑化する。甕は口縁部が直線的、もしくは外反するようになり、端部に面をもたない。胴の最大径は中位に有する。高坏は坏部が外反し、脚台部内側に横ケズリを施し、4期を踏襲する。完形に復元できるものは少ないが出土個体数は多い。なお、5期から把手付甕が出土する。器高の割に口径が大きく、把手を横に伸ばす。多孔式の蒸気孔を持ち、底部は平底である。口縁部内面上部の調整に斜ハケメが認められることに特徴がある。なお、甕を出土した住居跡には竈が設けられていた。また、5期では現在のところ陶質土器や初期須恵器は未確認である。時期は古墳時代中期前半に位置付けられる。

6期(第69図40~62) 糸島地域の古墳時代中・後期において最も多く住居跡が確認される時期である。図化したものは、三雲八龍1・3号住居跡、同堺3号住居跡、同上覚1・3・7号住居跡、井原ヤリミゾ2579番地5号住居跡である。

壺は小型丸底壺がほとんど見られなくなり、中型壺が若干確認される程度である。胴の最大径は下方に移る。甕も同様である。いずれも外面に粗いハケメを、内面に強いヘラケズリを施す。高坏の坏部は4・5期の形状を引き継ぐが、脚台部の屈曲部がより下方に移る。椀は重藤氏も指摘するように法量に比較的まとまりのあるものが出現し、出土量も増加する。また、6期から把手付の大型甕の出土例が増加する。28と比較し、器高が伸び、把手を斜め上方に向けて付ける。いずれも多孔式の蒸気孔を有し、底部に丸みを持つようになる。口縁部内面上方には横ハケを施し、以後継続していく。また、6期の後半になると、井原ムクナシ12号住居跡出土甕のように底部が完全に丸底化ようになる。なお、把手付甕の普及期に当たる6期でも、弥生系の甕が若干出土する(42)。6期の住居跡からは土師器とともに古式須恵器が出土している。それらはTK216・208併行で、古墳時代中期中葉に位置付けられる。

7期(第70図63~87) 図化した資料は飯氏遺跡3次7・44号住居跡、同遺跡6次810・919号住居跡、井原ムクナシ4・7・20号住居跡から出土している。甕は胴部の最大径がその下方に位置するようになる。口縁部は外反し、肥厚する。高坏は良好な資料が少ないが、前代まで見られた内湾する坏部を持つものが減少する。脚柱部は明瞭に屈折するものが多い。椀は6期に引き続き、一つの住居跡から確認される量が多い。鉢は他地域では椀と似た形態になるが、糸島地域では反転する口縁を持つものが多い。把手付甕は7期以降、多孔式は無くなり、棧を持つものやつつぬけタイプのものが出土する。63は器高と比べ、口径が狭い。器壁は薄く仕上げ、口縁部が外に開く。外面には粗いハケメを施す。7期もTK23~MT15併行期の古式須恵器を伴う時期で、古墳時代中期後葉から後期初頭に位置付けられる。

8期(第70図88~91) 古墳時代後期前半で、TK10~MT85併行期であるが、糸島地区における資料は殆ど無い。図化したものは飯氏遺跡3次2号住居跡、徳永遺跡6号住居跡出土品であるがどちらかといえば9期に近い。甕は外面に格子タタキ、内面に当て具痕を残すが、胎土は土師質で



第69図 糸島古墳時代中・後期土器編年図 (1/8)

	甕	甗	高坏	鉢・碗	須臾器	
7 期			 	 	 	
8 期					 	
9 期					 	

63、82
64
75、77
65~67、85~87
68、69
70~74
78~81
82、84

飯氏3次44住
飯氏6次919
飯氏3次7住
井原ムクナシ4住
井原ムクナシ20住
井原ムクナシ7住
飯氏6次80住

德永6住
飯氏3次2住
塚田2号埴岡溝

第70図 糸島古墳時代中・後期土器編年図 (1/8)

ある。また、口縁端部に面を有し、椀タイプの底部形態をとる。

9期（第70図92～97）古墳時代後期後半で、TK43～TK209併行期である。糸島地区では井原丁の坪遺跡で住居跡を確認しているが、土器の残りが悪いため掲載していない。図化した資料は塚田2号墳周溝出土土器である。高坏の坏部は椀形を呈する。坏部の変化は8期から始まるものと考ええる。また、甕は頸部の括れが弱くなる。糸島地域の特徴の一つとして、須恵器質の甕を古墳に副葬することがある。92は外面にカキメと回転ヨコナデを、内面にヨコナデと当て具痕を残す。底部は椀タイプである。

2. 糸島地域における竈・須恵器の導入

①竈の導入・展開

北部九州では古墳時代前期から住居に造付け竈が導入される。竈付住居跡は西新町遺跡に集中し、分布の中心に位置づけられるが、集落の廃絶とともに消えていくことから、本格的な竈の普及期とは位置付けられない。しかし、「位置と環境」の項でも述べたように、近年、前原西町遺跡2次調査において古墳時代前期の竈付住居跡が検出されたことから、造付け竈導入期の様相は玄界灘の沿岸部諸地域まで視野を広げる必要が出てきた。

さて、古墳時代前期に糸島地域に導入された造付け竈であるが、三雲・井原遺跡の同時期の住居跡からは未確認であることを踏まえると、福岡平野における西新町遺跡同様、沿岸部の点的な分布に留まる。また、前原西町遺跡につづく竈付住居跡の出現まで半世紀以上の時間を要するため、住居跡に竈を備え付けることは一度断絶したと思われる。しかし、半島系遺物は、古墳時代前期の三雲・井原遺跡で多く出土することから、半島系文物を朝鮮半島から北部九州沿岸部へ持ち込む人と、沿岸部から拠点集落へ運ぶ人は異なる可能性がある。

三雲・井原遺跡の本格的な竈の導入・普及は古墳時代中期前半の5期から始まる。三雲ヤリミゾ1号住居跡では、把手付甕も出土することから、5期が竈を用いた炊飯様式そのものを受容した段階に位置付けられ、糸島地域における竈受容の画期といえる。

②須恵器の導入

今津啓子氏は糸島地域を布留式土器が出現する以前の時期（Ⅰ期）から布留式土器が出現し須恵器が登場するまでの時期（Ⅱ期）にかけて半島系軟質土器が多く出土し、朝鮮半島からの渡来人が居住した集落とする（今津1994）。Ⅱ期は本稿の4期に位置付けられ、女原遺跡40号土坑に代表されるように陶質土器も多く出土する。また、三雲八龍大溝出土の初期須恵器と思われる高坏が4期の甕の口縁に覆い被さる状態で出土している（牟田編2003）。5期の様相は不明ながらも、6期の初頭に位置する三雲八龍1号住居跡からも古式須恵器が出土していることから、その前段階から須恵器を持ち込むものと考えられ、5・6期に画期が設けられる。

なお、須恵器と土師器の形態変化の早さは異なり、須恵器の2～3型式が土師器の1型式に相当するように、土師器は緩やかに変化していく。

(2) 住居跡の変遷

三雲・井原遺跡では弥生時代中期から古墳時代後期に至るまで、大規模な集落を形成する。5・6期の集落が井原鑓溝遺跡推定地周辺でまとまって出ており、7期の集落の一部がより南に位置す

る井原ムクナシ遺跡で確認されている。また、8・9期の住居跡は極端に確認事例が少ないが、県道49号線より南に位置する井原丁の坪遺跡で検出されていることから、集落の中心部が北から南へ移動していることがわかる。従って、今後県道49号線以南の調査が進むにつれて8・9期の良好な一括資料が出土するものと思われる。

(3) 井原鎚溝遺跡の所在地について

最後になるが、井原鎚溝遺跡の所在地について述べておく、市教委では平成9年度より所在地確認調査を実施している。その際、大正年間に作成された地籍図を元に調査区を設定している。その地籍図に調査区を重ね合わせたものが付図である。これまでの調査により、古地図に記された用水路は、ほぼ想定どおりに検出しているが、目的とする井原鎚溝遺跡は確認できていない。かわりに本報告で述べた古墳時代中期の集落の様相が明らかとなったが、包含層より弥生時代中期から後期の土器が大量に出土していることは、付近にその時代の遺構の存在を伺わせる痕跡であると考えられる。今後とも発掘調査を継続する予定であるが、諸兄のご指導、ご鞭撻を請う次第である。

参考文献

- 荒牧宏行 編 (1995) 『大原C遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第433集
- 今津啓子 (1994) 「渡来人の土器」『ヤマト王権と交流の諸相』古代王権と交流5
- 宇野隆夫 (1999) 「古墳時代中・後期における食器・調理法の革新—律令制的食器様式の確立過程—」
『日本考古学』7
- 江野道和・江崎靖隆 編 (2004) 『前原西町遺跡Ⅱ』前原市文化財調査報告書第84集
- 岡部裕俊 編 (1987) 『井原遺跡群』前原町文化財調査報告書第25集
- 岡部裕俊・牟田華代子 編 (2002) 『三雲・井原遺跡Ⅱ』前原市文化財調査報告書第78集
- 小田和利 (1994) 「北部九州のカマドについて」『文化財学論集』
- 九州大学考古学研究室 編 (1968) 『有田遺跡』有田遺跡調査団
- 小池史哲 編 (1985) 『三雲遺跡Ⅳ』福岡県文化財調査報告書第65集
- 重藤輝行 (2000) 「仁右衛門畑遺跡を中心とした浮羽郡の古墳時代土師器編年」
『仁右衛門畑遺跡』浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第12集
- 重藤輝行 (2002) 「福岡県における古墳時代中期～後期の土師器」『古墳時代中・後期の土師器』
- 杉井 健 (1993) 「カマドの地域性とその背景」『考古学研究』40-1
- 杉井 健 (2002) 「古墳時代中期から後期の土師器研究の諸問題」『古墳時代中・後期の土師器』
- 杉井 健 (2003) 『朝鮮半島系渡来文化の伝播・普及と首長系譜変動の比較研究』
- 林 覚 編 (1992) 『井原塚廻遺跡』前原町文化財調査報告書第38集
- 吉武 学 編 (1990) 『大塚遺跡 女原遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第224集
- 松村道博 編 (1992) 『徳永遺跡 (Ⅱ)』福岡市埋蔵文化財調査報告書第306集
- 松村道博 編 (1993) 『飯氏遺跡群Ⅰ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第352集
- 松村道博 編 (1994) 『飯氏遺跡群Ⅱ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第390集
- 牟田華代子 編 (2003) 『三雲・井原遺跡Ⅲ』前原市文化財調査報告書第82集
- 柳田康雄 (1983) 「第4節 堺地区の調査 7. 小結」『三雲遺跡Ⅳ』福岡県文化財調査報告書題65集
- 柳田康雄 (1991) 「2 土師器の編年 2 九州」『古墳時代の研究』6

図No.	整理	器種名	出土遺構	時期	色調	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	胴径 (cm)	備考
三雲437番地										
8-1	87	壺 (土師器)	1号住居	古墳中期	橙~黒褐色	10.3	8.1	丸底	9.7	
8-2	85	壺 (土師器)	1号住居	古墳中期	橙	14.4	9.8	丸底	12.7	ほぼ完形、黒斑有
8-3	88	壺 (土師器)	1号住居	古墳中期	赤褐色~明赤褐色	—	11.7	—	16.4	
8-4	11	壺 (土師器)	1号住居	古墳中期	橙	—	7.4	—	9.3	
8-5	34	壺 (土師器)	1号住居	古墳中期	黄褐色	—	8.3	—	10.8	口縁3箇所打欠、黒斑有
8-6	36	甕 (弥生)	1号住居	弥生中期	赤褐色	13.2	11.2	5.4	13.3	厚減番
8-7	43	胡台蓋? (弥生)	1号住居	弥生後期	橙	—	—	7.8	—	
8-8	48	甕 (土師器)	1号住居	古墳中期	橙~にぶい橙	—	—	丸底	—	底部裏に輪状の黒斑
8-9	89	甕 (土師器)	1号住居	古墳中期	橙	—	—	—	27.9	カマド内出土
8-10	15	甕 (土師器)	1号住居	古墳中期	橙	—	18.6	—	—	口縁部の調整は丁寧、黒斑有
8-11	8	甕 (土師器)	1号住居	古墳中期	橙	24.2	14.2	丸底	22.6	完形、黒斑有
8-12	28	甕 (土師器)	1号住居	古墳中期	灰黄褐色	28.3	15.8	丸底	25.0	
9-1	27	鉢 (弥生)	1号住居	弥生中期	橙	8.2	13.5	4.7	—	完形
9-2	86	鉢 (土師器)	1号住居	古墳中期	にぶい橙	7.5	13.4	丸底	—	完形
9-3	5	鉢 (土師器)	1号住居	古墳中期	橙	7.9	12.5	丸底	—	黒斑有
9-4	21	椀 (土師器)	1号住居	古墳中期	橙	5.8	11.9	丸底	—	完形
9-5	54	椀 (土師器)	1号住居	古墳中期	橙	—	13.0	—	—	
9-6	30	椀 (土師器)	1号住居	古墳中期	赤褐色~赤	5.9	12.3	—	14.1	完形、黒斑有
9-7	3	椀 (土師器)	1号住居	古墳中期	明赤褐色	6.0	9.7	丸底	—	完形、黒斑有
9-8	20	鉢 (土師器)	1号住居	古墳中期	橙	12.3	15.8	丸底	—	完形、黒斑有、二次焼成
9-9	59	甕 (土師器)	1号住居	古墳中期	橙~にぶい褐色	20.2	24.0	10.0	31.5	多孔透
9-10	53	甕 (土師器)	1号住居	古墳中期	明黄褐色	—	—	—	—	把手のみ
9-11	26	高坏 (土師器)	1号住居	古墳中期	橙	—	17.0	—	—	
9-12	2	高坏 (土師器)	1号住居	古墳中期	明赤褐色~橙	—	18.6	—	—	
9-13	58	高坏 (土師器)	1号住居	古墳中期	橙	—	16.6	—	—	カマド内出土
9-14	38	高坏 (土師器)	1号住居	古墳中期	にぶい橙	—	18.0	—	—	
9-15	52	高坏 (土師器)	1号住居	古墳中期	橙	—	17.0	—	—	厚減番
9-16	50	高坏 (土師器)	1号住居	古墳中期	橙	—	16.8	—	—	口縁部打欠か
9-17	22	高坏 (土師器)	1号住居	古墳中期	橙	—	20.0	—	—	黒斑有
9-18	55	高坏 (土師器)	1号住居	古墳中期	橙	—	17.8	—	—	
9-19	39	高坏 (土師器)	1号住居	古墳中期	橙	—	16.5	—	—	
9-20	32	高坏 (土師器)	1号住居	古墳中期	にぶい黄褐色	—	20.0	—	—	
11-1	11	高坏 (土師器)	1号住居	古墳中期	橙	—	—	—	—	
11-2	24	高坏 (土師器)	1号住居	古墳中期	橙	—	—	—	—	
11-3	23	高坏 (土師器)	1号住居	古墳中期	にぶい橙	—	—	—	—	
11-4	10	高坏 (土師器)	1号住居	古墳中期	橙	—	—	10.9	—	
11-5	46	高坏 (土師器)	1号住居	古墳中期	橙	—	—	—	—	焼成前穿孔
11-6	19	高坏 (土師器)	1号住居	古墳中期	橙	—	—	12.0	—	
11-7	35	高坏 (土師器)	1号住居	古墳中期	黄褐色	—	—	12.8	—	
11-8	31	高坏 (土師器)	1号住居	古墳中期	明赤褐色	—	—	11.1	—	
11-9	62	甕 (弥生)	2号住居	弥生中期	橙	—	—	5.7	—	スズ付着?
11-10	60	甕 (弥生)	3号住居	弥生中期	灰褐色	—	21.9	—	22.9	
11-11	64	甕 (弥生)	3号住居	弥生中期	明赤褐色	—	—	7.5	—	スズ付着?
11-12	66	甕 (弥生)	3号住居	弥生中期	にぶい橙~橙	—	—	7.5	—	
11-13	61	鉢 (弥生)	3号住居	弥生中期	黄橙	10.6	21.6	7.0	—	
11-14	63	蓋台 (弥生)	3号住居	弥生中期	橙	—	—	10.0	—	外面丹塗
13-1	78	壺 (弥生)	B-4包名層上面	弥生中期	にぶい橙	—	37.6	—	—	外面丹塗
13-2	79	壺 (弥生)	II TR D-2	弥生後期	にぶい橙	—	—	—	—	外面丹塗
13-3	65	壺 (弥生)	C-2	弥生中期	にぶい橙	—	—	—	—	
13-4	69	壺 (弥生)	A-3包名層土器群	弥生中期	橙	—	—	5.2	—	外面丹塗
13-5	74	壺 (弥生)	BTR	弥生中期	橙	—	—	9.0	—	外面丹塗
13-6	73	壺 (弥生)	II TR①	弥生後期	明黄褐色	—	13.6	—	—	外面丹塗
13-7	68	壺 (弥生)	A-3包名層土器群	弥生後期	にぶい赤褐色	—	—	18.0	—	
13-8	84	壺 (弥生)	A-3包名層土器群	弥生後期	褐色	—	—	26.0	—	
13-9	75	壺 (弥生)	A-3 P-1	弥生後期	明赤褐色	—	—	15.7	—	
13-10	83	壺 (弥生)	A-3包名層土器群	弥生中期	橙	—	—	9.8	—	
13-11	71	高坏 (弥生)	B-4包名層上面	弥生	橙	—	—	—	—	
13-12	80	蓋台 (弥生)	II TR②	弥生中期	橙	—	—	—	—	
13-13	77	蓋台 (弥生)	包名層上面	弥生後期	橙	—	—	—	—	
13-14	67	蓋台 (弥生)	A-3包名層土器群	弥生後期	にぶい褐色	12.3	9.8	11.8	7.5	完形
13-15	72	蓋台 (弥生)	B-3包名層上面	弥生後期	橙	—	—	14.0	—	
井原2575番地										
15-1	5	甕 (弥生)	1号住居	弥生中期	橙	—	—	—	—	内面丹塗
15-2	6	甕 (弥生)	1号住居	弥生中期	にぶい黄橙	—	—	—	—	外面丹塗
15-3	7	甕 (弥生)	1号住居	弥生中期	にぶい褐色	—	—	—	—	
15-4	4	壺 (土師器)	1号住居	古墳前期	にぶい黄橙~灰黄褐	—	—	—	—	
15-5	2	鉢 (土師器)	1号住居	古墳中期	明褐色	5.7	12.0	丸底	12.4	
15-6	1	鉢 (土師器)	1号住居	古墳中期	橙~黒褐色	6.5	12.0	丸底	—	
15-7	3	椀 (土師器)	1号住居	古墳中期	橙	—	12.0	—	—	
15-8	12	壺 (弥生)	2号住居	弥生中期	にぶい黄橙	—	—	—	—	
15-9	10	壺 (弥生)	2号住居	弥生中期	橙	—	—	—	—	
15-10	9	甕 (弥生)	2号住居	弥生中期	にぶい橙	—	—	26.4	—	
15-11	11	甕 (土師器)	2号住居	古墳前期	橙	—	20.4	—	—	
15-12	8	高坏 (土師器)	2号住居	古墳中期	淡橙~橙	—	—	17.2	—	蓋縁破片か、外面丹塗
15-13	14	壺 (弥生)	3号住居	弥生中期	褐色	—	34.3	—	—	
15-14	13	壺 (弥生)	3号住居	弥生中期	橙	—	—	—	—	蓋縁破片か、外面丹塗
15-15	18	壺 (弥生)	3号住居	弥生中期	にぶい橙	—	—	—	—	外面丹塗
15-16	23	壺 (弥生)	3号住居	弥生中期	にぶい黄橙	—	—	—	—	
15-17	20	壺 (土師器)	3号住居	古墳前期	にぶい黄橙	—	9.1	—	—	
15-18	130	壺 (土師器)	3号住居	古墳前期	灰黄褐色	—	—	—	7.6	
15-19	129	壺 (土師器)	3号住居	古墳前期	にぶい黄褐色	—	11.3	—	—	
15-20	21	壺 (土師器)	3号住居	古墳前期	にぶい黄褐色	—	—	丸底	17.8	外面丹塗
15-21	16	甕 (弥生)	3号住居	弥生中期	褐色	—	32.6	—	—	
15-22	24	甕 (弥生)	3号住居	弥生中期	にぶい橙	—	—	—	—	外面丹塗
15-23	17	甕 (弥生)	3号住居	弥生中期	にぶい黄橙	—	—	—	—	
15-24	19	甕 (弥生)	3号住居	弥生中期	褐灰色~橙	—	—	8.4	—	
16-1	93	甕 (弥生)	3号住居	弥生中期	淡橙	—	24.4	—	—	
16-2	97	壺 (弥生)	3号住居	弥生中期	橙	—	—	6.4	—	外面丹塗
16-3	25	壺 (弥生)	3号住居	弥生中期	橙	—	—	—	—	黒斑有
16-4	22	壺 (土師器)	3号住居	古墳後期	にぶい褐色	27.7	15.7	丸底	25.2	黒斑有、確認必要
16-5	27	壺 (土師器)	3号住居	古墳後期	灰褐色	15.0	12.8	丸底	13.0	黒斑有
16-6	26	椀 (土師器)	3号住居	古墳後期	橙	8.0	14.0	丸底	15.8	
16-7	28	椀 (土師器)	3号住居	古墳後期	橙	6.0	14.2	丸底	15.0	

表3-1 三雲・井原遺跡出土土器一覽①

図No.	整理	器種名	出土遺構	時期	色調	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	胴径 (cm)	備考
16-8	29	大甕 (須恵器)	5・6号住居		灰色	—	48.0	—	—	
16-9	33	甕 (須恵器)	5・6号住居		灰色	—	24.4	—	—	
16-10	30	鉢 (土師器)	5・6号住居		橙	—	12.4	—	—	
16-11	32	椀 (土師器)	5・6号住居		橙	4.8	12.0	—	—	
16-12	31	椀 (土師器)	5・6号住居		にぶい黄褐色	4.4	10.7	—	—	
16-13	36	壺 (弥生)	7号住居	弥生中期	褐色	—	10.4	—	—	外面丹塗
16-14	37	甕 (弥生)	7号住居	弥生中期	橙	—	—	—	—	外面丹塗
16-15	35	壺 (弥生)	7号住居	弥生中期	橙	—	—	—	—	外面丹塗
16-16	34	壺 (弥生)	7号住居	弥生中期	にぶい黄褐色	—	24.8	—	—	外面丹塗
16-17	38	鉢 (土師器)	7号住居	古墳前期	橙	5.1	14.0	—	—	
16-18	45	壺 (弥生)	8号住居	弥生中期	淡橙	—	26.2	—	—	
16-19	41	壺 (弥生)	8号住居	弥生中期	橙	—	22.8	—	—	
16-20	43	壺 (弥生)	8号住居	弥生中期	橙	—	27.0	—	—	
16-21	47	壺 (弥生)	8号住居	弥生中期	橙	—	22.0	—	—	
16-22	40	壺 (弥生)	8号住居	弥生中期	橙～灰白	—	—	8.4	—	黒斑有
16-23	44	壺 (弥生)	8号住居	弥生中期	橙	—	—	7.5	—	
16-24	42	壺 (弥生)	8号住居	弥生中期	橙	—	—	8.3	—	黒斑有
17-1	39	甕 (土師器)	8号住居	古墳後期	淡橙	—	24.0	—	31.7	確認必要
17-2	61	壺 (弥生)	9号住居	弥生中期	橙	—	27.8	—	—	外面丹塗
17-3	52	壺 (弥生)	9号住居	弥生中期	橙	—	23.4	—	—	外面丹塗
17-4	66	壺 (弥生)	9号住居	弥生中期	橙	—	—	6.8	—	外面丹塗
17-5	60	壺 (弥生)	9号住居	弥生中期	浅黄色	—	24.8	—	—	黒斑有
17-6	49	壺 (弥生)	9号住居	弥生中期	橙	—	24.6	—	—	
17-7	56	壺 (弥生)	9号住居	弥生中期	橙～淡橙	—	28.0	—	—	
17-8	53	壺 (弥生)	9号住居	弥生中期	にぶい黄褐色	—	27.4	—	—	
17-9	58	壺 (弥生)	9号住居	弥生中期	にぶい褐色	—	29.4	—	—	
17-10	54	壺 (弥生)	9号住居	弥生中期	橙	—	27.0	—	—	
17-11	65	壺 (弥生)	9号住居	弥生中期	橙	—	26.4	—	—	
17-12	59	壺 (弥生)	9号住居	弥生中期	にぶい黄褐色	—	16.3	—	—	外面丹塗
17-13	55	壺 (弥生)	9号住居	弥生中期	にぶい橙	—	—	7.7	—	黒斑有
17-14	48	壺 (弥生)	9号住居	弥生中期	にぶい黄褐色	—	—	9.8	—	
17-15	57	壺 (弥生)	9号住居	弥生中期	橙	—	—	7.4	—	
17-16	51	壺 (弥生)	9号住居	弥生中期	明赤褐色	—	—	7.0	—	
17-17	50	甕台 (弥生)	9号住居	弥生中期	橙	—	—	12.1	—	椀部に丹が飛び散る
18-1	62	壺 (弥生)	10号住居	弥生中期	明赤褐色	—	26.2	—	—	
18-2	64	壺 (弥生)	10号住居	弥生後期	灰	—	11.7	—	—	
18-3	63	甕台 (弥生)	10号住居	弥生後期	橙	—	—	10.4	—	
18-4	69	壺 (弥生)	12号住居	弥生中期	橙	—	28.9	—	—	外面丹塗
18-5	73	壺 (弥生)	12号住居	弥生中期	橙	—	32.0	—	—	外面丹塗
18-6	68	壺 (土師器)	12号住居	古墳前期	浅黄色	—	—	—	—	
18-7	88	壺 (土師器)	12号住居	古墳前期	にぶい黄褐色～橙	—	20.2	—	30.3	
18-8	89	壺 (土師器)	12号住居	古墳前期	橙	—	—	九底	29.5	
18-9	67	壺 (土師器)	12号住居	古墳前期	橙	7.2	10.4	九底	7.4	
18-10	77	壺 (土師器)	12号住居	古墳中期	灰白	22.7	13.7	九底	21.4	
18-11	83	壺 (土師器)	12号住居	古墳中期	橙～黄灰	—	—	—	26.2	
19-1	79	壺 (弥生)	12号住居	弥生中期	浅黄色	—	23.5	—	—	
19-2	80	壺 (弥生)	12号住居	弥生中期	橙	—	23.4	—	—	
19-3	71	壺 (弥生)	12号住居	弥生中期	橙	—	21.2	—	—	
19-4	78	壺 (弥生)	12号住居	弥生中期	橙	—	26.6	—	—	
19-5	87	壺 (弥生)	12号住居	弥生中期	浅黄色～黄褐色	—	—	8.1	—	
19-6	86	壺 (弥生)	12号住居	弥生中期	浅黄色	—	—	9.2	—	黒斑有
19-7	85	壺 (弥生)	12号住居	弥生中期	橙	—	—	9.8	—	
19-8	70	高坏 (土師器)	12号住居	古墳中期	浅黄色	—	18.4	—	—	
19-9	84	高坏 (土師器)	12号住居	古墳中期	にぶい褐色	—	20.0	—	—	
19-10	72	甕台 (弥生)	12号住居	弥生後期	明赤褐色	—	—	10.7	—	
19-11	75	甕台 (弥生)	12号住居	弥生後期	橙	—	—	11.9	—	
20-1	119	甕台 (須恵器)	Ⅱ区掘乱		黄灰色	—	—	31.0	—	確認必要
20-2	110	壺 (弥生)	土器溜 土器10	弥生中期	灰黄褐色	—	—	—	—	外面丹塗
20-3	99	壺 (弥生)	土器溜 土器5	弥生中期	橙	—	—	7.2	—	外面丹塗
20-4	120	壺 (弥生)	土器溜 土器19	弥生中期	橙	—	17.8	—	—	内外面丹塗
20-5	105	壺 (土師器)	土器溜 土器9	古墳前期	橙	7.7	9.3～10.9	九底	9.0	完形、口縁部黒色顔料塗布
20-6	109	壺 (弥生)	土器溜 土器10	弥生中期	灰黄	—	26.0	—	—	口縁部上面に丹が付着
20-7	112	壺 (弥生)	土器溜 土器12	弥生中期	にぶい褐色	—	22.5	8.0	—	
20-8	114	壺 (弥生)	土器溜 土器13	弥生後期	にぶい橙	12.5	13.1	5.1	11.8	完形、口縁部一部打欠き
20-9	101	壺 (弥生)	土器溜 土器7	弥生中期	橙	—	30.4	—	—	内面丹塗
20-10	113	壺 (弥生)	土器溜 土器13	弥生中期	にぶい黄褐色	—	20.5	—	—	
20-11	115	壺 (弥生)	土器溜 土器14	弥生中期	にぶい橙	—	31.0	—	—	内面丹塗
20-12	107	壺 (弥生)	土器溜 土器9	弥生中期	浅黄色	—	24.0	—	—	
20-13	106	壺 (弥生)	土器溜 土器9	弥生中期	にぶい黄褐色	—	25.7	—	—	
20-14	98	壺 (弥生)	土器溜 土器5	弥生中期	橙	—	24.0	—	—	
21-1	94	壺 (弥生)	土器溜 土器4	弥生中期	にぶい橙	—	27.3	—	—	
21-2	95	壺 (弥生)	土器溜 土器4	弥生中期	灰黄褐色	—	22.8	—	—	
21-3	108	壺 (弥生)	土器溜 土器9	弥生中期	にぶい橙	—	21.7	—	—	
21-4	128	壺 (弥生)	1号住居跡上面?	弥生中期	にぶい橙	—	14.0	—	—	外面丹塗
21-5	96	壺 (弥生)	土器溜 土器4	弥生中期	浅黄色	—	—	—	—	
21-6	127	壺 (弥生)	1号住居跡上面?	弥生中期	にぶい黄褐色	—	—	—	—	
21-7	119	壺 (弥生)	土器溜 土器18	弥生後期	灰黄褐色	—	20.8	—	—	
21-8	118	壺 (弥生)	土器溜 土器16	弥生後期	灰褐色	—	14.6	—	—	
21-9	125	壺 (土師器)	土器溜 土器22	古墳中期	にぶい赤褐色	—	15.4	—	—	
21-10	90	壺 (弥生)	土器溜 土器1	弥生中期	橙～灰褐色	—	—	6.6	—	
21-11	102	壺 (弥生)	土器溜 土器7	弥生中期	橙	—	—	7.5	—	
21-12	116	壺 (弥生)	土器溜 土器15	弥生中期	にぶい橙	—	—	8.0	—	
21-13	104	壺 (弥生)	土器溜 土器8	弥生中期	黄褐色	—	—	7.0	—	内外面丹塗
21-14	100	壺 (弥生)	土器溜 土器6	弥生中期	橙	—	—	7.9	—	
21-15	103	壺 (弥生)	土器溜 土器7	弥生中期	橙	—	—	9.2	—	
21-16	91	高坏 (弥生)	土器溜 土器2	弥生後期	橙	—	—	17.0	—	
21-17	92	高坏 (土師器)	土器溜 土器3	古墳中期	橙	—	—	—	—	
21-18	111	高坏 (土師器)	土器溜 土器11	古墳前期	浅黄色	—	—	—	—	
21-19	122	椀 (土師器)	土器溜 土器21	古墳中期	にぶい橙～黒褐色	6.6	13.6	九底	—	
21-20	121	椀 (土師器)	土器溜 土器20	古墳中期	橙	6.0	12.8	九底	—	
21-21	124	椀 (土師器)	土器溜 土器21	古墳中期	褐色	5.4	16.0	九底	—	
井原2579番地										
25		壺? (近世)	近世?	江戸	—	—	—	—	—	
26-1	9	壺 (須恵器)	1号住居	古墳中期	灰	—	15.0	—	—	

表3-2 三雲・井原遺跡出土土器一覽②

図No.	整理	器種名	出土遺構	時期	色調	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	胴径 (cm)	備考
26-2	8	壺 (弥生)	1号住居	弥生後期	紺褐色	—	11.8	—	—	外面丹塗
26-3	2	壺 (土師器)	1号住居	古墳中期	にぶい橙	14.1	9.6	—	15.8	黒斑有
26-4	4	壺 (土師器)	1号住居	古墳中期	橙	—	15.1	—	—	
26-5	10	壺 (土師器)	1号住居	古墳中期	にぶい黄褐色~灰黄褐色	—	17.0	—	25.8	
26-6	1	壺 (土師器)	1号住居	古墳中期	にぶい褐色	33.0	20.0	丸底	27.0	
26-7	5	椀 (土師器)	1号住居	古墳中期	褐色	6.4	15.3	丸底	15.9	
26-8	6	椀 (土師器)	1号住居	古墳中期	橙	6.5	14.7	丸底	—	口縁部に黒色顔料
26-9	7	椀 (土師器)	1号住居	古墳中期	にぶい橙	6.2	14.0	丸底	—	
26-10	3	椀 (土師器)	1号住居	古墳中期	橙	7.0	14.0	丸底	—	カマド内出土
27-1	15	長頸壺(須恵器)	2号住居	古墳中期	灰色	—	—	—	19.0	
27-2	20	壺 (土師器)	2号住居	古墳中期	橙	—	—	—	14.0	
27-3	21	壺 (土師器)	2号住居	古墳中期	にぶい黄褐色	—	17.1	—	26.1	
27-4	24	壺 (土師器)	2号住居	古墳中期	褐灰色	—	12.0	—	13.5	
27-5	22	壺 (土師器)	2号住居	古墳中期	橙	—	15.8	—	—	黒斑有
27-6	26	壺 (土師器)	2号住居	古墳中期	橙	—	12.8	—	—	
27-7	19	壺? (土師器)	2号住居	古墳中期	にぶい橙~褐	—	—	8.0	—	
27-8	18	壺 (土師器)	2号住居	古墳中期	灰黄褐色~黄灰	—	—	—	—	壺の底部に焼成前の穿孔
27-9	25	鉢 (土師器)	2号住居	古墳中期	橙	—	11.4	—	11.5	
27-10	14	鉢 (土師器)	2号住居	古墳中期	橙	—	10.2	丸底	10.4	
27-11	16	鉢 (土師器)	2号住居	古墳中期	橙	7.3	12.1	丸底	12.7	
27-12	11	鉢 (土師器)	2号住居	古墳中期	にぶい橙	6.1	12.2	丸底	12.6	
27-13	17	鉢 (土師器)	2号住居	古墳中期	橙	—	—	—	—	黒斑有
27-14	12	椀 (土師器)	2号住居	古墳中期	橙	5.6	14.0	丸底	—	
27-15	13	椀 (土師器)	2号住居	古墳中期	にぶい黄褐色	—	13.0	—	—	
27-16	23	支脚状土製品	2号住居	古墳中期	橙	—	—	2.7	—	
27-17	27	壺 (土師器)	3号住居	古墳中期	橙	—	7.5	—	—	
28-1	79	坏蓋(須恵器)	5号住居	古墳中期	灰黄色	4.0	12.3	—	—	内面に当て具痕、完形
28-2	80	坏身(須恵器)	5号住居	古墳中期	青灰色	5.6	10.4	—	—	内面に当て具痕、完形
28-3	85	壺 (弥生)	5号住居	弥生中期	橙~にぶい橙	—	25.2	—	—	
28-4	53	壺 (弥生)	5号住居	弥生中期	浅黄色	—	—	9.5	—	
28-5	46	壺 (弥生)	5号住居	弥生中期	にぶい赤褐色~灰白	—	—	8.9	—	
28-6	51	壺 (土師器)	5号住居	古墳中期	灰褐色~橙	—	10.1	—	13.5	黒斑有
28-7	48	壺 (土師器)	5号住居	古墳中期	にぶい黄褐色~暗褐色	—	9.8	—	12.2	
28-8	50	壺 (土師器)	5号住居	古墳中期	橙	13.0	9.0	丸底	12.6	底部内面にヘラズリかす残る
28-9	28	壺 (土師器)	5号住居	古墳中期	橙	—	13.2	丸底	—	
28-10	30	壺 (土師器)	5号住居	古墳中期	にぶい褐色	—	13.8	—	—	
28-11	49	壺 (土師器)	5号住居	古墳中期	橙	7.8	10.5	丸底	12.4	ほぼ完形
28-12	44	壺 (土師器)	5号住居	古墳中期	にぶい赤褐色~灰黄	15.9	9.7	丸底	15.0	黒斑有
28-13	33	壺 (土師器)	5号住居	古墳中期	明赤褐色~褐灰色	—	13.4	—	—	
28-14	59	壺 (土師器)	5号住居	古墳中期	橙	—	14.2	—	22.3	
28-15	43	壺 (土師器)	5号住居	古墳中期	橙	12.3	19.0	8.5	—	鉢の底部に穿孔を施す
28-16	45	壺 (土師器)	5号住居	古墳中期	明赤褐色	—	—	—	—	把手のみ
28-17	37	壺 (土師器)	5号住居	古墳中期	橙	—	—	—	—	把手のみ
28-18	52	壺 (土師器)	5号住居	古墳中期	橙	—	—	—	—	把手のみ
29-1	78	鉢 (土師器)	5号住居	古墳中期	橙~にぶい橙	6.7~7.8	9.8	丸底	11.8	完形
29-2	31	鉢 (土師器)	5号住居	古墳中期	にぶい赤褐色	7.3~8.4	11.3	丸底	12.0	
29-3	49	鉢 (土師器)	5号住居	古墳中期	橙	7.8	10.5	丸底	12.4	完形
29-4	56	鉢 (土師器)	5号住居	古墳中期	橙	—	10.1	—	11.6	
29-5	34	鉢 (土師器)	5号住居	古墳中期	橙	—	12.0	—	—	
29-6	29	椀 (土師器)	5号住居	古墳中期	橙	6.3	14.0	丸底	—	黒斑有
29-7	38	鉢 (土師器)	5号住居	古墳中期	橙~黄褐色	—	14.8	—	—	
29-8	41	椀 (土師器)	5号住居	古墳中期	橙	5.7	14.2	丸底	—	
29-9	42	椀 (土師器)	5号住居	古墳中期	橙	—	12.3	—	12.6	
29-10	54	鉢 (土師器)	5号住居	古墳中期	橙~にぶい橙	—	12.5	—	—	
29-11	76	椀 (土師器)	5号住居	古墳中期	橙~黄褐色	5.5	11.0	丸底	11.6	完形、黒斑有
29-12	39b	椀 (土師器)	5号住居	古墳中期	明赤褐色	—	12.4	—	12.6	
29-13	35	椀 (土師器)	5号住居	古墳中期	浅黄色	5.4	16.0	丸底	16.3	
29-14	77	鉢 (土師器)	5号住居	古墳中期	橙	5.2	15.4	丸底	—	完形
29-15	40	椀 (土師器)	5号住居	古墳中期	明赤褐色	—	14.0	—	—	
29-16	39a	椀 (土師器)	5号住居	古墳中期	橙	—	14.0	—	—	
29-17	36	ミニチュア土器	5号住居	古墳中期	にぶい黄褐色	1.4	4.2	丸底	—	完形、手握ね、柄もしくは皿か
29-18	66	壺 (弥生)	6号住居	弥生中期	明赤褐色	—	—	7.6	—	
29-19	67	壺 (土師器)	6号住居	古墳中期	にぶい橙	—	11.0	—	—	
29-20	63	壺 (土師器)	6号住居	古墳中期	淡橙~黄灰	—	—	3.0	—	
29-21	61	壺 (土師器)	6号住居	古墳中期	浅黄色	11.3	12.8	丸底	15.2	黒斑有
29-22	65	鉢 (土師器)	6号住居	古墳中期	橙	—	13.0	—	11.4	
29-23	69	鉢 (土師器)	6号住居	古墳中期	橙	—	14.6	—	—	
29-24	60	椀 (土師器)	6号住居	古墳中期	橙	6.0	14.4	—	14.8	
29-25	64	椀 (土師器)	6号住居	古墳中期	橙	6.5	16.1	丸底	16.8	
29-26	62	椀 (土師器)	6号住居	古墳中期	橙	5.4	12.0	丸底	—	
28-27	71	壺 (土師器)	6号住居	古墳中期	にぶい褐色	—	—	—	—	把手のみ
三雲441番地										
35-1	2	椀 (土師器)	1号住居	古墳中期	橙	3.4	8.0	—	8.9	
35-2	22	椀 (土師器)	1号住居	古墳中期	橙~灰黄褐色	—	12.1	—	13.4	
35-3	10	鉢 (土師器)	1号住居	古墳中期	橙	—	17.0	—	—	
35-4	5	椀 (土師器)	1号住居	古墳中期	橙~にぶい黄褐色	6.2	15.2	丸底	—	
35-5	12	椀 (土師器)	1号住居	古墳中期	にぶい褐色	—	16.0	—	—	
35-6	1	椀 (土師器)	1号住居	古墳中期	橙	5.6	13.7	丸底	14.0	
35-7	23	鉢 (土師器)	1号住居	古墳中期	橙	—	13.4	—	—	
35-8	84	鉢 (土師器)	1号住居	古墳中期	橙	—	12.5	—	—	
35-9	80	椀 (土師器)	1号住居	古墳中期	明赤褐色~黒褐色	5.9	15.1	丸底	—	カマド内出土
35-10	83	椀 (土師器)	1号住居	古墳中期	にぶい黄褐色~褐灰色	—	15.3	—	—	
35-11	79	椀 (土師器)	1号住居	古墳中期	灰黄褐色	—	—	—	—	カマド内出土
35-12	6	支脚 (土師器)	1号住居	古墳中期	灰黄褐色~にぶい褐色	—	—	丸底	—	カマド内出土
35-13	81	壺 (土師器)	1号住居	古墳中期	橙	—	—	—	—	
35-14	18	壺 (土師器)	1号住居	古墳中期	にぶい橙~橙	—	12.4	—	18.8	
35-15	17	壺 (土師器)	1号住居	古墳中期	橙	—	16.0	—	—	
35-16	21	大壺 (須恵器)	1号住居	古墳中期	オリーブ黒	—	—	—	—	部分的に自然緑
36-1	4	坏身 (須恵器)	2号住居	古墳中期	青灰色	5.0	10.6	3.0	—	底部にヘラ記号
36-2	15	鉢 (土師器)	3号住居	古墳中期	橙	—	12.0	—	—	
36-3	16	鉢 (土師器)	3号住居	古墳中期	橙	—	12.3	—	—	
36-4	3	椀 (土師器)	3号住居	古墳中期	橙~灰白色	5.9	13.6	丸底	13.8	
36-5	14	鉢 (土師器)	3号住居	古墳中期	橙	—	13.8	—	—	
36-6	11	椀 (土師器)	3号住居	古墳中期	橙	—	16.0	—	—	

表3-3 三雲・井原遺跡出土土器一覧③

図No.	整理	器種名	出土遺構	時期	色調	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	胴径 (cm)	備考
36-7	13	甌 (土師器)	3号住居	古墳中期	にぶい橙～にぶい褐色	12.8	18.1	—	19.0	単孔、把手無、ぼぼ球形
36-8	8	壺 (土師器)	3号住居	古墳中期	にぶい褐色	13.8	—	—	—	—
36-9	25	壺 (土師器)	5号住居	古墳前期	黄橙～黄灰	—	13.3	—	—	—
36-10	24	壺 (土師器)	5号住居	古墳前期	にぶい橙	—	17.0	—	—	—
36-11	32	壺 (土師器)	5号住居	古墳前期	にぶい橙～にぶい黄橙	—	18.0	—	—	—
36-12	30	壺 (土師器)	5号住居	古墳前期	浅黄色	27.8	14.5	丸底	26.9	—
36-13	31	壺 (土師器)	5号住居	古墳前期	にぶい黄橙～黒褐色	—	14.0	—	19.9	—
36-14	26	壺 (土師器)	5号住居	古墳前期	橙～灰褐色	—	—	丸底	18.5	—
36-15	9	高坏 (土師器)	5号住居	古墳前期	橙	—	—	11.0	—	—
37-1	33	坏蓋 (須恵器)	7号住居	古墳中期	灰色	4.3	12.0	—	—	—
37-2	34	坏身 (須恵器)	7号住居	古墳中期	両灰色	5.1	10.3	2.0	—	底部に火押痕
37-3	54	ハソウ (須恵器)	7号住居	古墳中期	灰色	—	12.0	—	17.0	自然釉有
37-4	58	壺 (須恵器)	7号住居	古墳中期	暗灰色	—	24.5	—	—	—
37-5	39	壺 (土師器)	7号住居	古墳中期	橙	—	14.5	—	—	—
37-6	65	瓶 (土師器)	7号住居	古墳中期	橙	—	13.8	—	—	—
37-7	47	鉢 (土師器)	7号住居	古墳中期	橙	—	11.8	—	—	—
37-8	41	瓶 (土師器)	7号住居	古墳中期	橙	—	14.0	—	—	—
37-9	35	鉢 (土師器)	7号住居	古墳中期	橙	6.2	13.2	丸底	—	—
37-10	36	瓶 (土師器)	7号住居	古墳中期	橙～浅黄色	6.1	13.3	丸底	13.8	—
37-11	38	瓶 (土師器)	7号住居	古墳中期	黄灰黄色	—	13.5	—	—	—
37-12	44	鉢 (土師器)	7号住居	古墳中期	橙	—	14.0	—	—	黒斑有
37-13	42	瓶 (土師器)	7号住居	古墳中期	にぶい褐色～褐色	5.5	14.0	丸底	14.2	—
37-14	46	壺 (土師器)	7号住居	古墳中期	にぶい橙	—	—	—	—	—
37-15	52	壺 (土師器)	7号住居	古墳中期	暗黄褐色	—	—	—	—	底部のみ、多孔
37-16	48	高坏 (土師器)	7号住居	古墳中期	橙	—	—	—	—	把手のみ
37-17	45	支脚 (土師器)	7号住居	古墳中期	橙	—	—	—	—	—
37-18	37	台付瓶 (土師器)	7号住居	古墳中期	紫褐色	—	—	10.4	—	—
37-19	67	坏身 (須恵器)	6号住居	古墳後期	青灰色	5.1	11.0	2.5	—	へう記号
37-20	72	鉢 (土師器)	6号住居	古墳後期	橙	6.5	13.5	丸底	13.8	—
37-21	62	高坏 (土師器)	6号住居	古墳後期	にぶい橙	—	15.0	—	—	—
37-22	68	鉢 (土師器)	6号住居	古墳後期	橙～にぶい黄橙	—	13.3	—	—	—
37-23	73	鉢 (土師器)	6号住居	古墳後期	橙～褐色	—	13.8	—	13.9	—
37-24	61	壺 (土師器)	6号住居	古墳後期	浅黄色～黄灰	—	13.6	—	—	—
37-25	59	ミニチュア土器	6号住居	古墳後期	橙	2.6	3.6	1.6	—	椀形
37-26	60	ミニチュア土器	6号住居	古墳後期	橙	2.4～3.2	4.0～4.6	2.1	—	椀形
37-27	70	鉢 (土師器)	6号住居	古墳後期	橙	—	11.9	—	11.8	—
37-28	63	壺 (土師器)	6号住居	古墳後期	灰黄褐～明黄褐～褐色	—	15.7	—	21.8	—
37-29	74	鳥足文土器	調査区北包舎層	古墳	黒 (黒斑部分か)	—	—	—	—	—
37-30	75	鳥足文土器	6号住居	古墳	にぶい褐色	—	—	—	—	—
38-1	78	壺 (弥生)	11号住居	弥生中期	浅黄色	37.3	26.1	8.8	28.7	黒斑有
38-2	87	高坏 (弥生)	12号住居	弥生中期	灰褐色	—	30.0	—	—	—
38-3	88	壺 (弥生)	12号住居	弥生中期	にぶい赤褐色	—	18.3	—	15.7	—
38-4	85	壺 (弥生)	12号住居	弥生中期	橙	—	17.4	—	17.4	—
38-5	77	壺 (弥生)	5号住居	弥生後期	にぶい橙	—	14.7	—	—	—
38-6	49	壺 (弥生)	7号住居	弥生中期	にぶい黄褐色	—	7.0	—	—	—
38-7	86	壺 (弥生)	12号住居	弥生中期	橙～明褐色	—	—	9.8	—	—
38-8	64	壺 (弥生)	8号住居	弥生中期	橙	—	—	—	—	—
38-9	51	壺 (弥生)	7号住居	弥生中期	にぶい黄褐色	—	—	11.0	—	—
38-10	66	壺 (弥生)	8号住居	弥生中期	にぶい黄褐～褐色	—	—	9.0	—	—
38-11	40	壺 (弥生)	7号住居	弥生中期	橙	—	—	8.5	—	—
38-12	53	壺 (弥生)	7号住居	弥生中期	にぶい橙	—	—	—	—	—
38-13	19	壺 (弥生)	1号住居	弥生後期	橙	—	—	—	—	壺破片か
38-14	20	壺 (弥生)	1号住居	弥生後期	橙	—	—	—	—	壺破片か
38-15	7	高坏 (弥生)	3号住居	弥生中期	橙	—	—	—	—	—
38-16	28	深鉢 (縄文)	5号住居	弥生中期	にぶい黄橙	—	—	—	—	—
三雲上寛										
41-1	12	壺 (弥生)	1号住居	弥生中期	紫褐色	—	—	—	—	—
41-2	15	壺 (弥生)	1号住居	弥生後期	淡黄褐色	—	—	—	—	—
41-3	2	壺 (土師器)	1号住居	古墳前期	淡黄褐色～褐色	—	16.3	—	30.2	—
41-4	5	壺 (土師器)	1号住居	古墳前期	赤褐色	—	—	3.0	10.6	—
41-5	6	壺 (土師器)	1号住居	古墳前期	濁茶褐色	8.2	9.8	2.8	11.0	—
41-6	23	壺 (土師器)	1号住居	古墳前期	—	—	—	—	—	—
41-7	21	壺 (土師器)	1号住居	古墳前期	淡黄褐色	—	—	—	—	—
41-8	10	壺 (土師器)	1号住居	古墳前期	黒灰色	—	—	—	—	—
41-9	14	壺 (土師器)	1号住居	古墳前期	淡黄褐色	—	—	—	—	—
41-10	1	壺 (土師器)	1号住居	古墳前期	明褐色	—	25.6	—	30.6	—
41-11	9	壺 (土師器)	1号住居	古墳前期	淡黄褐色	—	22.6	—	—	—
41-12	13	壺 (土師器)	1号住居	古墳前期	淡黄褐色	—	21.0	—	—	—
41-13	24	壺 (土師器)	1号住居	古墳前期	淡黄褐色	—	15.2	—	—	—
41-14	31	壺 (土師器)	1号住居	古墳前期	淡黄褐色	—	17.3	—	—	—
41-15	3	壺 (土師器)	1号住居	古墳前期	淡黄褐色	—	—	—	22.4	—
41-16	8	壺 (土師器)	1号住居	古墳前期	淡黄褐色	—	17.6	—	—	—
41-17	17	壺 (土師器)	1号住居	古墳前期	淡黄褐色	—	—	—	—	—
41-18	16	壺 (土師器)	1号住居	古墳前期	淡黄褐色	—	—	—	—	—
42-1	18	壺 (土師器)	1号住居	古墳前期	淡黄褐色	—	—	—	—	—
42-2	11	鉢 (土師器)	1号住居	古墳前期	—	16.4	—	—	15.9	—
42-3	4	鉢 (土師器)	1号住居	古墳前期	淡黄褐色	5.6	14.6	丸底	—	—
42-4	7	鉢 (土師器)	1号住居	古墳前期	黄褐色	5.8	14.4	丸底	—	—
42-5	30	鉢 (土師器)	1号住居	古墳前期	赤褐色	5.8	15.4	—	—	—
42-6	35	鉢 (土師器)	1号住居	古墳前期	赤褐色～暗褐色	6.5	18.3	—	—	—
42-7	28	鉢 (土師器)	1号住居	古墳前期	淡褐色	4.8	12.5	丸底	—	—
42-8	27	高坏 (土師器)	1号住居	古墳前期	淡褐色～淡赤褐色	—	30.8	—	—	—
42-9	22	高坏 (弥生)	1号住居	弥生中期	淡黄褐色	—	—	—	—	—
42-10	34	高坏 (土師器)	1号住居	古墳前期	淡褐色	—	14.0	—	—	—
42-11	19	高坏 (土師器)	1号住居	古墳前期	淡赤褐色	—	—	11.2	—	—
42-12	33	高坏 (土師器)	1号住居	古墳前期	暗褐色～黒褐色	—	21.0	—	—	—
42-13	26	高坏 (土師器)	1号住居	古墳前期	淡黄褐色～褐色	—	18.5	—	—	—
42-14	32	鉢 (土師器)	1号住居	古墳前期	黄褐色	16.4	23.6	9.0	—	注口付
42-15	20	鉢台 (土師器)	1号住居	古墳前期	淡黄褐色	—	12.9	—	—	—
42-16	25	鉢台 (土師器)	1号住居	古墳前期	淡黄褐色	—	—	14.1	—	—
42-17	36	壺 (弥生)	2号住居	弥生中期	淡暗褐色	—	—	—	—	—
42-18	37	鉢 (土師器)	2号住居	古墳前期	淡暗褐色～淡褐色	—	13.3	—	—	—
42-19	38	壺 (土師器)	3号住居	古墳前期	淡褐色	—	—	—	24.4	—
42-20	39	壺 (土師器)	3号住居	古墳前期	明橙	—	—	—	—	—

表3-4 三雲・井原遺跡出土土器一覽④

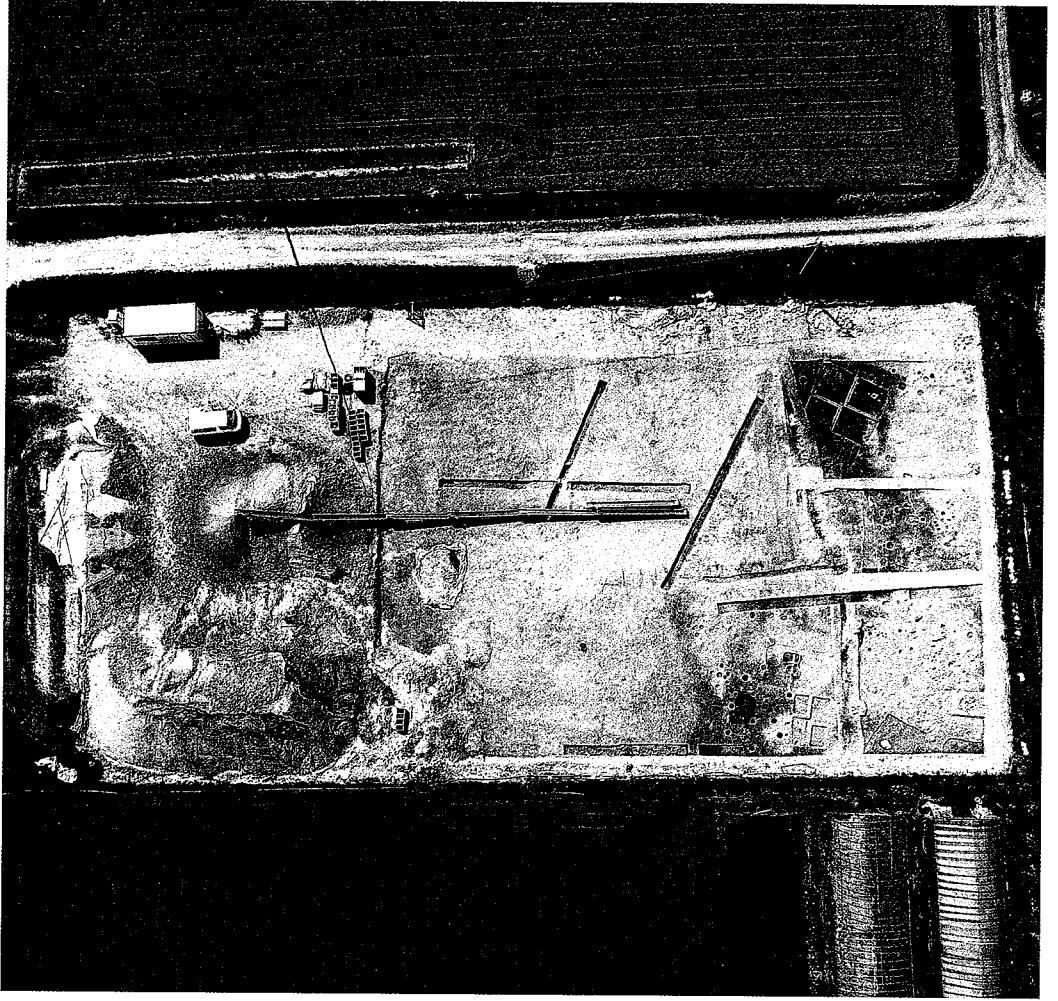
図No.	整理	器種名	出土遺構	時期	色調	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	胴径 (cm)	備考
45-1	40	甕 (弥生)	4号住居	弥生後期	暗黄褐色	—	15.6	—	—	
45-2	42	甕 (弥生)	4号住居	弥生後期	赤褐色	—	—	—	—	内外面丹塗
45-3	41	甕 (弥生)	4号住居	弥生後期	褐色～暗褐色	—	—	—	—	凸レンズ底
45-4	58	壺 (弥生)	7号と9号の間	弥生中期	淡褐色	—	—	—	—	外面丹塗
45-5	57	鉢 (弥生)	7号と9号の間	弥生中期	淡茶灰色～黒灰色	—	—	—	—	
45-6	59	甕 (弥生)	9号と10号の間?	弥生後期	淡こげ茶色	—	—	—	—	
45-7	48	甕 (弥生)	8号住居	弥生後期	淡明褐色	—	—	6.4	—	
45-8	53	甕 (弥生)	8号住居	弥生後期	淡褐色	—	17.8	—	—	
45-9	52	甕 (弥生)	8号住居	弥生後期	淡褐色	—	28.4	—	—	
45-10	43	甕 (土師器)	8号住居	古墳前期	淡黄褐色～淡赤褐色	30.2	19.2	丸底	23.6	
45-11	46	甕 (土師器)	8号住居	古墳前期	淡明赤褐色	—	12.4	—	—	
45-12	49	甕 (土師器)	8号住居	古墳前期	明赤褐色	—	14.8	—	—	
45-13	50	高坏 (土師器)	8号住居	古墳前期	淡暗褐色	—	—	—	—	
45-14	51	高坏 (土師器)	8号住居	古墳前期	淡明褐色	—	—	—	—	
45-15	45	高坏 (土師器)	8号住居	古墳前期	明黄褐色	—	—	12.0	—	
45-16	44	高坏 (土師器)	8号住居	古墳前期	淡明赤褐色	—	—	—	—	
45-17	47	器台 (土師器)	8号住居	古墳前期	淡赤褐色～淡暗褐色	—	—	7.6	—	
45-18	55	甕 (弥生)	9号住居	弥生後期	黄土色～暗褐色	—	20.1	—	—	
45-19	54	鉢 (弥生)	9号住居	弥生後期	淡暗褐色～淡赤褐色	5.5	16.4	丸底	—	
45-20	56	鉢 (弥生)	10号住居	弥生後期	濃橙	—	19.0	—	—	
47-1	60	甕 (土師器)	11号住居	古墳前期	—	—	19.2	—	21.4	
47-2	62	甕 (土師器)	11号住居	古墳前期	淡赤褐色	—	13.8	—	—	
47-3	63	甕 (土師器)	11号住居	古墳前期	淡黄褐色	—	—	—	—	
47-4	64	甕 (土師器)	11号住居	古墳前期	暗茶褐色	—	—	—	—	
47-5	71	甕 (土師器)	11号住居	古墳前期	淡黄褐色	—	—	—	—	甕の底部に穿孔
47-6	61	鉢 (土師器)	11号住居	古墳前期	淡黄褐色	—	—	—	—	
47-7	65	高坏 (土師器)	11号住居	古墳前期	—	—	—	—	—	
47-8	67	高坏 (土師器)	11号住居	古墳前期	淡黄褐色	—	—	—	—	
47-9	66	高坏 (土師器)	11号住居	古墳前期	淡黄褐色	—	—	11.2	—	外面丹塗
47-10	68	高坏 (土師器)	11号住居	古墳前期	淡黄褐色	—	—	—	—	外面丹塗
47-11	70	高坏 (土師器)	11号住居	古墳前期	淡黄褐色	—	—	—	—	外面丹塗?
47-12	69	台付椀 (土師器)	11号住居	古墳前期	淡黄褐色	—	—	9.0	—	
47-13	72	甕 (土師器)	12号住居	古墳前期	淡黄褐色	—	17.2	—	—	
47-14	73	甕 (土師器)	12号住居	古墳前期	淡黄褐色	—	17.5	—	—	
47-15	74	甕 (土師器)	12号住居	古墳前期	淡黄褐色	—	18.6	—	—	
47-16	75	甕 (土師器)	12号住居	古墳前期	淡赤褐色	—	16.8	—	—	
47-17	78	鉢 (土師器)	12号住居	古墳前期	淡褐色	—	18.8	—	—	
47-18	76	器台 (土師器)	12号住居	古墳前期	淡黄褐色～淡赤褐色	—	—	10.6	—	
47-19	77	ミニチュア土器	12号住居	古墳前期	暗茶褐色	—	6.8	—	—	高坏形か
50-1	84	甕 (弥生)	13号住居	弥生後期	灰白色	—	—	—	—	
50-2	93	甕 (弥生)	13号住居	弥生後期	黄褐色	—	—	—	—	
50-3	87	甕 (土師器)	13号住居	古墳前期	淡灰白色	—	26.0	—	—	
50-4	85	甕 (土師器)	13号住居	古墳前期	—	—	11.1	—	—	
50-5	94	甕 (土師器)	13号住居	古墳前期	淡黄灰色	—	13.3	—	—	
50-6	96	甕 (土師器)	13号住居	古墳前期	灰黒褐色	—	16.8	—	—	
50-7	95	甕 (土師器)	13号住居	古墳前期	黄灰色	—	—	—	—	
50-8	101	鉢 (弥生)	13号住居	弥生中期	淡赤褐色	6.1	10.0	4.2	—	
50-9	81	鉢 (土師器)	13号住居	古墳前期	黄灰色	—	24.0	—	—	
50-10	78	高坏 (弥生)	13号住居	弥生中期	黄褐色	—	—	—	—	
50-11	89	高坏 (弥生)	13号住居	弥生後期	淡灰白	—	—	—	—	
50-12	80	高坏 (弥生)	13号住居	弥生後期	黄灰色	—	—	14.2	—	
50-13	90	高坏 (土師器)	13号住居	古墳前期	—	—	—	—	—	
50-14	100	高坏 (土師器)	13号住居	古墳前期	—	—	18.1	—	—	
50-15	97	高坏 (土師器)	13号住居	古墳前期	黄褐色	—	13.4	—	—	
50-16	88	高坏 (土師器)	13号住居	古墳前期	淡黄灰色	—	—	—	—	
50-17	91	高坏 (土師器)	13号住居	古墳前期	茶黄色	—	—	12.6	—	
50-18	98	高坏 (土師器)	13号住居	古墳前期	淡赤褐色	—	—	11.3	—	
50-19	92	鼓形器台 (土師器)	13号住居	古墳前期	赤褐色	—	—	13.1	—	
50-20	82	器台 (弥生)	13号住居	弥生後期	灰褐色	—	15.2	—	—	
50-21	83	器台 (弥生)	13号住居	弥生後期	茶黄色	—	—	—	—	
50-22	99	ミニチュア土器	13号住居	古墳	灰黒色	4.1	7.2	3.4	—	
50-23	86	ミニチュア土器	13号住居	古墳	黒灰色	3.0	4.6	3.3	—	
50-24	103	甕 (土師器)	14号住居	古墳前期	黒灰色	—	—	—	—	
50-25	102	鉢 (土師器)	14号住居	古墳前期	灰白色	3.1	10.2	—	—	
50-26	104	甕 (弥生)	17号住居	弥生後期	淡黄褐色	—	24.4	—	—	
52-1	108	甕 (弥生)	18号住居	弥生後期	暗赤褐色～暗褐色	—	—	—	41.0	
52-2	105	甕 (弥生)	18号住居	弥生中期	淡明褐色	—	32.3	—	—	
52-3	107	甕 (弥生)	18号住居	弥生中期	明褐色	—	28.6	—	—	
52-4	106	高坏 (弥生)	18号住居	弥生中期	淡暗黄土色	—	23.8	—	—	内外面丹塗
52-5	112	甕 (土師器)	21号住居	古墳前期	灰白色	—	20.2	—	—	
52-6	109	甕 (土師器)	21号住居	古墳前期	淡黄褐色	—	—	—	—	
52-7	110	高坏 (土師器)	21号住居	古墳前期	濃褐色	—	18.9	—	—	
52-8	111	鉢 (土師器)	21号住居	古墳前期	淡褐色	—	—	—	—	
54-1	113	鉢 (土師器)	21号住居	古墳前期	暗褐色	—	35.5	—	30.5	
54-2	114	甕 (土師器)	23号住居	古墳前期	淡褐色	—	—	—	—	
54-3	115	甕 (弥生)	25号住居	弥生中期	淡黄褐色	—	—	7.6	22.6	外面丹塗、胴部に焼成後の穿孔
54-4	137	甕 (土師器)	25号住居	古墳前期	淡黄褐色	—	26.7	—	—	
54-5	136	甕 (土師器)	25号住居	古墳前期	淡黄褐色	—	25.2	—	—	
54-6	125	甕 (土師器)	25号住居	古墳前期	淡黄褐色	—	—	—	11.0	
54-7	127	甕 (土師器)	25号住居	古墳前期	淡黄褐色	—	—	—	—	
54-8	117	甕 (土師器)	25号住居	古墳前期	暗赤褐色	25.7	19.9	丸底	22.5	
54-9	118	甕 (土師器)	25号住居	古墳前期	淡黄褐色	—	15.3	—	—	
54-10	119	甕 (土師器)	25号住居	古墳前期	淡黄褐色	—	17.3	—	—	
54-11	124	甕 (土師器)	25号住居	古墳前期	淡黄褐色	—	—	—	—	
54-12	120	甕 (土師器)	25号住居	古墳前期	—	—	—	—	—	
54-13	134	甕 (土師器)	25号住居	古墳前期	淡黄褐色	—	—	—	—	
54-14	142	甕 (土師器)	25号住居	古墳前期	淡黄褐色	—	—	—	—	
54-15	123	甕 (土師器)	25号住居	古墳前期	淡黄褐色	—	—	—	—	
54-16	144	甕 (土師器)	25号住居	古墳前期	—	—	—	—	—	
54-17	121	甕 (土師器)	25号住居	古墳前期	淡黄褐色	—	—	—	—	
54-18	140	甕 (土師器)	25号住居	古墳前期	淡赤褐色	—	—	—	—	
54-19	138	甕 (土師器)	25号住居	古墳前期	—	—	—	—	—	
54-20	122	甕 (土師器)	25号住居	古墳前期	淡黄褐色	—	—	—	—	
54-21	139	甕 (土師器)	25号住居	古墳前期	淡黄褐色	—	—	—	—	

表3-5 三雲・井原遺跡出土土器一覽⑤

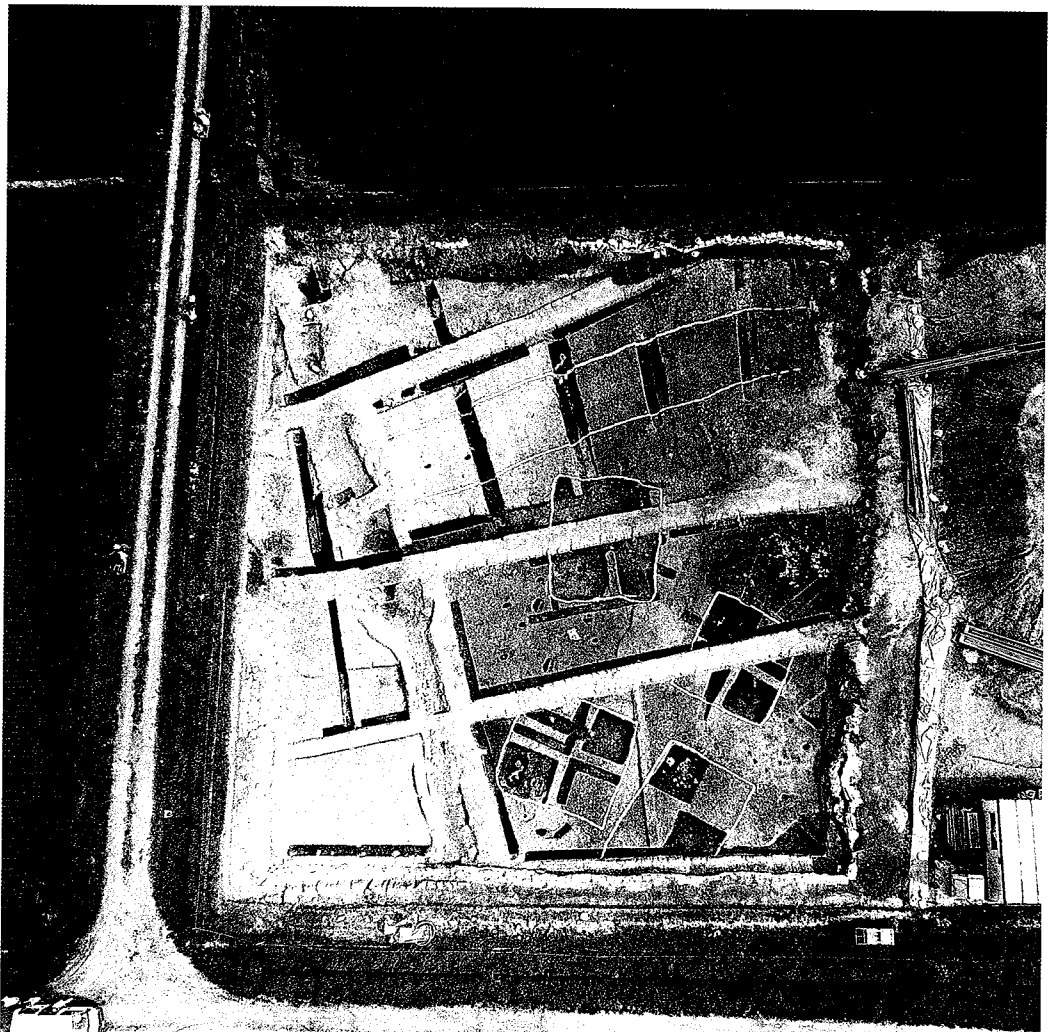
図No.	整理	器種名	出土遺構	時期	色調	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	胴径 (cm)	備考
56-1	128	高坏 (弥生)	25号住居	弥生中期	淡黄褐色	—	—	—	—	
56-2	129	高坏 (弥生)	25号住居	弥生中期	淡黄褐色	—	—	—	—	
56-3	145	高坏 (土師器)	25号住居	古墳中期	—	—	16.2	—	—	内外面丹塗
56-4	141	高坏 (土師器)	25号住居	古墳	淡黄褐色	—	—	—	—	
56-5	131	台付椀 (土師器)	25号住居	古墳	淡赤褐色	—	—	—	—	
56-6	132	鉢 (弥生)	25号住居	弥生後期	淡黄褐色	—	20.2	—	—	
56-7	133	鉢 (弥生)	25号住居	弥生後期	淡黄褐色	—	17.0	—	—	
56-8	135	鉢 (弥生)	25号住居	弥生後期	淡黄褐色	—	—	—	—	
56-9	116	鉢 (土師器)	25号住居	古墳前期	淡褐色~黒褐色	9.5	15.0	丸底	14.8	
56-10	143	鉢 (土師器)	25号住居	古墳	淡赤褐色	—	—	—	—	
56-11	130	鉢 (弥生)	25号住居	弥生後期	淡赤褐色	—	—	—	—	
56-12	126	ミニチュア土器	25号住居	古墳	淡赤褐色	4.7	7.5	3.0	—	椀形
56-13	159	壺 (土師器)	26号住居	古墳前期	明赤褐色	—	—	—	—	
56-14	160	壺 (土師器)	26号住居	古墳前期	明赤褐色	—	—	—	—	
56-15	167	壺 (土師器)	26号住居	古墳前期	淡黄褐色~淡赤褐色	—	10.8	—	—	
56-16	162	壺 (土師器)	26号住居	古墳前期	淡赤褐色	—	18.5	—	—	
56-17	153	壺 (土師器)	26号住居	古墳前期	淡黄褐色~淡赤褐色	—	12.7	—	—	
56-18	161	壺 (土師器)	26号住居	古墳前期	淡赤褐色	—	13.4	—	—	外面丹塗
56-19	170	壺 (土師器)	26号住居	古墳前期	黄褐色~褐色	—	18.4	—	—	
56-20	150	壺 (土師器)	26号住居	古墳前期	淡黄褐色	—	18.4	—	—	
56-21	149	壺 (土師器)	26号住居	古墳前期	—	—	16.6	—	—	
56-22	166	壺 (土師器)	26号住居	古墳前期	淡明赤褐色	—	15.8	—	—	
57-1	146	壺 (土師器)	26号住居	古墳前期	黄褐色	—	13.6	—	17.8	
57-2	169	壺 (土師器)	26号住居	古墳前期	淡褐色	—	16.4	—	—	
57-3	168	壺 (土師器)	26号住居	古墳前期	淡黄褐色~淡赤褐色	—	14.8	—	—	
57-4	151	壺 (土師器)	26号住居	古墳前期	淡明赤褐色	—	—	—	—	
57-5	152	壺 (土師器)	26号住居	古墳前期	淡薄茶色~淡明赤褐色	—	—	—	—	
57-6	155	壺 (土師器)	26号住居	古墳前期	淡明赤褐色	—	—	—	—	
57-7	158	壺 (土師器)	26号住居	古墳前期	淡暗茶色	—	—	—	—	
57-8	148	鉢 (土師器)	26号住居	古墳前期	淡赤褐色	8.3	20.4	—	—	
57-9	165	甌? (土師器)	26号住居	古墳	淡暗黄褐色	—	18.6	—	—	
57-10	156	椀 (土師器)	26号住居	古墳	淡褐色	—	—	—	—	
57-11	163	高坏 (土師器)	26号住居	古墳前期	淡明赤褐色	—	—	—	—	
57-12	147	高坏 (土師器)	26号住居	古墳前期	赤褐色	—	—	11.3	—	
57-13	154	高坏 (土師器)	26号住居	古墳前期	明赤褐色	—	—	—	—	
57-14	164	高坏 (土師器)	26号住居	古墳前期	淡褐色	—	—	—	—	
57-15	171	高坏 (土師器)	27号住居	古墳前期	黄褐色	—	—	—	—	
57-16	172	鉢 (土師器)	28号住居	古墳前期	暗褐色	4.8	11.9	丸底	—	
57-17	173	甌 (弥生)	29号住居	弥生後期	濃茶灰色	—	19.4	—	—	
57-18	174	高坏 (古墳)	29号住居	古墳前期	淡黄褐色~淡褐色	—	22.8	—	—	
57-19	175	鉢 (弥生)	29号住居	弥生後期	淡褐色	5.5	13.4	丸底	—	
57-20	179	壺 (弥生)	25住~31住上層	弥生後期	黄茶色	—	—	—	—	
57-21	177	高坏 (弥生)	25住~31住上層	弥生後期	黄灰色	—	—	—	—	
57-22	178	高坏 (土師器)	25住~31住上層	古墳前期	黄灰色	—	—	—	—	
57-23	176	高坏 (土師器)	25住~31住上層	古墳前期	黄灰色	—	—	—	—	
57-24	180	壺 (土師器)	31号住居	古墳前期	黒褐色	—	—	—	16.8	
57-25	181	ミニチュア土器	31号住居	古墳前期	淡赤褐色	6.5	10.0	丸底	10.5	
62-1	182	壺 (弥生)	1号土坑	弥生中期	茶灰色	—	31.0	—	—	
62-2	183	壺 (弥生)	1号土坑	弥生中期	淡赤茶色	—	—	—	—	
62-3	184	壺 (弥生)	1号土坑	弥生中期	淡赤茶色	—	—	5.7	—	外面丹塗
62-4	185	壺 (弥生)	2号土坑	弥生中期	淡赤茶色	—	16.9	—	—	
62-5	186	壺 (弥生)	2号土坑	弥生中期	灰白色	—	14.1	—	—	
62-6	188	椀 (土師器)	石椁墓	古墳中期	褐色	—	13.7	—	—	
62-7	187	鉢 (土師器)	石椁墓	古墳前期	—	—	14.3	—	—	内外面丹塗
62-8	191	壺 (土師器)	P-42	古墳前期	淡灰黒色	—	16.3	—	—	
62-9	189	壺 (土師器)	P-42	古墳前期	淡黄褐色~黒褐色	—	18.2	—	25.1	肩部に刺突文 (12個)
62-10	190	壺 (土師器)	P-42	古墳前期	淡褐色	—	—	丸底	21.7	
63-1	192	壺 (土師器)	包舎層	古墳前期	濃赤茶色	—	—	—	—	
63-2	193	壺 (土師器)	包舎層	古墳前期	赤褐色	—	—	—	—	
63-3	194	壺 (弥生)	包舎層	弥生中期	明黄褐色	—	—	—	—	
63-4	195	壺 (土師器)	包舎層	古墳前期	淡赤褐色	—	—	—	—	
63-5	196	壺 (土師器)	包舎層	古墳前期	濃黒灰色	—	17.1	—	—	
63-6	197	壺 (土師器)	包舎層	古墳前期	淡茶褐色	—	16.4	—	—	
63-7	198	壺 (土師器)	包舎層	古墳前期	—	—	10.1	—	10.0	
63-8	199	鉢 (弥生)	包舎層	弥生後期	淡黄褐色	—	—	—	—	
63-9	200	鉢 (弥生)	包舎層	弥生後期	淡黄灰色	—	18.8	—	—	内面丹塗
63-10	201	高坏 (弥生)	包舎層	弥生後期	褐色	—	—	—	—	
63-11	202	高坏 (土師器)	包舎層	古墳前期	黄褐色	—	—	—	—	
63-12	203	高坏 (土師器)	包舎層	古墳前期	淡赤茶色	—	—	—	—	
63-13	204	高坏 (土師器)	包舎層	古墳前期	淡赤茶色	—	—	—	—	
63-14	205	甌? (土師器)	包舎層	古墳中期	—	—	—	—	—	
63-15	206	甌台 (土師器)	包舎層	古墳前期	—	—	—	9.8	—	
63-16	207	甌台 (土師器)	包舎層	古墳前期	淡赤茶色	9.9	8.7	7.0	—	
63-17	208	甌台 (土師器)	包舎層	古墳前期	—	—	—	24.2	—	
63-18	209	甌台 (土師器)	包舎層	古墳前期	黄茶色	—	—	10.8	—	
63-19	210	甌台 (須恵器)	包舎層	古墳中期	黒灰色	—	—	—	—	
63-20	211	鉢 (土師器)	攪乱	古墳	淡赤褐色	12.5	20.6	6.5	—	注口付
63-21	212	椀 (白磁)	包舎層	中世	淡灰褐色	—	—	—	—	
63-22	213	椀 (白磁)	包舎層	中世	淡乳白色	—	—	5.2	—	
63-23	214	椀 (青磁)	包舎層	中世	濃緑灰色	—	—	5.6	—	

表3-6 三雲・井原遺跡出土土器一覽⑥

写真図版



a. 三雲437番地調査区全景



b. 井原2579番地調査区全景



a.三雲437番地調査区近景



b.近世溝全景



c.1号住居跡



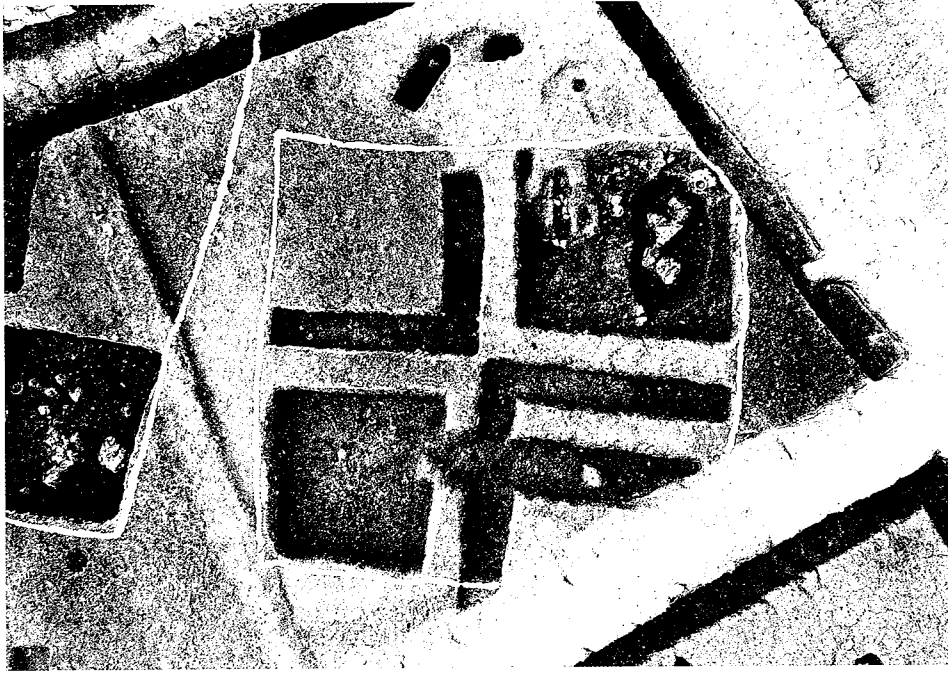
a. 1号住居跡竈検出状況



b. 1号住居跡土器出土状況



c. 井原2579番地近世溝全景



a.1号住居跡



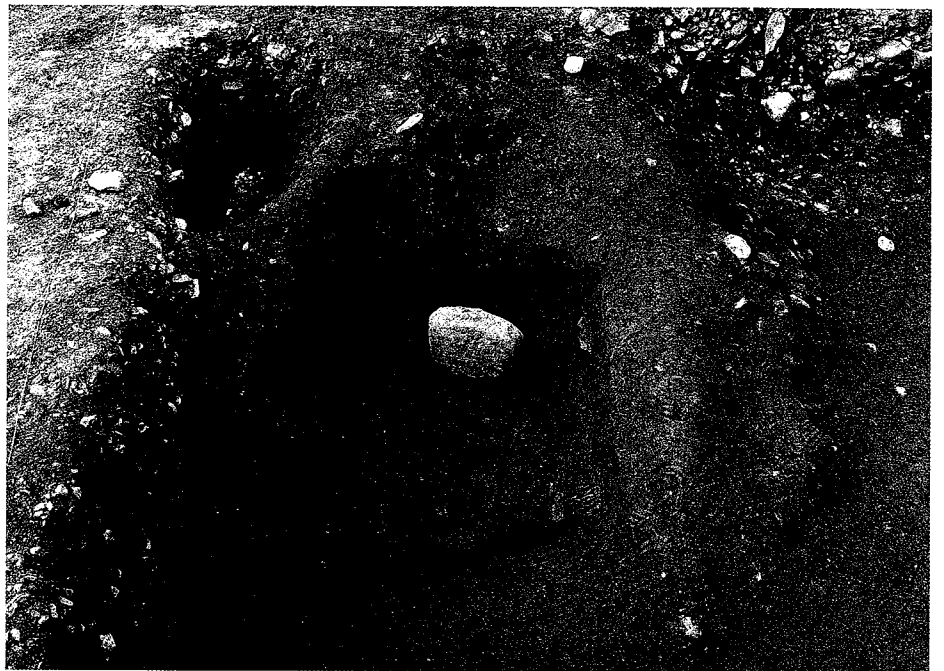
b.1号住居跡竈、屋内土坑検出状況



c.1号住居跡屋内土坑土器出土状況



a.1号住居跡竈検出状況



b.1号住居跡竈完掘状況



c.2号住居跡



a.三雲441番地調査区遠景



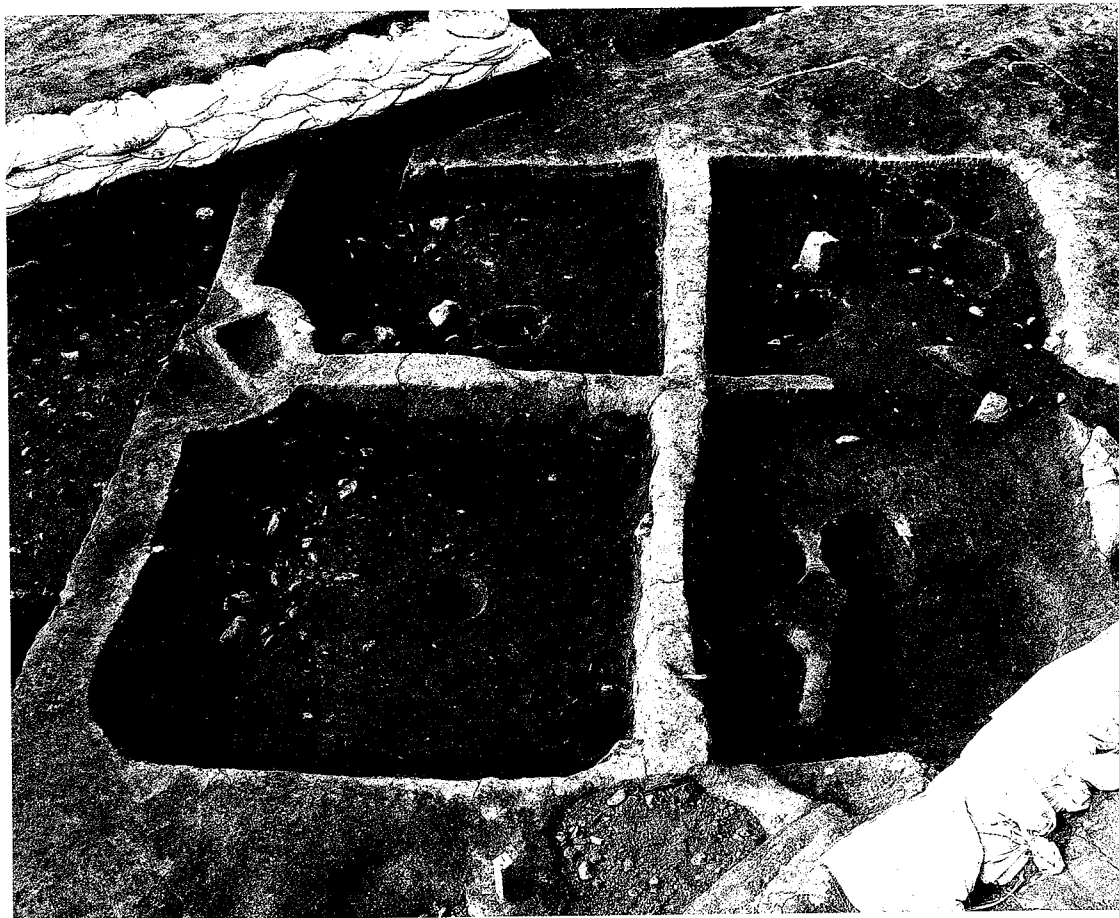
b.三雲441番地3区全景



a. 1 · 2 · 4号住居跡



b. 3 · 5 · 10 · 11号住居跡



a.1号住居跡



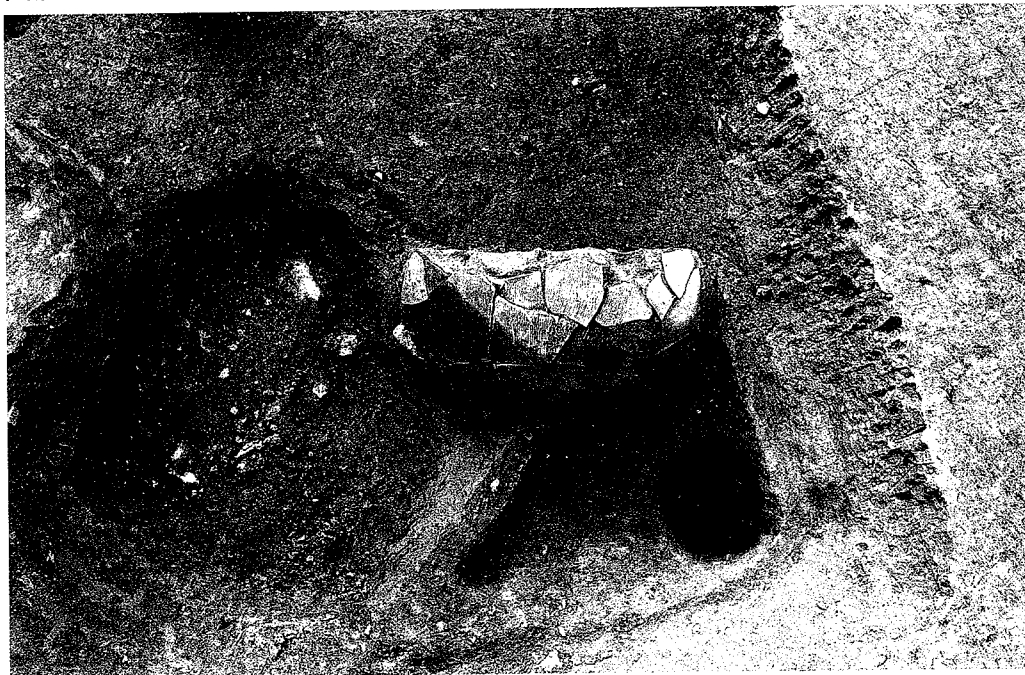
b.1号住居跡竈土器出土状況



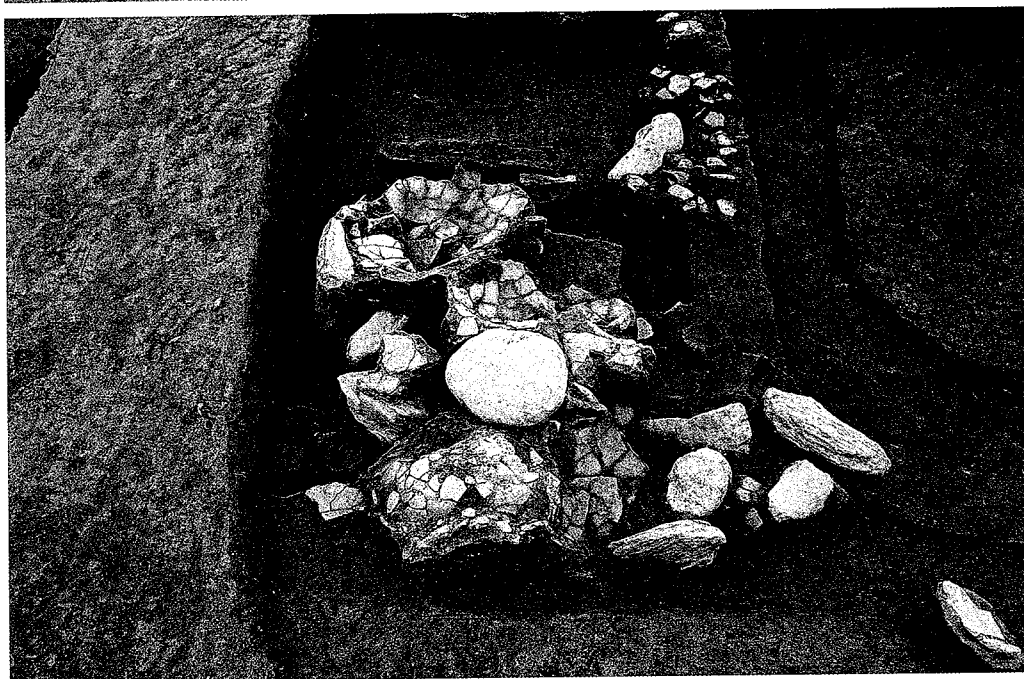
a. 5・6号住居跡



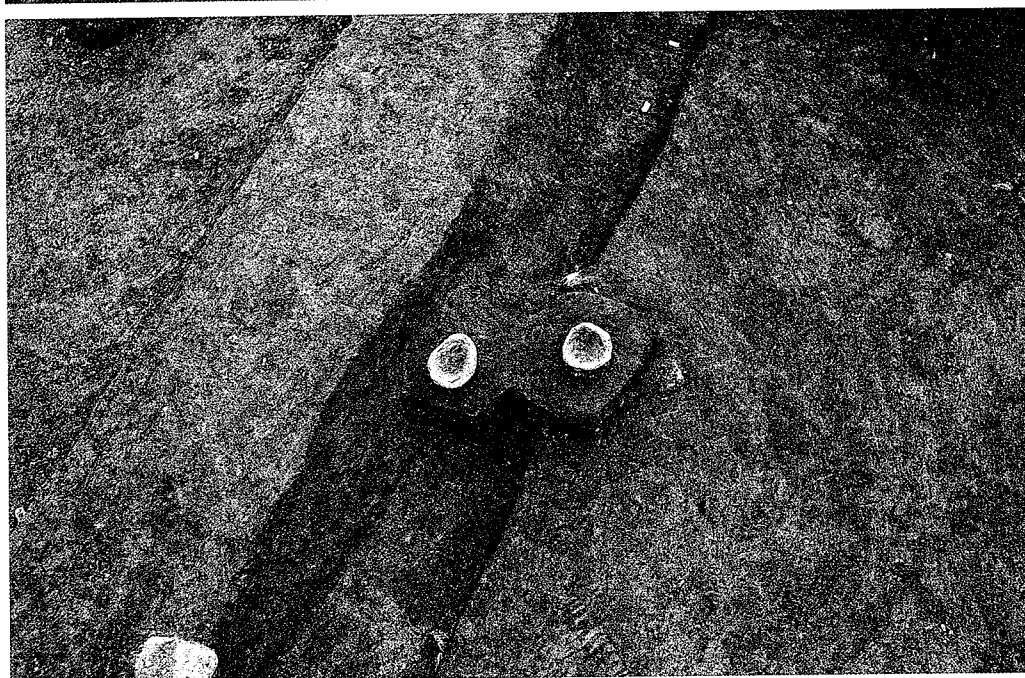
b. 7号住居跡



b. 7号住居跡



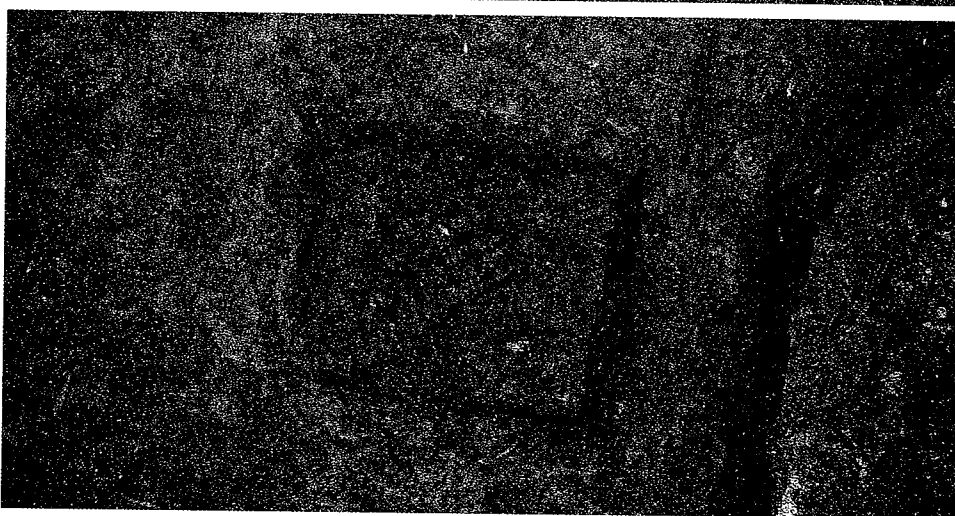
b.5号住居跡遺物出土状況



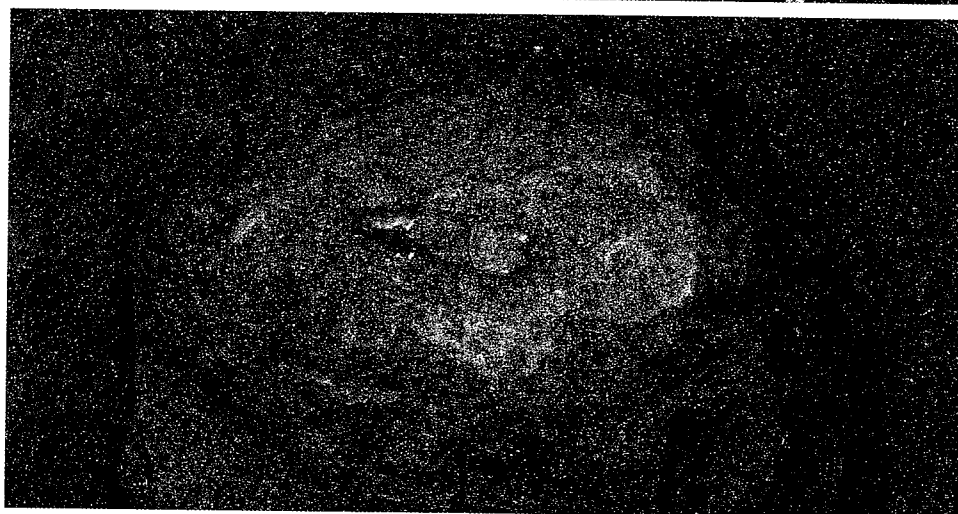
c.6号住居跡ミニチュア土器出土状況



a. 1号住居跡鉄小刀出土状況



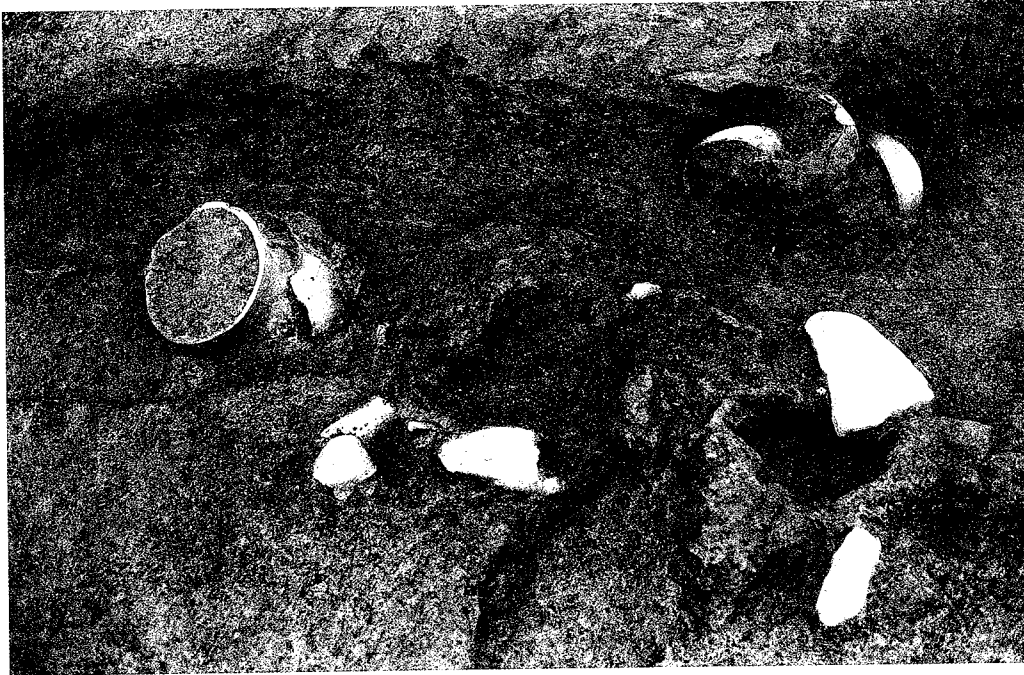
b. 5号住居跡鉄器出土状況



c. 同 上



d. 同 上



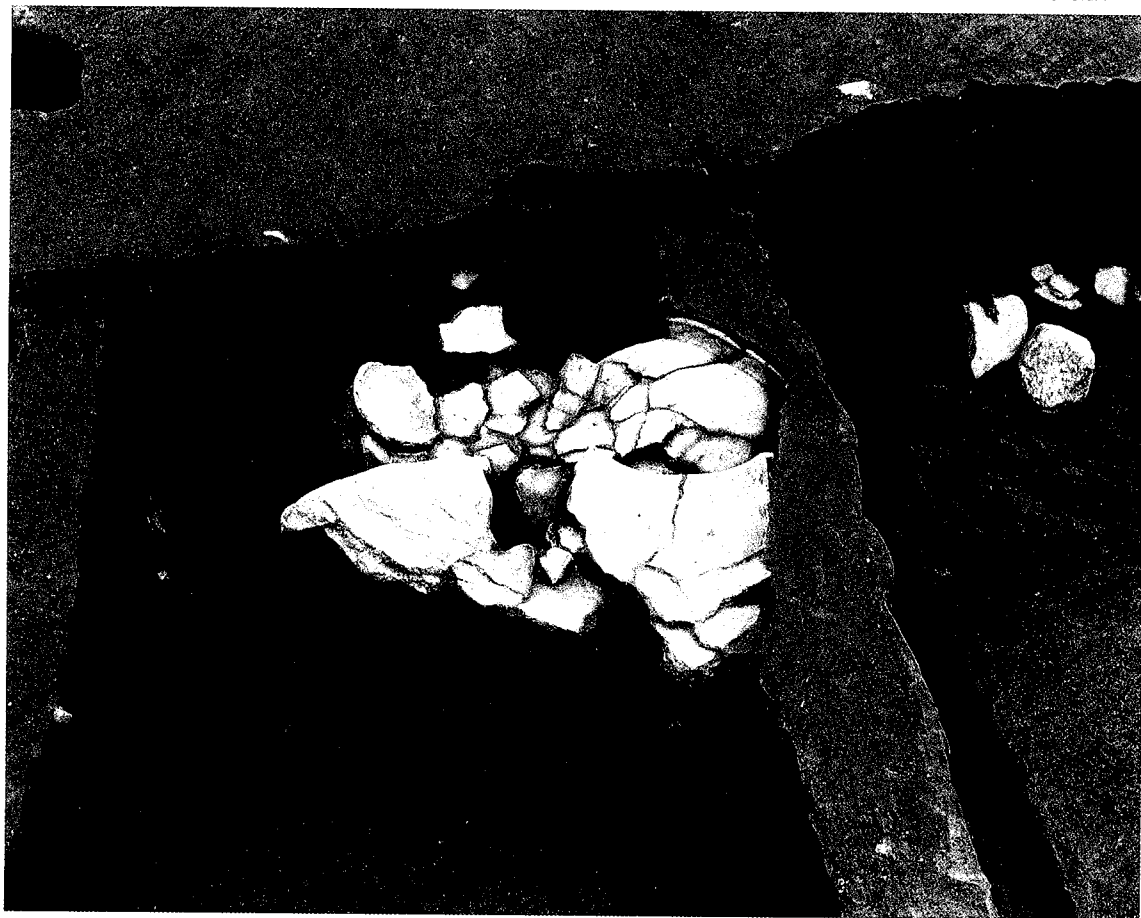
a. 6号住居跡土師器出土状況



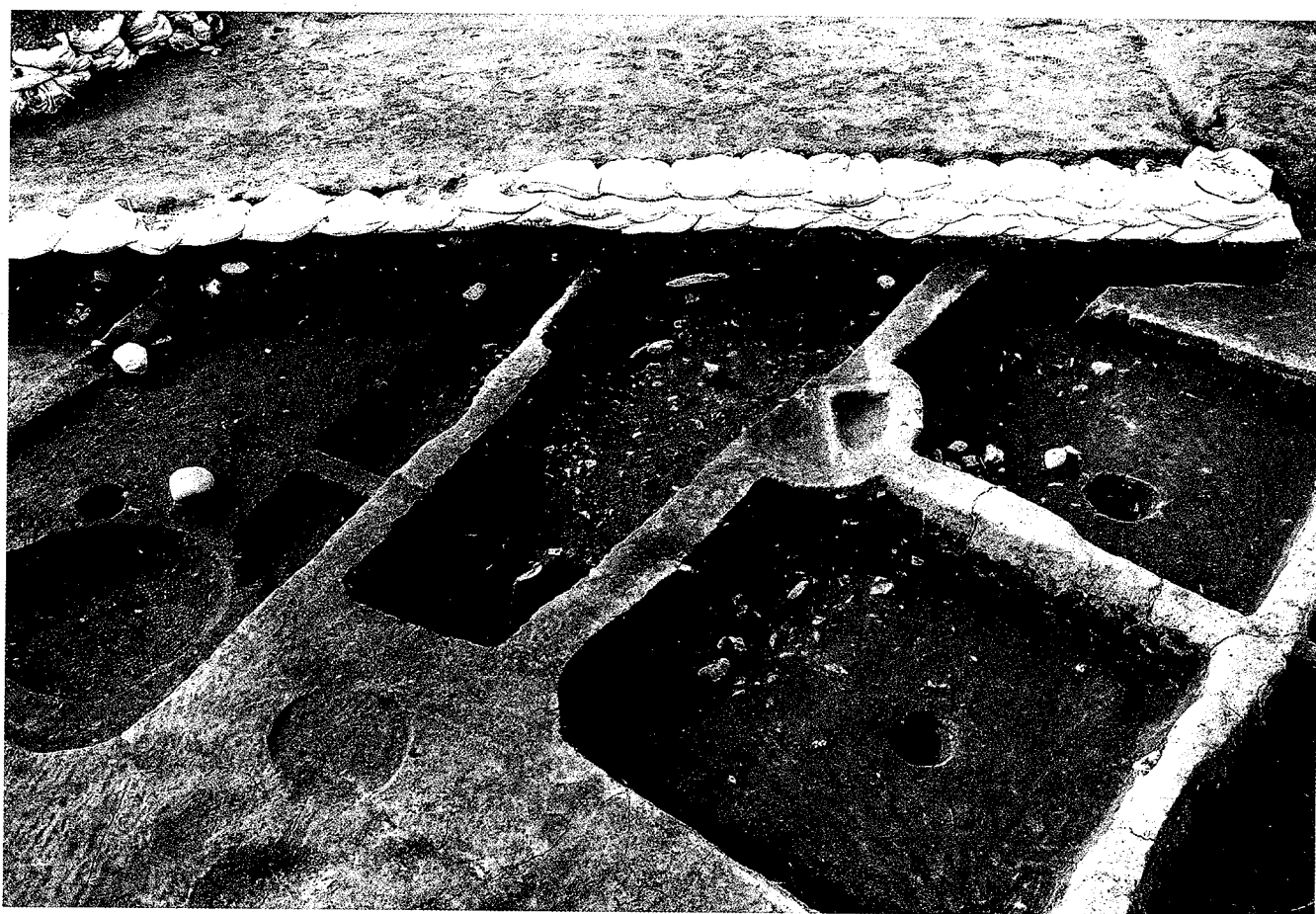
b. 7号住居跡須恵器出土状況



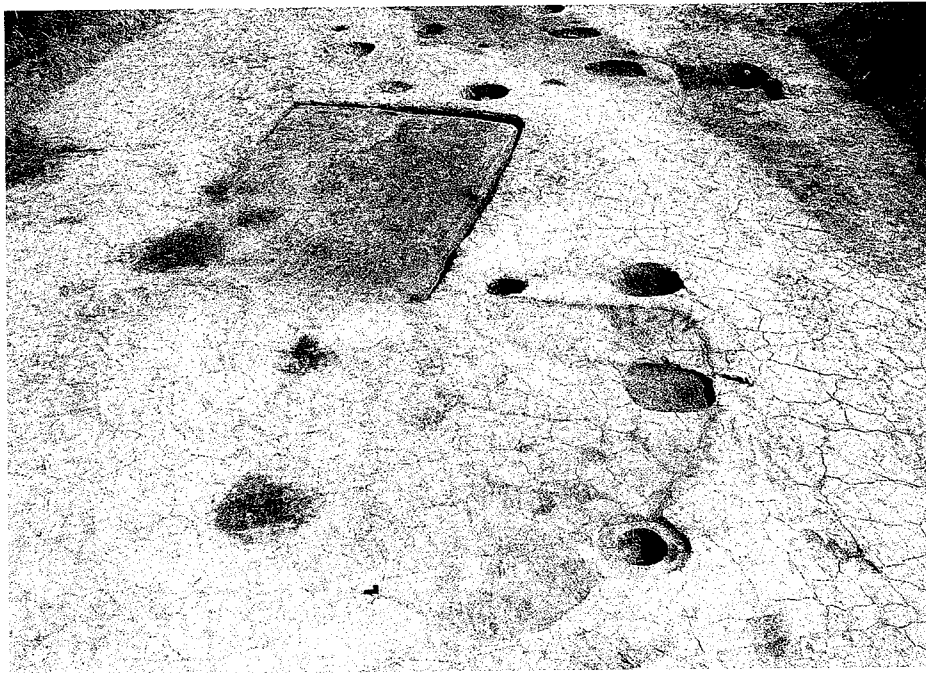
c. 7号住居跡土器出土状況



a. 10号住居跡弥生土器出土状况



b. 9号住居跡



a.三雲450-2番地他調査区①



b.三雲450-2番地他調査区②



c.三雲450-2番地他調査区③

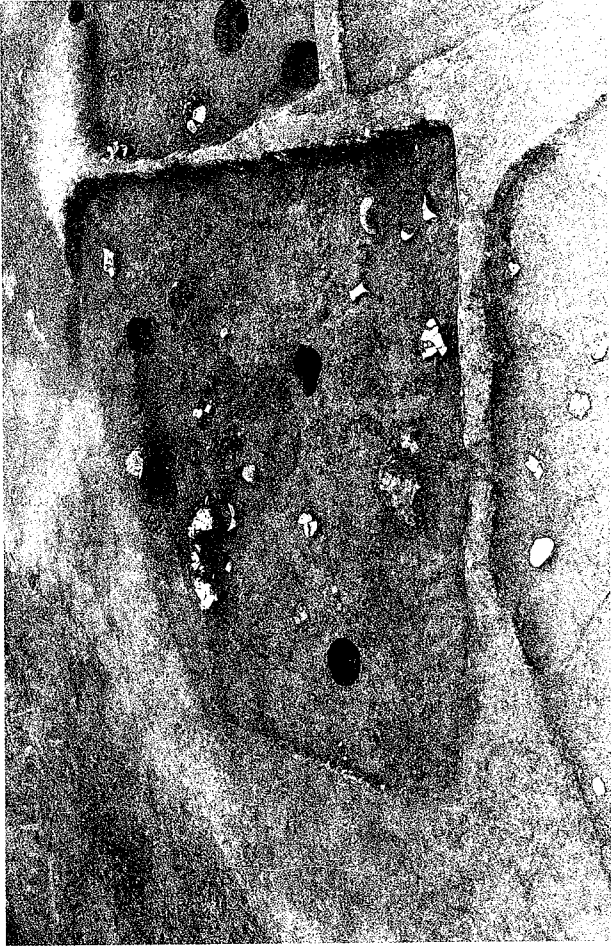
a. 三雲450-2番地他調査区④



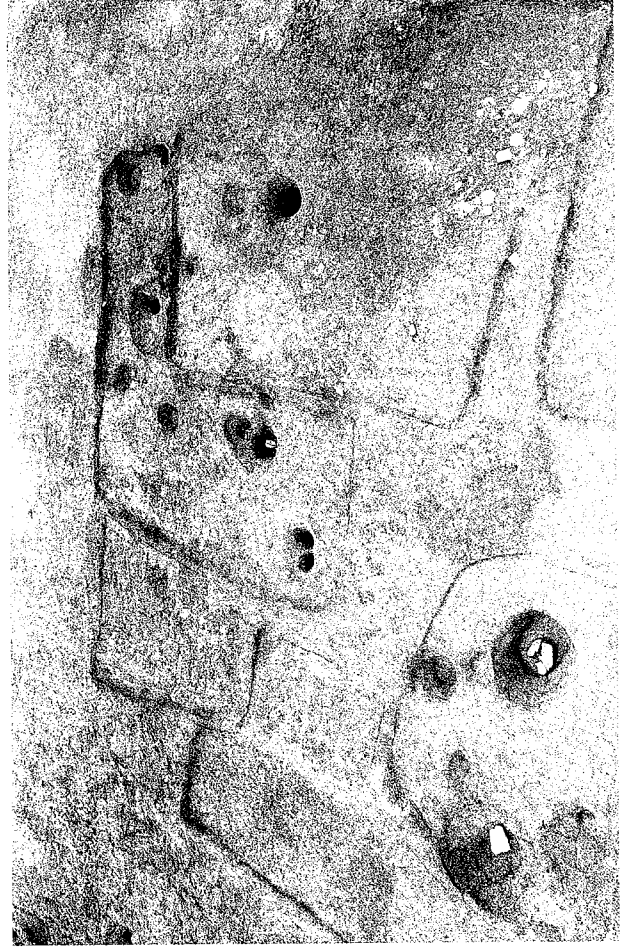
b. 三雲450-2番地他調査区⑤



c. 三雲450-2番地他調査区⑥



c.1号住居跡



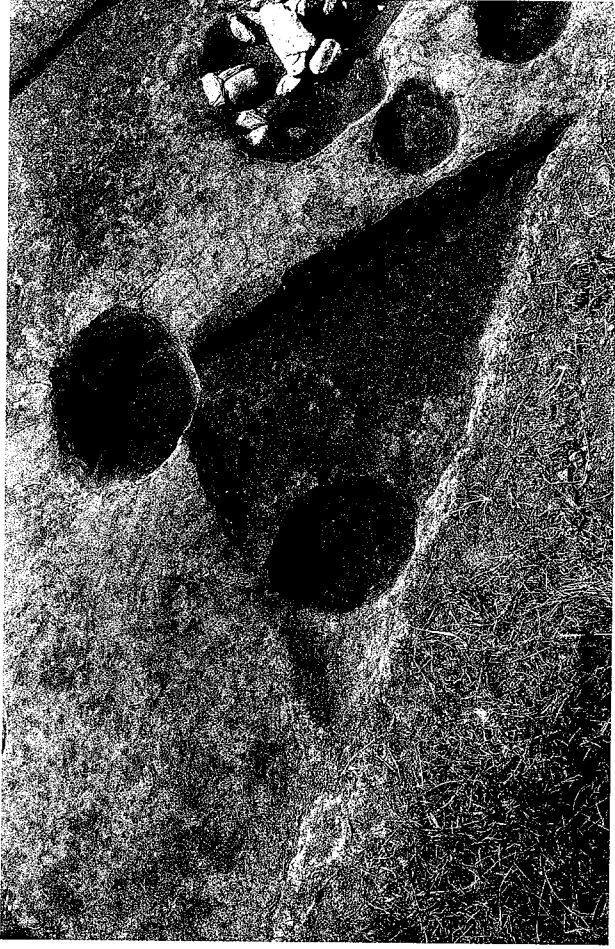
d.2·3·6·7号住居跡



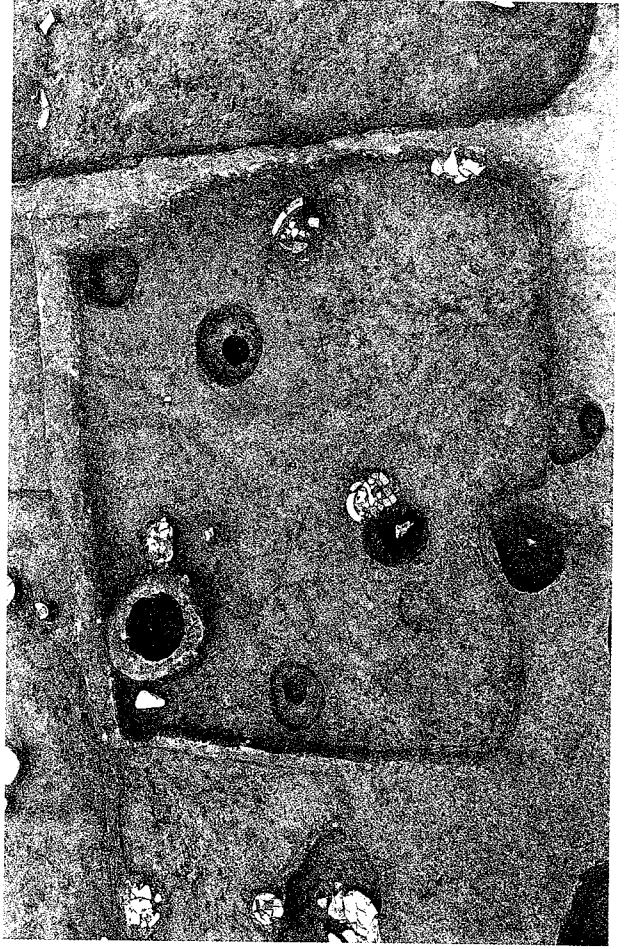
a.1号住居跡



b.1号住居跡



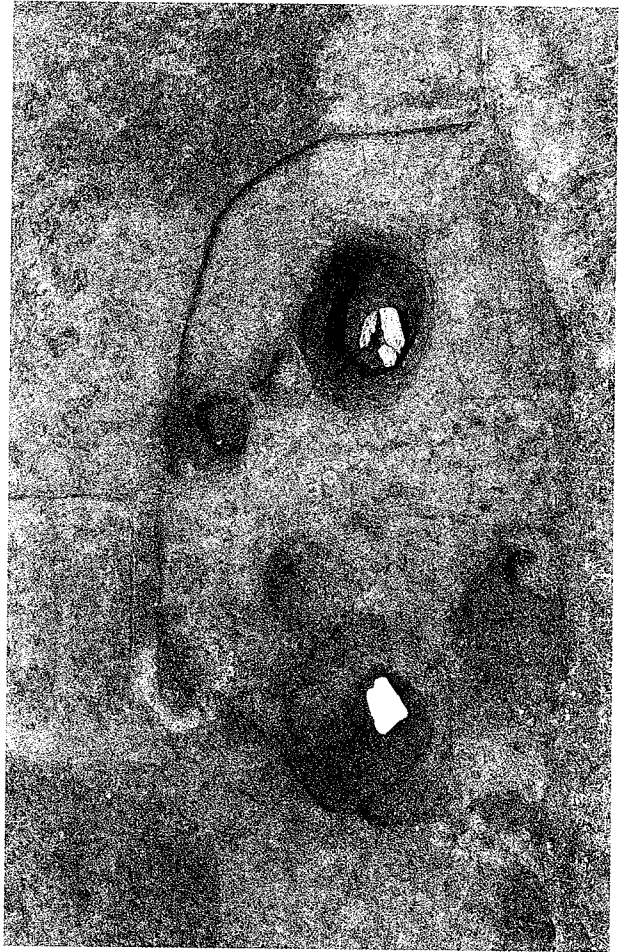
c.15号住居跡



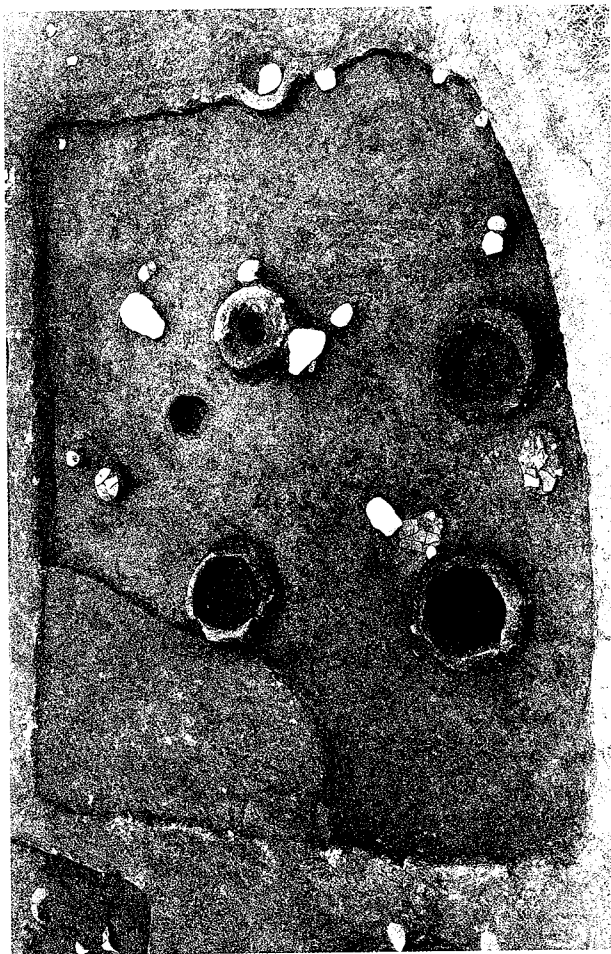
d.10号住居跡



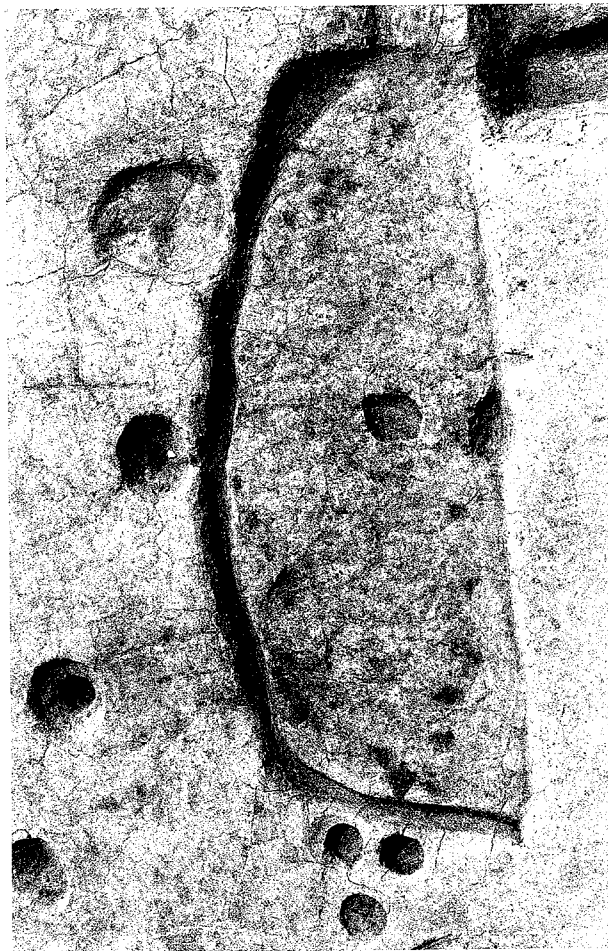
a.4・11・21~23号住居跡



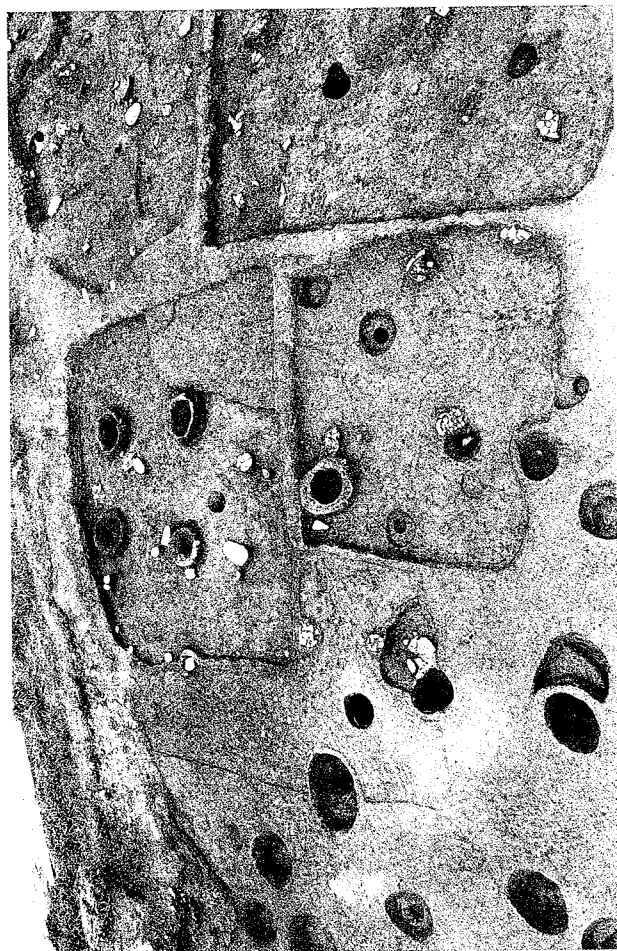
b.5号住居跡



c. 13号住居跡



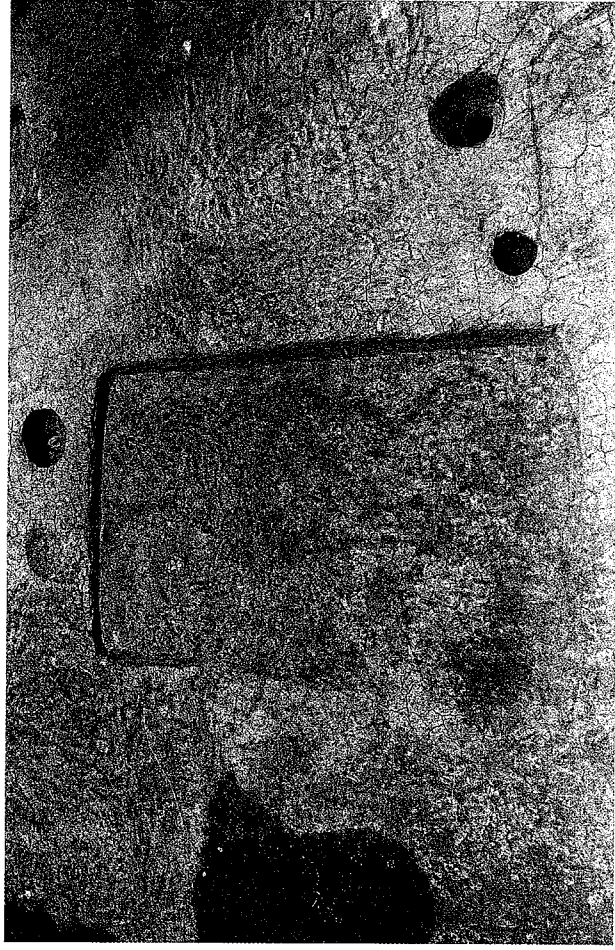
d. 17号住居跡



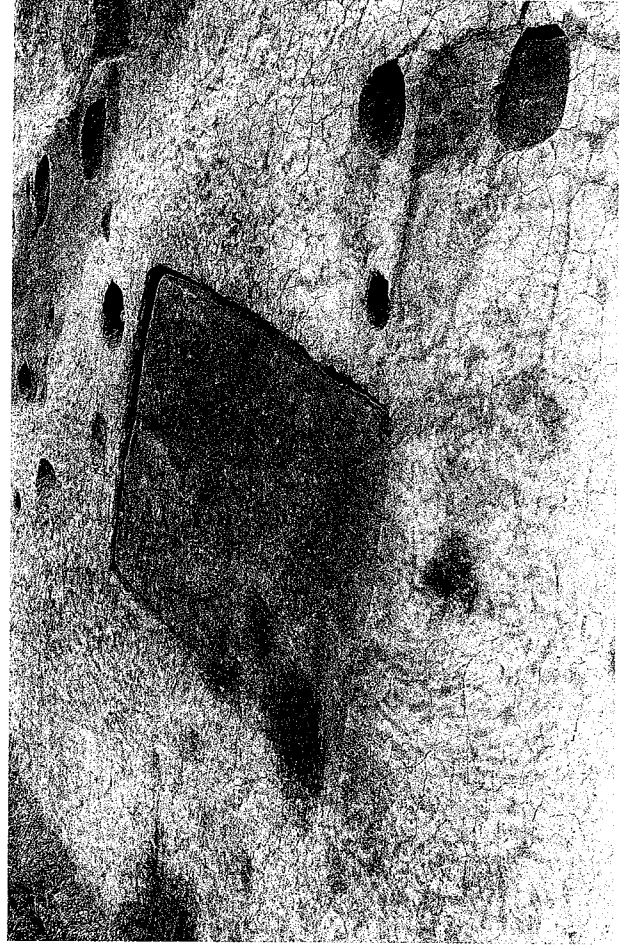
a. 12~14号住居跡



b. 13号住居跡土器出土状況



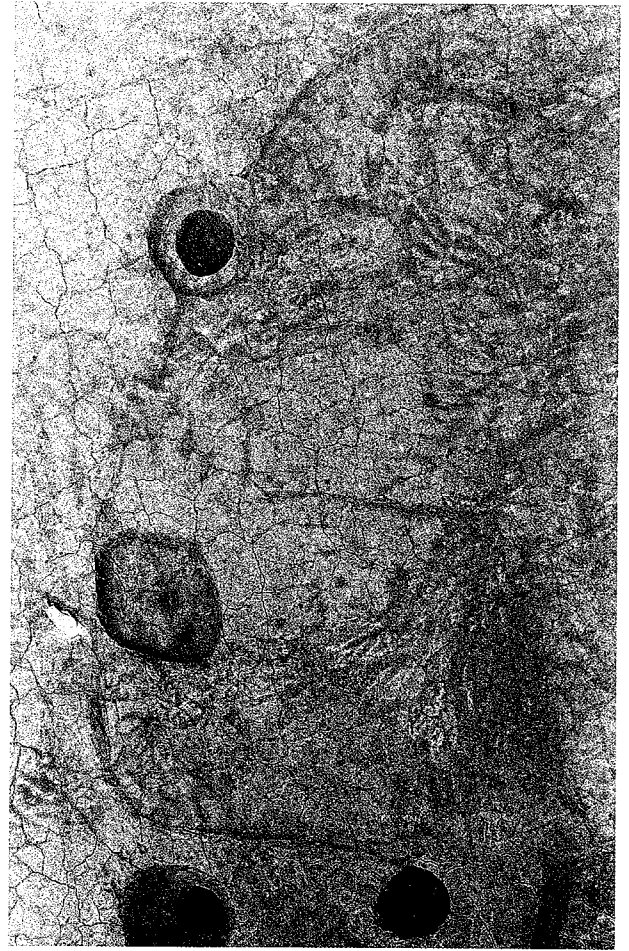
c. 20号住居跡①



d. 20号住居跡②



a. 19号住居跡



b. 17・18号住居跡



a. 26~29 · 31号住居跡



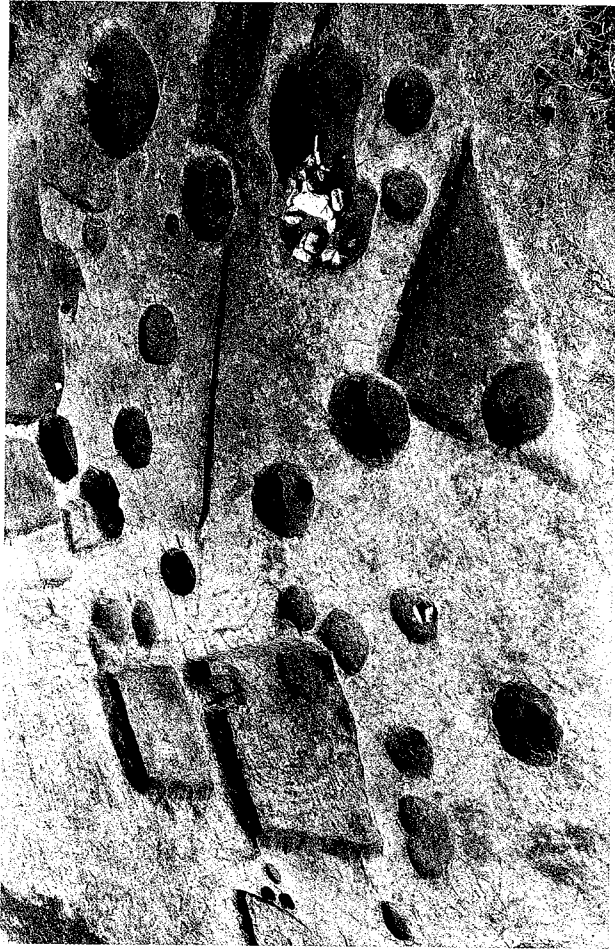
c. 25~28 · 31号住居跡



b. 25号住居跡土器出土状況



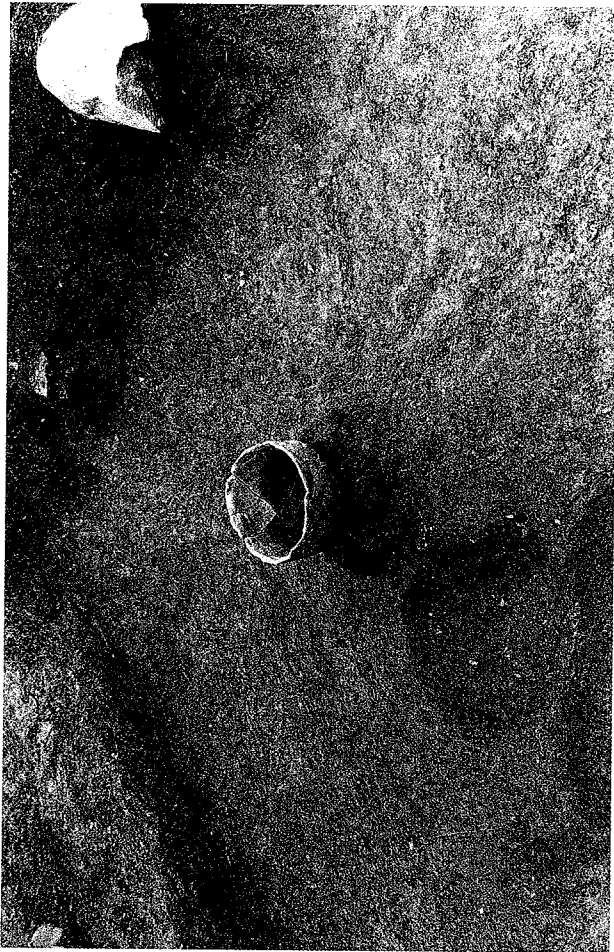
d. 25 · 26 · 29 · 31号住居跡



b. 石棺墓远景



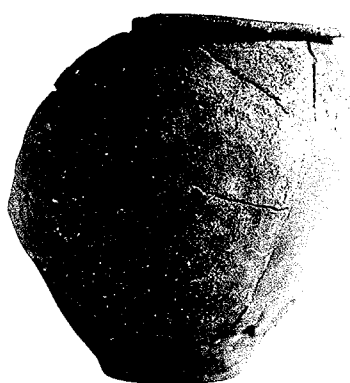
c. 15号住居跡・石棺墓



a. 31号住居跡土器出土状況



8-1



8-6



8-12



8-2



8-7



9-1



8-3



8-8



9-2



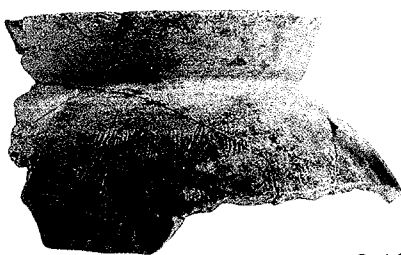
8-9



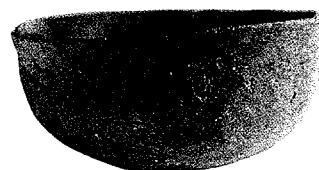
9-3



8-4



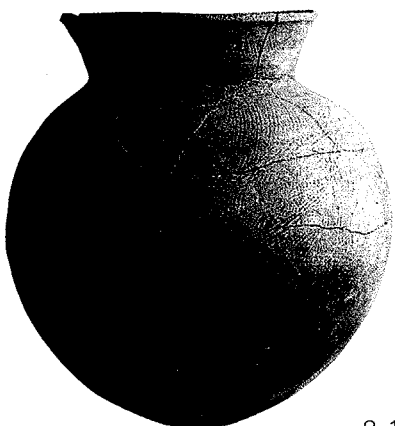
8-10



9-4



8-5



8-11



9-5



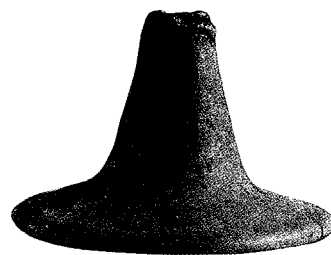
9-6



9-7



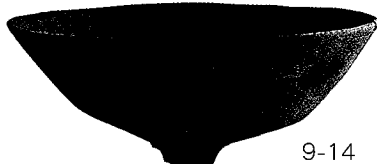
9-13



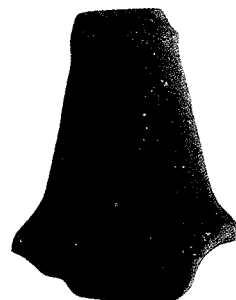
11-8



9-8



9-14



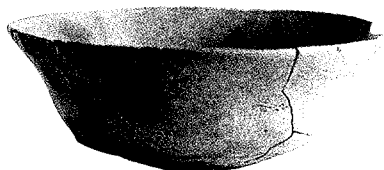
11-6



9-15



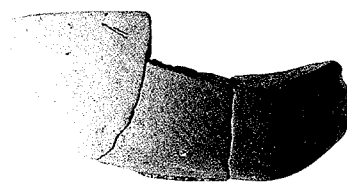
11-7



9-16



9-9



9-18



11-10



9-10



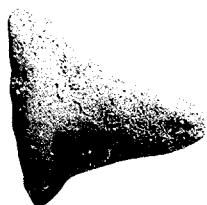
11-3



11-4



11-11



9-12



11-5

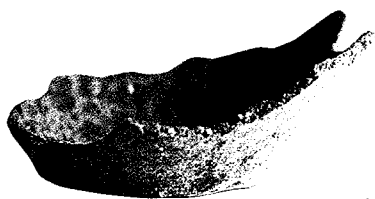


11-12

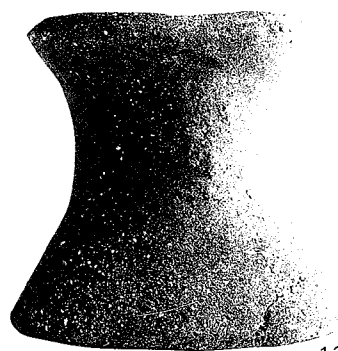
1~3号住居跡出土土器



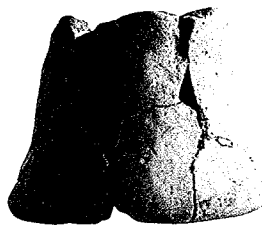
11-13



13-5



13-14



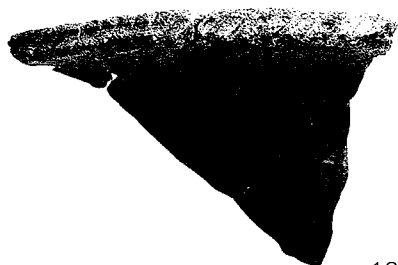
11-14



13-7



13-11



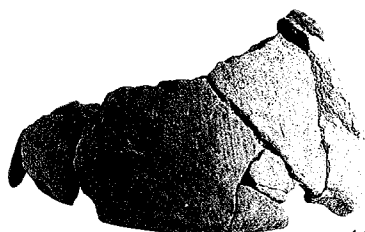
13-1



15-10



13-3



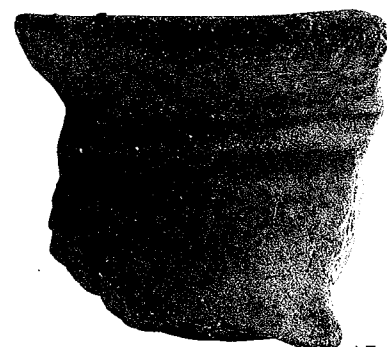
13-15



15-5



15-13



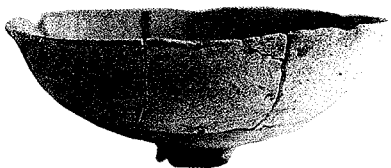
15-22



15-6



15-15



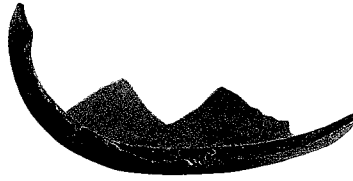
15-12



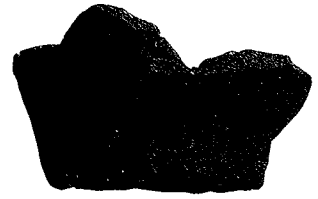
15-17



15-21



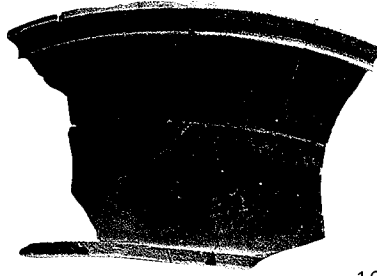
16-7



16-23



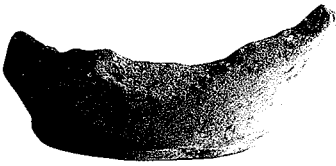
15-24



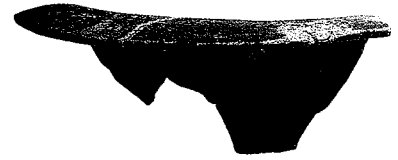
16-8



17-3



16-2



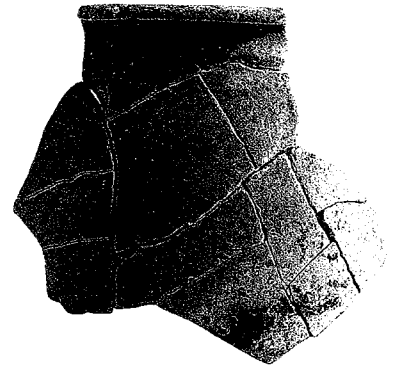
17-2



15-23



16-11



17-7



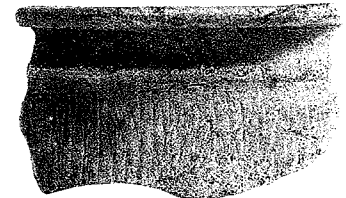
16-4



16-17



17-1



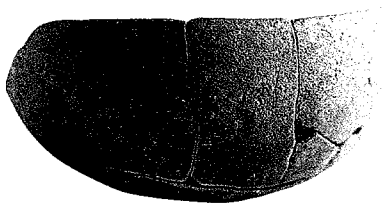
17-11



16-3



17-14



16-10



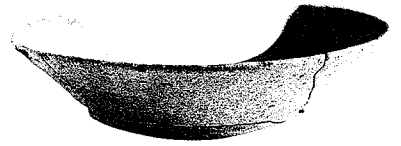
17-15



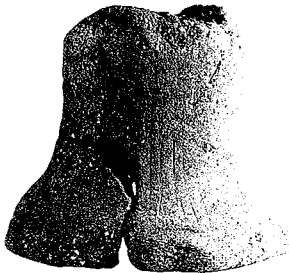
17-4



18-7



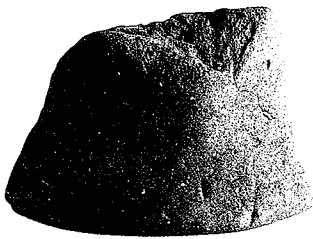
19-8



17-17



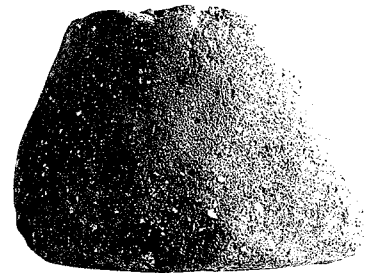
19-10



18-3



18-8



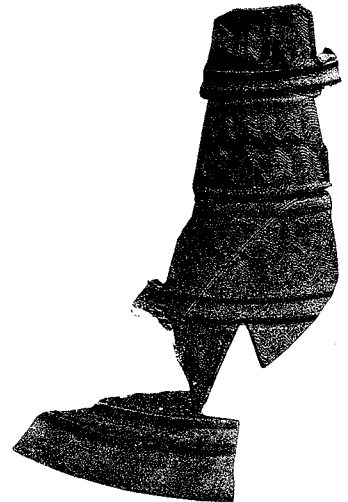
19-11



18-2



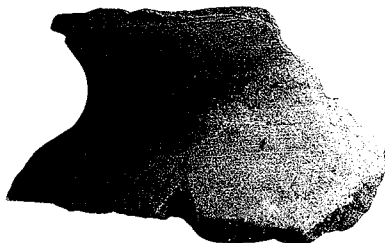
18-9



20-1



19-3



18-6



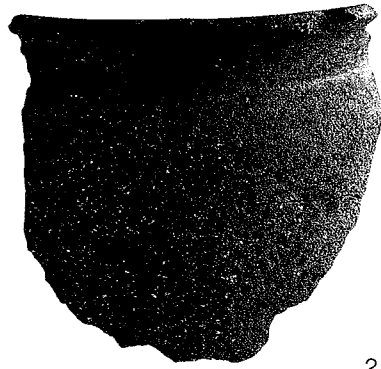
18-10



20-8



20-5



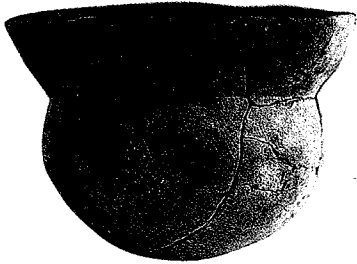
21-7



21-20



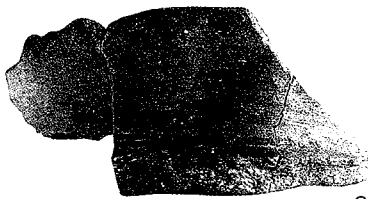
21-21



21-12



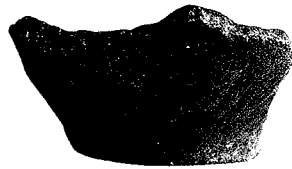
21-19



21-9



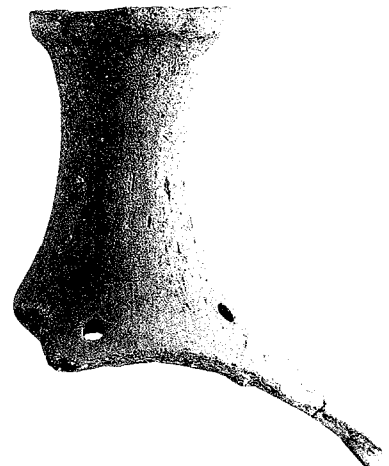
21-14



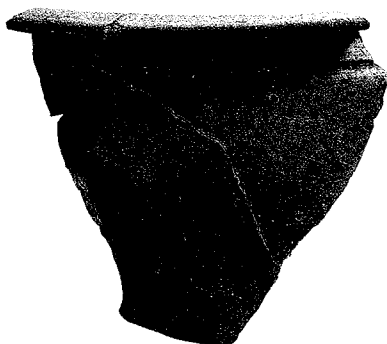
21-10



20-7



21-16



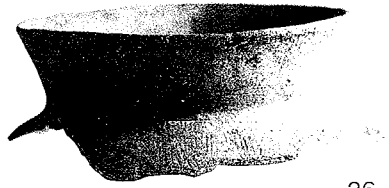
20-13



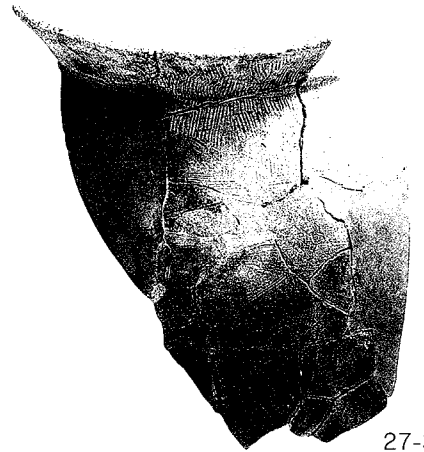
21-17



25



26-4



27-3



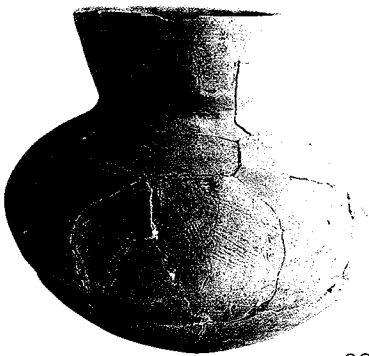
26-1



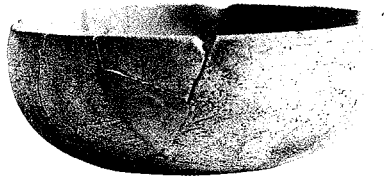
26-5



27-5



26-2



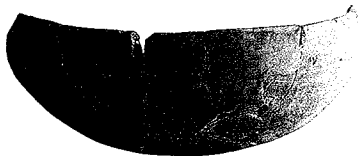
26-7



27-4



26-3



26-8



26-9



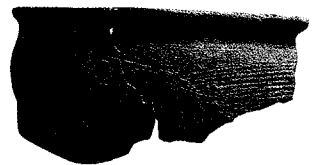
27-7



26-6



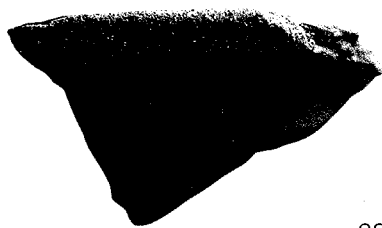
27-1



27-9



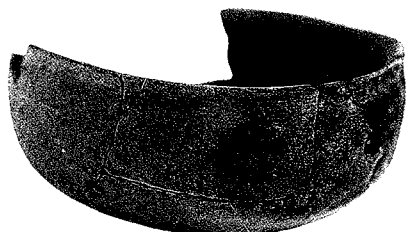
27-11



28-3



28-7



27-12



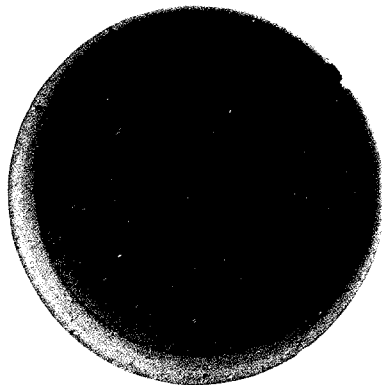
28-1



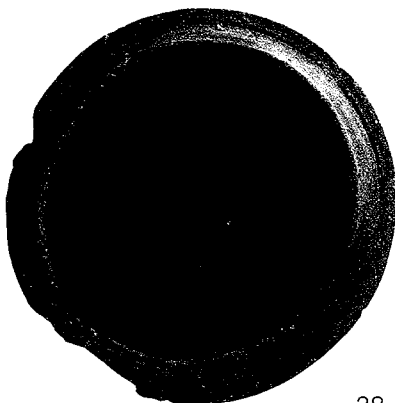
28-8



27-14



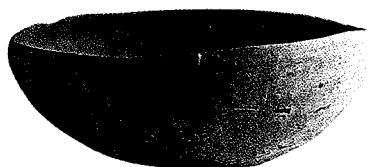
27-13



28-2



28-11



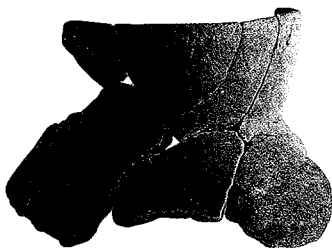
27-15



28-5



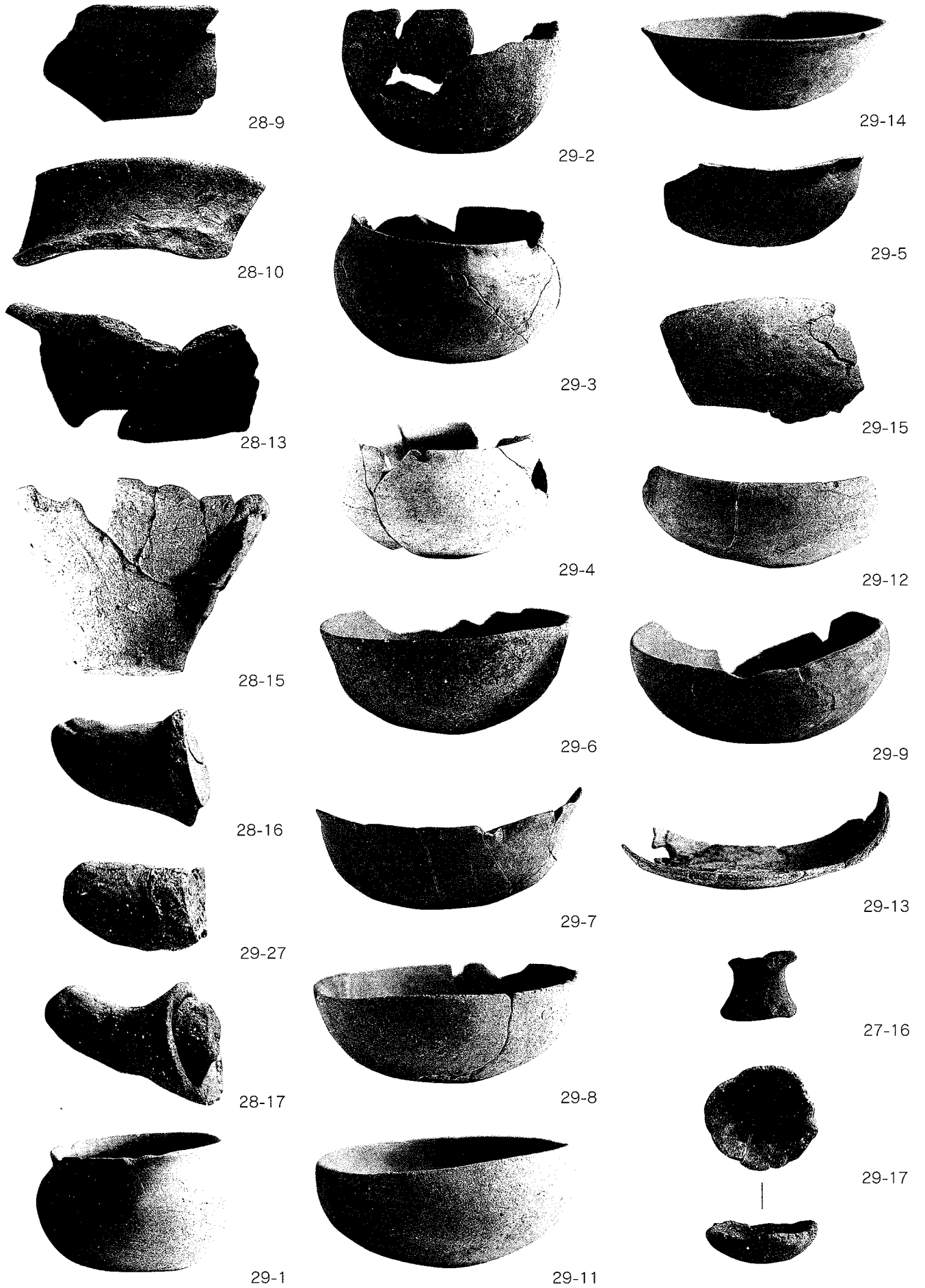
28-4

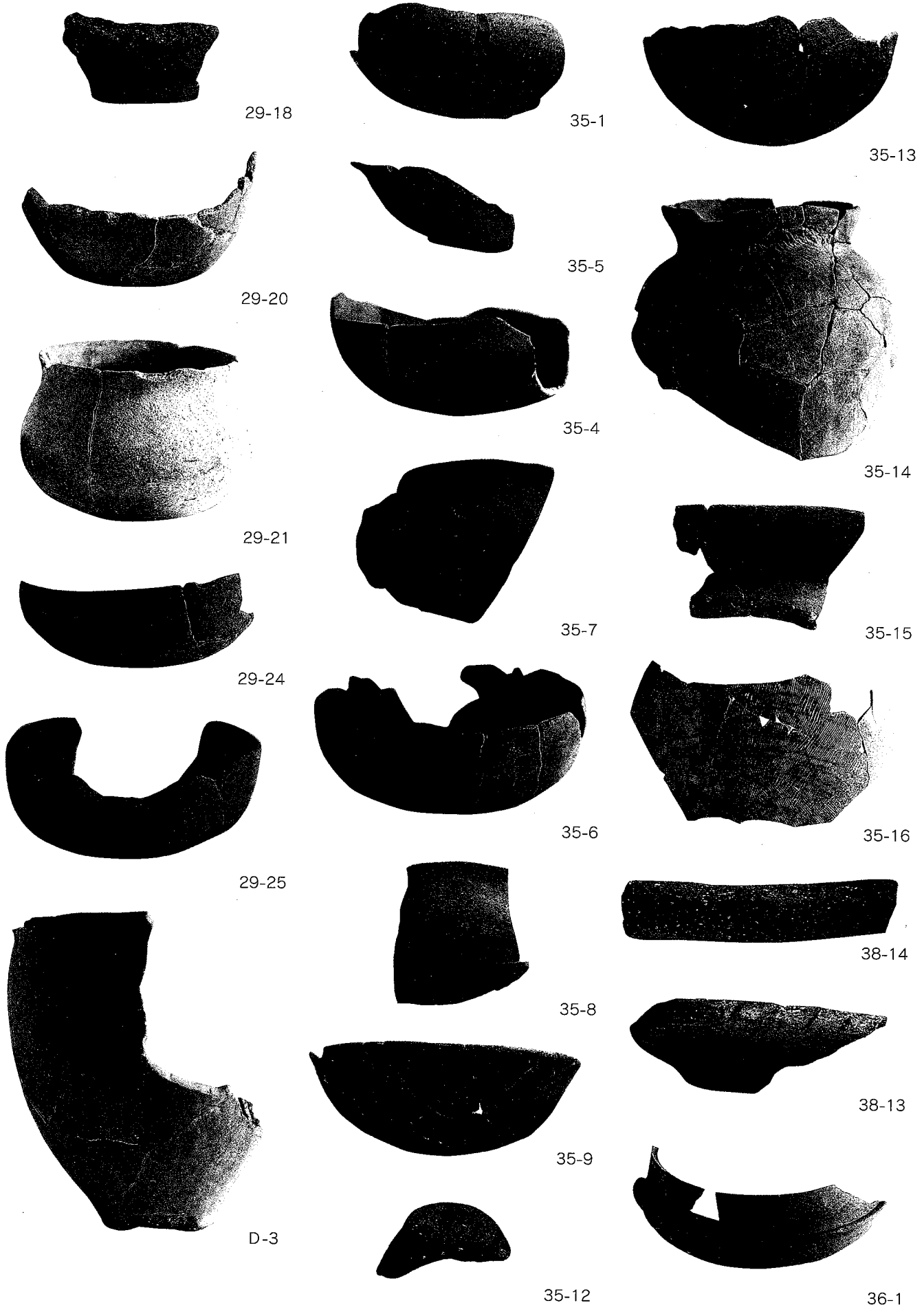


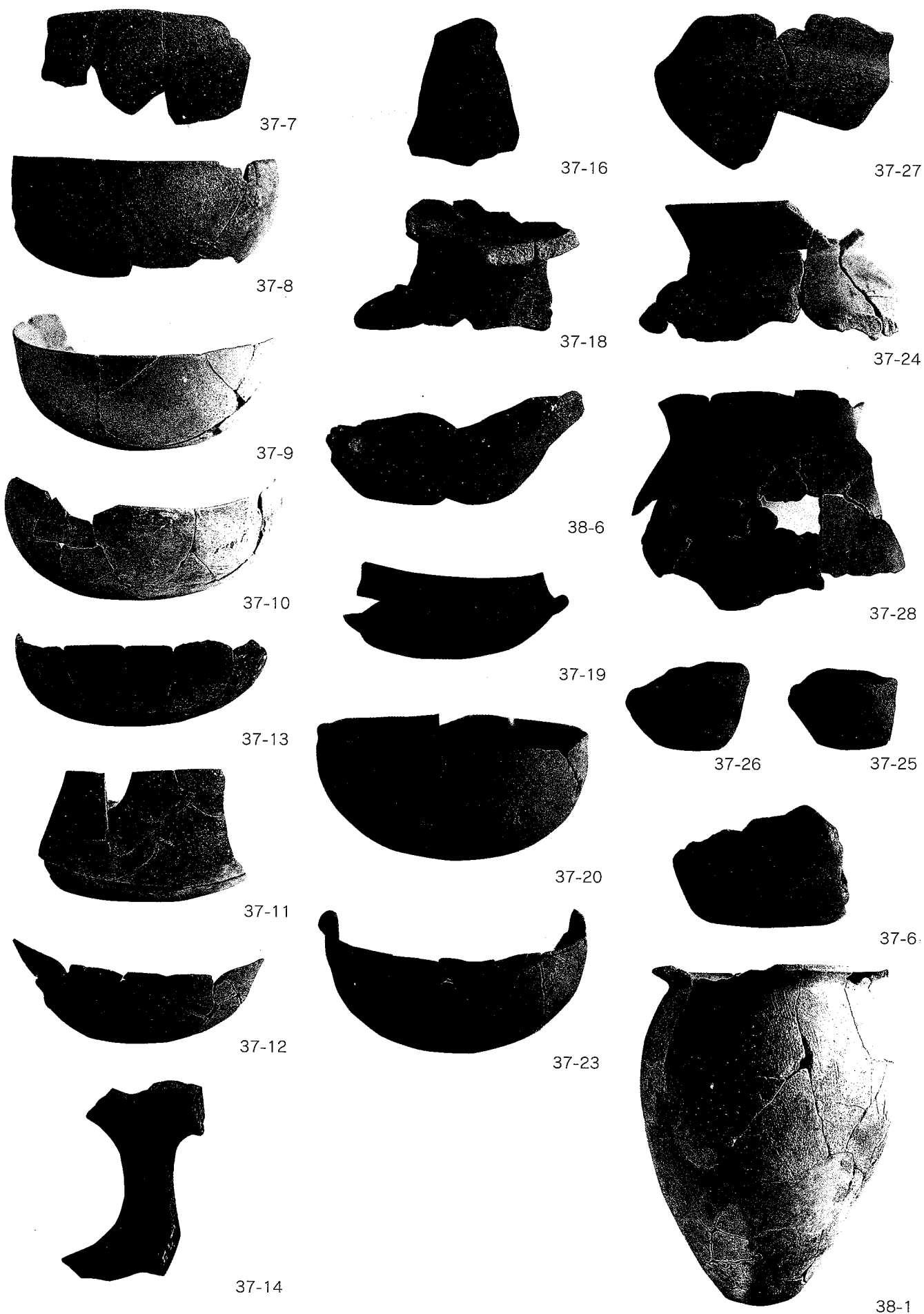
28-6



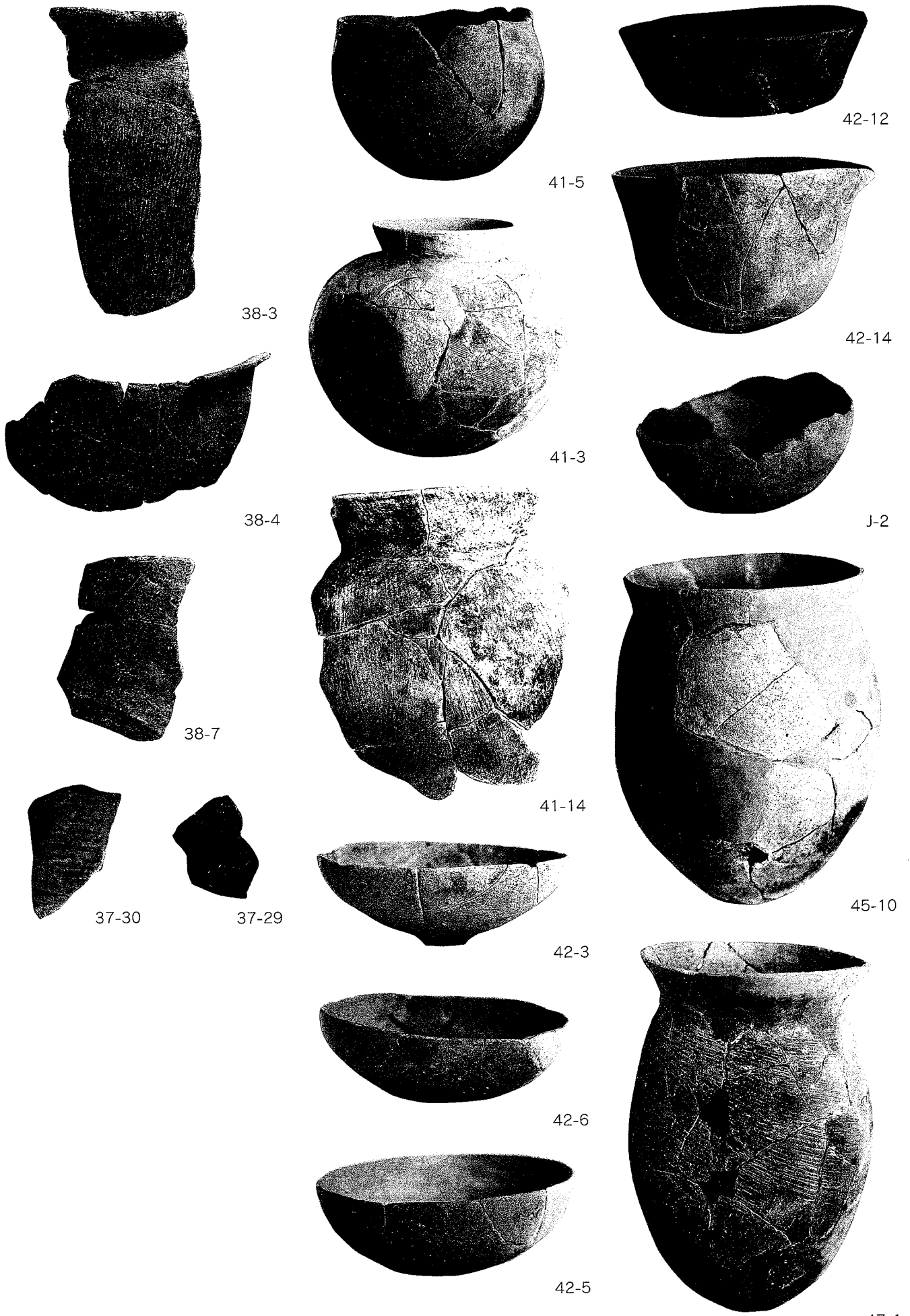
28-12



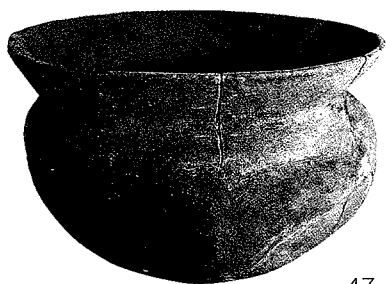




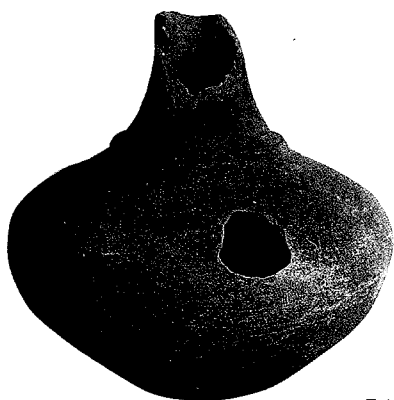
7~11号住居跡出土土器



三雲441番地12号住居跡・包含層出土土器、三雲450-2番地他1～8号住居跡出土土器



47-17



54-3



56-22



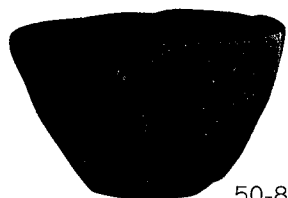
41-10



54-8



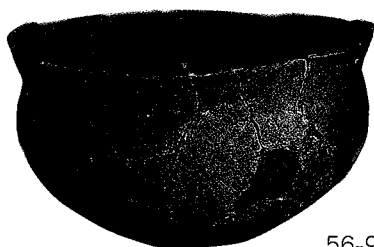
57-8



50-8



57-12



56-9



57-19



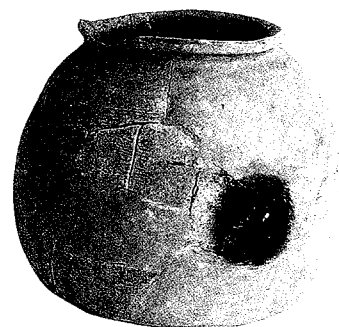
52-5



56-20



57-25



52-6



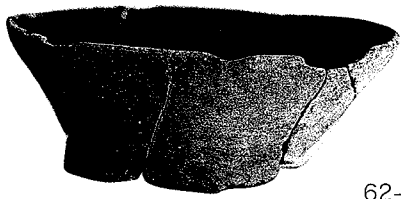
56-21



62-6



62-7



62-8



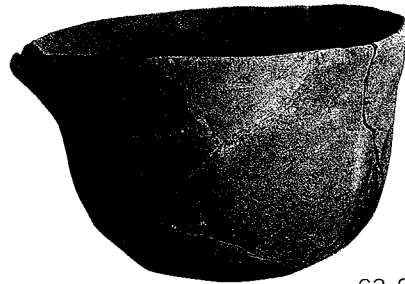
62-10



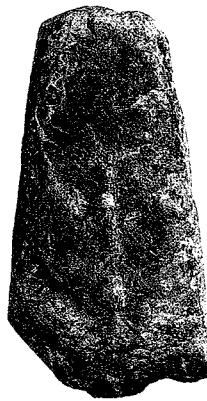
包含層



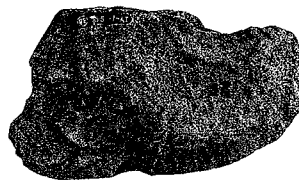
62-9



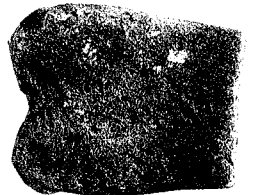
63-20



68-9



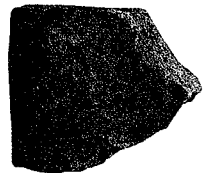
68-5



68-6



68-4



68-7



66-1



67-10



67-21



67-9



66-3



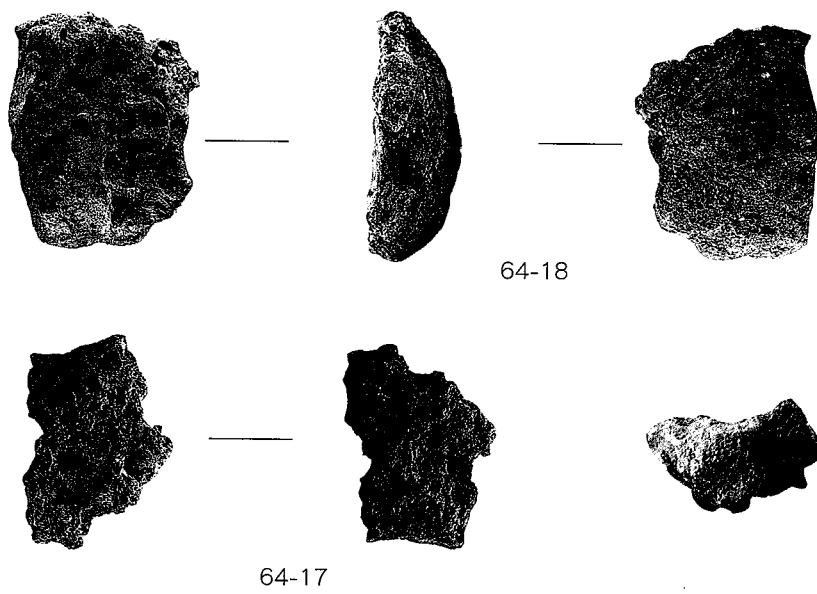
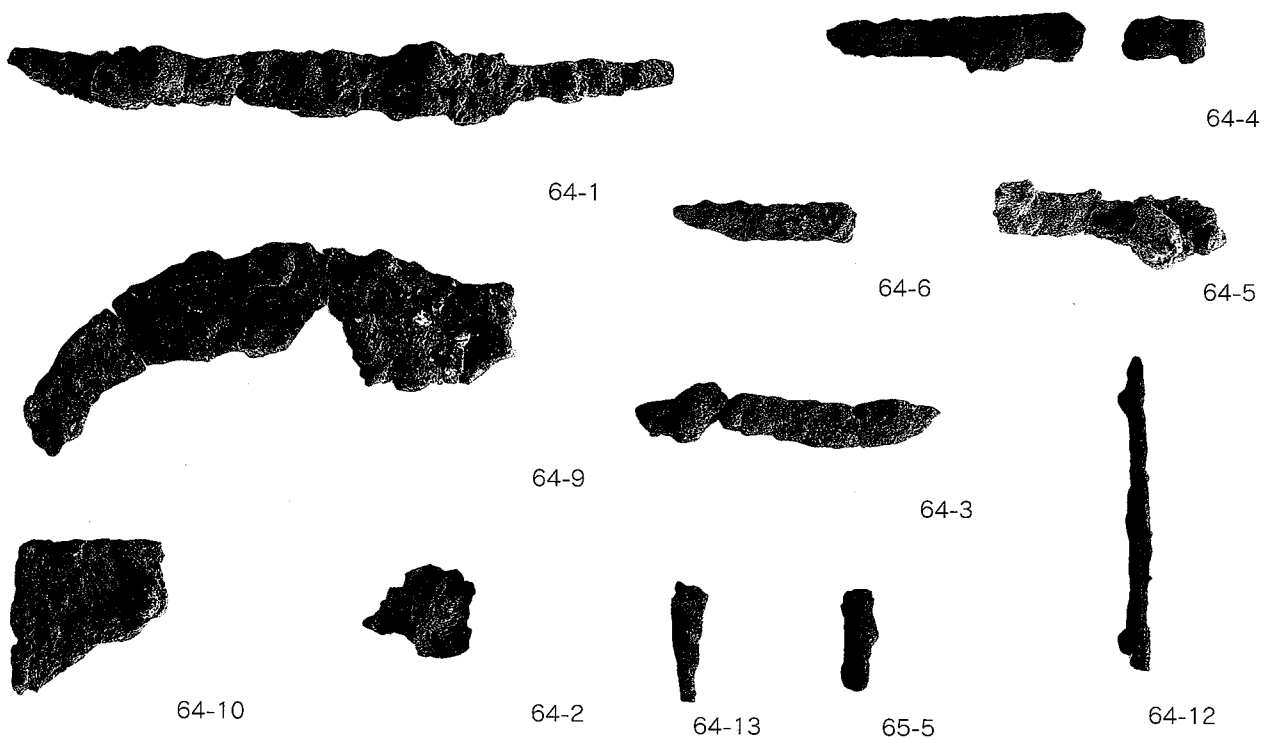
66-2



61オモテ



61ウラ



報 告 書 抄 録

ふりがな	みくも・いはらいせきⅣ							
書名	三雲・井原遺跡Ⅳ							
副書名	－三雲上覚・ヤリミゾ・井原ヤリミゾ地区－							
巻次								
シリーズ名	前原市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第86集							
編著者名	岡部裕俊・牟田華代子・平尾和久							
編集機関	前原市教育委員会							
所在地	〒819-1117 福岡県前原市前原西1-1-1							
発行年月日	2004年3月31日							
フリガナ	フリガナ	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
ミクモ イハラ イセキ 三雲・井原遺跡	フクオカケンマエハラシ 福岡県前原市 オホアサミクモ イハラ 大字三雲・井原			33° 31' 53"	130° 14' 40"	1983 1998～ 2002		重要遺跡 確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
三雲437番地	集落	古墳	住居					
井原2575番地	集落	古墳	住居				石帯	
井原2579番地	集落	古墳	住居					
三雲441番地	集落	古墳	住居					
三雲450-2番地 他	集落	古墳	住居、石棺墓				銅鏡片	

三雲・井原遺跡Ⅳ

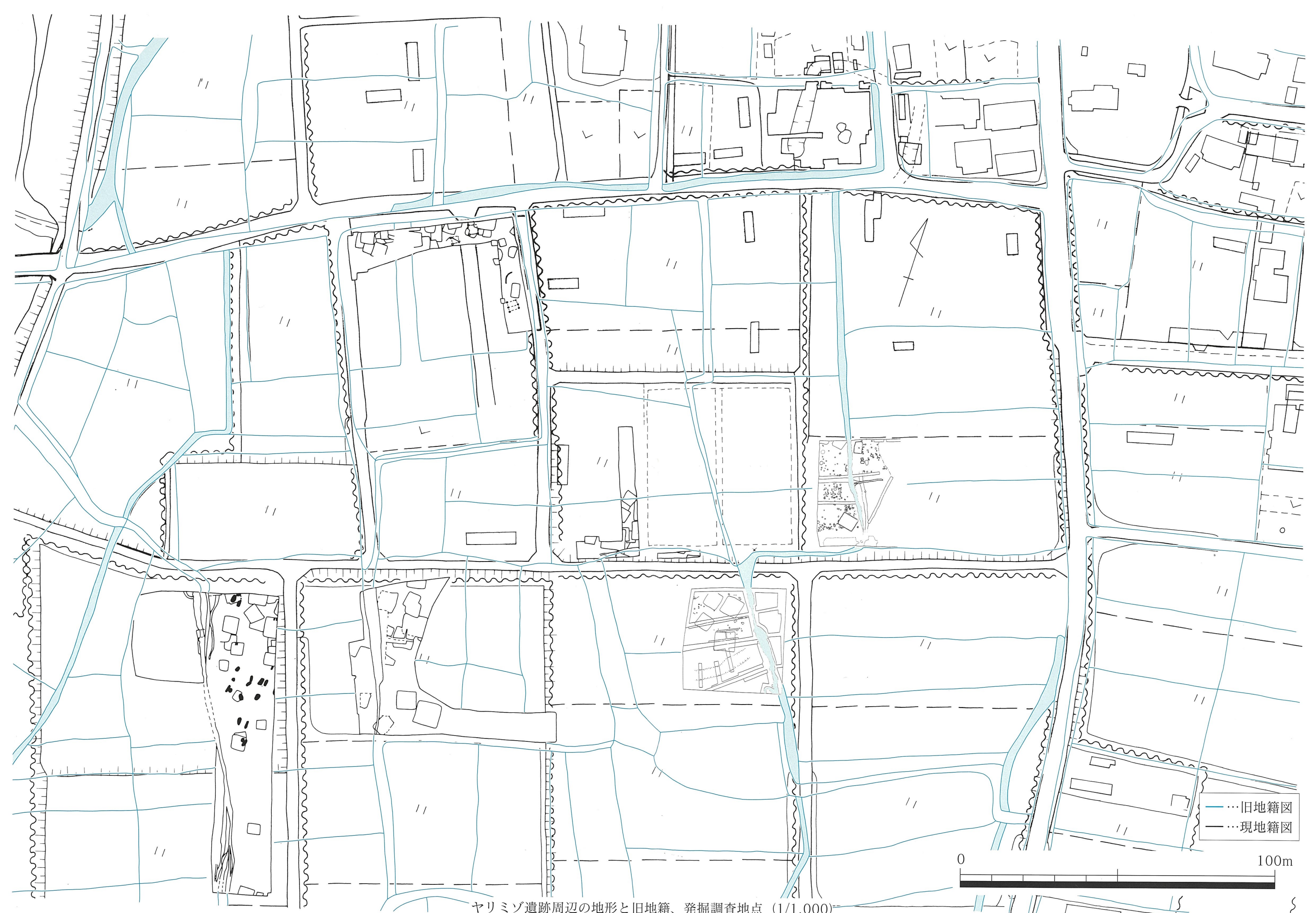
—— 三雲上覚・ヤリミゾ・井原ヤリミゾ地区 ——

前原市文化財調査報告書 第86集

2004年3月31日

発行 前原市教育委員会
福岡県前原市前原西一丁目1番1号
TEL 092-323-1111

印刷 (株)重富印刷
福岡県前原市前原東三丁目1番8号
TEL 092-322-0191 FAX 092-324-2661



ヤリミズ遺跡周辺の地形と旧地籍、発掘調査地点 (1/1,000)

.....旧地籍図
 - - - - -現地籍図

